新潟県埋蔵文化財調査報告書第44集

上新バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅱ

新井市坪ノ内館跡

1986

新潟県教育委員会

上新バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅱ

新井市坪ノ内館跡

1986

新潟県教育委員会

序

近年、中世に関する考古学的研究は全国的に進んでいる。

新潟県においても墳墓・経塚・集落・城館跡などの中世の遺跡が数多く存在している。中世の遺跡の発掘件数はまだ原始・古代の発掘件数に比して、数少ないが、上越市の春日山城跡（国指定史跡）の継続的調査をはじめ、白根市の馬場屋敷遺跡など県内各地で実施され、中世の実態が徐々に解明されてきている。また、県教育委員会では文化庁の指導のもと、中世城館跡の総合調査を四ケ年計画で進めており、その報告書の発刊を昭和61年度に予定している。

ここに報告する新井市坪ノ内館跡は、今回の上新バイパス建設に伴う発掘ではじめて中世城館跡と確認されたものである。調査の結果、発掘前には予想もできなかった堀に囲まれた館が検出され、当時の館の実態が明らかにされた。遺跡の調査は当時の人々の生活をいきいきとよみがえらせ、驚くほどの人と物の動きを語りかけるものであることを、あらためて認識することができる。本書が新潟県の中世史研究に資するとともに、ここで明らかにされた館そのものが、地元においても貴重な文化財として活用されることを望むものである。

調査にあたって、建設省北陸地方建設局高田工事事務所には格別の御配慮を賜り、新井市及び新井市教育委員会には多大な御協力と御援助をいただいた。ここに深甚なる謝意を表するものである。

昭和61年 5月

新潟県教育委員会

教育長　有　磯　邦　男

例　　言

1．本書は新潟県新井市大字長森字堂ノ浦に所在する坪ノ内館跡の発掘調査報告書である。遺跡名は調査計画当初から調査終了まで「坪ノ内遺跡」と呼称していたが、遺跡の性格を考慮して、報告に際し「坪ノ内館跡」とした。なお「坪ノ内」は地元における当地の通称である。

2．調査は一般国道18号線の上新バイパス建設に伴い、新潟県が建設省から受託して実施した。調査主体は新潟県教育委員会であり、昭和60年度に発掘調査を、昭和61年度に報告書刊行を行った。調査体制は第Ⅰ章に記した。

3．本書は上新バイパス関係の調査報告書としては、昭和59年３月刊行の第１冊（今池遺跡･下新町遺跡・子安遺跡）に次ぐ第２冊であり、書名は表題のとおりにした。

4．出土遺物と調査にかかる資料はすべて新潟県教育委員会が保管している。遺物の註記は「坪」と出土地点を併記した。なお、報告書作成に際して遺構名・番号を変更したが、それぞれの遺構の対照については第３表に記した。

5．本書で示す方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約７度である。掲載した図面のうち、既製の地図等を使用したものについてはそれぞれに原図の出典を記した。

6．遺構・遺物の写真・実測図は原則として巻末に一括した。遺物番号はすべて一連の通し番号を付し、写真図版を含めて、すべてこの番号を使用した。

7．文中の註は章ごとに番号を付し、章末に一括した。

8．本書に掲載した「天和検地帳」（別表１・２）と「明治４年長森村絵図」（別図１）は郷土史家金子以策氏より提供を受けたものである。このほかにも多くの郷土史関係の資料を提供していただくとともに、多くの貴重な御教示をいただいた。また「更正図」（いわゆる地籍図）関係についての調査は新井市役所税務課副参事宮腰公健氏の御高配を得た。ともに記して謝したい。

9．本書の作成にかかる作業はおもに昭和60年度に実施し、坂井秀弥（当課文化財専門員）・金沢道篤（同）・田辺早苗（同文化財調査員）があたった。執筆分担は第Ⅲ章１、第Ⅳ章２・３Ａ、第Ⅵ章１が坂井・金沢、第Ⅲ章２、第Ⅳ章１・３Ｂ・３Ｃ・３Ｄが金沢、ほかが坂井である。「天和検地帳」と「明治４年長森村絵図」及びその他の近世史料については竹田和夫（同文化財専門員）の協力を得た。

10．発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から御協力及び貴重な御教示を賜った。厚く御礼申し上げる。（敬称略　五十音順）

浅山龍蔵・阿部孝・阿部洋輔・伊藤正義・井上喜久男・植木宏・江崎武・荻野正博・小野正敏・金子拓男・兼康保明・岸本雅敏・久々忠義・久保智康・小島幸雄・小林三代治・高岡徹・高津孝高橋勉・高橋禮彌・田中治太郎・田中照久・中村美恵子・水野和雄・水野九右衛門・宮田進一・山本正敏・吉岡康暢・吉川善実・大江口土地改良区

目　　次

第 Ⅰ 章　序　　言……1

第 Ⅱ 章　遺跡の位置と環境……4

1．位置と地理的環境……4

2．古代の歴史的環境……6

3．中世の歴史的環境……7

A．中世後期の越後の動向……7

B．中世の遺跡……8

C．城　　館……8

D．村落と交通……10

第 Ⅲ 章　調査の概要……13

1．調査地の現況と伝承……13

2．調査の方法と経過……14

第 Ⅳ 章　遺　　跡……18

1．層　　序……18

2．概　　観……19

3．遺構各説……20

A．空掘・石組・土墨……20

B．掘立柱建物……26

C．井　　戸……29

D．溝・土坑・その他……33

第 Ⅴ 章　遺　　物……36

1．陶磁器類……36

A．中国製陶磁器……37

B．土師質土器……39
C．瓦質土器……42
D．瀬戸・美濃焼……43
E．珠洲焼……43
F．越前焼・その他……45
G．近世陶器・縄文土器……46

2．石製品……47
A．粉挽き臼……47
B．茶臼……48
C．鉢……48
D．石塔……48
E．その他……48

3．金属製品……49

第Ⅵ章　考察……50

1．館の構造……50

2．遺物と館の年代……53

3．坪ノ内館跡をめぐる開発史的考察……55
A．婁太地区の開発の概要……55
B．長森村の地名と開発状況……58
C．坪ノ内館の性格と歴史的背景……64

4．結語……66

引用・参考文献……70

図　　版

図　面

1．坪ノ内館跡周辺地形図
2．グリッド設定図
3．遺構実測図１　発掘区全体（1：200）
4．遺構配置模式図
5．遺構実測図２　空堀１・２・土塁土層断面
6．遺構実測図３　建物 1
7．遺構実測図４　建物 3・4・5・6・7
8．遺構実測図５　井戸 9・18・22・23 土層断面
9．遺構実測図６　井戸 1・2・3・4・5・6・7・8・16 断面
10．遺構実測図７　石組３・4
11．遺構実測図８　石組１・2
12．出土遺物実測図１　中国製陶磁器・瀬戸・美濃焼（１～29）
13．出土遺物実測図２　土師質土器・瓦質土器（30～60）
14．出土遺物実測図３　珠洲焼（61～71）
15．出土遺物実測図４　珠洲焼（72～74）
16．出土遺物実測図５　珠洲焼（75～83）
17．出土遺物実測図６　越前焼・その他（84～90）
18．出土遺物実測図７　越前焼（91・92）
19．出土遺物実測図８　粉挽き臼（93～98）
20．出土遺物実測図９　粉挽き臼・小林森男氏所蔵茶臼・石製鉢・石塔（99～110）
21．出土遺物実測図10　鉄製品・石製品（111～118）
22．出土遺物実測図11　水瓶・小林三代治氏所蔵和鏡（119・120）

写　真

23. 遺構　1.館跡全景　2.土塁1近景(カラー)
24. 明治4年長森村絵図(カラー)
25. 1.館跡遠景　2.館跡近景　3.館跡近景
26. 長森周辺空中写真
27. 遺構　1.館跡全景　2.東郭全景
28. 遺構　1.建物1・石組5　2.建物3・溝1　3.石組7
29. 遺構　1.石組1・石組2　2.石組2
30. 遺構　1.石組1　2.石組2縦断面　3.石組2横断面　4.石組1･2縦断面
31. 遺構　1.空堀2南端部　2.空堀2北部・石組3･4･5　3.石組5
32. 遺構　1.石組3　2.石組4　3.石組6･空堀2南端部
33. 遺構　1.空堀1　2.橋1　3.空堀1南端突出部
34. 遺構　1.空堀2礫出土状況　2.空堀2南端部礫出土状況　3.空堀2土層断面　4.空堀1土層断面
35. 遺構　1.B5区土層断面　2.B3区土層断面　3.土塁1土層断面　4.空堀1・空堀2交差部石組
36. 遺構　1.井戸1検出状況　2.井戸1土層断面　3.井戸1完掘状況　4.井戸4完掘状況　5.井戸3土層断面　6.井戸3完掘状況　7.井戸10完掘状況　8.井戸6完掘状況
37. 遺構　1.井戸12完掘状況　2.井戸13完掘状況　3.井戸16完掘状況　4.井戸18完掘状況　5.井戸22土層断面　6.土坑1検出状況　7.柱穴300遺物出土状況　8.建物1柱穴26土層断面
38. 遺構　1.館西半部　2.土塁1近景　3.土塁1石積状況　4.土塁1石積状況
39. 遺物　1.中国製陶磁器(青磁)　2.同上裏面　3.瀬戸・美濃焼(24～27・88)・中国製陶磁器黒釉壺(23・86)
40. 遺物　1.中国製陶磁器(青磁)　2.同上裏面　3.瓦質土器
41. 遺物　1.中国製陶磁器(白磁・染付)　2.同上裏面　3.近世陶磁器(伊万里・その他)
42. 遺物　1～11. 土師質土器皿　A類(33～39・41・42) B類 (44～47)　12・13. 土師質土器皿A類調整痕
43. 遺物　1.土師質土器皿A類　2.土師質土器皿B類(48・49) C類(50)　足付皿(51) 杯(53)　3.土師質土器鍋
44. 遺物　1.珠洲焼　壺(61・62)　甕(68・69)　すり鉢(64～67)　2.珠洲焼甕
45. 遺物　1.珠洲焼甕　2.珠洲焼　壺(63)　甕(その他)

46. 遺物　1.越前焼大甕(90)体部外面　2.同上内面　3.同上底部

47. 遺物　1.越前焼・その他　鉢(84)　越前焼壺(85・87)　2.瀬戸・美濃焼　灰釉香炉(28)　3.漆塗土器　4.壺(89)口縁部　5.同上体部外面調整痕　6.同上体部

48. 遺物　1.越前焼大甕(91)　2.珠洲焼甕(74)底部　3.珠洲焼甕(71)底部　4.珠洲焼甕(70)底部　5.珠洲焼甕(83)体部内面　6.珠洲焼甕(75)体部内面　7.珠洲焼甕(71)底部内面

49. 遺物　1.越前焼大甕(92)　2.石製鉢　3.宝篋印塔(107)　4.五輪塔塔身(108)　5.五輪塔基礎(110)

50. 遺物　1.粉挽き臼(94)上臼　2.粉挽き臼(95)上臼　3.粉挽き臼(99)下臼　4.粉挽き臼(96)下臼　5.小林森男氏所蔵茶臼(100)上臼　6.すり石(117)

51. 遺物　1.水瓶(119)　2.小林三代治氏所蔵和鏡(120)　3.鉄製品(112)　4.鉄製品(113)　5.鉄製品(114)　6.鉄製品(111)　7.銭貨　8.石製品(砥石・硯)

挿　　図

1．坪ノ内館跡の位置と頸城地方の関係概要図……2

2．周辺の地形と遺跡分布……4・5(折り込み)

3．試掘坑の位置と小グリッド割付図……14

4．発掘調査風景……15

5．発掘区主要土層断面図……18・19

6．橋1実測図……21

7．建物1柱穴断面図……26

8．土坑1実測図……33

9．柱穴300実測図……34

10．土師質土器皿法量分布図……40

11．香炉(57)スタンプ……42

12．縄文土器……47

13．銭貨拓影……49

14．使用された井戸の分布……51

15．斐太地区灌漑系統概念図……57

16．圃場整備前の地形と字界……59

17．長森村天和3年検地帳地名・石高比定図……62・63

表

1．新井市の年間気象……5
2．新井市周辺の居館……10
3．遺構名対照一覧……35
4．陶磁器類個体数一覧……36
5．斐太地区村高一覧……55
6．長森村地名一覧……61

別表　1．天和3年長森村検地水帳一覧……72
　　2．斐太地区天和3年検地帳地名一覧……82

別図　1．明治4年長森村絵図……(折り込み)85

第Ⅰ章　序　　言

上新バイパスは、新潟県の上越市・新井市・中郷村を通過する一般国道18号線(群馬県高崎市～長野県長野市～新潟県上越市)のバイパスである。この地域は頸城平野(高田平野)に位置する上越市(旧直江津市・旧高田市)と新井市を核とした新潟県南西部(上越地方)の中心地であり、日本海縦貫線の国道８号線に長野方面からの18号線が接続するという交通の要所でもある。このため、18号線は上越市と新井市域で慢性的に車が渋滞し、冬の降雪時には完全なマヒ状態にしばしばおちいるのであった。このような状況を打開するために、建設省北陸地方建設局(北陸地建)では、上新バイパスの建設計画を立てるに至った。

バイパスのルートは上越市下源入の８号線から中郷村市屋に至り、この間上越市富岡で北陸自動車道上越インターと、上越市寺町で現18号線と交差する。このルートは昭和50年４月23日までに発表された。北陸地建高田工事事務所(高田工事)は、昭和51年10月４日付け文書(建北高調第549号)で新潟県教育委員会(県教委)にバイパス予定線に関する埋蔵文化財の照会をした。これに対し、県教委文化行政課では、既往の遺跡分布図を参考にしたうえ、地元の教育委員会に調査を依頼し、７遺跡についての所見を、昭和52年３月24日付け文書(教文第828号)で高田工事に回答した。７遺跡のうち２遺跡(中郷村八斗蒔原遺跡・同窪畑遺跡)は調査が必要、２遺跡(新井市くつがた遺跡・同梨の木遺跡)は圃場整備により湮滅のため調査不要、３遺跡(新井市坂の上遺跡・中郷村中ノ原Ｃ遺跡・同丸木林Ａ遺跡)は法線に接近しているが、接触せず調査不要というものであり、今回の対象地である新井市坪ノ内館跡はまだ発見されてはいなかった。

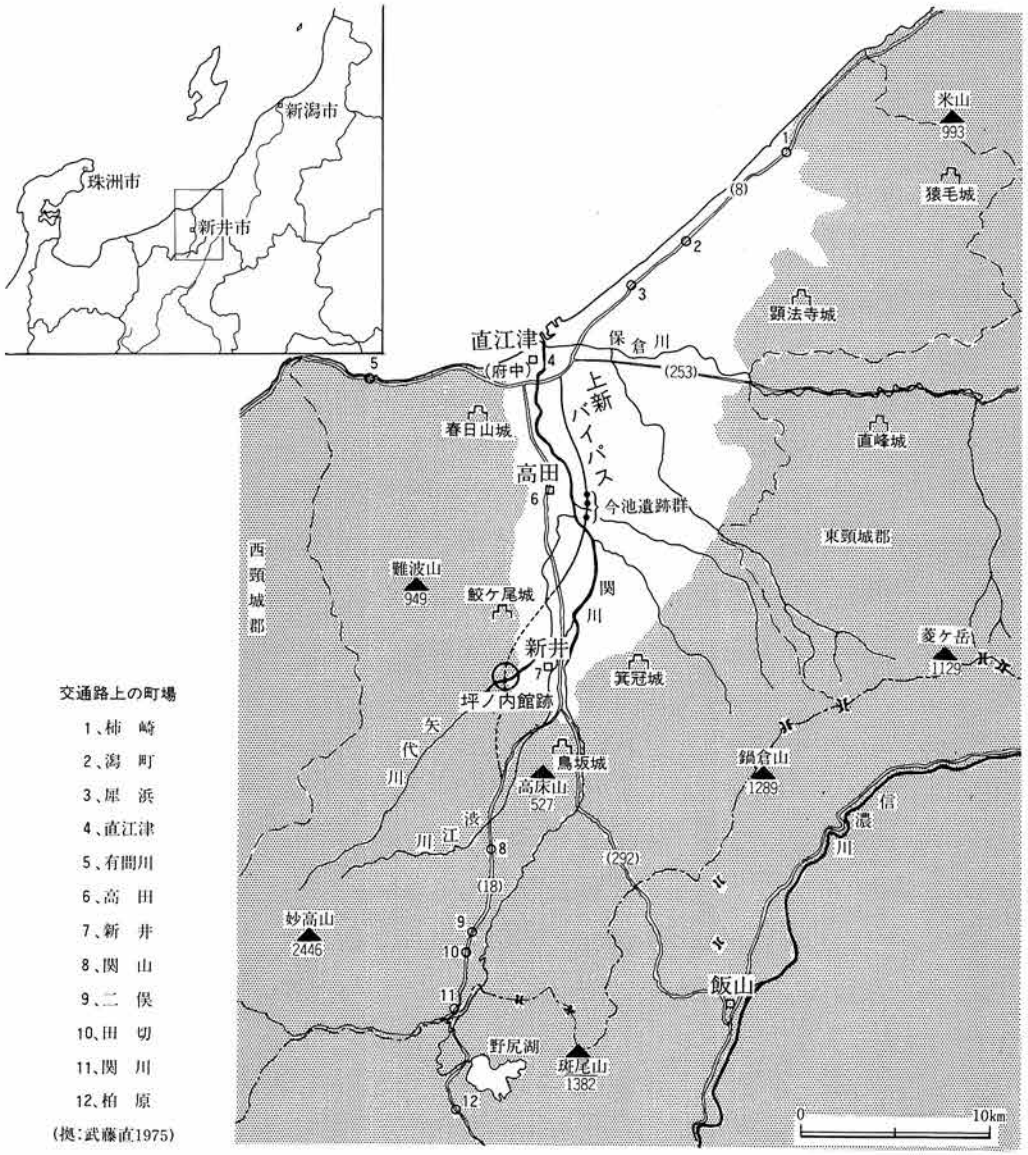
その後、上越市や新井市の教育委員会による分布調査や県の文化財保護指導員のパトロールなどによって、バイパス予定地内においていくつかの新しい遺跡が発見された。そこで、県教委で遺跡の分布調査を実施したところ、坪ノ内館跡を含む６遺跡を新たに加えることになり、昭和54年12月11日付け文書(教文第1103号)でその結果を高田工事に通知した。行政の文化財担当者や考古学研究者のなかで、従来の周知の遺跡以外にもかなり多くの遺跡が存在することが認識されはじめたのはこの頃である。昭和55年度から58年度にかけて実施された上越市今池遺跡群(今池・下新町・子安遺跡)の発掘調査の端緒はここにある。[1)]

坪ノ内館跡は、新井市教育委員会職員宮腰公健氏(当時)が現地で中世陶器及び青磁片若干を採集して発見された。発掘対象面積は段丘縁辺の畑のおおよそ1000㎡と見込まれていた。この時点で土塁状の高まりとそこに屋敷があったという地元の伝承が確認されていたが、明確に中世の城館と認識されてはいなかった。

バイパスは、北陸自動車道上越インター開業に伴って北陸自動車道上越インターと上越市寺

町の18号線までの間が先行して供用開始されるため、この区間内にある前述の上越市今池遺跡群の調査がまず実施された。この調査成果についてはすでに県教委からか報告書(『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集1984)が刊行されている。上越インター～寺町区間は昭和58年10月供用開始され、バイパス建設工事は寺町から新井市方面に進行し、これにより坪ノ内館跡の発掘調査が迫られることになった。

坪ノ内館跡の調査についての建設省と県教委との協議が本格的になったのは、昭和59年度からである。建設省側は当初59年度内の実施を要望したが、県教委側は調査を担当する文化行政課で調査体制を組めないことから、60年度に送ることにした。文化行政課では道路公団の高速



第１図　坪ノ内館跡位置と頸城地方の関係概要図

道関係と建設省の国道関係の調査をおもに実施しているが、このうち建設省関係には職員３名の１班しかあてることができず、60年度の建設省関係の調査は出雲崎バイパス１件、新々バイパス１件と上新バイパスの坪ノ内館跡を実施することにした。これについては昭和59年９月の会議で双方合意し、３件の調査の優先順序は①出雲崎バイパス、②上新バイパス坪ノ内館跡、③新々バイパスということを59年度末までに確定した。坪ノ内館跡の調査はお盆明け頃に開始し、期間は１～２ケ月と考えた。

60年度にはいり、出雲崎バイパス(出雲崎町番場遺跡)の調査を５月に開始し、８月上旬終了の見通しがたった７月中旬に、坪ノ内館跡の調査の開始は８月下旬とし、その前の８月初旬に予備調査をすることに決定した。これとともに、県教委は教文第 711号で文化財保護法第98条の２の発掘通知を文化庁に提出し、新井市教育委員会の協力のもと、作業員募集などの調査準備を行った。

調査体制

調査は新潟県教育委員会（教育長　有磯邦男）が主体となり、以下の体制で実施した。

総　括	高橋　安	（県教育庁文化行政課長）
管　理	田中　浩一	（同　課長補佐）
調査指導	中島　栄一	（同　埋蔵文化財係長）
庶　務	高橋　幸治	（同　主事）
調査担当	坂井　秀弥	（同　文化財専門員）
調査職員	金沢　道篤	（同　同　）
	田辺　早苗	（同　文化財調査員）
作業員	新井市高齢者事業団、ほか地元有志	
協　力	新井市教育委員会　新井市高齢者センター	

註

1）昭和57年度以降に始まった北陸自動車道の春日・木田地区の調査においても、既知の遺跡のほかに数多くの遺跡があらたに確認されて大きな問題が生じた。そのため遺跡の見直しがさらに要請され、上新バイパスについても新井市の矢代川から中郷村にかけては昭和59年度にあらためて分布調査を実施した。調査はあくまで表面観察によるものであり、①畑などで遺物が採集される。②森林などで表面採集はできないが、地形からみて遺跡の存在が予想されるという２つに分けてチェックした。この結果、確認されていた３遺跡のほかに６つの遺跡があらたに確認され、地形から判断して遺跡の存在が予想される箇所がいくつか指摘された。遺跡の範囲は遺物の散布状況と地形を勘案して決めている。これらの遺跡あるいは要確認地区についてはさらに確認調査を実施したうえ、発掘調査対象地を絞っていく予定である。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1．位置と地理的環境

坪ノ内館跡は新井市大字長森字堂ノ浦763番地他に所在する。新井市は新潟県の南西部に展開する頸城平野南縁を中心に、その周辺の丘陵・山地を市域とする。頸城平野は新井市を頂点とし、北側の海岸にむかって開く三角形の平面形を呈し、大局的な地勢は南から北に傾斜する。館跡は巨視的にみてこの平野から南西方向にひろがる広大な妙高山（標高2446ｍ）山麓裾野端、標高約127ｍに立地する。

館跡から南西方向は上越後の秀峰妙高山を望み、北から東にかけては頸城平野を一望のもとに見下ろす。東西両側は山地である。西側は火打山（2402ｍ）、焼山（2400ｍ）から南葉山系につらなる丘陵が近くにせまり、東側は信越国境となる関田山脈（最高峰は鍋倉山1289ｍ）とこれから派生する山地が望まれる。これらの山地にはさまれて展開するのが、妙高山の裾野である。頸城平野第一の河川である関川は、妙高山の南側から流れ、長野県との県境をなし、妙高山東麓を深くえぐり、平野南端に達する。長野県北部と新潟県南西部とを結ぶ大動脈、国道18号線と国鉄信越本線はこの妙高山東麓に沿って、ほぼ南北に通っている。一方、妙高山北側に源をもつ矢代川は、西側の山地の裾をほぼ北西方向に流れ、館跡南側をぬけ、平野中央部で関川に合流する。

館跡周辺の地形は、おおよそ①山地および丘陵、②火山山麓、③扇状地、④氾濫原性低地に分類される[1)]〔北陸地建弘済会1981〕（第２図）。前述したように、巨視的には館跡の南西から北側にかけてと南から東にかけては山地・丘陵が分布し、その間は起伏の比較的少ない火山山麓から頸城平野の南縁をなす扇状地となる。山地・丘陵のうち、その北端に鳥坂城をのせる高床山（527ｍ）とその北側の経塚山（200ｍ）は、関川や片貝川などによって、東側の山塊から分断され、残丘状となる。火山山麓は妙高火山の泥流堆積物で形成され、南西から北東方向の地勢に平行して矢代川・渋江川・片貝川などの谷がある。当館跡はこの火山山麓に立地する。

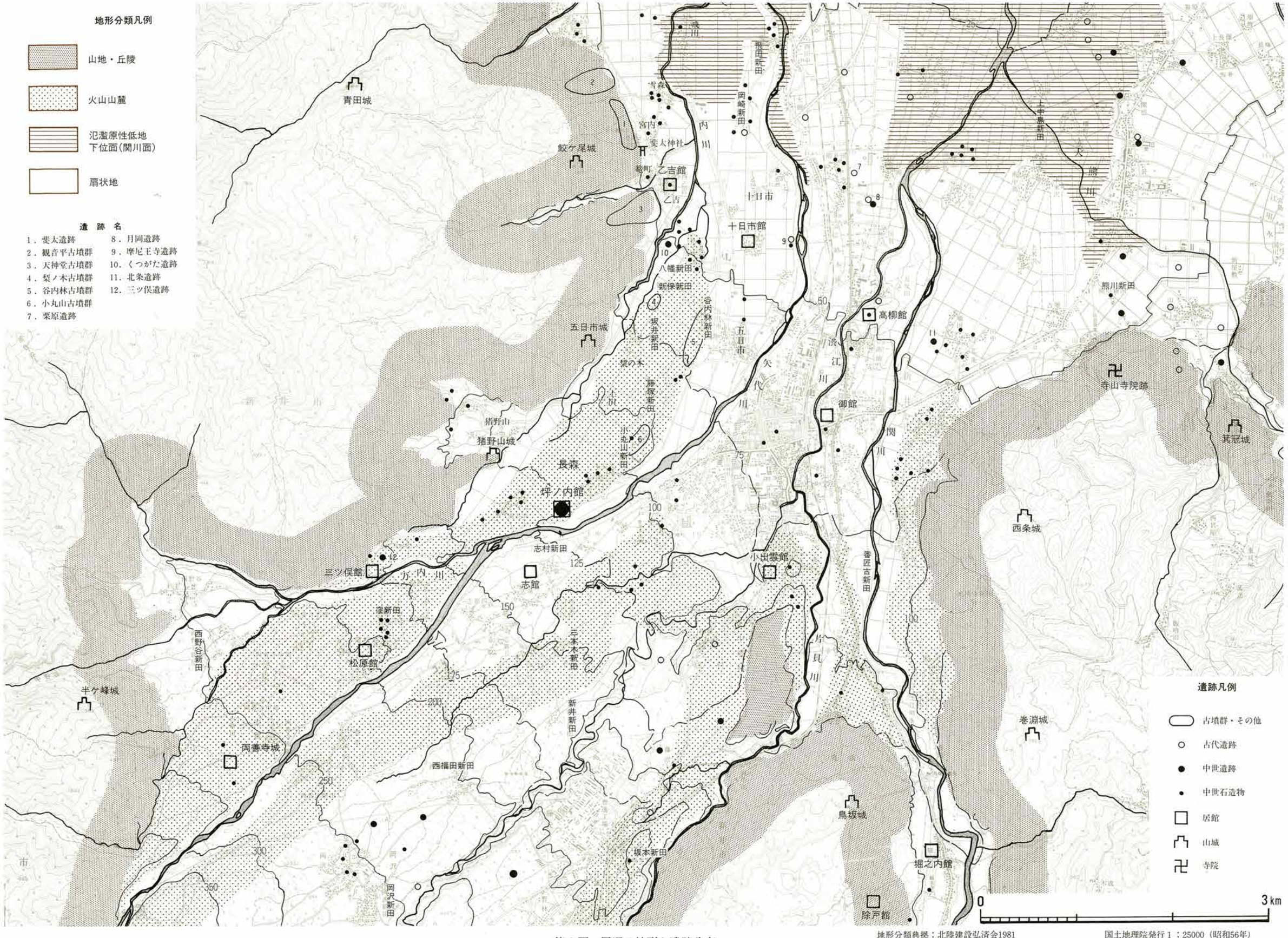
扇状地は矢代川と関川が平野部に出るところに広く分布するが、山地・丘陵からそのまま扇状地に移行するものと、矢代川や関川に沿って火山山麓と接するものがみられる。後者には火山山麓との境界に明瞭な段差をもち、火山山麓が段丘状となる部分がある。こうした地形は河川が火山山麓を開析したことにより形成されたものと考えられ、館跡は矢代川北岸の段丘化した火山山麓縁辺に立地している。また、新井市街地から北側の柳井田・月岡・高柳にかけては、矢代川・渋江川・関川による開析で、扇状地が段丘化した部分もある（月岡段丘砂礫層）。

地形分類凡例

- 山地・丘陵
- 火山山麓
- 氾濫原性低地
  下位面(関川面)
- 扇状地

遺跡名

1．斐太遺跡
2．観音平古墳群
3．天神堂古墳群
4．梨ノ木古墳群
5．谷内林古墳群
6．小丸山古墳群
7．栗原遺跡
8．月岡遺跡
9．摩尼王寺遺跡
10．くつがた遺跡
11．北条遺跡
12．三ツ俣遺跡



第２図　周辺の地形と遺跡分布

地形分類典拠：北陸建設弘済会1981
遺跡分布典拠：『昭和54年度新潟県遺跡地図』新井市史

国土地理院発行１：25000（昭和56年）
重倉山・新井・関山・猿橋

氾濫原性低地は、おおよそ標高30m以下に分布し、高位面(高田面)と下位面(関川面)に分けられる。頸城平野の主体をなすもので、沖積段丘である。さきの月岡段丘部分との境には関川に沿った東側を中心に明瞭な段差がある。

前述したように、坪ノ内館跡は矢代川北岸の段丘化した火山山麓縁辺に立地する。長森を含む矢代川と西側の丘陵にはさまれた地域は、現在行政上「斐太地区」と呼ばれている。これは旧斐太村の村域を継承するものであるが、地形的にまとまった地域を形成している。この地区は地形的にみて、丘陵をのぞくとほぼ火山山麓と扇状地に区分される。火山山麓は段丘面、扇状地は沖積面と区分することもできよう。この地区の火山山麓は三ツ俣から長森を経て佐川・籠町の集落に至る三ケ月形の平面形を呈し、その東西は矢代川・万内川と丘陵・内川にそれぞれはさまれている。最高点となる三ツ俣は矢代川の支流である万内川と丘陵の間、標高約180mに立地し、末端の佐川は標高約50mである。矢代川と万内川に沿う南東側は、両河川の氾濫原である沖積面との段差が発達する。この段差は上流ほど大きく明瞭である。坪ノ内館跡は矢代川にむかってわずかに半島状に突出する地点に立地し、段丘崖の比高は約10mである。

一方、西側は西長森の集落北側から丘陵裾部を流れる内川に沿って、段丘面よりやや低い帯状の沖積面が形成される。段丘面は大局的に南西から北東方向に傾斜するが、東側段丘崖縁辺が高い傾向がみられ、東長森と小丸山新田の集落の北側には小高い丘がある。このほかはおおむね水田となっている。この周辺は昭和54年から56年にかけて大規模な圃場整備が実施され、まったく旧景観をとどめていない。かつては微妙な起伏に富み、これに沿って小さな区画の水田が存在していたことは、圃場整備前の空中写真(図版25、国土地理院1974撮影)、地形図(第16図新井市1969作成)によって知ることができる。なお、長森周辺の地形環境については第Ⅵ章において歴史的背景とともに若干ふれることにする。

気象条件　新井市の年間の気象状況は第1表のとおりである。これは過去25年間の数値の平均値である。冬は降雪による降水量が多く、夏はフェーン現象を伴い高温となり、日本海気候の特徴をもつが、冬の降雪量は著しく多く、全国でも有数の豪雪地帯である。年最深積雪深は平均200cm、最大は43豪雪・60豪雪時の360cmである。長森周辺はこの数値よりさらに大きいものと考えられる。平均すると、12月下旬には根雪となり、3月末までこれが残る。気温は冬季2.7℃前後であるが、降雪が続く場合、真冬日となることが多い。夏季は26～29℃であり、東京とほとんど差はないと思われる。

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年又は計
平均気温(℃)	2.7	2.7	4.5	12.8	18.5	22.8	26.0	28.6	22.7	15.9	10.1	5.3	14.4
平均降水量(mm)	406.6	272.9	160.7	69.7	51.7	132.4	196.5	213.5	174.7	151.6	210.7	239.9	2,280.2
平均最大積雪値(cm)	146.0	176.4	134.2	24.0	—	—	—	—	—	—	2.2	57.6	90.0
根雪日数	85日	最深積雪値及び起年月日			360cm (43年2月2日)								

(新井市消防署観測)

第1表　新井市の年間気象

2．古代の歴史的環境

新井市周辺の奈良・平安時代のおもな遺跡の分布は第２図のとおりである。これはおもに『昭和54年度新潟県遺跡地図』（新潟県教育委員会1980）をもとに示したものである。新井市周辺では詳細な分布調査が実施されていないため、今後さらに遺跡が増加することと思われる。

奈良・平安期より古い時期のものでは、弥生後期末前後の斐太遺跡群や観音平・天神堂・谷内林・梨ノ木・小丸山などの後期古墳群が知られている。斐太遺跡群は百両山遺跡と上ノ平・矢代山遺跡という二つの隣接した高地性集落で、環濠と竪穴住居が地表面にくぼみとして残っている〔駒井和愛・吉田章一郎1962〕。頸城平野の古墳はおもに平野の東西の丘陵に分かれて分布しているが、新井市周辺はこれがもっとも集中する地域でもある。梨ノ木・谷内林の古墳群は１基ずつ圃場整備に伴って調査され〔新井市教育委員会1977・1978〕、観音平・天神堂古墳群では一部調査されている〔駒井・吉田1962〕。これらの古墳は古墳時代後期のこの周辺の有力者層の奥津城と考えられているが、その生産基盤である集落・耕地の所在は、現状では地域的に特定できず、７世紀までの開発状況はあまりよくわかっていない。ただ、現在の遺跡分布や古墳の数量、さらには地形環境などを勘案すれば、その地域は矢代川西岸の斐太地区に限定されず、矢代川東岸まで含まれるものと推察される。近年、開発に伴って急速に調査が進展している栗原周辺の遺跡群（栗原遺跡・月岡遺跡・上百々遺跡など）はその候補としてあげうる。少なくとも、小丸山・梨の木古墳群の存在をもって、長森や梨の木の集落が立地する段丘面上の広汎な開発を想定することはできない。

奈良・平安期の遺跡はさほど多く確認されてはいない。とくに奈良期の遺跡は栗原遺跡以外ほとんど知られていない。栗原遺跡は「郡」の墨書土器、金銅製帯金具などが出土しており、頸城郡衙か郡司層の居宅と推定され〔坂井秀弥1982・1983〕、この周辺が頸城郡のひとつの中心をなすほど生産性が高かったことがうかがえる。当期の遺跡分布は、栗原遺跡周辺と関川東岸の板倉町周辺にやや集中する傾向がみられ、長森周辺では現在のところまったく確認されていない。遺跡の詳細な時期は不明であるが、火山山麓に立地する中郷村の遺跡を含めて、平安中期（９世紀後半～10世紀）の短期間の遺跡が多いものと推定される。それはこの時期に全般的に遺跡の拡散現象ともいうべき動向がみられること〔坂井秀弥1985〕から想像される。したがって古代でも奈良から平安末期・中世まで継続的に営まれる遺跡は少ないと予測される。なお『和名抄』にみえる郷名のうち、栗原郷・板倉郷は現在の地名に継承されており、それぞれ大字栗原周辺、関川東岸の板倉町周辺に比定される。ただし、栗原郷は広さからみて、式内社である斐太神社が存在する斐太地区北辺、すなわち矢代川西岸までその範囲に含めて考えることができよう。いずれにしろ、古代を通じて開発が進んでいたのは地形区分上の扇状地を中心とした沖積面とみることができる。

3．中世の歴史的環境

A．中世後期の越後の動向

元弘3年(1333)、鎌倉幕府が滅亡すると、越後は上野・遠江とともに新田義貞にあたえられた。その後、建武2年(1335)に足利尊氏が自立すると、上杉憲房・憲顕父子は義貞の領国である越後に進撃した。上杉氏はこれより越後・伊豆・相模・上野・武蔵などの守護となり、長尾景忠・景恒が守護代となった。この体制から守護代長尾氏が勢力をのばし、越後を掌握してゆくのが16世紀初頭から前葉にかけての永正年間、長尾為景の代である[2)]。そして次の景虎(上杉謙信)の時代を迎える。謙信は享禄3年(1530)に生まれ、天文17年(1548)には兄晴景から家督をつぎ、春日山城に入城した。上杉謙信は越後国外の関東・北陸地方にも勢力をのばし、有力な戦国大名に成長したが、天正6年(1578)に没した。

謙信の死後、その二人の養子、景虎と景勝の間に後継者争いが生じ、領国を二分する内乱に発展した。これが天正6年から3年間にわたる御館(おたて)の乱である。景勝は春日山城をおさえ、景虎側の御館城を攻め、翌7年(1579)3月におとした。景虎はその直後、堀江宗親の居城である新井市鮫ケ尾城で自害した。その後、景勝は天正15年(1587)に揚北の新発田城をおとして、越後を統一し、天正19年(1591)には佐渡も平定した。景勝の領国は、越後・佐渡・出羽三郡・信濃四郡、計91万9000石といわれる。景勝は慶長3年(1598)に会津に移封され、堀秀治が入部し、まさに新しい時代を迎えることになる。

以上が中世後期の越後のおおよその動きである。この間、全国的に戦乱が続くが、越後においても、数多くの戦乱の連続である。観応の乱(1350)、応永の乱(1423)、永享の乱(1438)にはじまり、永正の乱(16世紀前葉)、上条の乱(1530)、あるいは長尾氏内部の抗争、謙信・景勝らの領国版図の拡大に伴う幾多の抗争など枚挙にいとまがない。こうした戦乱に伴って数多くの城館が築かれたことはいうまでもない。しかし、これらの城館の築造年代は文献資料からはほとんど知りえない。頸城の城館の中心ともいうべき春日山城は、長尾為景の時代、永正10年(1513)に文献上に初見し、謙信の時代に充実したとされる。いくつかの城館がこれと直接的な関係で成立するとしたならば、16世紀代にその築造年代の中心をおくことができる。

ところで、当時の新井市周辺を知る文献資料はごく少なく、具体的な動向はほとんどわからない。建仁3年(1203)の「関東下知状案」(鎌倉遺文3－1388)にみえる「中河保」は市内中川に比定されている〔荻野正博1983〕。応永10年(1403)の金子以策文書に「新井」の名があらわれ、同18年(1411)の居多神社文書(県史4－2121)に高柳・中川の地名が出てくる程度である。城館についても、わずかに鮫ケ尾城の城主が堀江宗親と推測される[3)]にすぎず、大半の城館主名はわからない。したがって、坪ノ内館の造営にかかわるさまざまな歴史的背景は文献資料以外の多様な観点から考察することが要請される[4)]。

B．中世の遺跡

城館跡をのぞく中世の遺跡は、古代の遺跡と同様さほど多くは知られていない。分布状況も古代とあまり変らない。新井市内で調査がなされているのは、月岡遺跡〔花積哲夫・伊藤裕1984、高橋勉1985〕と三ツ俣遺跡〔吉田恵二ほか1981〕があるにすぎない。

月岡遺跡は出土遺物からみて15世紀を中心とする時期と考えられ、井戸・土坑・溝などが検出された。狭い範囲の調査であるため詳細は不明であるが、遺構は南北方向と東西方向の溝に囲まれた部分に分布しており、ひとつの屋敷地を想定することができよう。建物は掘立柱建物であろう。三ツ俣遺跡は圃場整備の際、古墳状のマウンド(泥流丘)を確認調査したところ、付近で掘立柱建物が検出されたもので、時期は中世(後期)～近世と考えられる。月岡・三ツ俣両遺跡とも比較的現在の集落に近い水田に存在しており、発掘前にその存在が知られていなかったことを考慮すれば、今後このような遺跡が多く発見される可能性は大きい。このほかに、発掘調査はなされていないが、籠町所在のくつがた遺跡からは偶然に埋納された仏具が発見されている〔金子拓男・宮腰公健1977〕。仏具には独鈷杵・花瓶・火舎・六器・小六器があり、これらが提子とともに曲物の中に納められていた。双魚浮文青磁皿が伴っており、14世紀前後のものと考えられる。以上のように、中世の遺跡についての知見はきわめて乏しく、今後の調査の進展がまたれる。

これに対し、石塔を中心とする中世の石造物は数多く分布している。図に示した分布は『遺跡地図』(前掲)のほか、新井市域については『新井市史』上巻〔加藤晋平1973〕の資料を加えたものであり、市内の多くの集落やこれに接するところに分布していることがわかる。『新井市史』によれば、石塔は大半が五輪塔で、一部が宝篋印塔である。時期は南北朝以降のものという。石塔は遺跡と異なり、現在の位置がそのまま当初造立された場所とは限らず、寺院の墓地や集落の共同墓地でまとまって存在するのは、集められた結果によるものと思われる。したがって、現状の分布状況はそのまま造立当時の状況を示さないが、ことさら遠く離れた場所に運ぶことはほとんど考えられないことから、石塔の広汎な分布は、中世後期には新井市域に広く集落が分布していたことを示すものと思われる。

C．城　　館

頸城平野には上杉謙信の居城として著名な春日山城をはじめ、数多くの城館跡が分布する。新井市周辺の城館跡については『頸南』〔伊藤正一1966〕、『新井市史』上巻〔加藤晋平1973〕、『日本城郭大系』第７巻〔植木宏1980〕などの調査・研究がある。以下、これらによって概観しよう。

まず、山城のうち大規模なものには、鮫ケ尾城(新井市)・鳥坂城(同)、箕冠(みかぶり)城(板倉町)がある。鮫ケ尾城は前述のとおり文献にみえ、堀江宗親が勤番しており、御館の乱で景虎が自害したと

いわれている。標高183mの城山に5本の壮大な堀切りがあり、5個の郭を形成する。この要害の居館は山麓の乙吉字立ノ内にあるとされる。地元では「御館(おたち)」と呼称するが、明確な堀や土塁は存在しない。ただ、勝福寺境内と宅地・畑はほぼ1町四方の範囲にまとまっており、これが館の範囲とも考えられる。坪ノ内館跡から鮫ケ尾城は望めない。

鳥坂城は高床山からのびる丘陵先端、標高347.5mの城山にあり、飯山街道など信濃口をおさえる位置にある。坪ノ内館跡からもよく見え、壮大な空堀もうかがえる。この縄張りは鮫ケ尾城とよく類似しており、5本の堀切りで尾根を断ち切るもので、これと相前後して築城されたとされる。この居館(堀之内館)は山城の東麓、上堀之内集落の河岸段丘縁辺、現在の菓成寺境内にあるとされる。ここは70×40mほどの長方形をなし、一部に土塁状の高まりがある。なお、山城の東南中腹に除戸館といわれる館城がある。

箕冠城は上杉氏の重臣である大熊氏の居城といわれる。弘治2年(1556)、大熊朝秀が謀反を起こした際、謙信に攻め落とされたという伝説がある。

このほかの山城はおおむね小規模である。坪ノ内館跡の西側丘陵には青田城(高城)・五日市城・猪野山城・半ケ峰城[5]、東側の丘陵には西条城・巻淵城などがある。五日市城・猪野山城などは平地に面する低い尾根上に立地し、青田城・半ケ峰城・巻淵城などは平地と200m以上の比高差をもつ。猪野山城は坪ノ内館跡と約1kmの至近距離にあり、長森と猪野山の大字界となる低くて小さな尾根先端、標高約150mの八坂神社に立地する。平地との比高は約30m、中心部は35m四方の平坦部をもち、周囲に堀切り・縦堀がある。

一方、居館は『頸南』によると上記の乙吉館・堀之内館のほかにいくつかあげられている(第2表)。これらのうち、新井市内のものについては更正図等の字名により、位置を確認したものを第2図に示した。第2表に掲げたものは遺構が確認されたもののほか、地名・伝承等で存在をただちに肯定できるものという〔伊藤正一1966〕が、新井市内のもので、現在も堀や土塁を明確に残しているのは高柳館と松原館であり、ともに鬼小島弥太郎の居館と伝えられる。

高柳館は渋江川の曲流袂の崖を利用したもので、半島状の基部を堀切り内郭とし、その外側の台地を外郭とする。松原館は矢代川右岸の比高20m以上の半島状の丘陵上に立地し、90m四方ほどの広さを囲む土塁と堀がある。ここは地元で「坪ノ内」と通称されており、今回発掘した地点の通称と同じであることが注目される[6]。これらのほかは現段階で現地踏査していないものの、地表面からその存在を明瞭にうかがうことはできないと思われる。

ところで、坪ノ内館跡を含めて、大規模な山城との関連が明瞭な館(乙吉館・堀之内館)をのぞくと、立地条件にひとつの共通点がみられる。すなわち、おおむね河川に面した河岸段丘縁辺に立地し、眺望もよいことである。渋江川には高柳館・御館・小出雲館が、矢代川には坪ノ内館・志館・松原館・両善寺城(館)がそれぞれ臨んでおり、周辺に対する眺望もよい。三ツ俣館は金子以策氏所蔵の「明治4年三俣村絵図」にみえる字「立ノ内」(現小字「前田」に含まれる)

名　称	所　在　地	遺　構	関　係　地　名	備　考
高柳館	新井市高柳字鳥ケ窪	渋江川の河岸段丘突端、二郭と墓壕	館ノ内、元城、馬場、堀田、外堀	鬼小島弥太郎館跡と伝う
御館	〃　二子島字御館	河岸段丘端、畑・宅地となり、旧規不明	御館、柳町、佃舞台の内、御坊町	
小出雲館	〃　小出雲字堀ノ内	河岸段丘端	堀ノ内、立ケ窪、舟場	
十日市館	〃　十日市字御屋敷		古町、舞台、御屋敷、御殿平	※検地帳に「土井の内」の地名あり「御屋敷」は「柳屋敷」の誤りか？
乙吉館	〃　乙吉字立ノ内	単郭(90×110m) 畑となる	立ノ内、ぶたい立田、木戸のはい	鮫ケ尾城の居館
堀之内館	〃　上堀之内	河岸段丘上	平屋敷、北ノ屋敷、正田屋敷、築田、馬場川原、杉ノ木町	鳥坂城の居館、現在菓成寺寺域か
除戸館	〃　除戸字前田	河川段丘端、単郭石垣、壕址	殿屋敷、立野、寄畑	除戸氏館跡と伝う.
志館	〃　志字立ノ越	緩斜地、水田となり湮滅	立ノ越、舞台、柳町、北屋敷	
松原館	〃　窪松原(松原高地)	※土塁、空堀	柳町、本堀、小六左エ門	鬼小島弥太郎館址と伝う
※三ツ俣館	〃　三ツ俣字前田		立ノ内(明治4年三俣村絵図)	
両善寺城	〃両善寺字出張(板ケ峯)	山頂か？	出張、升形	
針館	板倉町針(たての内おたて)		浄屋敷、たての内おたて畑、馬場畑、町屋敷	
横町館	〃　横町字逢		逢、苗代	地名により推定
熊川館	〃　熊川(たての内)		たての内、立ノ前	大熊氏館址か
山越館	〃　山越字尾立		尾立、ぶたい、御馬田、長尾	要害(山城)を伴なうらしい
山部館	〃　山部(たて畑)		柳町、東町、たて畑、立山	
不動新田館	〃　不動新田(殿屋敷)	山麓水田	殿屋敷	箕冠城の根小屋か
宮島館	〃　宮島(たての内)		たての内、柳町、竹ノ花	
国川館	〃　国川字館ノ越		館ノ越	
高野館	〃　(たての内)		たての内、柳町、屋敷田	

第2表　新井市周辺の居館　　(摸：伊藤正一1966、第2図の図幅のものに限る　※は加筆)

によって存在を推定したものであるが、万内川に面した段丘縁辺に立地し、眺望もよいことは共通している[7]。このような立地条件は、これらの館の性格や造営の背景、時期などについて示唆的である。なお、館の時期について、高柳館・松原館は中世前半に成立するとされる〔加藤1973・植木1980〕が、具体的な資料に乏しい。これ以外の館を含めて、今後の調査がまたれる。

D．村落と交通

村落　中世に存在した集落は近世以降に成立した新田村をのぞくことによって、おおよその状況を知ることができよう。新田村の分布は第2図に示したが、矢代川西岸の斐太地区と矢代川南岸の新井市南部（矢代地区）から中郷村にかけての地域に多くが集中している。これらの地域は地形的にみて、火山山麓と矢代川の氾濫原(扇状地)であり、水田耕作にあまり適していない。とくにこれらが集中する斐太地区の八幡・新保・谷内林・坂井・藤塚・小丸山の各新田は火山山麓の段丘上に立地しており、その水田化にあたっては上流から用水を引くことが心要である(第Ⅵ章3)。このほかの新田村もほとんど同様の条件が存在しており、新井市南部の新

田村は矢代川に堰を設け、水を引いている。

新田村をのぞく本田村は少なくとも中世末までに成立した村落と考えられ、慶長2年(1597)の頸城郡絵図〔東大史料編纂所1983〕が残っている頸城平野北半部では、絵図にみえる村はおおむね現在の村と対応する。本田村が多く分布しているのは、新井の市街地より北側あるいは北東側の地域であり、地形区分の上では扇状地・氾濫原の沖積地である。こうした地域は古代・中世を通じて安定した耕地がひろがっていたと推察される。館跡の分布状況も本田村の分布と重複する面がうかがわれ、館の存立基盤が一面では農業生産にあることを示す。ただ、ここで注意したいのは、本田村についても中世と近世とではその生産力に一定の差が存在したと想定されることである。すなわち、現在みるような一面に水田がひろがるという景観は、近世の用水の完備などによって、執拗に水田開発がなされた結果と考えられる[8]〔坂井秀弥1985〕。

交通　頸城地方は古代越後国府の所在地であり、北陸地方と東海・関東甲信地方を結ぶ結節点にあたる。こうした交通上の特性はどの時代についてもかわることはない。中世になると越後府中の直江津は、政治的にも経済的にも頸城地方の中枢となる。問丸の存在も推定され〔豊田武1952〕、海上・陸上両交通で重要な役割を担っていたと考えられる。一方、新井市周辺の南辺は信濃に近く、これと交通上の接点である。詳細な経路は不明であるが、『延喜式』には東山道の支路が信濃の綿織から越後の頸城にのびていたことが記されている[9]。

中世の交通路も詳細はよくわからないが、関山などが記録にみえることからすれば、近世の北国街道(ほぼ現在の18号線にあたる)にあたる道が存在したものと思われる[10]〔武藤直1975〕(第1図)。一方、新井から北信の飯山に至る飯山街道(現在の国道292号線)にあたる道も存在したと考えられる。北信地方と頸城地方の分水嶺には多くの峠があり、西側丘陵には西頸城に至る峠もあり、上記以外にも多くの道が通じていたことがうかがえ、これらによって両地方との活発な交流がなされていたものと思われる。

註

1）地形分類や地質については、北陸建設弘済会1981のほか高田平野団体研究グループ1981、妙高団体研究グループ1969を参考にした。

2）戦国期越後の権力構造の変遷については、守護代長尾氏による守護上杉氏からの領国支配機構の奪取により永正年間を画期とする考え方が主流であるが(『戦国大名論集・上杉氏の研究』1984所収の各論文参照)、他に幕府や朝廷との関係から長尾氏の政治的オートノミー確立の時期を永正～大永年間に求める考えもある〔竹田和夫1986〕。

3）「景勝一代略記」、「越後古実聞書」、「上杉年譜」、「北越略風土記」、「浅間文書」上杉家記所収、「歴代古案」(以上『越佐史料』巻之五)

4）本項の記述については井上鋭夫1970、金子以策1973、小村弐1963、伊藤多三郎1963、木村宗文1984・1985を参考にした。

5）半ケ峰城については、報告によって位置・名称・所在地に相違がみられる。ここでは字半ケ峰の位置と宮腰公健氏の教示にしたがって位置を示した。なお、字半ケ峰は大字が両善寺で半ケ峰城を西野谷城とす

ることは適当でないと思われる。また、『城郭大系』は半ケ峰城を西野谷城とし、西野谷字城平に所在するとしているが、記述内容からみた位置と一致しないようである。

6）「坪ノ内」は個有名詞でなく、「立ノ内」、「土居の内」、「堀ノ内」などと同様に館の存在を示す可能性が考えられよう。

7）現地は40m四方ほどの畑地であるが、明瞭な方形の区画や堀・土塁などはみられない。遺物の散布はごく少ない。この周辺には「前田」・「越前」・「ぶたい」などの地名が存在する（村絵図）。

8）後述（第Ⅵ章３）参照。

9）当地方の古代土器は基本的には北陸的な様相を示すが、信濃との直接的な関係でとらえられる要素もいくつかある。平安中期の土師器甕に北信濃系のものが散見されること（たとえば上越市子安遺跡・一之口遺跡など）、美濃産の灰釉陶器がけっこう搬入されていることはその一例である〔坂井秀弥1986〕。また、８・９世紀の須恵器杯類に、糸切り技法に象徴される東海系の技術系譜が普遍的にみられるのも、信濃を介した影響と考えられる。

10）北国街道は中郷村の関山からほぼ信越線に沿って北上するルートをとるが、これより西側の中郷村岡沢を経て矢代川沿いに新井に至るルートも存在したと予想される。後者のほうが全般的に傾斜が小さいと思われる。このルートの近くには、両善寺・松原・三ツ俣・志・坪ノ内などの城館跡が存在しており、城館と交通路との関係上注目される。

館跡から東長森・梨の木方面を望む

第Ⅲ章　調査の概要

1．調査地の現況と伝承

調査地の現況（図版２）　当館は矢代川左岸の河岸段丘縁辺、標高約 127 m に立地する。館が立地する地点は段丘縁辺のなかでも南側にわずかに張り出しており、小さな半島状をなす。矢代川との比高差は約10m である。館跡からの眺望はよく、南側直下に矢代川が流れ、新井市街を一望し、遠くは頸城平野から信越国境の山々が視野に入る。北側には西長森、東長森の集落を眼前にひかえる(12頁写真)。

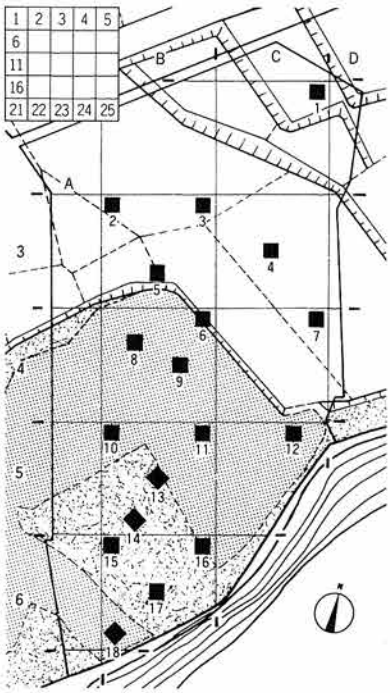
館の北側、県道西野谷新田・新井線以南は、昭和54年から56年にかけて実施された圃場整備がなされておらず、旧地形をよくとどめている。地形は半島状張り出し部の突端が高く、畑や荒地となり、その北側は水田である。突端の高くなっている部分は東西約75m 、南北約50m の範囲で、その北辺から東辺にかけては水田面と数10cmから１m ほどの段差がある。北辺西側はこの段差が北側に屈折してのびる。北辺部には一部カギの手に屈折する箇所があり、この部分に沿って土塁状の高まりがある。この高まりは下端幅約５m 、高さは約1.5mであるが、東側調査区に向かって細く低くなり、不明瞭になる。この場所は昭和30年代まで長森地区の共同火葬場であった。調査の結果、この畑と荒地からなる高い部分と水田との段差に沿って空堀(空堀2)が検出されたが、地表面からの観察ではまったくその痕跡は認められず、更正図からもこの空堀の存在はうかがえなかった。南北方向の空堀１も同様で、地表面にまったく痕跡をとどめていなかった。こうした点からも、調査前に館の存在を明確に確認するに至らなかった。また、この周辺は遺物の散布が希薄で、再三の表面採集でも珠洲焼・土師質土器などの小破片が散見される程度であった。

伝承　館跡の位置する周辺は行政上の小字は「堂ノ浦」であるが、地元では「坪ノ内」という通称で呼ばれており、かつて豪族の館があったという伝承がある。今回の調査のかなり前に当地で茶臼(図版20—100)を採集した東長森の小林森男氏(昭和５年生)は、その際の書き付けに「坪ノ内」の場所を「往古の頃坪の内何某と称する豪族の居城あり処」と書き留めている。「坪ノ内」という通称は松原館にもあり、氏名というよりも、「たてノ内」などと同様の語義をもつのではないかと思われる(第Ⅱ章２C)。東長森の唯念寺の尾崎オサさん(大正15年生)は、「坪ノ内」にかつての豪族が存在した証拠として、お茶と矢竹が生えているということを親から聞いたという。昭和にはいってからの状況を知る東長森の小林三代治氏(大正９年生)は、ここにお茶畑が存在したことはなかったが、館の南側の崖の斜面にはお茶が自生していたという。矢

竹とは弓矢に使う細い竹を意味し、現在でも崖にみられる。調査の結果のとおり、館が存在したという伝承は、史実に由来するもので、現在まで400年もの間語り継がれてきたことが知られる。あらためてこの種の遺跡における伝承の重要性を認識することができる。

2．調査の方法と経過

グリッドの設定(図版２)　グリッドは方位に合わせず、バイパスのセンター杭No.275とNo.274を結んだ線を主軸として15m方眼の大グリッドを組むことにした。その結果グリッド主軸は国土地理院の座標系に対し10度32分12秒西偏することになった。当初杭No.275を基点とする予定であったが、その1.44m北に基準杭を誤って打設したため、最終的な基点はNo.274＋18.56となった。グリッドの呼称は東西をアルファベット、南北を数字として、両者の組み合わせによって「Ｂ４」のごとく表示した。大グリッドはさらに３m方眼の小グリッドに区分けし、１～25の番号を付した(第3図)。グリッド設定に係わる杭の打設とその杭頂標高表示作業は業者に委託し、８月初旬には完了した。



第３図　試掘坑の位置と
小グリッド割付け図

予備調査　本調査に先立って、遺跡の層序や遺物の包含状況をおおよそ把握するために、８月初旬の２日間に予備調査を実施した。調査は大グリッドの１・５・13の小グリッドに２m×２mの試掘坑を設定することを基本として、断面観察と遺構検出を行った。遺構の検出状況により適宜設定箇所を変更し、最終的には18箇所に試掘坑をあけた(第３図)。

その結果、明黄褐色のいわゆる地山(泥流堆積土)上面までの深度は20～100cmであり、基本層序は表土(耕作土)とその下の暗褐色土ないしは黒褐色土であることが確認された。試掘坑３・７・11・12・14・17では地山面で柱穴・土坑・溝・石列が検出された。15では地表下15～20cmの浅い地点で石列が検出された。出土した遺物は土師質土器皿２点、陶磁器片１点であった。これらは細片で、時期は明確ではなかったが、一応中世後期から近世のものと推定した。また試掘坑15で検出された石列には、石塔の一部と考えられる直方体の切り石が使用されていた。

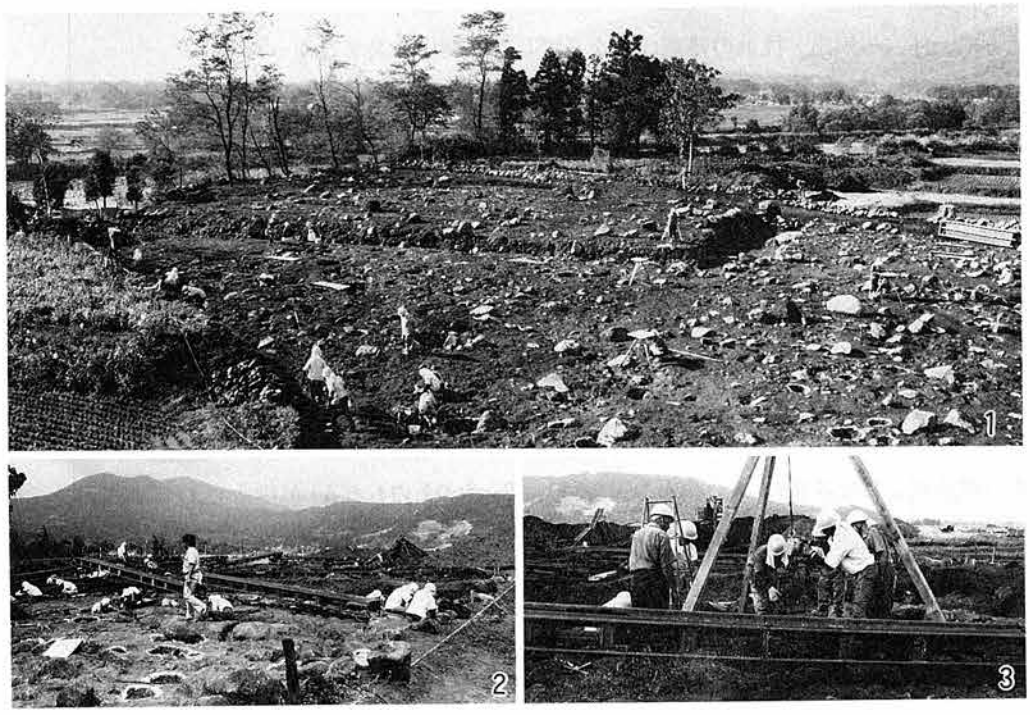
以上の予備調査の結果、遺構の分布は低い水田部にもひろがり、発掘面積は当初約1500㎡と考えていたが、北側の県道までの間、約2500㎡が調査対象となった。そのため、調査期間は９月下旬より延び、10月中旬までと計画変更した。しかし、遺物の出土量がごく少ないこともあ

って、この時点でも中世の居館という性格は明確に意識していなかった。

調査方法　調査はまず耕作土及び水田床土(以下それぞれⅠ層、Ⅰ′層とする)を重機によって除去し、暗褐色～黒褐色土(以下Ⅱ層)を人力によって掘り下げた後、地山(以下Ⅲ層)上面で遺構を検出した。Ⅱ層の除去には、ベルトコンベアーとバックホーを併用した。遺構確認では、掘立柱建物の見落しのないよう柱穴の関連に注意した。建物柱穴はおもに柱痕の検出に重点を置き、断面観察は代表的なもの以外行わなかった。井戸・土坑は半截した時点で断面観察をし、掘り下げた。遺構平面図は1/30で平板実測し、さらに心要なものについては1/10・1/20で実測した。

遺構番号は、建物・井戸・堀等の種別で分けず、検出順に一連番号を付し、その頭にＳＢ・ＳＥ・ＳＤ・ＳＫ・ＳＡ・ＳＸの種別記号を付した。種別の記号はそれぞれ建物・井戸・堀(溝)・土坑・柵・石組を表わす。Ⅰ・Ⅰ′・Ⅱ層の遺物はグリッドごとに、遺構の遺物はそれごとにとりあげ、それぞれ「坪ノ内・Ｂ４区・Ⅱ層」・「坪ノ内・ＳＥ29」のごとくラベルを付けた。ＳＤ171の遺物は上・中・下層に分けてとり上げ、ラベルもそれぞれに対応したものを付けた。なお、報告書作成にあたっては遺構を空堀・建物・井戸・溝・石組などに分け、番号は種別ごとに付けた(第３表参照)。遺物の註記は、調査時のラベルを生かし「坪Ｂ４Ⅱ層」・「坪ＳＤ171下層」のごとく行った。　土層観察は、南北方向はＢ・Ｃ列界線上、東西方向は５・６列界線上の土層観察用アゼで行った。

現場では調査区の1/100縮尺の略図を作成し、現場で遺構の位置・切り合い・柱穴の関係を主と



第４図　発掘調査風景　　1.遺構実測　2.遺構発掘　3.チェーンブロック

した所見を記入した。現場では発掘作業のほか、遺物の洗浄、註記作業を併せて行った。

調査経過　8月22日に器材を搬入し、26日までに土層観察用アゼの設定、草刈り等の準備作業を完了し、27日より発掘作業に着手した。

発掘は調査区南端より開始し、調査区北側の県道沿いに排土した。当初、Ⅰ・Ⅱ層の掘り下げにおける遺物の出土は、全般に希薄であり、Ⅲ層上面までの掘り下げは早く進行した。発掘開始まもなくの28日に、Ｂ６区で検出された溝状の落ち込みにトレンチを入れたところ、幅約３ｍ、深さ約１ｍの大規模な堀（空堀１）であることが判明し、居館ではないかとの見通しがもたれた。その後30日に試掘坑15で検出されていた石列は空堀１に構築された石垣（石組１）と石組暗渠（石組２）であることが判明し、珠洲焼や青磁・染付などの中国製陶磁器も少量ながら出土しはじめ、この時点で当遺跡が中世の居館であるとの確信をもった。柱穴はいくつか検出されていたが、９月３日にＢ・Ｃ６区で桁行３間の建物（４）が確認された。Ｂ５区では多数の柱穴が検出され、９日にはＢ４・５区（建物１）とＣ５区（建物３）で、それぞれ建物が確認された。Ｂ５区は柱穴・井戸が集中しており、さらに径１ｍを超えるような柱穴もいくつか存在し、建物１のプラン確認には苦慮した。

柱穴の切り合いは認められなかった。また柱痕の確認は容易ではなく、柱穴確認面から10～20㎝下げた時点でそれを確認しようと試みたが、柱穴埋土が暗褐色土・黒褐色土を主体としていたため、地山土の混入の度合・土のしまり具合等、不確実な根拠で確認せざるをえなかった。さらに、館廃絶後耕作地として利用した際の石抜き痕が多かったことと、調査員の不馴れも手伝って、柱穴の検出・柱痕の確認はかならずしも順調には進まなかった。

調査開始後１週間ほど経過し、当地の土層にも慣れ、遺構の掘り込み面を観察したところ、耕作土直下のⅡ層上面から遺構が掘り込まれていることを確認した。したがって、当時の生活面は現在とほとんどかわりなく、Ⅲ層上面で多数の石が露出している状況とはかなり異なることを認識した。しかしながら黒褐色土のⅡ層上面で遺構を検出することは困難であり、よし可能であったとしても著しく時間を要するうえ不確実なものであると判断し、Ⅲ層上面まで下げて遺構検出することにした。

建物の確認と並行して他の遺構の発掘も進めたが、井戸と空堀２の発掘は困難であった。

当館跡の井戸は井戸１に代表されるように、ほとんどが径１ｍ前後の円形素掘りのもので、その埋め戻しには非常に多くの石（中には50～70㎝大のものもある）が投入されており、その発掘は困難かつ危険であった。当初タイヤを利用したもっこを作って石を引き上げたが、時間がかかるうえたいへん危険なため、チェーンブロックを使うことにした（第４図）。このような状況であったため、井戸埋土の断面観察は上層部で可能だったものの、下層部では断念せざるを得なかった。

Ａ３・４区、Ｂ３・４区の水田部南端で耕作土を除去したところ、幅約３ｍの範囲に石が敷

きつめたように検出された。当初その性格は不明であったが、B４区における土層観察の結果（第５図参照）、堀（空堀２）をのちに埋め戻す際に、水田として利用するため、床土を安定させることを目的として、意識的に石を投入したものと推定された。このことは水田に利用されていなかった空堀1の石組1南側の埋土にほとんど石が含まれておらず、空堀２の状況と好対照をなすことによっても裏付けられた。そのため、石の検出状況はとくに実測する必要が認められず、写真に記録するにとどめた（図版34—１・２）。空堀２は遺物の出土量が多いことに加えて、その遺物が当館の造営・廃絶時期を示すものと考え、すべて人力によって掘り下げることにした。そのため空堀２の発掘には予想以上の人力と時間を費やすことになった。また空堀の外側にも予想以上に遺構が多く分布しており、井戸も多数検出された。

一方、館跡は明らかに調査区の西側に広がっており、空堀１・空堀２の状況や土塁状の高まりの性格を把握することが要請された。そのため、土塁状の高まり（長森共有地）については長森地区の、水田部については土地所有者の承諾を得て、必要最小限の範囲でトレンチを設定するとともに、地表面の清掃を行った。まず空堀１と空堀２の交差する部分（トレンチ1）、土塁状の高まりが良好に残っていると判断された部分（トレンチ２）、土塁状の高まりの西側で空堀２の西側延長線上の部分（トレンチ３）、カギの手状に屈折する土塁状高まりの西辺の北側（トレンチ５）にそれぞれトレンチを設定し発掘した。その結果、空堀２はトレンチ３まで直線的につながっていること、土塁状の高まりは実際に館に伴う土塁であること、カギの手に屈折する土塁に沿った外側（北側）にも空堀が存在することが明らかになった。空堀２は西方段丘崖にトレンチ６を設定したところ、崖面に空堀の落ち込みが検出され、ここまで延びていることが判明した。

以上のトレンチ調査で、調査区外の館西半部についても所期の目的をほぼ達成した。15日には上越市南消防署の消防車（ハシゴ車・高さ約30ｍ）から全体を写真撮影した。写真撮影に際しては遺構と関係ないⅢ層上面に露出していた多くの石を除去した。16日に器材搬出を行い、17・18日に残っていた平面実測図の作成を完了し、すべての調査を終了した。

当館跡の発掘は、調査中から地元を中心にかなりの注目を集めた。新井市は全国的にも著名な上杉謙信の春日山城にも近く、また謙信の後継者争いである御館の乱で当館跡に近い鮫ケ尾城が落城したことなどがよく知られており、市民の歴史に対する関心は強い。館跡は調査後、破壊されることでもあり、多くの市民に検出された館や出土遺物などを見てもらうために、10月６日に市教育委員会の協力のもと現地説明会を開催した。当日は強風にもかかわらず、新井市を中心として約120 名の参加者があり、あらためて文化財に対する関心の強さを認識した。

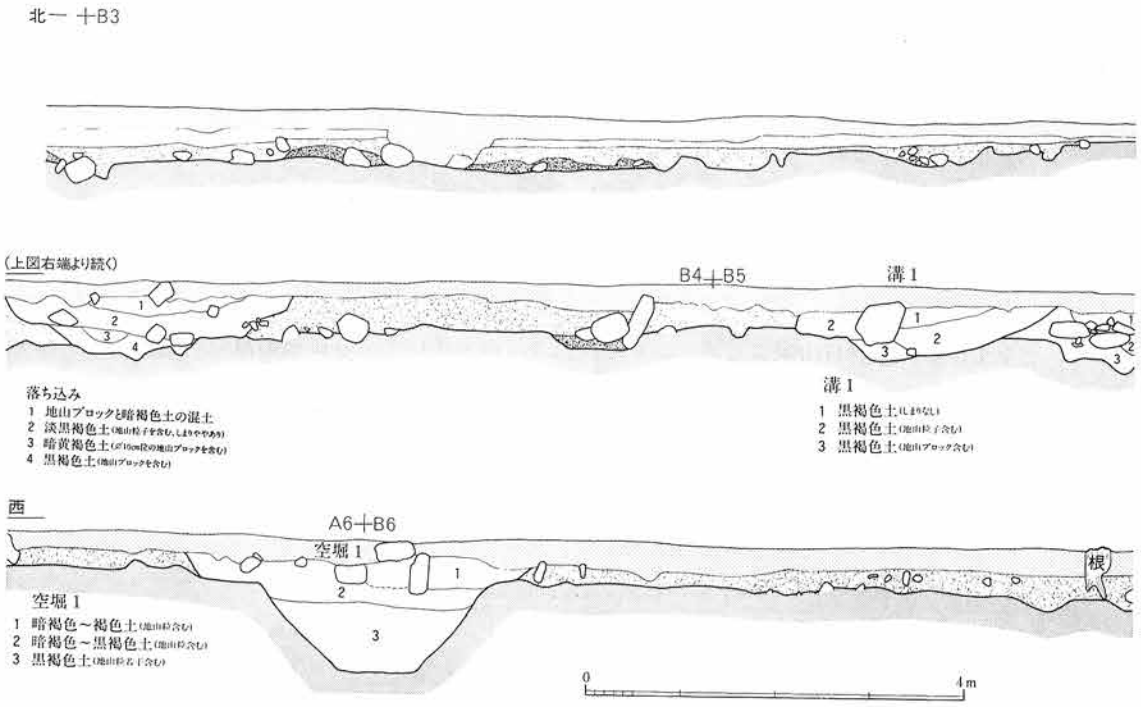
第Ⅳ章　遺　　跡

1．層　序

今回発掘調査を行った範囲は、河岸段丘上縁辺部の東西約38ｍ、南北約70ｍの範囲であり、南側段丘縁辺は畑地で高く、北側は水田部で低い。両者の間には約80cmの段差がある。地勢は北東に向かってゆるやかに傾斜する。

土層は単純である。基本層序はⅠ層が表土・耕作土、Ⅱ層が暗褐色土ないし黒褐色土、Ⅲ層がいわゆる地山の明黄褐色土である。水田部ではⅠ層とⅡ層の間に床土（Ⅰ′層）が存在する（第５図）。Ⅰ層はⅡ層が耕作等により変質したもので、Ⅱ層と基本的に同一層と考えられる。このことから遺構の多くはⅡ層上面から掘り込まれているが、館が存在した時の地表面は現状とほぼ同じレベルであったと推定される。

Ⅰ層は厚さ10～30cm程であるが、水田と畑の境界では80cmを超える部分もある。褐色～暗褐色を呈し、粒子が非常に細かく、粘性はほとんどない。Ⅰ′層は厚さ５～20cm程で、茶褐色を呈し、鉄分を多く含む。粘性が強く、しまりもよい。Ⅱ層は水田部と畑地でそのあり方が若干異



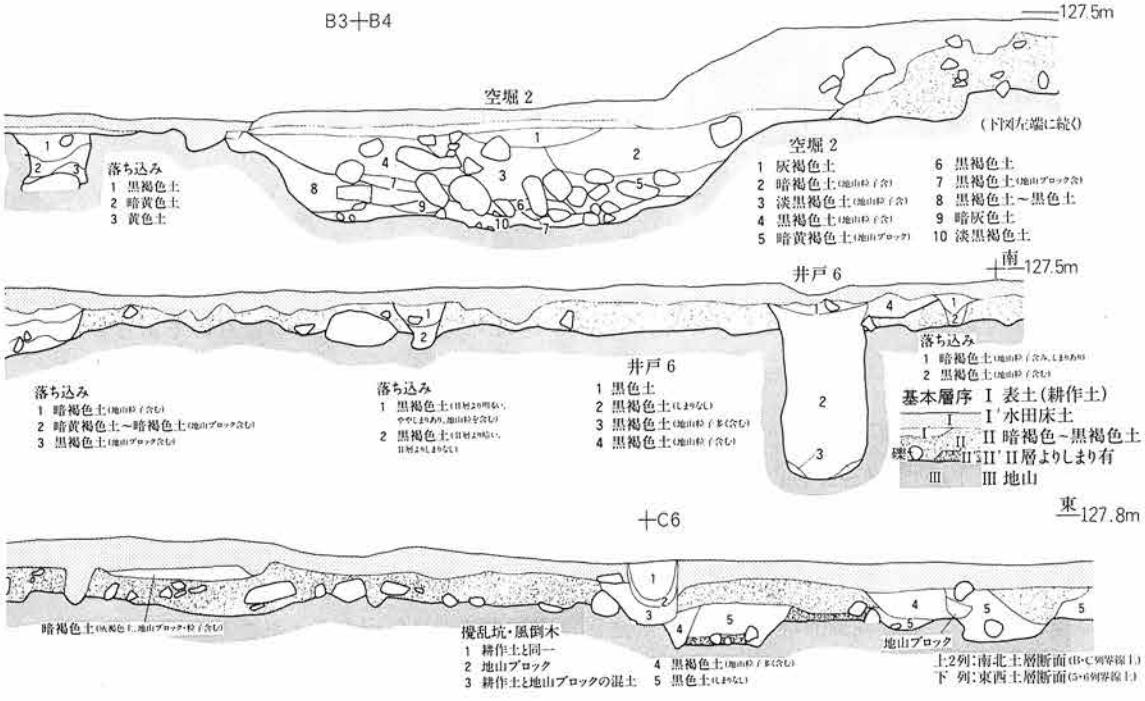
第５図　発掘区主要土層断面図

なる。水田部では後世の水田化に伴い畑地側の高い部分は削平されまったく存在しないが、北側では厚さ５～25cm程あり、畑地では農作業による撹乱を若干受けてはいるものの厚さ30～50cmほどである。Ⅲ層の傾斜に伴い北側が厚い。黒褐色ないしは暗褐色を呈する黒ボク(火山灰起源と考えられる黒褐色腐植土)で、粒子は非常に細かく、若干粘性を希びる。水分を含むと粘性は著しく強くなる。Ⅲ層はいわゆる地山で、矢代川泥流堆積物である〔新潟県1980〕。明黄褐色を呈し、非常に硬い。10cmから１～２ｍ大の礫を非常に多く含んでいる。

２．概　観（図版４）

今回の調査範囲は、堀に囲まれた館の東半部にあたる。堀に囲まれた館の規模は東西50～70ｍ、南北30～50ｍ、面積約3,000㎡と推定される。発掘面積は約2,250㎡で、堀に囲まれた部分はこのうち約1,270㎡である。遺構は館を画す空堀・石組・掘立柱建物・柵・井戸などで、掘立柱建物と井戸は堀の外側にも分布する。

堀は幅3.5ｍ前後で、すべて空堀と考えられる。発掘区内では崖に向って開く「コ」の状をなすが、東側の空堀(空堀２)は西方に屈折して、調査区外にも直線的にのび、段丘崖まで達する(トレンチ１・３・６)。発掘区の西側の空堀(空堀１)は館を東西に２分する位置にある。発掘区西側が未調査のため、その状況は不明であるが、ここでは発掘区内で空堀１と空堀２に



囲まれた部分を一応「東郭」、空堀１の西側を「西郭」と呼称することにする。東郭は東西20～25ｍ、南北約30～45ｍの方形を呈し、面積は約１,060㎡である。

掘立柱建物は全体で12棟検出されたが、柱穴の分布状況からみて復原しえなかった建物がかなり存在するものと推定される。建物ののうち３棟は発掘区外へのびており、全容は不明である。空堀の外側の建物は二つのまとまりをなし、井戸もおおむね建物の分布と重なる。空堀の内側では東郭に４棟、西郭に１棟確認された。東郭には主屋とも考えられる大規模な建物１がある。

建物の方向は東西棟５棟・南北棟６棟・不明１棟で、建物方位が空堀１の方位に近いもの８棟・空堀２の東辺部の方位に近いもの３棟・全く関係しないもの１棟がある。廂を含めて３間×２間(推定)の平面形を呈する建物が９棟あり、このうち棟持柱柱穴を検出できたものは２棟であった。全体的に柱穴は小さく、掘形埋土は地山土の混ったⅡ層を使っている。建物２・９～12は図上で検討・復元したものであり、詳細な観察は不充分である。

井戸は24基検出された。すべて素掘りで、径１ｍ前後を測り、井戸14・15が平面不整方形のほかは円形を呈する。多くは掘削する際、地山中の大きな礫にあたり、掘り抜くことを断念し、使用されずに埋め戻されたものと考えられる。現在でも湧水があり、井戸として使用できるものも数基ある。ここでは使用されずに埋め戻されたと考えられるものも一括して井戸とした。

空堀に伴う土塁は発掘区外で一部存在するのみで、発掘区内では検出されなかった。７基検出された石組には、空堀内に構築された土橋の石垣・暗渠、空堀及び崖縁辺の一部に位置する石列などがある。なお、発掘区内で数基の風倒木痕が検出された。

３．遺構各説

Ａ．空堀・石組・土塁

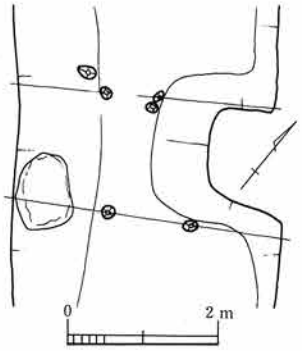
空堀１　付橋１（図版３・４・５・33・34―４）

調査区南西部(Ａ４～Ｂ６区)に位置する南北方向の空堀である。空堀の中ほどに石組１(石垣)、石組２(暗渠)がある。これらは後述するように、二次的に空堀を埋めて構築されたものである。石組１・石組２については次項で述べる。

空堀１は西偏37度の方位で、長さ約37ｍ発掘されたが、北側は調査区外にのびる。幅は上端で3.2～3.7ｍ、下端で2.1～2.4ｍ、深さは0.85～1.1ｍである。崖際は上端幅2.6mと狭くなり、東側に幅約１ｍ、高さ約25cmの突出部がある(図版33―３)。断面は逆台形を呈するが、両側で法面の角度が異なる。西側は50度前後、東側は70度前後でかなりの差があり、視覚的にもその差は明瞭である。これは掘削時になんらかの意図で東西の法面の角度を変えたことによるものと考えられる。底面は南側の崖際にむかってゆるく傾斜しており、そのレベルはＡ５区では126.21ｍ、崖際南端部では126.08ｍを測る。レベルの低い南側の掘り込みが深くなっている。

底面には地山中の大きな礫が一部露出している。なお、堀の掘り込み面はⅢ層ではなく、Ⅱ層上面のレベルにちかいことから、本来の深さは20～30cmほど深くなり、上端幅も10～20cm広くなる。

橋1(第6図)は空堀1のほぼ中央部、B5(21)区・B6(1)区に位置する。この部分の空堀1の東側法面には、上端で幅1.1～1.5m、長さ0.9mの突出部が削り出されており、堀の幅が狭くなっている。この狭くなった堀の底面に、小さなピットが6基あり、これが木橋と考えられる。ピットは径20cm前後、深さ15～30cmで、ほぼ一直線に配列しており、これより幅1.5～1.7mほどの木橋の存在が推定される。



第6図　橋1実測図

空堀の北半部が埋められて、石組1・石組2が構築される二次的な段階でも、石組1の南側は空堀として機能していたと考えられる。この部分は館が廃絶した後に埋められたものと推定されるが、覆土は基本的に4層に分けることができる。最上層はⅡ層として削除した土で、詳細は不明であるが、厚さ20cmほどと推定される。上層(1・2)は厚さ約30cmの黒色土で、含まれる地山粒子の多寡で2層に細分される。中層は厚さ約80cmの赤褐色土粒子を多量に含む黒褐色土(3)で、厚さ10～20cmのレンズ状黒色ブロック(4)が存在する。下層は西壁立ち上がり部分から中位までレンズ状に堆積している上層類似の黒色土(5)と、底中央から東壁立ち上がりにかけて同様に堆積している地山粒子を多量に含む暗褐色土(6)である。中層と下層の間には焼土ブロック(7)が僅かに存在する。

石組1より北側はほとんど人為的な埋め土と考えられる。ただし、石組2の下部最下層の暗褐色土は、底面に露出した大きな礫により溜った土と考えられ、石組1・石組2構築以前の土層であろう。この石組2の下部最下層からは珠洲焼体部破片(82)、土師質土器(48)が出土しており、石組1南側からは、瓦質土器(58)・珠洲焼(74)・越前焼(90)が出土している。

空堀1の北側の発掘区外の状況は、トレンチ1によると、空堀1は空堀2北辺と連結し、全長約42mとなる。連結する部分には石組1と同じように石が積まれており(図版35—4)、この部分まで埋め戻されていたことが推定される。この時点ではかなり広い部分で東郭部と西郭部がつながっていたことがうかがえる。なお、トレンチ1の部分での空堀1と空堀2の底面レベルはそれぞれ126.28m、125.86mであり、約40cmの比高差をもって、空堀1のほうが高い。

石組1・石組2　(図版11・29・30)

空堀1に構築された石垣(石組1)と暗渠(石組2)で、両者は同時につくられた施設である。空堀1の中ほどA・B列、5・6列の界線付近に位置する。空掘1は堀削当初、その東側の一部に小さな突出部があり、そこに橋(木橋)がかけられていたが、ある時点で、この突出部より

北側が埋められ、これに伴って石組1・石組2がつくられている。空堀1の覆土と調査区外のトレンチ1で検出された石組遺構からみて、空堀2との接点まで埋め戻されたと判断され、その時点で空堀1の約1/3のみが空堀として残されていたものと考えられる。埋め戻しがなされた部分は、ある意味では「土橋」というべきかもしれない。

石組1は土を埋めた際の土溜めの機能をもつもので、ほぼ旧状をとどめるものと推定される。台形状の空堀1の断面に積まれたものであり、石垣の正面は下底約2.5m、上底約4m、高さ1.2mで、上面のほぼ中央に暗渠(石組2)の口がとりついている。石は暗渠の部分の1個をのぞいて、いずれも自然石で、大きさは下底の1個をのぞけば、いずれも人頭大からこれよりやや大きいものである。こぶし大の栗石は正面にはあまりみられない。自然石のうち、明確に川原石と判断されるものは2個のみで、ほかは地山に含まれる石を利用している。川原石はすぐ下の矢代川から搬入したものであろう。下底の長さ70～80cmの石は横積み(長軸の面を正面に)で、その他の石は小口積みを基本とし、わずかな傾斜(2～5度程度)をもつ。裏込めの栗石はあまり多くはない。

石組2の暗渠は遺存状況がかならずしもよくないが、長さ約10mにわたって検出された。暗渠の幅は25～40cmで、長さ40～70cmの石を横積みに2列に並べて両側壁とし、その上に扁平な蓋石をおく。石垣につらなった暗渠の口となる部分の石1個は五輪塔の基礎(110)であるが、それ以外は自然石である。川原石はみられない。蓋石は2個遺存するのみで、この部分では暗渠の高さは約30cmである。側壁の石は石組1後方約4mまでは両側が遺存するが、それ以後は西側しか遺存しておらず、その北側は原位置から移動したもの1個がみられるのみである。暗渠の底面は石組1後方約1mのみ石が敷かれているが、ほかは石がない。石組1後方約3.5mの範囲は側壁の石が設置される面、すなわち暗渠の底面にあたる部分に、厚さ15～30cmのつきかためた土がみられる。これは地山の土に黒色土を混ぜたもので、とくに硬い。側壁の下には栗石をおく部分がある。

発掘前から2個の蓋石の上面は露出しており、構築当初もそのレベルまで土を積んでいたものと推定される。厚く土をかぶっていなかったことから、遺存状況があまりよくなく、構築時の状況は不分明であるが、暗渠の長さは遺存していた10mをあまりこえないものと推定される。

空堀2　付石組3・4・5・6柵1・2　(図版3・5・10・28・31・32・34・35)

発掘区南東端より中央部(B3・4、C5区)を西偏約49度で南北にのび、B3区中央で約80度西に折れて、発掘区外にのびる(N—52°—E)。北辺部と空堀1はほぼ直交するが、東辺部は方位が約10度ずれており、東郭は整った長方形を呈さない。発掘区外のトレンチ1・3・6で、このつながりを追求したところ、ほぼ直線的に段丘崖まで達していることが判明した。これより、東辺の南北部分は約35m、北辺の東西部分では約80mとなる。空堀1と同様、水が溜った形跡はなく、空堀と考えられる。空堀の上端幅はおおむね3.9～4.2mで、崖際南端部は広くなり、

4.6 mほどになる。底面のレベルは北辺西側が高く、屈折部をへて東辺南端へむかって低くなる。これにしたがって、空堀の深さは深くなるとともに、下端幅は狭くなる。浅い北辺部のA4区では深さ約60cm、底面レベルは125.70m、屈折部で深さ約70cm、底面レベル125.40m、東辺中ほどで深さ1.1 m、底面レベル125.30mと、北辺部から東辺部中ほどまではゆるく傾斜するが、東辺部の南端にかけては急激に深くなり、深さ約2.2 m、底面レベル124.30mで、下端幅は約1.5 mとなる。この部分には傾斜面が急に変化する段が2箇所ある。断面の形状は空堀1と同様、逆台形であり、東西・南北の内外面で法面の角度が異なっている。西側・南側の内法は50～60度、東側・北側の外法は70度前後である。ただし、東辺南端部の深い部分ではこの差が明瞭ではなく、法面も角度が一様ではなく、上端近くでゆるくなっている。また、地山中の大きな礫が露出している部分がいくつかあるとともに、これを除去したために堀の上端のプランが歪んでいる部分もある。

埋土は基本的に4層に分かれる。最上層は厚さ約15cmの暗灰褐色粘質土(耕作土)と厚さ約10cmの茶褐色粘質土(床土)である。上層は厚さ10～20cmの地山粒子を含み、Ⅱ層よりしまりのある黒褐色土、ないしは地山粒子・鉄分を多く含む暗褐色土である。中層は厚さ60～90cmで、人頭大からこれよりやや大きい礫を多量に含み、これが面をなしている(図版34—1)。土は暗黄褐色土・茶褐色土・暗茶褐色土・暗褐色土・黒褐色土・暗灰褐色土が互層をなしている。それぞれ含まれる黄褐色土粒子・小礫の多寡でさらに細かく分かれる。下層は東西にのびる部分と南北にのびる部分では異なっている。前者では厚さ約20cmで、堀底中央部から南壁立ち上がりにかけて、地山粒子・小礫を含む明褐色土が堆積し、後者では堀底面全体に厚さ約10cmで淡黒褐色土が堆積している。

このことより、中層より上位は館廃絶後、ある程度時間が経過した後、多数の礫を投入して埋め戻されたものと考えられる。下層は掘削直後から埋め戻すまでの間の流入土であろう。埋め戻しに多数の礫を使用したのは、水田として利用するためにその床土が安定し、沈下したりしないようにしたものと推定され、南端の崖際にはかなり丁寧に石垣状に石を積み上げており、土留めとしている(図版34—2)。なお、埋土最上層から18世紀の伊万里が出土していることなどから、近世にはいってから堀が埋められて水田化されたものと思われる。

出土遺物は多数あり、特にB3区屈曲部付近を中心に中国製陶磁器(1・3・5・6・9・10・12・13・15・20・21)、土師質土器(32・34・35・41～43・49～51・53・54・60)、珠洲焼(61～64・66・71～78・80・81・83)、越前焼(90・91)、石臼(94・97・99)、石製鉢(104～106)、石塔(108)、鉄製品(111～114)、石製品(116～118)などがあり、図示しないものも含めると総数137点を数える。なお、越前焼大甕(92)は堀南端部最上層より出土したが、これは東長森の集落から持ち込まれて近年まで肥溜として使用されていたもので、館と直接的な関係はない。

本空堀には石組3・4・5・6と柵1・2が伴っている。

石組3（図版10、31－2、32－1）はA3(23・24)区に位置し、空堀の外壁に構築された石垣である。石垣の下部には平面が3.2m×1.9mのきわめて大きい礫が存在する。石垣は野面積みで、長さ3.8mにわたって拳大から80cm長ほどの石を高さ約1mに積み上げている。裏込めには黄褐色土を含む暗褐色土が充填されていた。石垣後方の堀形はこの大きな礫の面を出す範囲まで広がっていることから、空堀を掘削する際、いったんはこの大きな礫を除去しようと外側を掘り下げたものの、あまりに大きくて除去するのを断念し、堀の壁面を石垣で修正したものと推定される。

石組4（図版10、31－2、32－2）はB3(12・13)区の空堀2の屈折部外壁に位置する石垣である。この石垣は石組3と同様で、地山中の大きな礫を除去した後に壁面を石垣で整形したものであろう。礫は除去されていた。長さ4.0mにわたって拳大～90cm長の石を、高さ約90cmに積み上げている。

石組5（図版31－2・3）はA4(4・5)、B3(21・22)、B4(1)区の空堀2内法上端に位置する石列である。40cm長の石を1列・1段に11.7mほど並べている。石が置かれているのはⅢ層上面より約20cm高いⅡ層上面であり、石は水平ではなく堀の傾斜にそって置かれている。館敷地内の土が堀に流れ込むのを防ぐ機能が考えられる。

石組6（図版32－3）はC5(9・14・15)区の空堀2内法上端に位置する石列で、形状・性格は石組5と同一である。60cm長の石を3.6mにわたって並べてある。

柵1はC4(17・22・23)区の空堀2内法上端に位置する2間(4.3m)の南北方向(N－46°－W)のもので、柱間寸法は北から2.0m、2.3mを測る。柱穴掘形は径50cmの円形、深さ10～30cmである。防禦施設の一つと考えられる。

柵2はC4(23)、C5(3・9)区の空堀2内法上端に位置する2間(5.4m)の南北方向(N－43°－W)のもので、柱間は2.7m等間である。柱穴掘形は径30～40cmの楕円形、深さ20～30cmである。柵1の南端柱穴と柵2の北端柱穴は約50cm離れて重なっており、4間の柵と思わせるような状況である。

石組7　（図版3・28－3）

C6区北西部の段丘崖縁辺部に位置する石列である。石が設置されている面は、Ⅱ層上面であり、石の面が一部地表面に露出していた。このことからも、当時の地表面が現在のそれとほぼ同じレベルであったことがわかる。溝1の西側約6.5mにわたって良好に遺存しており、この西方にも一部遺存する。石列は館側と崖側の2列あり、両者は約1.2mの間隔をもつ。館側の石列は長さ40～60cmの石を横積みにして、一部その上に石をのせる。崖側の石列は館側の石よりも相対的に小さく、小口積みにしている。遺存状況も相対的に良くはない。両者の石列の間には拳大の石が乱雑におかれている。

空堀3

発掘区外のトレンチ５で確認されたものである。トレンチ５は土塁状の高まりの北側の水田に設定したもので、堀の南側の上端は確認していないが、現状の土塁状の高まりとの関係から幅約3.5 mほどと推定される。深さは約90cmである。この堀はこのトレンチ５以外では不明であるが、土塁状の高まりに平行して東西にのび、東側は南北方向の土塁にそって空堀２につらなるものと推定される。土塁状の高まりと水田との段は西側へのびず、直角に北へ屈折するため、空堀３の西側がどのようにのびるかは不明である。空堀２と土塁との関係からすれば、空堀３は空堀２と同時に掘削されたものではなく、空堀２の一部が埋められて南北方向の土塁が築かれた時に掘削されたものと考えられる。

土塁１　（図版４・５・23・35・38）

発掘区西側の未調査区にあり、全面的に発掘は実施していない。発掘前から外観や形状から土塁の可能性が考えられ、一部石を積んだ状況も観察されたところから、地表面を清掃し、石がある部分についてはその面を出すとともに、部分的にトレンチを設定した。このトレンチの観察から、明瞭に土塁と判断されたのはトレンチ２の部分のみで、この東西両側延長上のトレンチ４の高まりは後世の盛土あるいは積石である。トレンチ１の部分についてはトレンチ２の東側約２ mで、この高まりの幅が急に狭くなり(上端幅約50cm)、高さも低くなる(約40cm)。一方、トレンチ２の西側から北への屈折部には土塁上に石が葺いたようになっており、土塁に伴うものと判断される。この石がなくなる北辺部の高まりは西側へ向かって徐々に低くなり、西側の水田面のレベルと同じになる。この部分にはトレンチを設定しておらず、また後世の改変も想定され、土塁かどうかは不明である。ただし、この高まりの北側に空堀３があり、この高まりと水田との段差が東側と同様に旧状を反映した可能性が強い。以上のことから、トレンチ２の東側約２ mの部分から、西側へ約10mと、これから北へ直角に屈折する長さ約10 mの部分は明確に土塁と考えられ、西側北辺部についてはその可能性が高いものと考えられる。

トレンチ２西壁の断面からみると、土塁は断面カマボコ状を呈し、Ⅲ層(地山)から頂部まで1.8 m である。このうちⅢ層の上約60cmは土塁築造以前の自然堆積土で、土塁自体の盛土は約1.2 m である。盛土は、下部が黒褐色土主体で、地山(Ⅲ層)ブロックを含み、最上層はしまりのない褐色土で拳大の礫を多く含んでいる。これらの間に地山ブロックを主体とした硬くしまった層がある。この層以外はとくに硬くはない。土塁の北側の裾と空堀２の南側上端が一致し、空堀２の底面と土塁頂部との比高は約2.6 m 、基底部の幅は約5.5 m である。土塁の土はおもにⅡ層の黒褐色土であり、空堀２を掘開した際の排土をそのまま土塁に積んだとは考えられない。

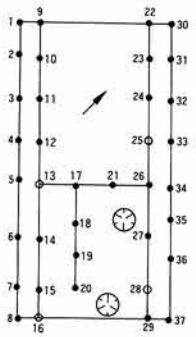
土塁の外側に顕著にみられる葺石の多くは地山中の礫で、一部川原石である。大きさは拳大から人頭大よりやや大き目のものであり、乱雑に積んである。トレンチ２の部分では、内側にも石がみられたが、これは土塁に伴うもので、ほかの部分では土が覆っているため観察で

きないものと思われる。なお、葺石の屈折部南端下部に暗渠の口の部分とも考えられるものがみられる(図版38－４)。これは「冂」状に三つの石が組まれたもので、調査後写真によりその可能性が想定されたことから、詳細は不明である。トレンチ３の状況からみて、南北方向の土墨の下には、空堀２が存在しており、この部分の土墨は空堀２を二次的に埋め戻して築造されたことがうかがえる。これは空堀１と石組１・石組２の関係と同じであり、空堀１の南側を残して埋め戻された時に、空堀２のこの部分も同時に埋め戻された可能性が考えられる。空堀１の上にも暗渠(石組２)があることから、この暗渠らしき石組と共通した設置状況がうかがえるように思われる。

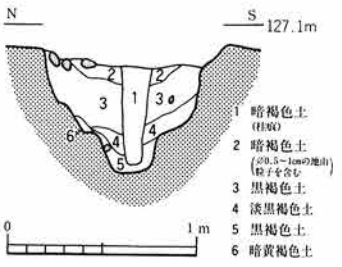
B．掘立柱建物

調査で検出された12棟の掘立柱建物の周囲には多くの柱穴が集中しており、ほかの建物の存在あるいは建て替えの可能性も残る。建物の方位測定は、南北棟建物は桁行(長辺)の方位、東西棟建物は梁間(短辺)の方位を基準とした。

建物１　(図版３・６・28—１・37—８)

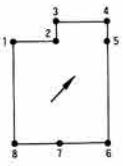


Ａ４、Ｂ４・５区に位置する発掘区内最大の建物である。南北棟建物(Ｎ－42°－Ｗ)で、桁行７間(15.6m)、梁間(5.8m)は３間と推定される。東西に各１間(東1.2m・西0.9m)の廂あるいは縁を有する。柱間寸法は身舎桁行で柱穴９～(13)・22～26がほぼ2.2m等間、柱穴(13)～15・26～(28)は2.5～3.0mと不揃いである。柱穴15～(16)・(28)～29は1.2mと推定される。梁間は南北両妻で柱穴を検出できなかったが、柱穴(13)—26間に間仕切りと考えられる柱穴列が存在し、これに妻通りの柱が対応するならば、身舎梁間は３間となり、東から1.9・2.0・1.9mとなる。間仕切り柱穴列(13)—26以南にも同様な柱穴列17—20が存在する。この２筋の柱穴列と身舎東側桁行柱穴列・南妻に囲まれた部分は土間と考えられ、井戸１・３が存在する。柱穴列13—26以北は床を持っていたと推定される。柱穴掘形は平面不整な円形・楕円形を呈する。身舎で径60～170cm、深さ35～70cm(遺構確認面より、以下同じ)、廂で径40～70cm、深さ16～46cm、間仕切りで径40～60cm、深さ10～40cmを測る。身舎柱穴が大きく深い。柱穴２・４・11・12・22・23・26・32・34で確認された柱痕は、径17～32cmを測る。埋土は暗褐色～黒褐色土が主体で地山粒子が若干混じる。柱穴26の断面(第７図)によると、上面径80cmほどで、中段から中央部を径30cmほどで掘り下げて柱を据えたと考えられ、埋土は版築状を呈している。



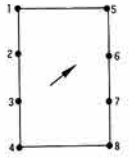
第７図　建物１柱穴断面図

建物２　（図版３）



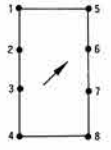
Ａ・Ｂ５区に位置する建物である。本建物は調査後図上で復原したもので、プランの特異性などから復原にやや問題が残る。西北１間(5.2 ｍ)×東西２間(北5.1ｍ・南4.9 ｍ)で南北が若干長い。北柱穴列の東部分に１間(約１ｍ)の張り出しをもつ。建物方位(Ｎ—40°—Ｗ)は建物１・空堀１のそれとほぼ一致する。当館で唯一平面形が正方形を呈する。柱間寸法は不揃いで、北側が東から2.7 ｍ・2.4 ｍ、南側が東から2.5 ｍ・2.4 ｍを測る。柱穴掘形は平面不整な円形・楕円形・方形を呈し、規格性は認められない。身舎・張り出し部で大きな違いはみられず、径40～80cm・深さ10～40cmを測るが、柱穴１・２は非常に深く55cm前後を測る。埋土は暗褐色～黒褐色土が主体である。柱穴８内より天目茶碗(26)が出土している。

建物３　（図版７・28・２）



Ｂ・Ｃ５区に位置する桁行３間(7.4 ｍ)×梁間１間(4.6 ｍ)の南北棟建物(Ｎ—49°—Ｗ)である。東郭にある建物のうち、これのみ空堀２の東辺部分の主軸方向と一致している。柱間寸法は東側桁行が北から2.5・2.3・2.6 ｍ、西側桁行が北から2.4・2.6・2.4 ｍを測る。建物中央に同じ方向の南北溝(溝１)があるが、新旧関係は不明である。柱穴掘形は平面不整形を呈し、径は50～80cmを測る。深さは東側桁行で30～50cm、西側桁行で45～60cmを測り、西側が若干深い。柱穴２・８内には地山中の石が露出している。柱穴２・３・４・６・７で確認された柱痕は、径14～22cmを測る。埋土は暗褐色～黒褐色土を主体とする。柱穴２～３、５～６のそれぞれほぼ中間に径50cm前後、深さ25cm前後の浅い掘り込みが検出されたが、本建物の柱穴かどうかは不明である。

建物４　（図版７）



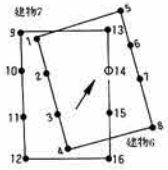
Ｂ5・6、Ｃ6区に位置する桁行３間(6.6 ｍ)×梁間１間(3.6 ｍ)のやや小形な南北棟建物(Ｎ—40°—Ｗ)である。桁行柱間寸法は2.2 ｍ等間で、当館跡で検出された建物の中で最も柱間寸法が揃っている。本建物と建物２は約８ｍ離れているにもかかわらず、前者の西桁柱筋と後者の東桁柱筋が一直線上にのり、両者の建物は同時に建てられた可能性が強い。柱穴掘形は径40～65cmの不整な円形・楕円形を呈する。深さは柱穴１・５・７が25cm前後と浅いのに対し、他は40～50cmを測り、約20cmほど深い。北１間は廂の可能性もある。柱穴２で確認された柱痕は径18cmを測る。本建物東1.5 ｍに井戸６がある。

建物５　（図版７）

Ａ６・７区(西郭)に位置する建物で、６基の柱穴が検出された。建物は発掘区外へのびており全容は不明である。ほかの建物の規格からみて、桁行３間(約７ｍ推定)×梁間１間(4.5 ｍ)の東西棟建物(Ｎ—42°—Ｗ)と推定される。東郭の建物1・

2・4と同様に空堀1の方位に近いが、これらが南北棟なのに対し、本建物は東西棟である。桁行柱間寸法は2.2～2.3mとほぼ等間である。柱穴掘形は径50～60cmの不整な円形・楕円形を呈し、深さ40～50cmを測る。柱穴4は地山中の礫が露出しているため20cmと浅い。他の建物よりも丁寧に掘り込まれている印象を受ける。

建物6　（図版7）

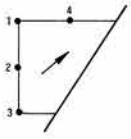


C3区に位置する桁行3間(東6.5m・西6.0m)×梁間1間(4.7m)のやや歪んだ平面形の南北棟建物(N—44°—W)である。空堀2の東辺部分の方位に近い。建物7と重複するが、新旧関係は不明である。桁行柱間寸法は東側で北から2.2・2.0・2.3m、西側で北から1.9・2.5・1.6mを測り、不揃いである。柱穴掘形は径40～70cmの不整な円形を呈し、深さは柱穴1・7がそれぞれ25cm・30cmのほかは40～50cmを測る。柱穴1で径17cmの柱痕が確認された。埋土は暗褐色～黒褐色土を主体とし、地山ブロックを混入する。北妻に接するように井戸12・13がある。

建物7　（図版7）

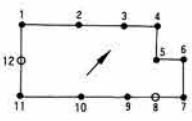
C3区に位置する南北棟建物(N—31°—W)で、桁行は東側が2間(6.8m)、西側が3間(6.6m)梁間1間(北4.7m・南4.5m)の歪んだ平面形を呈するものである。建物方位はほかの建物と異なり、どちらの空堀の主軸方向とも関連しない。桁行柱間寸法は、東側が北から4.3・2.5m、西側が北から1.8・2.6・2.2mと不揃いである。柱穴掘形は径36～70cmの不整な円形を呈し、深さは柱穴13が24cmのほかは40～50cmを測る。柱穴15より白磁皿片(16)が出土している。建物南西隅に井戸10がある。

建物8　（図版3）



C4区に位置する建物で、柱穴は4基検出された。東半部は発掘区外へのびており全容は不明である。ほかの建物からみて桁行3間(約8m推定)×梁間2間(5.0m)の東西棟建物(N—46°—W)と推定される。建物方位は空堀2の東辺部分のそれに近く、棟持柱柱穴を検出できた2棟のうちの1棟である。柱間寸法は北桁行の柱穴1—4が2.7m、梁間は2.5m等間である。柱穴掘形は径60～70cmの比較的整った円形を呈するが、深さは25～60cmと不揃いである。柱穴4で径18cmの柱痕が確認された。埋土は暗褐色～黒褐色土を主体とし地山粒子が混入する。

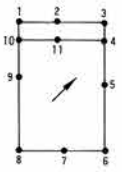
建物9　（図版3）



B2区に位置する建物で、建物10・11と重複するが、新旧関係は不明である。本建物は調査後図上で復原したもので、柱間寸法が非常に不揃いであることなどから復原にやや問題が残る。東妻南柱穴(12)は検出できなかったが、桁行3間(北7.3m・南7.2m推定)×梁間2間(東3.75m推定・西4.1m)のやや歪

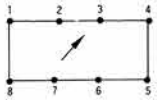
んだ平面形を呈する東西棟建物(N—43°—W)である。東妻南半に1間(1.5 m)の張り出しがある。柱間寸法は不揃いで、桁行は北側で東から1.7・2.45・3.15m、南側で東から1.5(推定)・2.45・3.25m、梁間は東妻の北が1.9 mを測る。柱穴掘形は1辺20～40cmの不整な方形を呈する。深さは柱穴2が15cmと特に浅く、ほかは35～65cmと不揃いである。柱穴9で径30cmの柱痕が確認された。埋土は暗褐色土・黒褐色土が主体であった。

建物10　(図版3)



B2区に位置する桁行2間(6.0 m)×梁間2間(北4.6 m・南5.0 m)のやや歪んだ平面形を呈する南北棟建物(N—41°—W)で、北妻に1間(約1m)の廂を有する。建物方位は空堀1のそれに近く、棟持柱柱穴を検出できた2棟のうちの1棟である。柱間寸法は、桁行が東側で北から2.5・3.5 m、西側で北から2.4・3.6 mと南側が長く、梁間が北側で東から2.7・1.9m、南側で東から2.7・2.3 m、廂で東から2.6・2.0 mと東側が長い。柱穴掘形は身舎で1辺50～60cm、廂で1辺20～30cmの不整な方形を呈し、深さは前者で40～60cm、後者で20～30cmと身舎のものが大きくて深い。柱穴7・8・9で確認された柱痕は、それぞれ径24・28・14cmを測る。埋土は茶褐色土が主体である。柱穴7より土師質土器皿(灯明皿)片が出土している。

建物11　(図版3)



B2区に位置する桁行3間(7.4 m)×梁間1間(3.0 m)の細長い東西棟建物(N—40°—W)で、空堀1の方位に近い。桁行柱間寸法は、北側で東から2.6・2.2・2.6 m、南側で東から2.6・2.3・2.5 mと中央が短い。柱穴掘形は1辺40～70cmの不整な方形・円形で、深さは柱穴6が20cmと浅く、ほかは30～60cmを測る。

建物12　(図版3)

B2区北端に位置する建物で4基の柱穴が確認された。検出された柱穴列は東西棟建物の南側にあたるものと推定される。桁行3間(7.5 m)×梁間1間の東西棟建物(N—42°—W)であろう。桁行柱間寸法は東から2.5・2.45・2.55 mを測る。柱穴掘形は1辺30～50cmの不整な方形を呈し、深さは20～30cmと比較的浅い。柱穴2・3で確認された柱痕はそれぞれ径16cm・22cmである。

C．井　戸

井戸1　(図版9、36—1・2・3)

B4(23)区、建物1の中央部南東側に位置する。長径1.2m、短径1.1mの不整な円形素掘りの井戸である。深さ2.8mを測り、当館跡で最深の井戸である。掘形の壁は東北側下位でわずかに段をもつ。井戸内は20～40cm長の石と黒褐色粘質土が充満しており、埋め戻しがきわめて短時間で行われたと考えられる。越前焼壺片(89)が出土している。

井戸2　（図版9）

B 5（2）区、建物1の身舎西桁第5柱穴(柱穴13)と重複する井戸である。径1.1 m、深さ1.65mの不整な円形素掘りの井戸である。建物1との新旧関係は不明瞭である。埋土上層は暗褐色土が主体で地山ブロック・粒子が混入する。確認面下20cmほどで40cm長の石が2個検出された。この石を礎石とするなら建物1は井戸2より時期が下ることになる。

井戸3　（図版9、36－5・6）

B 5（9）区、建物1の南妻柱筋に近接する位置にある。径1.4 m、深さ2.15mの不整な円形素掘りの井戸である。約1.5 mの深さで掘形西側壁に長さ1 m、厚さ40cmの礫が露呈しており、その上方の壁は外方へ大きく抉られている。掘削時に石の除去を試みたと考えられる。埋土は上層約45cmが地山粒子を含む黒褐色粘質土、その下が20～40cm長の石を主体とした黒色土との混合層であった。下層では若干の焼土が検出された。土師質土器(44)・珠洲焼(74・79)・越前焼(89)・石製鉢底部(103)・水瓶(119)が上層の約1 mの間に集中して出土している。石製鉢と水瓶は火を受けた痕跡がある。

井戸4　（図版9、36－4）

B 5（12・13）区、建物1の西廂柱筋上にあるが、これとの新旧関係は不明である。長径1.1 m、短径1 m、深さ2 mの不整な円形素掘りの井戸である。掘形東側壁下位と底面に60～70cm長の石が露出しているが、現在でも豊富な湧水があり、その機能を充分に果すことができる。

井戸5　（図版9）

B 5（12）区、井戸4の南約1 mに位置する長径1.1 m、短径1 m、深さ1.5 mの楕円形素掘りの井戸である。底面径が1.4 mと断面がフラスコ状を呈する。底面中央部に露出する80cm長の石の除去を試みたが、不可能なため掘削途中で埋め戻されたものと推定される。埋土上層は地山ブロックを含む褐色土である。青磁碗片（図版39－1・2 a）が出土している。

井戸6　（第5図、図版9・36－8）

B 5（25）区、建物4の東約1.5 mに位置する長径1.2 m、短径1 mの楕円形素掘りの井戸で、深さ1.5 mを測る。B・C列界線上のアゼの土層観察の結果、本井戸はⅡ層上面より掘り込まれていることが明らかとなった。これより井戸の規模は径で約30cm、深さで約60cm大きくなる。埋土は3層に分けることができる。上層はⅡ層として排除した土で、厚さ約10cmのレンズ状の黒色土、中層は地山粒子を含むしまりのない黒褐色土で、井戸底面までこの土が充満していた。下層は掘形壁立ち上がり付近にわずかに存在する黒褐色土（地山粒子含む）である。比較的浅いにもかかわらず現在でも湧水があり、井戸として使用された可能性があるが、その場合でも使用期間は短いものであったと考えられる。

井戸7　（図版9）

B 6（6）区、空堀1内にある長径1.1 m、短径0.85mの楕円形素掘りの井戸で深さ1.0 mを

測る(空堀底面より)。20～40cm長の礫を投入して埋め戻されており、空堀底面では井戸掘形を覆うように石が集中して検出された。珠洲焼(65・69)、中国製染付片(図版41－a)が出土している。これらのことから空堀1より時期が古い可能性もあるが、新旧関係については不明である。現在でも若干の湧水がある。

井戸8　(図版9)

B6(2)区、空堀1東側上端に接している。長径1.4m、短径1.2mの平面不整形な掘形を呈する深さ1.7mの素掘りの井戸である。掘形北東側壁中位及び底面に、それぞれ70cm・40cm長の石が露呈している。現在でも若干の湧水があるが、使用されずに掘削途中で埋め戻されたと考えられる。土師質土器皿B類(46)が出土している。

井戸9　(図版8)

C4(6)区、空堀2内にある長径1.75m、短径1.5mの楕円形素掘りの井戸で、深さ1.35mを測る(空堀底面より)。空堀2との新旧関係は不明である。掘形埋土は礫をほとんど含まず、4層に分けることができる。上層は地山土を主体としたもので、意図的にこの土で埋めたことが推定され、空堀2の掘削以前に存在した井戸の可能性がある。

井戸10　(図版36－7)

C3(24)区に位置する。建物6または7に付随する可能性がある。径1.2mの円形素掘りの井戸で、深さ2.4mを測る。埋土は単一で、地山ブロックを含む暗褐色粘質土である。現在でも湧水があり、その機能を果し得る。石臼(95)と珠洲焼片が出土している。

井戸11　(図版3)

C3(16)区に位置する径0.9mの不整な円形素掘りの井戸で、深さ1.6mを測る。現在でも若干の湧水がある。

井戸12　(図版37－1)

C3(8)区に位置する長辺1.2m、短辺1.0mの不整な隅丸方形の素掘りの井戸で、深さ1.3mを測る。埋土は4層に分けることができる。上層より地山ブロック・粒子を含む暗褐色土、地山ブロックを含む褐色土、黒褐色土と地山土の混土、黒褐色土である。3層中で20～40cm長の石が検出された。底面に50cm長の礫が露呈しており、使用されずに掘削途中で埋め戻されたものと推定される。

井戸13　(図版37－2)

C3(9)区、井戸12に接して掘削されている。径1.5mの不整な円形素掘りの井戸で、深さ1.9mを測る。掘形西側壁の中位及び下位にそれぞれ120cm・80cm長の礫が露呈している。現在でも湧水があり、その機能を果し得る。建物6あるいは建物7に付随する可能性がある。30～50cm長の礫を使って埋め戻されている。

井戸14　(図版3)

C 2(25)区に位置する1辺約0.8 mの隅丸方形素掘りの井戸で、深さ1.2 mを測る。埋土は3層に分けることができる。上層より黒褐色土、地山粒子を含む灰褐色土、地山粒子を含む黒褐色粘質土である。底面に100 cm長の石が露呈しており、使用されずに掘削途中で埋め戻されたものと推定される。

井戸15　(図版3)

D 2(16)区に位置する長辺1.0 m、短辺0.8 mの隅丸方形素掘りの井戸で、深さ0.85 mを測る。埋土は3層に分けることができる。上層より地山ブロックを含む暗褐色土、地山ブロックをわずかに含む黒褐色土、地山土と黒褐色土の混土である。

井戸16　(図版9・37－3)

B 2(17・22)区に位置する長径1.5 m、短径1.3 mの楕円形素掘りの井戸で、深さ1.5 mを測る。南を除く三方の掘形壁下位でわずかに段をもつ。埋め戻しはおもに礫を投入してなされており、上層約1 mは40～50cmの礫が、その下約20cmは拳大の礫がつまっている。埋土は地山土・暗褐色土・黒褐色土の混土である。底面には45cm長の礫が露呈している。埋土最上層中より石臼(96)・珠洲焼片が出土している。

井戸17　(図版3)

B 2(24・25)区に位置する長径1.5 m、短径1.2 mの不整形な素掘りの井戸で、深さ1.8 mを測る。掘形上端の南・北側にそれぞれ80cm・150 cm長の礫が露呈している。埋土は上層より地山粒子を含む褐色土、地山ブロック・30～50cm長の礫を含む暗褐色土、黒褐色土である。

井戸18　(図版8・37－4)

B 2(8)区、建物10の東側桁行柱筋に接するように掘削された井戸である。長径1.2 m、短径1.0 mの楕円形素掘りの井戸で、深さ1.2 mを測る。礫を使わずに埋め戻されており、埋土は4層に分けることができる。底面西側に50cm長の礫が露呈している。

井戸19　(図版3)

B 2(14)区に位置する長径1.2 m、短径1.0 mの不整形な素掘りの井戸で、深さ1.5 mを測る。掘形北東側壁上位に60cm長の礫が露呈している。現在でも底から20cmほどの高さまで湧水がある。

井戸20　(図版3)

B 2(10)区に位置する長径1.9 m、短径1.2 mの整った小判形の素掘りの井戸で、深さ1.6 mを測る。掘形南側壁下位に60cm長の礫が露呈しているが、底から50cmほどの高さまで、湧水がある。

井戸21　(図版3)

C 2(8)区に位置する長径0.9 m、短径0.8 mの不整な方形素掘りの井戸で、深さ1.3 mを測る。礫を投入して埋め戻されていた。現在でも若干の湧水がある。

井戸22　（図版８、37－５）

Ａ２(14)区に位置し、井戸北半は発掘区外へのびるため、その全容を知ることはできなかった。１辺約1.5 ｍの隅丸方形素掘りの井戸と推定される。深さは1.2 ｍで、現地表面からは約２ｍである。断面観察の結果、少なくともⅡ層上面より掘り込まれていることが明らかとなった。最下層が礫を多量に含む黒色土であるほかは、埋め戻しにさほど礫を使っていない。掘形東隅の壁は崩落のためか若干抉れている。掘形上端東隅では幅約50cm程度の硬くしまった一段低い面が検出された。井戸を使用する際になんらかの機能を果していたと考えられる。

井戸23　（図版８）

Ｂ２(３)区に位置する径約1.1ｍ、深さ1.5ｍの不整な円形素掘りの井戸である。西側で柱穴529と重複しており、本井戸はこれに切られている。埋土は単一なもので、底面から上面まで地山ブロックを含む黒褐色土が充満していた。掘形壁西側立ち上がり部分に30cm長の礫が露呈している。

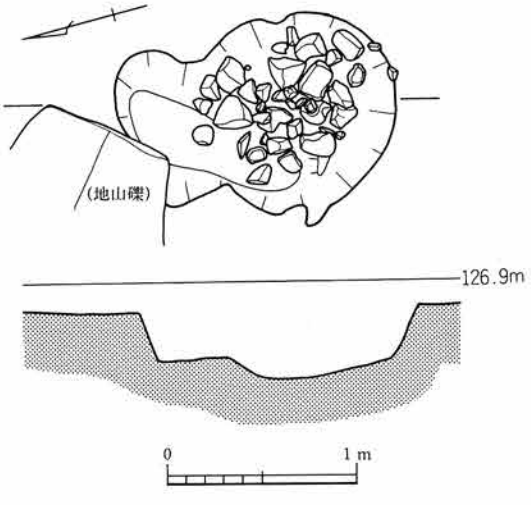
井戸24　（図版３）

Ｂ２(14)区に位置する径0.8ｍの不整な円形素掘りの井戸で、深さ1.3ｍを測る。底面に50cm長の礫が露呈している。

Ｄ．溝・土坑・その他

溝１　（第５図、図版28－２）

Ｂ５(５)区、建物１から0.5ｍほど離れた位置から、西偏約50度で南にのび崖に達する溝である。建物３・空堀２の東辺部の方位とほぼ一致する。長さ17.5m、幅1.1～1.5ｍ、深さ25～30cmを測る。北端部と開口部の底面は約40cmほどの比高差があり、崖に向ってゆるやかに傾斜している。Ⅱ層上面より掘り込まれており、その実質的な規模は幅1.5 ～2.4 ｍ、深さ60～90cmほどになると推定される。埋土は黒褐色土を主体とし、含まれる地山粒子の大小、多寡等によって３層に分けることができる。建物１に近接し、南側土間部分の外に掘られていることより、この建物に関連する遺構であると推定されるが詳細は不明である。また建物３と重複するが新旧関係は不明である。出土遺物はない。



第８図　土坑１実測図

土坑１　（第８図、図版37－６）

Ａ４(15)区、建物１の北0.6ｍにある土

坑である。平面形は1.5m×1.0mほどの不整なもので、深さ約40cmを測る。西北部に段を有する。壁面のたちあがりは明瞭である。底から上面まで拳大の礫がつまっており、井戸と同様に人為的に埋められたと考えられる。出土遺物はなく、時期・性格は不明である。

土坑2　（図版3・6）

B5(5)区、建物1東側廂(又は縁)内に位置する土坑である。平面形は1.3m×0.8mほどの不整な方形を呈し、深さ約50cmを測る。北側と南東側に段をもち、底面南西隅に柱穴と思われる径20cmほどの落ち込みがあるが、詳細は不明である。覆土は黄褐色土粒子を含む暗褐色土で、出土遺物はない。

土坑3　（図版3）

B6(3)区、建物4の南約2mにある楕円形の土坑である。長軸約1.8m、短軸約1.4m、深さ約10cmと浅い。底面はほぼ平らである。覆土は黒褐色土で、出土遺物はない。

土坑4　（図版3）

C4(3)区、建物7の南約2mにある土坑である。1.3m×1.0mほどの不整な方形を呈し、深さ約50cmを測る。東側に段を有し、底面には60cm長の礫が露呈している。覆土は地山ブロックを含む暗褐色土で、出土遺物はない。

土坑5　（図版3）

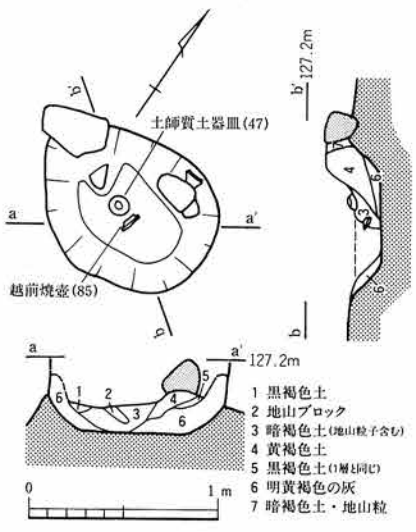
A3(14)区に位置する径1mほどの土坑で、深さ約40cmを測る。断面すり鉢状を呈し、西側は後世の石抜き痕である。覆土は地山ブロックを含み、しまりの悪い暗灰色土である。

土坑6　（図版3）

A2(14・15・19・20)区にある発掘区最大の土坑である。平面形は不整な瓢形を呈し、長軸約4.7m・短軸東側約2.3m・西側約2.1mである。底面西側に2つの段を有し、東へ向って低くなるが、確認面も同様にゆるく傾斜しているため、深さは10～20cmを測り、東半部の壁の立ち上がりはしだいに不明瞭なものとなる。西南隅・東側で3基の柱穴に切られている。覆土は地山粒子を含む黒褐色土である。時期や性格等は不明である。

柱穴300　（第9図・図版37－7）

B5(10)区、建物3の北妻西柱穴の南に近接する柱穴である。平面形は卵形を呈し、長軸105cm・短軸80cm・深さ40cm(Ⅱ層上面より)を測る。底面はほぼ平らで、掘形の壁がゆるく立ち上がり、断面舟底形を呈する。掘形埋土に明黄褐色の灰が



第9図　柱穴300の実測図

使われており、ジョレンがけによるⅡ層削平中にその灰がドーナツ状を呈して検出されたが、その時点で柱穴と認識するにいたらなかった。柱痕確認のため内側の黒褐色土を掘り下げたところ，埋土下層で土師質土器皿 (47) が底部を上にして伏せた状態で出土した。 埋土の土層断面観察の結果、ドーナツ状を呈していた灰が掘形埋土と判明し、出土した皿は流れ込みによるものでなく意識的に埋められたものであることがわかった。

また、この皿は底部を除く内外面にスス・タールが付着しており、台のようなものの上に置いた状態で火を受けたと考えられる。これらのことより本遺構は建物の造営に伴う地鎮の供養があったことをうかがわせるが、埋納物がわずかに皿１点でもあり疑問が残る。

このほかに本柱穴内からは、越前焼壺口縁片 (85) も出土している。

空堀１	ＳＤ　１	建物１	ＳＢ502	井戸３	ＳＥ 29	井戸17	ＳＥ634
2	ＳＤ171	2	505	4	30	18	645
3		3	503	5	56	19	646
溝 1	ＳＤ 19	4	501	6	214	20	647
石組１	ＳＸ　１	5	504	7	3	21	657
2	2	6	507	8	2	22	519
3	3	7	506	9	309	23	528
4	4	8	508	10	376	24	669
5	5	9	509	11	413	土坑１	ＳＫ189
6	6	10	510	12	440	2	68
7	7	11	511	13	441	3	4
柵 1	ＳＡ　１	12	512	14	606	4	337
2	2	井戸１	ＳＥ130	15	668	5	513
橋 1		2	116	16	525	6	520

第３表　遺構名対照一覧 （左：報告書番号　　右：現場・註記番号）

第Ⅴ章　遺　　物

今回の調査で出土した遺物には、いわゆる焼き物の陶磁器類のほか、石製品・金属製品・銭貨などがある。出土量は陶磁器類がコンテナ約2箱、石製品がコンテナ約5箱で、ほかは若干である。遺物の多くは館の外堀（空堀2）から出土したものであり、それ以外に遺物がまとまって出土した遺構は少ない。出土品ではないが、かつて当地で採集された和鏡や隣接地で採集された遺物もあわせて掲載する。なお、遺物の出土地点についてはそれぞれの説明に加えた。遺物の番号は種別にかかわらず、すべて通し番号を付した。

1．陶磁器類

中国製陶磁器・国産陶磁器に大別されるが、後者は瀬戸・美濃焼、珠洲焼、越前焼など産地別の陶器のほか、土師質土器・瓦質土器がある。このなかでは珠洲焼の甕と土師質土器の皿A類の個体数がやや不確定な要素が残るが、個体数は全体で106点である。中国製陶磁器が全体の1/4近くを占め、これと同じ器種をもつ瀬戸・美濃焼をはるかにしのぐ。碗皿類に限定すれば、土師質土器を含めた全体の1/3以上が中国製陶磁器であり、瀬戸・美濃焼の5倍近くになる。土師質土器皿と珠洲焼甕体部破片をのぞく大半を図化した。以下、種別ごとに述べる。

産地	種別	器種	点数	小計	小計（百分率）
中国製陶磁器	青磁	碗	10	15	26（24.5%）
		皿	4		
		香炉	1		
	白磁	碗	0	3	
		皿	3		
	染付	碗	3	6	
		皿	3		
	黒釉	壺	2	2	
国産陶磁器	土師質土器	皿A類	(22)	37	
		B類	9		
		C類	1		
		足付皿	1		
		杯	2		
		鍋	1		
		（漆塗）	1		

産地	種別	器種	点数	小計	小計（百分率）
国産陶磁器	瓦質土器	香炉	1	6	80（75.5%）
		火舎	5		
	瀬戸・美濃	天目	3	7	
		灰釉碗	1		
		香炉	1		
		盤	1		
		壺	1		
	珠洲	すり鉢	4	22	
		壺	3		
		甕	(15)		
	越前	壺	2	5	
		甕	3		
	その他	鉢	1	3	
		壺	2		
			106		

第4表　陶磁器類個体数一覧

A．中国製陶磁器

青磁15点、白磁３点、染付６点、黒釉壺２点がある。

青磁（図版12・39・40）

碗（１～８・22）　全体の器形を残すものはない。１～４は体部から口縁部で、５～８は底部である。

１は無文の体部下半破片で、口縁部は端反りのタイプと考えられる。上田分類〔上田秀夫1982以下同じ〕のD類にあたる。釉は内外面ともにうすくかかり、外面のロクロ削りの痕跡がよく残る。色は灰味をおび、淡黄白色の釉の流れがみられる。胎は灰色を呈する。約1/4残存。空堀２下層出土。

２～４は蓮弁文碗であるが、それぞれタイプが異なる。２はヘラ先による細線の線描蓮弁文をもつ。剣頭は蓮弁の単位と一致せず、遺存部からみて２単位に１つの剣頭が描かれている。上田分類のB－Ⅳ′類である。胎は灰白色で、釉は淡明緑色である。C４(３・８)区出土。

３は線描の蓮弁文をもつが、その線は明確ではない。蓮弁は２よりも太く、剣頭は蓮弁を意識してはいない。胎は部分的に淡褐色にちかい。釉はうすいが黄色味が強く、くすんだ色である。空堀２中層出土。

４の蓮弁は比較的細く、鎬がていねいに削り出されたものである。釉は比較的厚い。火を受け器面が一部光沢を失っている。C５(23)区出土。

５は径がやや小さく、かつ高くて厚い高台で、６・７とは形態が異なる。高台から体部下半のカーブが直線的に立ち上がる点も同様である。高台畳付は内外両端を粗く面取りし、内端部をとくに大きく削る。見込みに一条のヘラ先によるごく細い沈線がめぐるほかは無文である。釉は厚く、全体を施釉した後、高台内側を輪状に削りとる。露胎部は赤味をおびる。胎は灰白色である。見込み部分に敲打痕がみられる。約2/3残存。空堀２最上層出土。

６は底部から体部下半を残す。見込みに一条のヘラ先による沈線をめぐらすほか、遺存部に文様はみられない。高台は５に比してややうすく、高くて若干外側にひらく。畳付の内外両端を面取りし、接地面はほとんど面をもたない。体部外面にはロクロ削りの痕跡がみられる。釉は全面施釉後、高台内側を輪状に削りとり、その部分は赤味をおびる。胎は灰色で、１に類似する。約1/6残存。空堀２下層出土。

７は全体の約1/3を残す底部から体部下半の破片で、外面にヘラ先による文様がみられる。おそらく口縁部に雷文帯をめぐらすタイプと推定され、体部の文様は蓮弁と考えられる。遺存部から推測すると４葉の蓮弁と考えられる。見込みには一条のヘラ先による沈線をめぐらし、高台内側はヘラ削りのままで、中央が突出する。釉は全体に比較的厚く、高台内面途中までかかるが、外面の一部は赤味をおびた磁胎がのぞく。胎は淡白色を呈する。空堀２出土。

８は高台がごく低く、５～７とは明瞭に異なる。外面には釉がかからず、見込み部分は蛇

の目状の釉剝ぎがみられる。火を受けており、釉はくすんだ淡青灰色を呈する。あるいは近世の内野山系の肥前陶磁かもしれない。B 4 (16)区出土。

22は碗の底部であるが、意識的に円形に削り、高台部分をとったものである。元来の形態は5と類似すると考えられ、釉は全面施釉後、高台内側を輪状に削りとる。貫入が明確にみられる。D 4 (21)区出土。

以上のほかに碗の体部小破片が1点ある(図版39—1・2—a)。これは蓮弁かと思われる文様がみられ、釉の表面に気泡がある。井戸5出土。

皿(9・11～13)　9は稜花皿の底部と考えられる。底部内面と体部の境にはヘラ先の沈線がめぐり、両者を明瞭に分ける。このほかに見込みにごく浅い沈線がめぐる。釉はやや暗い緑色で、全体にうすくかかり、全面施釉後高台内側を輪状に削りとる。その磁胎部分は暗褐色を呈する。胎は12・13と同じく、灰色を呈する。空堀2出土。

11は段皿で、体部・口縁部内外面に文様をもつ。文様はヘラ先でごく繊細に描く。内面は唐草文と思われる。釉は比較的厚く、透明感のある明るい発色をする。胎は9・12・13などより白っぽい。空堀2中層D 3 (16)区出土。これと同一個体の破片が1点ある(図版39—1・2—b)。

12は稜花皿で、口縁部内面に3条の波状文を配する。釉は比較的うすく、暗緑色を呈し、胎は暗灰色である。空堀2出土。これと同じタイプのものがもう1点ある(図版39—1・2—c)。これは空堀2最下層出土である。

13も稜花皿であるが、口縁部内面には波状文はみられない。熱を受けているとみられ、釉は淡黄緑色を呈する。釉は全体にうすくかかる。空堀2下層出土。

香炉(10)　体部径約5cmの小さなもので、全体の約1/4を残す。体部中位に2条の沈線が配される。足は1個のみ残るが、底部中央は足の接地部分より突出する。釉は比較的厚く、胎は部分的に赤褐色を呈する。空堀2上層出土。

白磁(図版12・41)

14は高台部小破片で、皿と思われる。高台接地面は釉が削りとられる。D 3 (16)区出土。

15は高台に抉り込みを入れる皿である。森田分類〔森田勉1982〕D群にあたる。高台は低く4ケ所の抉り込みは高台上端に及ぶ。中央は突出する。胎はやや黄色味をおびた軟質なものである。釉は濁った感じの黄白色で、内外面とも施釉するが、高台の一部分は胎がのぞく。見込み部分には4ケ所の焼成時の高台痕が残る。空堀2上層出土。

16は口径15.8cm、器高2.9cmの皿である。口縁はゆるく外反し、高台は体部下半がそのまま外面につらなる。釉は全体に厚く、貫入を伴っており、一般の白磁よりやや暗い色を呈する。こうした釉は青磁のそれに類似しており、胎も灰白色で、青磁のものと共通している。全面に施釉したのち、高台の畳付から内外面中位まで釉を剝ぎとり、露胎部との境は明褐色を呈する。全体の約1/6を残す。建物7の柱穴15・空堀2下層出土。

染付（図版12・41）

碗（17～19）　17は器壁の薄い口縁部の小破片である。口縁部には内外面とも2条の界線があり、外面はこの下に丸を三つ結んだ文様を配する。空堀2出土。小野分類〔小野正敏1982、以下同じ〕CⅢ類のレンツー腕であろう。

18は器壁がやや厚い碗の口縁から体部である。外面は口縁部に雷文帯、その下に唐草文、口縁部内面に2条の界線を配する。トレンチ2の空堀2下層出土。口縁部の形態や文様構成は小野分類のEⅨ群に相当するが、器壁が厚いことや文様の描き方、呉須の発色はB群に類似する。

19は体部下半の小破片で、外面に芭蕉葉文、内面見込みに一条の界線がめぐる。胎は黄色味をおびており、このため生地は淡黄緑色、呉須はくすんだ藍色を呈する。発掘区外表面採集。

皿（20・21）　20は口径11.8cm、器高2.7cmの皿である。口縁部は端反りで、高台は断面三角形となる。外面は口縁部に太い界線、その下に牡丹唐草と鳥かと思われる文様、体部下端には3条の界線で、内面は口縁部に太い1条の界線、見込み周辺に2条の界線、中央に玉取獅子文を配する。高台畳付は釉を剝ぎとり、高台内側も輪状に釉を剝ぎとり、露胎部は暗褐色を呈する。熱を受けたと思われ、器面がざらつく。空堀2下層出土。

21は20同様端反りの皿で、外面には唐草かと思われる文様のほかに1条の界線がめぐる。20と同様器面があれている。空堀2出土。20・21ともにBⅦ群である。

以上のほかに、図示しなかったものが1点ある（図版41—1・2—a）。これは体部の小破片で、外面に渦状の密な唐草、内面はアラベスクと梵字文と思われ、B_1Ⅷ群にあたる。井戸7出土。

黒釉壺（図版12・17・39）

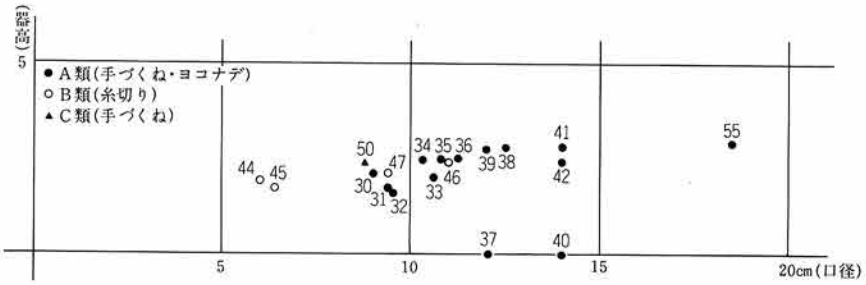
86は口縁部である。玉縁状になり、外側に肥厚する。頸部は器壁がうすくなる。胎は細砂粒を多く含み、やや粗い。釉は黒褐色で口縁部上面はコバルト・ブルーに発色する。空堀2出土。

23は体部の破片である。器壁はうすく、胎は灰色で黒い粒子が含まれており、一見して国産陶器と異なることがわかる。C5(23)区出土。86とは胎土のちがいから同一個体とは考えられない。

B．土師質土器（図版13・42・43）

皿が多く、供膳具のほかに煮炊具の鍋が少量ある。

皿（30～50・54・55）　製作技法や大きさにいくつかの種類がある。製作技法は基本的にA・B・Cの3類に分けられる。A類は手づくねで、口縁部内外面を横ナデするタイプ、B類はロクロ成形で底部を回転糸切りするタイプ、C類は手づくねでまったく横ナデを加えないものである。A類がもっとも多く、これにB類が次ぎ、C類は1点のみである。A類とB類の比率は5：2ないしは、3：1でA類が多い。A類とB類とでは胎土や色調などが明瞭に異なるものが多く、製作工人が異なるものと推定される。



第10図　土師質土器皿法量分布図

A類（30～43・54・55）

大きさはかなり多様であるが、製作技法はいずれも共通し、形態も共通する。大きさは明瞭に分類できないものもあるが、おおよそ５種類ほどに分けられる（第10図）。口径10cm未満のＡⅠ類（30～32、Aは製作技法による分類）、10～12cmのＡⅡ類（33～36）、12～13cmのＡⅢ類（37～39）、14cm前後のＡⅣ類（40～43）、18cm前後のＡⅤ類（54・55）である。大形のＡⅣ類・ＡⅤ類は底部が広く安定しているが、小形品はほとんど平坦面をもたない。灯明皿として利用された痕跡（タール・ススの付着）を残すものはＡⅠ・ＡⅡ類に集中する。完形品が少ないため、ＡⅠ・ＡⅡ類のなかでどれだけ灯明皿として使用されたかは不分明ではあるが、灯明皿として使用するのは小皿が多かったことは認めうる。なお、タール状の付着状況は実測図に網目で示した。

体部内面から口縁部外面を横ナデ、体部外面から底部は不調整でかるい指頭圧痕がみられる。口縁部は外反し、横ナデによって端部がつまみあげられる。この内側はわずかにくぼむ面をもつ。この端部のつまみあげは口縁部を広く横ナデして外反させたのちに意識的に行ったものと考えられる。これは染付の端反りの形態に類似し、これに影響を受けた結果かもしれない。口縁部の横ナデは明瞭な条痕を残すものが多く（図版42—35など）、調整時布などを指に巻きつけていたことも推定される。また、この横ナデによって外面に明瞭な稜を形成するものもある(34)。横ナデは内面に親指の腹をあてたものと推測されるが、指が器体から離れる際の軌跡が孤状を呈する。

底部内面は口径12cm以上のＡⅢ～ＡⅤ類では、口縁部に横ナデを施す前に一方向のナデを行い、横ナデの部分との間に稜がみられる。ＡⅠ・ＡⅡ類ではこれが明瞭ではない。ただ、一方向のナデが観察されるものでも、横ナデの部分ほど条痕は明瞭ではない。外面の不調整の部分は器面がなめらかではなく、小さな亀裂が多くみられる。これは一次成形が型取りによる結果とも考えられる。小さなものは底面の中央がくぼむものがある(35)。

胎土はいずれも精良で、淡褐色を呈し、焼成は良好である。ただ37は砂粒が多く、白っぽい。53は細かい砂粒が多く、やや硬質である。41・43には底部外面に黒斑状のものがみられる。30・31・37・55がＢ５区、40がＢ２区、44が井戸３で、ほかはすべて空堀２出土である。

B類（44～49）

底部回転糸切りで、ほかはロクロナデのものである。法量がわかるものが少ないため、分類するのは適当でないかもしれないが、口径約6cmのBⅠ類（44・45）、口径約9cmのBⅡ類(47)、口径約11cmのBⅢ類(46)に分けられる。底部破片Bの49はこれより大きい皿か、皿よりも身が深い杯と推定される。小形のBⅠ類はA類にはみられない大きさである。

BⅠ類は44が体部下端がくびれるのに対して、45は丸くなる。45は底面の糸切り痕がヘラ削りで消される。44は糸切り痕に板目状の圧痕がみられる。胎土はA類に比して細砂粒を多く含んでおり、器面がざらついている。44はほとんど完存する。44・45ともに灯明皿として使用された痕跡がある。47は口径9.4cm、器高2.1cm、底径6.7cmの完存品である。底面の糸切り痕はきれいではなく、スムースに切り離されてはいない。全面にスス・炭化物が付着するが、底面はこれがさほど濃くはない。胎土は砂粒を多く含む。スス・炭化物の付着状況はほかの灯明皿と異なることや柱穴300の出土状況（第9図）からみて、なんらかの埋納行為が想定される。46は口径約11cmの1/4破片である。全体にていねいに調整されており、内面はとくに器面がなめらかである。胎土はほかのB類のものに比してとくに精良で、A類のものに類する。淡褐色を呈する。井戸8出土。48は体部と口縁部がなく、全体は不明であるが、底部内面にロクロナデによる凹凸がみられ、皿でない可能性もある。約1/4残存。胎土精良、淡褐色を呈する。空堀1の石組2下部最下層出土。49は底径約9cmで、大形の皿かこれより身のやや深い杯と推定される。1/6残存。胎土精良、褐色を呈する。空堀2出土。

C類（50）

ナデなどの調整をいっさい施さないもので、1点のみ存在する。口径約9cm、器高約2.5cmで、約1/4を残す。口縁部から体部外面は指頭圧痕が明瞭で、口縁部と体部内面には爪状の圧痕がみられる。底面は比較的平滑である。胎土精良、淡褐色を呈する。空堀2中層出土。

足付皿（51）　B類の小形の皿に小さな粘土粒を貼り付けて足とするものである。約1/4の破片で、足は1個のみ遺存し、全体の数は不明である。器面があれており、底部の調整は不明であるが、糸切りと考えられる。胎土に砂粒を含み、明褐色を呈するが、器肉は黒色である。空堀2最下層出土。

杯（52・53）　52は底部を欠くため、全体の器形は不明で、あるいはやや深めの皿とも考えられる。体部から口縁部はやや内湾したのち、端部は外反する。口縁の一部にタールが付着する。1/8残存。胎土精良、淡褐色。B2(18)区出土。

53も底部を欠き、器形は不明であるが、口縁部が直立し、身は皿よりも深い形態をとることから、一応杯と考えておく。体部内面から口縁部外面まで横ナデ、体部外面は指頭圧痕で、調整技法は皿のA類と同一であり、胎土、色調も一致する。全体の約1/3を残す。空堀2・C4(5)区ピット345出土。

鍋（59・60）　2点出土したのみである。59は全体の約1/8を残す口縁部で、内面に耳をもついわゆる「内耳鍋」である。口縁部はゆるく外反し、上端部に水平の面をもち、内面下辺に段をもつ。この段の部分に耳の上部が貼り付けられている。内外面横ナデである。胎土は小砂粒を多く含み、焼成はとくに硬質である。外面に厚くススが付着する。内面と器肉は明茶褐色を呈する。トレンチ5の空堀2下層出土。

60は口縁部30cmで、全体の約1/8を残す。遺存部には内耳はない。口縁部と体部の境は段をもち、口縁部は水平な面をもつ。内面の段は明瞭な稜をなす。内外面横ナデである。口縁部に焼成後の穿孔がある。外面にススが厚く付着する。胎土は小砂粒を多く含み、硬質である。茶褐色を呈する。空堀2下層出土。59・60とも胎土・焼成が皿と明瞭に異なる。

漆塗土器（図版47—3）　かなり厚い器壁の土器の表面に黒漆を塗ったものである。胎土は瓦質土器に類似しており、内面はナデである。器形は不明であるが、かなりの大型品と思われる。空堀2出土。

C．瓦質土器（図版12・40）

香炉（57）　口径 12.5cm で、浅く筒形にひらき、口縁部は外反する。体部に雷文と三角形のなかを区画した文様のスタンプ（第11図）が連続して押印されている。体部外面は上下方向、口縁部内面は横方向のヘラミガキで、体部内面、口縁部外面は横ナデのみである。口縁部内面のみ炭素が残り、黒色を呈するほかは淡褐色である。1/6残存。B 2区出土。

1:2

第11図　香炉(57)スタンプ

火舎（56・58）　56は外面に突帯をめぐらすもので、その上にわずかに雷文かと思われるスタンプの押印が観察される。外面は横方向のヘラミガキ、内面は横ナデで、内外面とも黒色処理され、黒色を呈する。器肉は淡褐色である。空堀2出土。

58は平面形が円形をなさないもので、方形の火舎と考えられる。口縁部は内側に屈折し、その外面に2本の突帯をもち、その間に円形の浮文を付すが剝離する。突帯は浅い刻みを入れ、円形浮文は円錐形のくぼみをつくり、それぞれを貼り付ける。外面から口縁部内面の屈折部下面までヘラミガキされ、内面はナデである。全面を黒色処理する。器肉は赤褐色を呈する。きわめてもろい質で、器面に多くの亀裂がみられる。空堀1の石組1南側出土。

このほか図示していないものが3点ある（図版40—3—a・b・c）。aは底部の破片で、外面がヘラミガキと黒色処理、内面がナデである。C5（2）区出土。bは体部破片で、外面はヘラミガキ、内面は横ナデと黒色処理である。C 5（5）区出土。cの外面はとくに丁寧にヘラミガキされ、光沢をもち、内面は横方向のヘラミガキであるが、炭素はみられない。C 6区出土。

D．瀬戸・美濃焼（図版12・17・39・47）

天目茶碗（24～26）　24は口径12.0cm、全体の約1/5を残す。口縁部は短く直立気味になり、端部が外反する。体部中位までロクロ削りである。釉は黒褐色で、あまり光沢をもたない。わずかに残る釉がかからない部分は、鉄釉をうすく化粧がけする。胎土は灰色で、一部褐色となる。C5(2)区出土。

25は口径10.6cm、全体の約1/3を残す。器壁は24よりもうすく、口縁部は短く外反する。口縁部外面直下までロクロ削りが及ぶ。釉は緑色をおびた黒褐色で、やや透明感をもち光沢がある。B2(7)区ピット531中層出土。

26は底部の1/6 残す。 全体に器壁がうすく、外面はロクロ削りの稜が明瞭に残る。削り出し高台は輪状をなし、高台脇をわずかに内側にえぐるように削り出す。釉は黒褐色で、光沢があり、露胎部は鉄釉をうすく化粧がけし、褐色を呈する。建物2柱穴8出土。

灰釉碗（27）　口径約12cmの無文の碗である。素地自体の仕上りがやや粗雑で、器面に亀裂がみられる。釉は淡緑色で、胎土は淡灰色を呈する。1/10残存、B7(2)区出土。

灰釉香炉（28）　口径11.4cm、器高4.5cmで、全体1/4～1/5を残す。扁平な器形で、体部は肩が張り、口縁部は上面に比較的広い面をもち、大きく外反する。足は粘土粒を底面外縁に付着させたもので、4個ある。底部外面は回転糸切りで、中央部に突出する部分がある。ほかはロクロナデである。底部内面は調整があらい。釉は淡黄緑色の灰釉で、口縁部から体部外面中位までかかる。胎土は黄白色で、がさついた質である。A4(7)区出土。

盤（29）　底部のみ約1/4残るものである。足は一個のみ遺存するが、付着痕からみて、全体では4個もつと推定される。足は小さな円柱状の粘土を底部外縁から体部下端に付着させたものである。外面はロクロ削り、内面はロクロナデでなめらかである。内外面とも部分的にススが付着する。胎土は28と同じく黄白色でがさついた質である。口縁部から体部にかけては灰釉が施されているものと推定される。空堀2最下層出土。

耳（88）　四耳壺の耳と推定されるもので、鉄釉がかかる。空堀2下層出土。

E．珠洲焼（図版14～16・44・45・48）

厳密な産地同定をしていないため、すべてが珠洲焼と断定することはできないが、珠洲系陶器を含めて珠洲焼とする。ただし、頸城地方は中世前半より珠洲焼の流通圏と予想され、大半が珠洲焼という見通しはもたれる。

すり鉢（64～67）　口縁部が残るのは64のみである。64は口縁部から体部の破片である。口縁部は片口部分にあたっており、内側につままれている。上端には波状文がみられ、内面の卸し目は太い条線で、密に施される。内面下半はよく磨滅する。器面は灰色を呈するが、器肉は黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、多孔質である。焼成は軟質である。空堀2出土。吉

岡編年〔吉岡康暢1982〕Ⅵ期(15世紀後半)に比定される。

65は静止糸切りの底部で、内面はよく磨滅して卸し目がかすかに残る程度である。胎土は淡黄白色の粒子を多く含んで粗く、灰色を呈する。これの体部と考えられるのが66である。内面はよく磨滅して卸し目があまり残らない。65は井戸7、66は空堀2下層出土。

67は体部中位の破片で、遺存部には卸し目はみられず、ロクロナデの凹凸が観察される。暗灰白色を呈し、焼成は堅緻である。卸し目が密でなく、焼成がよいことから、Ⅳ期(14世紀)以前に比定されよう。空堀2下層出土。

壺(61～63)　61は外面に肥厚した角張った口縁帯と、その下に大きく突出した稜をもつ。やや特異な形態で、一般的な叩き目を残す「壺T種」(吉岡分類)ではなく、叩き目を削磨調整で消す「壺K種」にあたる。四耳壺の可能性もある。暗灰色で、焼成は堅緻、空堀2中層出土。全体の1/6を残す。

62は口縁部から体部上端にかけてで、端部は欠失する。口縁は上方に面をもち、外方に張り出す。頸部は横ナデ、体部外面は叩き目である。灰色で焼成堅緻、1/8残存。空堀2中層出土。

63は約1/6を残す体部下半の破片である。胎土・焼成・色調など62と類似しており、同1個体の可能性がある。下部は体部下端部と中位の接合部にあたり、これより下方は内外面横ナデであり、これより上方は外面叩き目、内面円形押圧痕である。内面はさらにナデを加え、押圧痕はほとんどめだたない。空堀2上層出土。

甕(68～74)　器形全体が把握されるのはほとんどない。体部破片は別に一括して説明する。

68はくの字に短く外反した口縁部である。黄白色の粒子を多く含み、焼成はやや軟質で、灰色を呈す。体部内面は剝離する。C5(5)区出土。

69は外反した口縁部がやや長く、肥厚せず外方にのびる。焼成堅緻、暗灰色。井戸7出土。

70は約1/2を残す底部破片である。内外面とも厚く炭化物が付着しており、二次的に使用された可能性がある。外面は叩き目、内面は明確な押圧痕がみられない。淡黄灰色を呈し、焼成はやや軟質である。空堀1の石組1南側出土。

71は約1/3を残す底部破片である。外面は叩き目、内面はきわめてよく磨滅し、調整不明である(図版48－7)。底面は周縁が比較的なめらかであるが、その内側は砂粒が付着する。内面の磨滅状況からすれば、二次的にすり鉢などに転用したことが想定される。胎土に挟雑物を多く含み、焼成は普通かやや軟質で、灰色を呈する。空堀2出土。

72はくの字状にごく短く外反し、肥厚する甕口縁部である。体部外面は叩き目、内面は円形押圧痕、口縁部は横ナデである。焼成堅緻で灰色を呈する。空堀2出土。

73は72とほぼ同じ大きさでつくりも類似する。外面の肩部にヘラによる文字状の記号がみられる。破損面には接着剤としての漆が付着している。全体の約1/12を残す。空堀2出土。

74は同一個体としてはもっとも破片の点数が多いものである。口縁部はごく短く外反するの

みで、72・73と明瞭に異なる。口縁部の横ナデは外面にほとんど及ばず、体部の叩き目や凹凸が目立ち、歪みがみられる。体部外面は叩き目、内面は円形押圧痕ののちにナデる。このナデは上端部ではごくかるいものである。体部下位と中位との接合痕が内外面ともに明瞭に残る。底部は厚く、外面中央は砂粒が付着する(図版48－2)。肩部に1条の縦線のヘラ記号がみられる。焼成堅緻で、外面は灰色を呈する。空堀2のほか井戸3から出土している。

体部破片(75～83)　いずれも外面は叩き目である。ほとんどが甕の体部で、一部をのぞいて別個体と考えられる。

75の内面は円形押圧痕を消すように上下方向にヘラ状の工具でナデる(図版48－6)。図の上の破損面は接合部にあたる。灰色で焼成堅緻である。空堀2中層出土。

76は内面の円形押圧痕が小さく顕著で、外面の叩き目は条線が比較的太い。淡灰色で、焼成は普通である。空堀2中層出土。

77は内面の円形押圧痕が比較的明瞭で、磨滅する。灰色で、焼成堅緻。空堀2上層出土。

78はきわめて焼成堅緻で、灰色を呈す。ただし器肉は淡褐色となる。内面はかすかに円形押圧痕がみられる。空堀2出土。

79は器壁が比較的うすく、内面は粗くナデられているが、円形押圧痕をとどめる。灰色を呈し、焼成堅緻である。井戸3出土。

80は外面が太い条線の叩き目で、原体の端部がわかる。内面は円形押圧痕ののち上下方向にナデる。焼成はやや軟質で、器面は明褐色、器肉は淡灰色を呈する。これは83と同様であり、叩き目や胎土・焼成などから両者は同一個体と考えられる。空堀2下層出土。

81は内面にナデを加える。灰色で焼成堅緻である。器面はやや光沢をもつ。空堀2下層出土。

82は細かい条線叩き目で、内面は円形押圧痕が顕著である。叩き目や胎土・焼成などが一見してほかのものと異なり、つくりのよさが感じられ、ほかのものより古い様相を呈す。灰色で焼成堅緻である。空堀1の石組1・石組2の下部埋土最下層出土。

83は外面が太い叩き目、内面が円形押圧痕ののち、上下にナデる(図版48－5)。器面は暗灰色、器肉は淡黄色を呈し、瓦質土器のような焼きあがりとなる。80と同一個体と考えられる。空堀2中層出土。

F．越前焼・その他(図版17・18・46～49)

越前焼に代表される瓷器系陶器をここであつかう。製作技法や形態・胎土の特徴から明確に越前焼と考えられるもの(87・90～92)、その可能性のあるもの(85)、越前焼以外とみなされるが産地不明のもの(84・89)がある。

壺(85・87・89)　85は端部が外面に折り返すように丸く肥厚する口縁部である。外面は部分的に淡黄色の灰かぶりがみられる。ほかは褐色を呈する。胎土は灰色、約1/3を残す。B5区柱

穴300出土。

87は体部肩に断面三角形の突帯をもつ広口壺と考えられる。内面上位は横ナデで、下位は凹凸がみられる。外面肩部は淡白黄色、ほかは褐色である。C5区出土。

89は口縁部と体部上半の破片があるが、全体の器形は不明である。口縁部はほぼ直立し、端部が角張って肥厚し、外側はきれいな面をなす。体部はあまり肩の張らない形態と考えられる。口縁部内外面は横ナデで、体部外面下位には刷毛目のような条痕がみられ(図版47－5)、そのほかの内面は指頭圧痕状のくぼみと粗い横ナデである。外面と口縁部内面は茶褐色から黒褐色を呈し、そのほかの内面は黒灰色を呈する。口縁部の片側には一部緑色がかった暗黄白色の自然釉がかかる。胎土は黒色の粒子を多くふくみ、がさついた質であり、器面に長石の吹き出しが散見される。空堀1・空堀2・井戸1・3などから出土している。

大甕（90～92） 90は口縁部径約40cm、体部最大径約65cm、器高約60cmの大甕である。口縁部から体部下半部までと底部から体部下半部に接合部がないが、輪積み接合痕から全体の器形を復原した。この形態は同時期の大甕の一般的な形態に比して胴が張り、かつ短くてずん胴である。体部は内面の凹凸や調整痕からみて、6回に分けて接合しており、1回につき2段の輪積みを行っている。この接合部は横ナデで、ほかは指頭圧痕が顕著に残る(図版46－2)。口縁部は上端部が面をなし、外側に突線状の稜と内側に小さな段がある。体部下端部には焼き台の痕跡かと思われる大きなくぼみが2ケ所みられる。黄緑色の自然釉のかからない部分は茶褐色を呈すする。多くの破片は、空堀2を中心に出土した。

91は90とほぼ同じ大きさのものである。同一個体の破片はかなりあるが、接合しない。口縁部の形態も90と同様であり、端部に面をもち、外側に突線状の稜、内側に凹線状のくぼみがある。外面に黄緑色の自然釉がかかり、そのほかは茶褐色を呈する。ほとんど空堀2出土。

92は空堀2上部に埋設して肥溜として利用されていたもので、かつての土地所有者(東長森唯念寺)が東長森の上石家(屋号「紺屋」)から譲り受け運びこんできたものである。口径約70cm、器高約66cm、底径約20cmで、体部上半から口縁部にかけて一部欠損する。内外ともうすく鉄釉を刷毛で化粧がけする。茶褐色を呈する。館とは直接関係ないもので、近世の所産である。

以上のほかに図化しなかったものが1点ある。これは大甕の破片で、自然釉がまったくみられず、色調は淡茶褐色を呈する。空堀2・井戸3出土。

鉢（84） 底部の約1/8破片で、卸し目はみられない。内外面横ナデで、底面はナデである。外面は器面に凹凸が多く、内面は下半部がとくに磨滅している。胎土はほとんど挟雑物を含まないもので、淡茶褐色を呈する。焼成堅緻である。空堀2下層出土。

G．近世陶器・縄文土器

近世陶磁器（図版41－３）　肥前系陶磁と瀬戸・美濃焼に区別される。肥前系陶磁には伊万里の染付のほか、唐津焼すり鉢や京焼風陶器がある。瀬戸・美濃焼には皿や瓶などがある。鉄釉のひだ皿はやや古いものかも知れない。ほとんどが18～19世紀のものと考えられる。

第12図　縄文土器(1：2)

縄文土器（第12図）　外面に縄文を施し、ススが付着する。Ｄ５区ピット362出土。このほかに胎土からみて縄文土器と思われるものが２点あるが、縄文はみられない。

２．石製品

Ａ．粉挽き臼（図版19・20・50）

上臼と下臼からなる。完形品ばかりではなく、正確な大きさは不分明なものもあるが、上臼・下臼ともに直径25～30cm前後である。ただし、直径は８～11尺に近似する傾向があるようである。すなわち、８尺は93、９尺は94・96、10尺は98・99、11尺は95・97が、それぞれ相当するようである。上臼と下臼の組み合せは95・97が対になる可能性をもつものの、ほかは対応していないものと思われる。石材はいずれも安山岩で、黒光りした輝石を多く含む。比較的粒子が粗く、多孔質でもろい感じがする。若干赤味をおびるもの、黒っぽいものなど色調のちがいがあり、それによって硬度もやや異なる。以下、臼の分類と名称は『臼』〔三輪茂雄1978〕に従った。

上臼（93～95）　図化したもののほかに２点、計５点出土している。上縁部にふちがあり、中央にくぼむ。高さは直径の小さい93が９cm、大きい95は14cmである。供給口は95が円形、93・94はやや角張っている。下面は中央がくぼみ、その中心には芯棒受けがある。芯棒受けは表面がよく磨滅しており、大きいものは深く、小さいものは浅い。挽き木はいずれも横打ち込み式で、上臼の側面に１つの穴がある。この穴は隅丸長方形の平面形をなし、縦２～2.5cm、横３～４cmほどの大きさである。臼の目は磨滅して不明な部分もあるが、６分画と考えられる。ただし、94はこれが不明瞭で、１ケ所に方向のちがう溝の接点がみられ、放射状風に見える。95は目を彫り直した痕跡がみられ、溝が交差する。93にはものくばりがあり、この方向より上臼の回転方向は一般的な反時計回りと考えられる。95が井戸10、ほかは空堀２出土である。

下臼（96～99）　図化したもののほかに１点、計５点出土している。上面はやや中央が高くなり、中央に芯棒孔がある。芯棒孔は下面まで貫通するもの（97・98）と貫通していないもの（96・99）がある。96には芯棒とも思われる鉄が穴に遺存している。97は下面のくぼみが大きく、表面には加工痕がよく残る。目はいずれも６分画である。96は井戸16、ほかは空堀２出土。

B．茶臼（100）（図版20・50）

発掘調査前に当地で土地所有者(東長森・小林森男氏)によって採集され、所蔵されていたものである。上臼の約半分が遺存する。直径約20㎝、高さ約14㎝で、側面の対になる位置２ケ所に挽き木の打込孔がある。孔の周辺には方形の突部に区画した装飾をもつ。中央に供給口が貫通している。この供給口の下半部は表面が磨滅しており、下臼の芯木がこの部分にはまり込んで回転したことがうかがえる。目は８分画で細かい溝が刻まれており、縁部の表面はよく磨滅してなめらかである。石材は粉挽き臼と同じく安山岩である。

C．鉢（101～106）（図版20・49―２）

陶器のすり鉢のような形態を有するものである。石材は粉挽き臼・茶臼と同じ安山岩である。口径20㎝前後のもの(101)と30㎝前後のもの(102・104～106)がある。全体の器形のわかるものは２点だけである。底部の形態は、底部から体部にかけてくびれるものと(101～103)、とくびれないもの(104)がある。用途は不明であるが、内面下半部はよく磨滅しており、陶器のすり鉢と同じ機能を果すのかもしれない。103はかなり強い熱を受けている。101はＢ６区、103は井戸３、ほかは空堀２出土である。

D．石塔（図版20・49）

宝篋印塔（107）　宝篋印塔の宝珠と請花と考えられる。請花は弁を刻んだ形跡はなく、形骸化したものであろう。遺存部下端はわずかにふくらみ、九輪の部分がみられる。石組１の上面の裏込めに利用されていたものである。

五輪塔（108～110）　108は半分に割れた五輪塔の塔身(水輪)で、側面に梵字を刻む。上面はわずかにくぼみ、下面には穴を穿つ。空堀２出土。109は笠(火輪)である。上部中央に穴を穿つ。調査区南側の崖下で採集されたものである。110は基礎（地輪)で石組１の上部、暗渠の側壁として利用されていた。

以上の４点とも石材は臼・鉢と同じく安山岩である。

E．その他（図版21・50・51）

砥石（115）　１点のみ出土している。断面方形で2.3×1.8㎝を測る。各面とも擦痕がみられる。表面にススが付着している。石材は凝灰岩であろう。建物10柱穴８出土。

硯（116）　石硯の裏面の縁辺である。粘板岩製で、空堀２中層出土。

すり石（117・118）　117は扁平な川原石を利用したもので、石材は砂岩である。上面の中央に大きなくぼみとその両側に小さなくぼみをもち、下面の中央に敲打痕を残す。くぼみはいずれも摩れている。下面の側縁には親指とそのつけ根のふくらみになじむようなくぼみがみられる。このくぼみは意識的につくり出されたものであろう。用途は不明であるが、類品は新井市

栗原遺跡〔高橋勉1984〕、同月岡遺跡〔高橋勉1985〕、上越市今池遺跡〔新潟県教育委員会1984〕など古代・中世の遺跡にみられ、かならずしも特異なものではない。118は扁平な川原石の片面中央にススが厚く付着している。顕著な磨滅はみられない。空堀2上層出土。

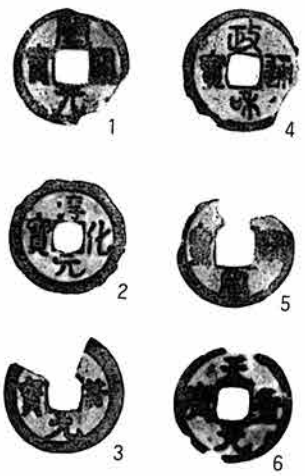
3．金属製品（図版21・22・51）

鉄製品（111～114）　111は刀と考えられるもので、背は若干反っている。幅約4㎝、厚さ0.4㎝を測る。空堀2出土。112は杓子状のもので、比較的厚い。鉄製であることや厚さからみて、一般的な調理具としては考えられず、鉄器製作等に関係する工具とも推定される。113は薄い鉄板の端部を折り曲げたもので、針穴がある。空堀2出土。114は上下両面に片刃をもつものである。用途不明。空堀2出土。

水瓶（119）　井戸3の埋土中位から出土した金銅製の水瓶(仏具)である。体部は強い熱で部分的に溶解し、ゆがんでいる。体部に注口がつく。注口の先端は欠損する。付け根には整った蓮弁がつけられている。注口と体部の接合は内側から銅板をあて、鋲でとめる（図版51－1右中)。体部の厚さはごくうすく、1㎜ほどである。脚部は厚く、八の字状にひらく。底板とみられる円形の銅板がB5(20)区から出土しており(図版51－1右下)、これが底部に貼り合されていたものと推定される。

和鏡（120）　調査前の昭和57年頃に土地所有者(東長森・小林三代治氏)によって採集され、所蔵されていたものである。鏡背の縁と界圏に一部傷がみられるが、全体に遺存状況がきわめて良好である。直径10.8㎝、厚さ3.5㎜、重さ370ｇで、かなり重い。縁は内傾式で厚さ5㎜の厚縁である。界圏は単圏で比較的太くて高い。鈕は亀形鈕で、背甲は花菱亀甲紋である。この部分は紐ずれによって磨滅する。鏡背の文様は丸文を主体とする。亀形鈕の上方に円形に意匠化された双鶴が向かい合っており、界圏の内側に双鶴と牡丹と思われる丸文5つが均等に配され、その外側に界圏にかかる位置と界圏外にそれぞれ牡丹丸文を6つずつ相互に配する。縁の形式や鏡背の文様から室町後期のものと考えられる〔後藤守一1935・中野政樹1968〕。

銭貨（第13図、図版51）　中国銭6点と實永通宝1点が出土している。1は開元通宝(621年初鋳)、2は淳化元宝(真、990年)、3は祥符元宝(1008年)、4は政和通宝(篆、1111年)、5は皇宋通宝(篆、1039年)、6は天聖元宝(真、1023年)である。1がC5(6)区、6が井戸23上層、ほかはA4(19)区出土である。



第13図　銭貨拓影(2：3)

第Ⅵ章　考　　察

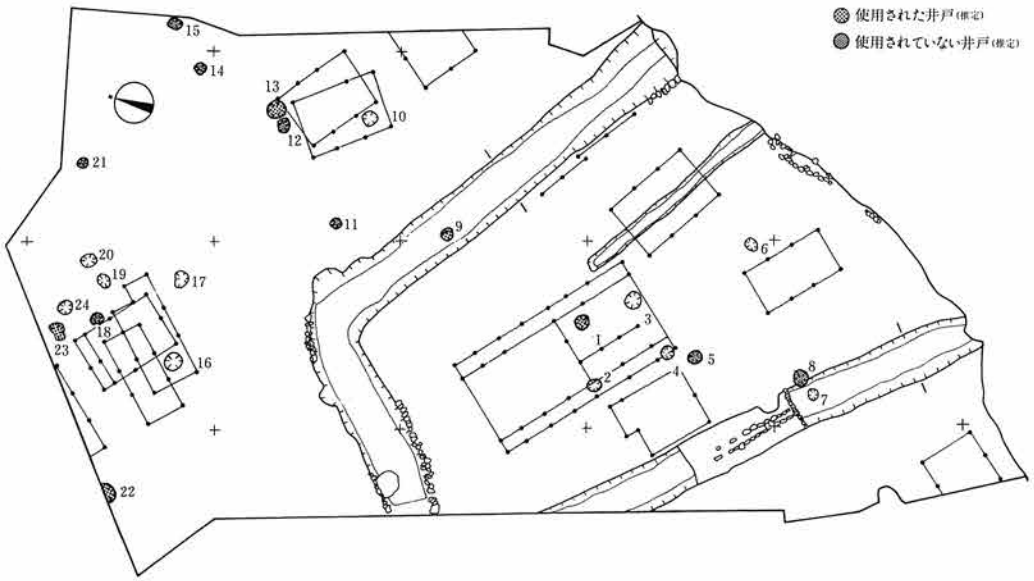
1．館の構造

今回の発掘調査はバイパス建設に伴うもので、発掘範囲は館と考えられる部分の東側約４割程度であり、館の全容は不分明である。このため、発掘区で検出された遺構の機能や変遷過程も適確には判断できない。しかしながら、館の西半部の未発掘区については、ごく一部であるが、トレンチ調査を実施し、堀や土塁などの存在も確認できたことから、発掘区の所見と合わせて、館の構造について若干の知見を述べることにする。

発掘区内で検出された遺構は空堀２本・掘立柱建物12棟・井戸24基・溝１条のほかに、各種の石組遺構・土坑・柱穴などである[1]。掘立柱建物のうち、東郭にある建物は４棟である。このうちほぼ中央にある建物１は桁行７間（約16ｍ）、両面に廂か縁をもつ大規模なものである。この建物は中央に間仕切りをもち、これを境に柱間寸法も大きく異なっている。この南側の空間にはこれに伴うと推定される井戸１・３があり、土間として利用されていたと思われる。一方、北側の空間は床をもっていたのではないかと思われる。規模や位置からみて、この郭の中心をなすものであり、この館全体の主屋の可能性もある。この建物付近はとくに柱穴が多く集中しており、これと重複する建物の存在は確実視される。このほかの建物３や建物４は桁行３間の小規模な建物で、建物１に対して副屋的な存在である。これらの付近にはあまり柱穴は多くなく、これ以外の建物が存在したとしても少数であろう。これらの建物の付近には井戸がほとんどなく、あるいは厨房施設を伴わない建物かもしれない。なお、井戸は東郭内で７基存在するが、井戸として機能したものは建物１の中に位置する井戸１など数基にすぎないと思われる(第14図)。

空堀１の西側で検出された建物は南端部の建物５のみである。発掘区の面積も少ないが、柱穴も比較的少ない。建物５は東郭の建物４などとほぼ同じ規模である。

空堀２の外側に分布する建物は７棟である。これらは二つの群に分かれている。ひとつは空堀２の東側の建物６・建物７・建物８で、もう一方は北側の建物９・建物10・建物11・建物12である。それぞれの建物群付近には柱穴が多く分布しており、これら以外に建物が存在することは確実であり、柱穴の分布も二つの群に重複しており、建物のまとまりは変化していないことがわかる。井戸も建物群に伴っている。これらの建物は重複しており、何度か建て替えられていることがうかがえる。空堀の外に存在するものの、きわめて近接し、建物の方位が空堀の方位とほぼ一致することから「堀の内」となんらかの関係がうかがえる。規模が小さいこ



第14図 使用された井戸の分布

とや、井戸を伴っていることから、「堀の内」の館主の被官の住まいと推定される。空堀の外側の建物はどの範囲まで分布しているのかは明確ではないが、県道北側に設定した長さ約20ｍほどの試掘溝では遺構が検出されなかったことから、北側へはさほど広がらないものと思われる。

発掘区内では土塁は検出されなかった。しかし、発掘区内の部分の空堀２は水田造成時に完全に埋め戻されており、その際土塁が完全に削平されてしまった可能性も考えられる。空堀2北辺部の内側の上端部に存在する石組５は、未発掘区で確認された土塁に伴う石の残部の可能性もあり、空堀を埋める時に投げ込まれている多量の礫は、とくに遠くから運んで来たものとは考えられず、土塁に使用されていた石とも考えられよう。土塁に使用されている土は、掘削した地山土をそのまま盛ってはおらず、空堀２最下層の堆積土が地山土を主体としていないことも、土塁の存在を否定する理由にはならない。また、４列のＢ・Ｃ界線上の土層断面(第５図)には、空堀の内側にあたる部分のⅡ層を掘り込んだなかに、Ⅲ層の地山土がはいっている。以上の点から、発掘区内においては土塁の存在は積極的に肯定できないが、まったくその可能性を否定することもできないと思われることを指摘しておきたい。

ところで、空堀１で検出された橋１と石組１・石組２の遺構は、空堀１が掘削されたのちに構造が改変されたことを明示するとともに、館全体の構造もこの時点で変化したことを示唆する。まず、空堀１の掘削部分は、堀の東側に突出部を造り出し、木橋をここにかけることを明確に意図している。その後、ある時点でこの突出部南側と空堀２と接する部分に石垣を築いて、その間約28ｍを完全に埋めて、その上に石組暗渠(石組２)をつくっている。これにより、空

堀１を掘削して木橋をかけた最初の段階と北半部を完全に埋めた段階の二つの時期がとらえられる。ここで問題なのは、空堀１と空堀２東側が同時に掘削されていたかどうかである。すなわち空堀１の最初の段階で空堀２東側が存在したならば、空堀１は堀の内側を東西に分けるもので、この間をつなぐものとして木橋が存在したと考えられる。これに対し、空堀２東側が空堀１よりも後に掘削されたならば、空堀１の北半部が埋められた段階で、空堀１との接点より空堀２を東側に掘削して館を拡張したことが想定される。発掘区における調査所見では、両者いずれとも決定しがたいが、以下の点を考慮すると、館が拡張された可能性が強いと思われる。

まず第一に、空堀１と空堀２の法面の角度が、東西、あるいは南北で明確に相違していることである。空堀はいずれも断面逆台形状を呈するが、南北方向の空堀１と空堀２東辺部ではいずれも東側が約70度で、西側は50～60度であり、西側が明らかにゆるくなっている。東西方向の空堀２北辺部では北側が約70度で、南側が50～60度となっている。こうした法面の角度の相違は、空堀２のあり方からみれば、館からみた外側の面を急にし、内側の面をゆるくするという意図にもとずくものと考えられる。この傾向は一乗谷朝倉館跡においてもみられ[2]、当時の一般的な構造であったと考えられる。このような堀における内法と外法の角度の相違が厳然とあるとするならば、空堀１の法面の角度の相違からみて、空堀１の西側を「堀の内」、東側を「堀の外」というように意識したと考えられ、空堀１が掘削された段階では、空堀１と空堀２に囲まれた東郭は存在しなかったことが示唆される。これより、拡張に伴って堀の内側を有効に使うために、北側の半分以上を埋めたと考えられる。発掘区外のトレンチ１において、空堀１と空堀２の底面レベルに約40cmの比高があり、空堀２のほうが低いことも、空堀２を東側へ拡張した結果によるものと考えられる。また、空堀２の中で検出された井戸９は埋土からみて、空堀２より古い可能性があり、空堀２が拡張されたことを示唆すると思われる。

一方、空堀２の西側延長上に土塁が築かれていることは、この部分について館の拡張が実際に行われたことを示している。これに伴って、あらたに築かれた土塁に沿って、空堀３が掘削されたものと考えられる。とするならば、この段階で空堀２が東側に拡張されたことも類推されるのではなかろうか。空堀３が西側へどのようにのびるかは、現状の地形からも全く判断できないため、この際の拡張がどのようになされたかの詳細は不明であるが、館の造営当初の規模は空堀２北辺部と空堀１に囲まれた範囲とするならば、面積は約1,400㎡であり、拡張した後は東郭と北側の張り出し部が加わり、面積は約2,800㎡以上と考えられる。

このように東郭を含めて館の拡張を想定すると、その時期が問題であるが、これについては遺物の出土状況を考慮しても不明といわざるを得ない。また、館の全体の構造も詳細は不明で、入口や門などの所在は北側に設けられたと予想できる以上は現段階ではわからない。これら不明な点については、館の西側を本格的に発掘調査した段階で明らかにされるであろう。また、ここで示した判断もそれによって修正すべき点も出てこよう。

2．遺物と館の年代

中世の陶磁器類の編年研究は、近年の資料の増加と相まって、各分野でかなり進んできている。坪ノ内館についての文献史料がまったくない現在、出土陶磁器類はその年代を考える際の大きなよりどころである。

中世後期の中国製陶磁器については、青磁・白磁・染付の種別ごとに、それぞれ分類と編年がなされている〔上田秀夫1982・森田勉1982・小野正敏1982〕が、ここでは15・16世紀の総体的な陶磁器の編年案〔小野正敏1985〕を参考にして、当館跡出土品をみよう。これによれば15世紀から16世紀はⅠ期からⅣ期に分けられており、当館跡の出土品はおおむねⅠ期・Ⅱ期に比定される。Ⅰ期は15世紀前葉から後葉、Ⅱ期は15世紀後葉から16世紀前葉の年代観が示されている。Ⅰ期には雷文帯をもつと推定される青磁碗(７)、高台に抉りをもつ白磁皿(15)が典型的なものとしてあげられる。無文の青磁碗(１)は高台と口縁を欠くため、詳細は不明であるが、この時期か、これよりやや古い時期に比定される可能性が強い[3]。段皿(11)や稜花皿(９・12・13)はこの時期と次のⅡ期に共通してみられる。Ⅱ期には染付の碗(17・19)と皿(20・21)、青磁の線描きの細かい蓮弁文碗(２)、白磁皿(16)がある。線描きの粗い蓮弁文碗(３)も当期に含められよう。染付碗(18)は口縁部の形態や文様モチーフはⅢ期に多いタイプであるが、器壁が厚いことや文様の描き方が比較的丁寧なことはⅢ期のものには見られない特徴で、Ⅱ期かあるいはⅠ期に比定されよう。底部のみの青磁碗(５・６)はⅠ期・Ⅱ期の弁別は難しいが、腰丸で高台が厚く高い形態(５)が後出的でⅡ期、高台が薄くて低いもの(６)はⅠ期の可能性が強い。Ⅲ期（16世紀後葉）の典型例はみられない。

次に国産陶器を産地別にみよう。瀬戸・美濃焼では天目茶碗が鉄釉の化粧がけが施されること(24・26)、高台脇が幅２㎜位で内側に削り込むこと(26)などから、大窯Ⅰ期に比定される[4]。灰釉香炉(28)は器形が筒形ではなく袴腰形で、口縁部の口径と外反度が大きいことから、大窯の直前の時期(施釉陶Ⅳ期)、盤(29)もこれとほぼ同時期か、これよりやや古い時期にそれぞれ比定される。大窯Ⅰ期については16世紀の第１四半世紀を中心にみる意見と、15世紀後半から末に遡らせる意見がある[5]が、一定の幅を考慮すればこれらの瀬戸・美濃焼はおおむね15世紀前半から16世紀初頭前後に比定されよう。

珠洲焼のうち、すり鉢(64)の口縁部は内傾する面に波状文をもつⅥ期の典型的な例である[6]。粗い胎土、軟質な焼成状況もⅥ期の特徴である。大甕(74)は口縁部のつくりからみて、同様にⅥ期に比定できるが、焼成がよいことを重視すれば、Ⅴ期に含められるかもしれない。このほかのものは明確な特徴がないものの、叩き目や焼成状況などからおおむねⅤ期、あるいはⅥ期に比定されよう。ただし叩き目の条線が細かくて焼成のよい甕体部(82)と卸し目が密ではな

いすり鉢(67)だけはⅢ期前後に遡ると考えられる。珠洲焼Ⅴ期は15世紀前半、Ⅵ期は15世紀後半にそれぞれ比定されている。

越前焼では、大甕(90・91)の口縁部がⅣ群aに分類され〔小野正敏ほか1981・朝倉氏遺跡資料館1983〕、朝倉氏遺跡の古い時期、15世紀後葉から16世紀前葉に比定される。

これらの陶磁器類のほか、土師質土器皿は主流を占める手づくねのA類とロクロ成形、糸切りのB類の二種が存在する。これらは胎土のちがいなどからも系譜の異なるもので、両者が併存していたと考えられる。A類は北陸地方で鎌倉初期に在地の糸切りのタイプにかわって主要なタイプとなり、戦国期に至るまで主体をなすものである。この系譜の出自は畿内に求められると考えられる。一方、B類は中世を通じて関東甲信地方で普遍的にみられ、古代末期以来の在地の系譜下でとらえられる[7]。これらは北陸地方でごくわずかに散見される程度である。当館跡ではA類とB類の比率が5対2ないしは、3対1程度で、A類が多いものの、北陸地方に比してB類の比率がかなり高い。これはこの地方が信濃と接する地理的条件によるものと考えられ、土鍋の存在もそれと関係していよう[8]。

さて、土師質土器は一般に在地で製作されたと考えられ、形態・手法などの特徴を離れた地域間での比較・対照が可能かどうかは検討を要するが、A類の形態や手法は越中の弓庄城Ⅳ期〔宮田進一1985〕や、越前の朝倉氏遺跡〔福井県教育委員会1979〕のものとほとんど共通していることが注目される。これらは北陸地方ばかりでなく、畿内の15・16世紀のもの(中世京都Ⅲ・Ⅳ期、宇野隆夫1981)ともほとんど一致しており、かなり広い範囲で共通した様相がうかがえる。当館跡出土のものは朝倉氏遺跡の時期、すなわち15世紀後葉から16世紀後葉の幅のなかでとらえられよう。

以上、陶磁器類の年代観を概観したが、ごく一部をのぞけばいずれも15・16世紀のなかにおさまる。これより、当館跡の造営年代は15世紀代に求められ、16世紀まで継続して営なまれていたことが類推される。これ以上に細かな年代を考定することはむずかしいが、陶磁器類のなかで15世紀の前半期に年代の中心をおくものは、Ⅰ期の中国製陶磁器と珠洲焼の甕など、生産から使用・廃棄までの期間が相対的に長いと想像されるものであるのに対し、これが相対的に短いと思われる在地産の土師質土器にはほとんど型式差が認められないことを考慮すると、館の造営年代は15世紀後葉以降にみてよいのではなかろうか。他方、廃絶の年代は周辺の情勢を勘案すると、天正7年(1579)前後の御館の乱ののちとは考えられず、これを下限とみることができよう[9]。なお、中国製陶磁器と瀬戸・美濃焼はともに少ないが、小野編年のⅢ期に特徴的な中国製陶磁の染付や白磁、瀬戸・美濃灰釉皿などがみられないことを重視すれば、1573年に焼亡した一乗谷よりも早い時期に廃絶した可能性もあろう。

3．坪ノ内館跡をめぐる開発史的考察

坪ノ内館跡は前節で述べたとおり、15世紀後葉以降に造営されたと考えられる武士の館である。この周辺についての文献史料は皆無に等しく、当館跡の直接的な成立事情や具体的な機能などはほとんど不明である。しかしながら、長森を中心にした斐太地区の地名や地形環境、あるいは後世の諸資料から、館跡周辺の開発過程はある程度考察することができると思われる。以下、開発史に視点をすえて、当館跡の成立背景などについて、若干の考察をこころみたい。

A．斐太地区の開発の概要

坪ノ内館跡の所在する新井市大字長森は矢代川左岸（北岸～西岸）と西側の丘陵に挟まれた地域に位置する。斐太地区とは長森を含むこの地域をさすものである。斐太地区の地形環境については、すでに述べた（第Ⅱ章１）が、あらためて整理しておくと、西側の丘陵をのぞく平地は、基本的に火山山麓と扇状地に区分される。火山山麓は矢代川と丘陵に挟まれた南西から北東方向に細長くのびており、その東側は矢代川の氾濫原で、これとは明瞭な段差（約10～数m）で区切られる。一方、その西側は丘陵山裾を流れる内川の氾濫原と接している。両者の境は明瞭でない部分もあるが、下流にそっては若干の段差で区切られている。こうした地形からみると、火山山麓は矢代川と内川によって開析されたひとつの段丘面であり、矢代川と内川の氾濫原は段丘面に対しての沖積面とすることができる。

斐太地区には現在の大字が20以上存在する。現在の大字は基本的に近世の村を継承しており〔木村礎1980〕、元禄15年（1702）の郷帳にはこれらの大字の大半が記載されている[10]（第５表）。

村　名	元禄15年(1702)	天保５年(1834)	村　名	元禄15年(1702)	天保５年(1834)
	石　勺	石　勺		石　勺	石　勺
青田村	381.0020	391.0000	谷内林新田（五日市村枝郷）	28.9070	37.2980
宮内村	169.2520	170.2190	新保新田（五日市村枝郷）	8.8400	新保新田村 13.8710
神宮寺村	65.8490	65.8490	梨木村	163.6580	165.8560
雪森村	317.3590	328.2650	梨平新田（梨木村枝郷）	31.9450	36.3630
岡崎新田（十日市村枝郷）	38.8160	50.8370	土田村	10.5020	10.9830
飛田村	807.0170	820.3510	長森村	744.4620	791.1990
飛田新田（飛田村枝郷）	45.6150	85.9660	藤塚新田（長森村枝郷）	108.5680	115.3820
乙吉村	318.5180	328.7070	坂井新田（長森村枝郷）	10.6270	坂井新田村 12.2830
籠町村	267.2310	271.0120	小丸山新田（長森村枝郷）	21.4380	28.9780
四ツ屋村	196.5470	198.2570	猪野山村	527.0650	531.3730
五日市村	305.6710	449.4980	三俣村	275.8800	280.0900
八輔新田（五日市村枝郷）	8.8180	9.2080	計	4853.5870	5192.8450

第５表　斐太地区村高一覧

当地区には新田村がきわめて多く分布している。小丸山・坂井・藤塚・梨平・谷内林・新保・八幡の７つの新田村が段丘面北半部に集中するほか、矢代川西岸に飛田・岡崎の２つの新田村が存在する。これに対して、本田村は丘陵裾に三ツ俣・猪野山・乙吉・宮内・神宮寺・雪森・青田、段丘面上に長森・土田・梨の木・籠町、矢代川の氾濫原に五日市・十日市・上四ツ屋・飛田がそれぞれ分布する。現在の大字の範囲には、かなりの差があり、長森村はこれらのうち大きいほうである。山林を除いた平地の広さについては最大級である。長森の範囲は大半が段丘面であり、これに内川沿いの沖積面とその北側の丘陵地の狭い山林が加わる（第15図）。現在の大字の範囲はほぼ近世の村の領域に一致していると考えられ、近世における長森村の領域も広かったと考えられる。事実、元禄15年郷帳にみえる各村高は長森村が744石余りで、飛田村の807石余りに次いで多く、それだけ水田を主体とした生産地の面積が広かったことを裏付ける。

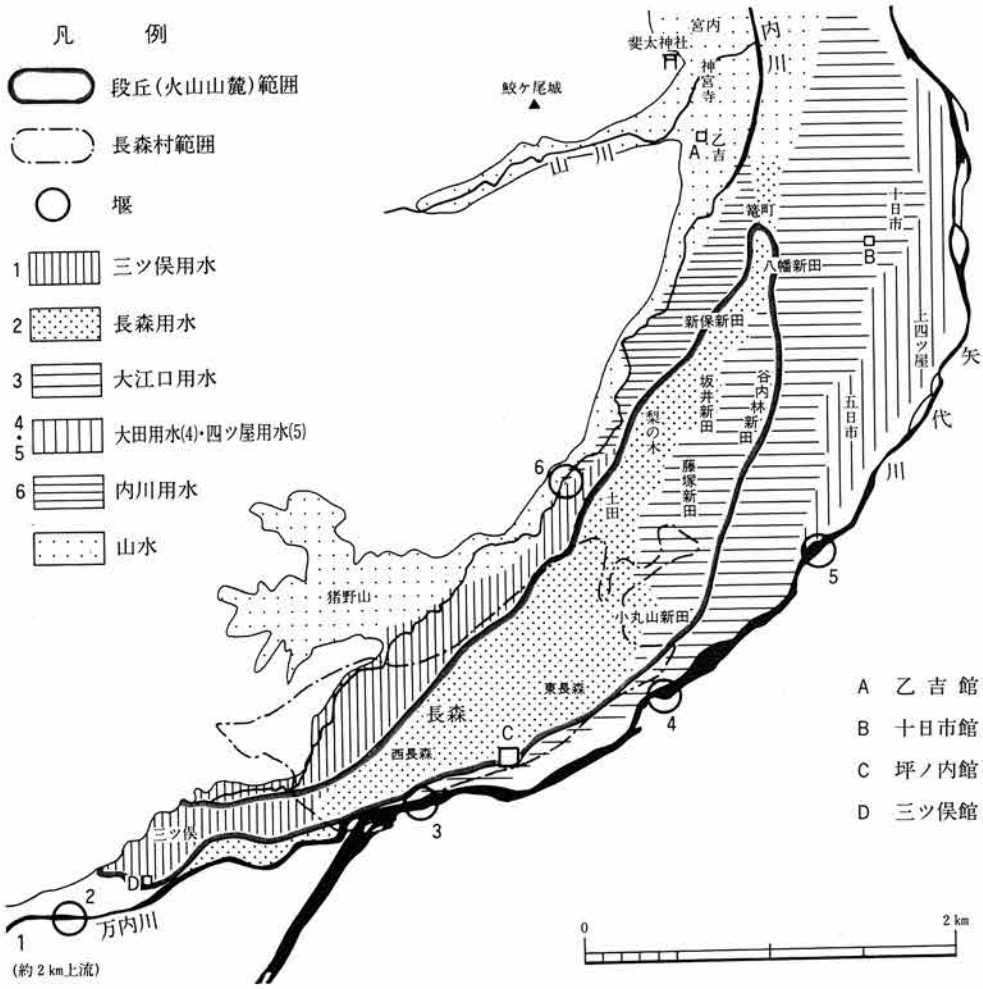
現在この地区の平地はほとんど水田化されており、段丘面上においても一部山林と畑が点在するにすぎない。現在の用水の灌漑系統は第15図のとおりである[11]。この地区の用水源は矢代川・万内川・内川の河川と、西側の丘陵からの谷水である。

まず、矢代川から取水するのは大江口用水・大田用水・四ツ屋用水である。大江口用水は万内川との合流点近くに堰をもうけ、これより取水し、段丘上の小丸山新田・藤塚新田・谷内林新田などと、沖積面の五日市・十日市などの広い範囲を灌漑する。段丘上を灌漑するため、灌漑区域のかなり上流から取水して、段丘上に導いている。大田・四ツ屋の用水は矢代川に面した五日市・上四ツ屋などを灌漑する。

万内川から取水するのは三ツ俣用水と長森用水である。三ツ俣用水は三ツ俣の集落の約2.5km上流から取水し、丘陵裾を通って段丘上の三ツ俣から、内川沿いの沖積面を灌漑する。長森用水は三ツ俣集落の近くの地点で取水して、長森にはいる手前で段丘上にあがり、段丘面上の長森全域と段丘面東縁の梨の木から篭町を灌漑する。これらの用水もおもに段丘上を灌漑するために、かなり上流から取水している。

内川を用水源とする内川用水は、梨の木から篭町にかけての内川沿いの沖積面を灌漑するが、その面積は大きくない。これらの用水を除くと、西側の丘陵からの谷水を利用した水田が、谷に位置する猪野山や山川の小さな谷の出口にある乙吉・神宮寺などに分布する。

このような灌漑系統は歴史的にどれだけ遡るかは明確ではないが、近世の荒井組村鑑帳（金子以策文書）に記された灌漑用水[12]とほぼ同じであり、少なくとも近世末[13]には完成されていたものである。ところで、当地区の地形を考えた場合、段丘面上の全面的な水田化は河川の上流から用水を引くことが必須であり[14]、これを灌漑する三ツ俣・長森・大江口の３つの用水の開削年代が段丘面上の開発期とみなすことができる。これに対し、矢代川と内川沿いの沖積地、あるいは丘陵の谷やその出口付近は谷水・清水などの自然水を利用した水田を造成することが可能



第15図 斐太地区灌漑系統概念図

であり、ことさら長い用水路を掘削する必要はない。したがって、歴史的には古くから開発がなされたものと考えられる。

さて、段丘面上を灌漑する二本の用水のうち、大江口用水は段丘面北半部の新田村の耕地を灌漑しており、その開削が新田開発に伴うことが考えられる。この新田開発の詳細な年代は、史料がないため不明であるが、いずれも「古新田」[15]ではなく、天和検地帳にみえる村であり、17世紀に成立したものと考えられる。さらに、正保2年(1645)の越後国絵図[16]にこれらの新田村がみえないことから、その成立年代は正保2年以降天和3年までの間に限定することができる。いずれにしろ、近世前期に段丘上の不毛な地を大規模に開発したものである。

一方、三ツ俣用水・長森用水は段丘面を灌漑しているにもかかわらず、本田村の田地に供給されており、その開削年代は近世以前の可能性もある。しかし、万内川に堰を築き、長い用水路を掘削することは、大江口用水とほぼ同様の普請がなされており、さほど年代差は感じられないように思われる。ところで、元和8年(1622)3月の文書[17]には、「長森村本高520石7升3

合、新田高483石1斗総高1003石1斗7升3合」という文言がみえ[18]、村高の約半分にあたる483石余りが新田高であったということが知られる。天和3年(1683)検地帳にみえる長森村の村高は743石余りであるのに対して、年代が遡る元和8年の総高のほうがこれより多く不自然な感もある[19]が、ここにみえる文言を忠実に解釈すれば、天和3年の段階で、長森村のなかでも新しく開発された耕地がかなり広く存在したことが想定される。483石余りというきわめて大きな新田高(石高)からすれば、これが長森用水と三ツ俣用水の開削に伴って開発された水田によるものと考えられよう。このような見方が妥当であるならば、これらの用水は当時「新田」と認識された時期、すなわち戦国期以降、元和8年までの間に開削されたと考えられる。少なくとも長森村の水田に多くの用水を供給する長森用水についてはその可能性が強い。

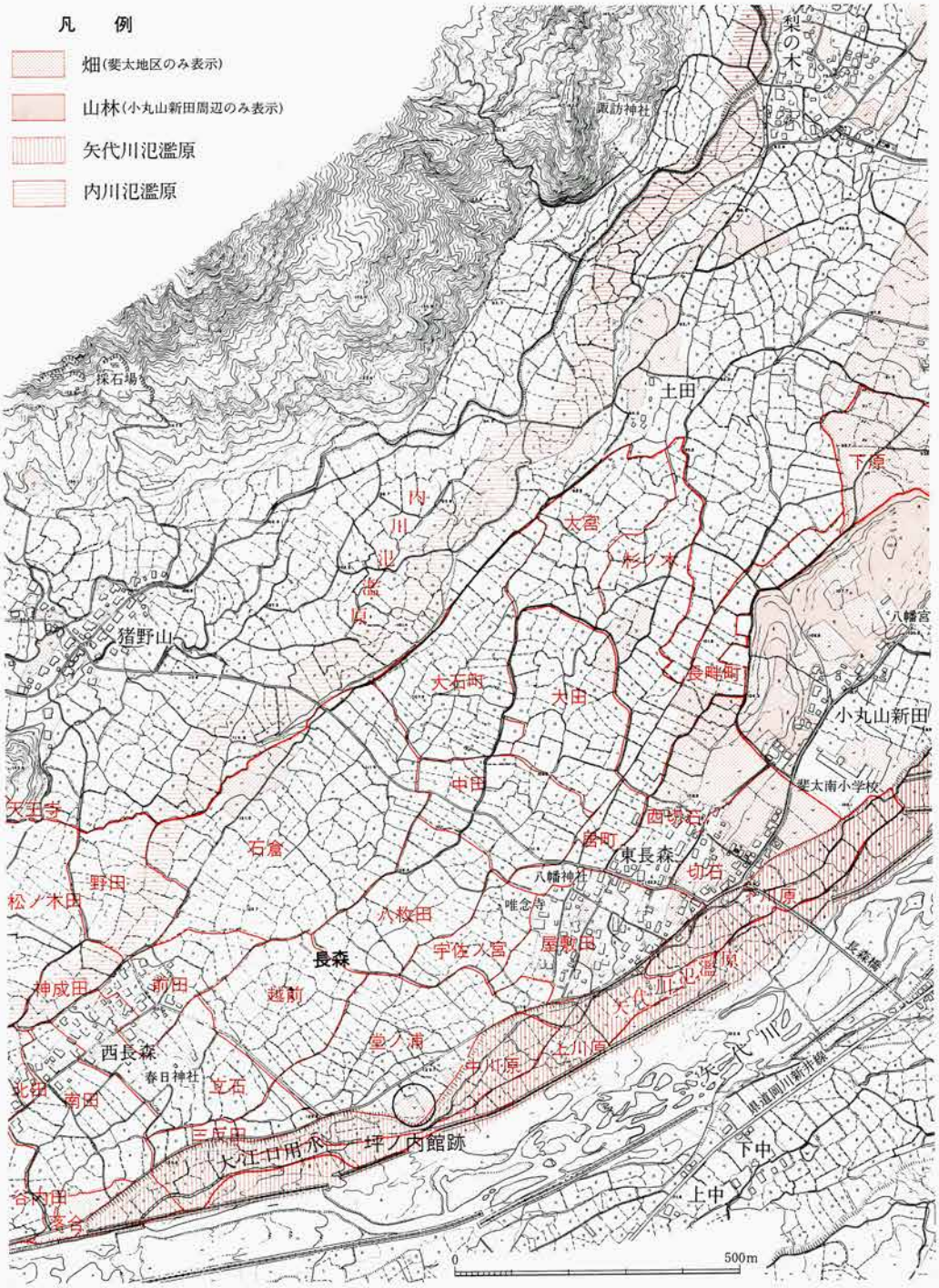
他方、これら三本の用水の灌漑区域外の村は、すべて本田村であり、中世末までにこれらの村が成立していたことが確認される。これらの地域は沖積地であり、用水を得やすい小規模河川が存在し、土壌も細粒灰色低地土壌(おもに内川沿い)、灰色低地土壌(おもに矢代川氾濫原)、細粒グライ土壌(おもに宮内付近)で、水田に適した環境である〔新潟県1980〕。したがって大規模な用水を引かなくとも容易に水田化できる条件であり、段丘上よりも早く、中世までに水田開発がなされたと考えられ、本田村はこうした水田に依存して成立したといえる[20]。段丘上に集落が立地する長森(西長森)・梨の木や篭町も領域内にこうした沖積面を広く含んでおり、そこに生産基盤を求めたことが考えられる。

B．長森村の地名と開発状況

前項において婁太地区の地形と灌漑系統から、おおまかな開発過程を推定したが、ここではおもに長森村に焦点をあて、地名や検地帳などにより、中世後期の坪ノ内館をとりまく環境を復原することにしたい。ここでいう長森村は現在の行政上の大字長森の区域をさすが、近世の長森村を念頭においている。

長森村は前述のとおり、かなり村域の広い村である。北西側は猪野山、西南側は三ツ俣、北東側は土田・藤塚新田・小丸山新田と接している。南辺部は矢代川の氾濫原をわずかに含み、矢代川に面する。村域のうち山林はごくわずかであり、平地のうちの約3/4を段丘面が占めており、内川沿いの沖積面は平地の約1/4ほどである。南辺の矢代川沿いには比高差10m以上の段丘崖を介して矢代川の氾濫原となるが、この面積も少ない。なお、谷内林新田と五日市に挟まれた段丘縁辺に飛地がある。

長森の集落形態はいわゆる塊村であり、このまとまりが2つ存在する。西長森と東長森がそれで、直線距離にして約1km離れている。西長森は西南部の内川沖積地に面した段丘面縁辺に立地し、東長森は中央南辺の矢代川に面した段丘縁辺に立地する。地元では西長森のほうが歴史が古く、東長森はこれより分かれたと伝えられており、西長森のほうが相対的に富裕であり、



第16図 圃場整備前の地形と字界

東長森には蔵をもっている屋敷がないという意味の戯言もあるという。このような東長森の集落の成立にかかわる伝承がどの程度史実を反映したものかはわからないが、さきにみたように東長森の北側から北東にかけての土地は、長森用水の開削によってはじめて全面的な水田化がなされたのであり、東長森の家々はこれに伴って西長森から分かれて成立した可能性が大きい。長森用水は前述のとおり戦国期以降、17世紀初頭までに開削された可能性が強く、東長森の成立もこの時期と類推される。こうした事情であれば、東長森はいわゆる零細農民を主体とした集落と推定することができ、さきの戯言は案外これを示唆するようにも思われる。

西長森が相対的に古い集落であることは、早くから開発された内川沿いの沖積面をひかえていることからもうかがうことができるが、後述する検地帳の記載内容もこれらをさらに裏付けるものである。

ところで地域の歴史を考えるとき、地名が有効な資料であることは、多くの先学の業績によって知られるところである。地名は現在の行政上の小字のほか、地元の通称や検地帳などによって知ることができる。長森の場合、小字のほかに天和３年(1683)の検地帳[21](以下、検地帳と略す、別表１)と、明治４年(1871)の村絵図[22](以下、村絵図、別図１)の二つがあり、現在小字に残っていない地名も数多く知ることができる(第６表)。小字は圃場整備によって、その範囲が大幅に改変され、名称もすべて残されているわけではない。ここにあげた小字は圃場整備前のものである。それぞれの位置と範囲を土地更正図[23]によって、圃場整備前の地形図に示すと、第16図のとおりである[24]。

明治４年の村絵図は、長方形の図幅に村全体を模式的に描いたもので、実際に測量した図面ではない。これには山・川・土手・宮・寺・屋敷が描かれ、水田と畑は色を変えて表現されている。そして水田と畑にそれぞれの地名と面積が記載されている。それぞれの地名の位置は、正確な地図ではないため厳密な地名の現地比定はできないものの、道や川(用水路)、面積などを検討すると、おおよそは把握することができる。

この村絵図には現在の小字をはるかにこえる数の地名(字)が記されており、明治24年の土地更正図の作成に際して、地名を大幅に統廃合したことが知られる。その結果、かつて存在した地名の多くが消えると同時に、それまで存在しなかった新しい地名がつくられたり、地名の位置が移動したりする状況が生じている。まさに現代の町名変更と相似した状況である。坪ノ内館跡は村絵図によれば、「風吹」と「欠端」の畑に比定される。現在、ここは小字「堂ノ浦」であるが、これは村絵図にみえる字「当之浦」に由来することは明らかである。しかし、現在の小字「堂ノ浦」の範囲内に「当之浦」が含まれておらず、「堂ノ浦」自体の位置と範囲は歴史的な側面からすれば、ほとんど意味をなさないことがわかる。また、小字「宇佐ノ宮」など歴史的な地名のように思われがちなものも、村絵図にはみられず、案外新しい地名である。このような事情を考慮すると、現在の小字のみに依存した地名研究はあまり有効ではないことが

	天和検地帳	明治4年村絵図	明治24年更正図
田	孫左衛門原、野墨、大宮、ほつこ（ぼつこ、ほくこ）、大石まち、とうりん、畑田、みつくり田、石原田、小田、弐反田、ひえの木、八枚田、えふかい、えび作り、腰前、風吹、弐枚田、塚田、立石、鴫田すいみん（鴫田）、南田、前田、石橋田（石橋）、立石田（立石）、東田、當流、大田、沢田、下塚、落合、場作り、壱枚田、かけはた、とうふけ（どふけ）、こくぞう、大やち、諏訪の木、かつほ田、あら田、くね添、野田、下野田、道下（野田道下）、七月田、大石のまり（大石町）、てのぶち（天王寺）、長左衛門田、山のこし、屋鋪田、えの木町（いの木）、長田（永田）、ほきの宮、せうふ田（しよぶ田）、えまり（居町）、堂浦（当之浦）、越米、山口田、ぼら塚（ぼこ塚）、永代田（よ代田）、芝河原くろ（荒川原墨）、北田、神なり田、清水田、松木田、三百苅、ほこ塚（ぼこ塚）、小泉（小泉田）、山口（山口田）、五反田、十二田、餅田、かにか沢（かに沢）、下新田、中新田、丸山新田（丸山）	風吹、落合、欠端、石原田、場作り、畑田、屋敷田、沢田、下塚、前田、山口田（山口）、五反田、十二田、小泉田（小泉）、大田、三百苅、ぼこ塚（ぼら塚・ほこ塚）、よ代田（永代田）、荒川原墨（芝河原くろ）、餅田、巳新田、東田、南田、立石（立石田）、当流、石橋（石橋田）、松之木田、神成田、清水田、山ノ根、山之越、天王寺（てのふち）、大石町（大石のまり）、七月田、長左衛門田、荒田、野田、北田、くね添、野田道下（道下）、下野田、石蔵、諏訪木、宮之越、塚田、鴫田（鴫田すいみん）、えび作り、春ノ切、すわ之方、中川原、欠下、ほきの宮、居町（えまり）、当之浦（堂浦）、しよぶ田（せうふ田）、いの木（えの木町）、えの木町、三作り田、ほくこ（ほつこ）、大やち、かつほ田、二反田、下原、中新田、ぽつこ（ほつこ）、杉の木、えの木、西切石、永田（長田）、大宮、当林、切石、どふけ（とうふけ）、丸山（丸山新田）、下新田、野くろ、孫左衛門原、下川原	落合、谷内田、沢田、山口、小泉田、五反田、北山、天王寺、松ノ木田、北田南田、風吹、三反田、立石、神成田、野田、前田、石蔵、向原越前、宮ノ浦、中川原、上川原屋敷田、宇佐ノ宮、八反田、大石町、中田、大田、居町、西切石、切石、下川原、長畔町、杉ノ木、大宮、下原
畑	大宮、下新田、西原、孫左衛門原、野くろ道境、杉の木、とうりん、ほここ（ほくこ）、立石、田中、おち合、しやうか塚（正ケ塚）、かけはた、屋敷添、寺かた、切石、中川原、風吹、かけ下、すみ畑、石原畑、小泉、十二畑（十二）、寺前、かにか沢（かに沢）、屋鋪裏、うら畑、坂の根、川端、野畑、手のこうし下、北浦、家の前、南浦、屋敷前、十二天、よこひ、とや、野田、下原、くね添、五りん林、丸山、西切石、小丸山、中新田	正ケ塚（しやうか塚）、寺之前、かに沢（かにか沢）、十二（十二畑）、小泉、屋敷添、立石、欠端、上川原、風吹、野田、下原、中新田、中川原、寺方、切石、長泉寺屋敷、西切石、くね添、五輪林、杉の木、ほくこ（ほここ）、西原、当林、大宮、下新田、丸山、大犬穴、亥新田、孫左衛門原、野くろ	

註1）（ ）は検地帳、村絵図と対比される地名を示す。
2）検地帳、村絵図の「・」は両者で対応する地名を示す。
3）更正図は圃場整備前のもので、「・」は検地帳、村絵図いずれかと一致する地名を示す。

第6表 長森村地名一覧

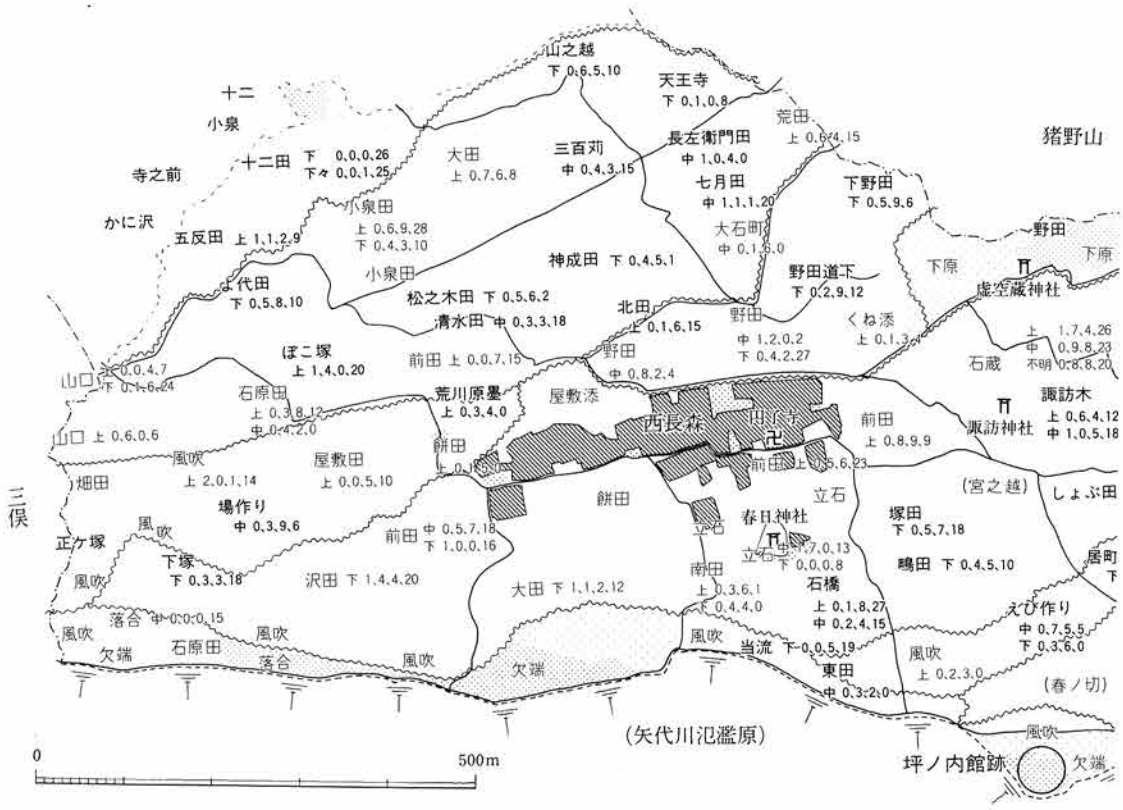
認識される。

次に、この村絵図の地名を天和3年(1683)の検地帳に記された地名と比較すると(第6表)、村絵図の地名の多くが、検地帳にあり、それらの起源は17世紀末まで遡ることが確認される。このことは200年近くの間、村人のなかで地名が忠実に継承されてきたことを示すとともに、大規模な開発がほとんどなく、大幅な土地景観の改変もなかったことを示唆する。

比較的規模の小さい開発がなされたことは、天保5年(1834)の村高が791石余りで、元禄

15年(1702)の村高より約50石増加していることからもうかがえる。これは地名の対応関係から、具体的な開発地区を推定できる例がある。村絵図には記載されていながら検地帳にはみられない地名のうち、「上川原」・「下川原」・「巳新田」・「すわ之方」はいずれも矢代川の氾濫原に位置しており、この地が天和3年以降に耕地化されたことが知られる。ここは氾濫原というよりも、むしろ河原といったほうがふさわしい土地で、川原石が多いという土壌条件から、耕地化が遅れた土地と考えられる[25]。また、田と畑で地名の対応関係をみると、検地帳の畑の地名で、村絵図の畑の地名にみられないものが多いことが注目される。これは天和3年以降に畑が水田化されたことを示す。「おち合」は検地帳では水田と畑の両方にみられるが、村絵図には水田のみにみられるし、「切石」・「西切石」・「杉ノ木」・「中川原」・「かけ下」・「下原」は前者では畑のみにみられるが、後者には水田と畑の両方にみられ、同様に水田化されたことが知られる。他方、検地帳の畑の地名のうち、「屋鋪裏」・「うら畑」・「家の前」・「屋敷前」などは村絵図にはみられなくなっているが、これは屋敷の周辺を水田化する小規模ないわゆる切添新田と考えられ、水田化されたのちに「屋敷田」などの地名に編入されたと推測される。

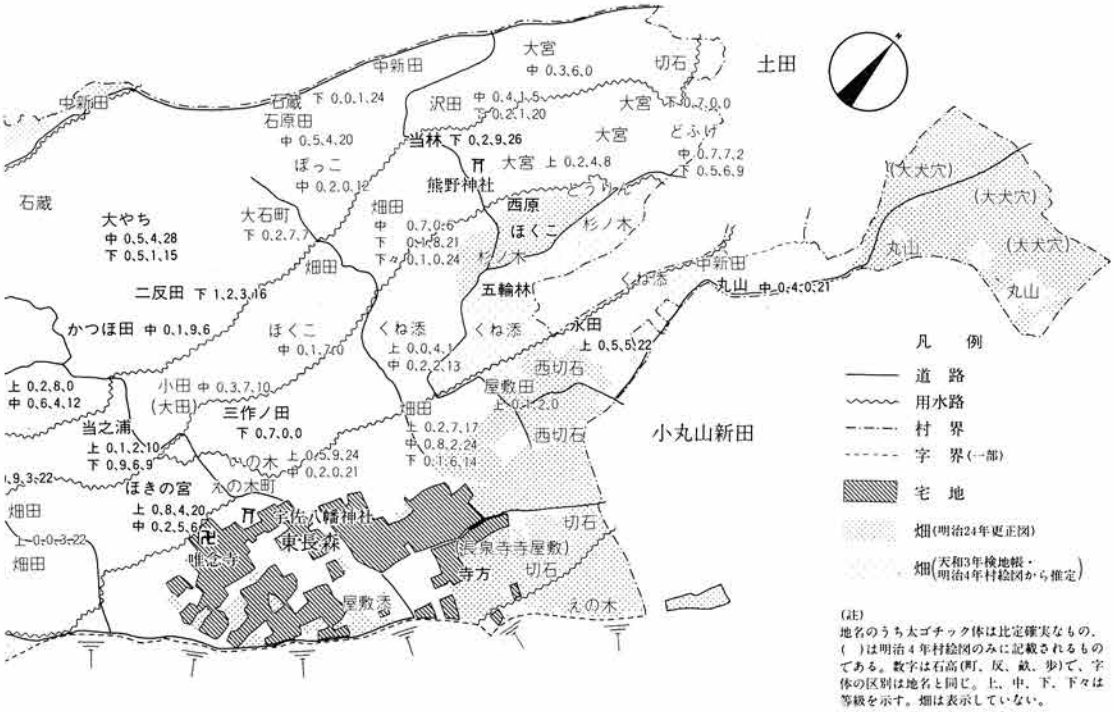
検地帳や村絵図から知られる地名は、通常数反から1・2町で、畑はこれより小さいものが多い。地名はその土地の状況や由来を類推させるものである。そのため、土地の状況・由来が



第17図　長森村天和3年検地帳地名・石高比定図

共通する場合、別々の場所を同じ名称で呼ぶことにもなる。「屋敷添」・「屋敷田」は西長森・東長森の集落周辺にあるし、「畑田」・「前田」・「風吹」などは5箇所以上にみられる。こうした例では検地帳と村絵図との地名の対応関係を把握することはやや困難であるが、面積や記載順などを考慮すると、おおよそのところは比定される。もちろん双方にひとつしかみられない地名の対応関係は確定できる。このようにして検地帳と村絵図との地名の対応関係を検討し、さらにその地名の現地比定を行うことができれば、検地帳の記載内容から17世紀末の長森村の具体的な土地の状況を把握することが可能である(第17図)。

ここで、坪ノ内館跡周辺の水田の等級、およその面積に注目すると、中田・下田が多く、上田はあまりみられず、館のごく近い範囲はあまり生産性の高い土地ではないことが知られる。通常、段丘上に開発された水田は、地下水位が低い乾田で、生産性が高いといわれるが、長森の場合はきわめて堅くて礫を多く含む泥流堆積物を基盤とし、その上に黒ボク土がのるという土地条件は灌漑されたとしても決して水田としては良好なものではなかったと考えられる。また、用水系統の末端に位置する坪ノ内館跡周辺から下位にかけては、用水の供給量も豊富でなかったことも想定される。これに対して、西長森の集落周辺は、上田・中田が広く分布しており、相対的に生産性が高かったことがうかがえる。これに加えて、集落の周辺には「前田」・



「北田」という地名が点在していることが注目される。一般に「前田」は中世の館の前に位置することが多く、それは良質の水田である場合が多いといわれる。ここでも「前田」は一部をのぞいて上田である。また「北田」は集落の北に位置しており、集落を中心とした地名であり、同様に上田である。このようにしてみるならば、西長森の集落周辺に中世の在地領主層[26]の存在を想定することができよう。それは長森用水開削以前に遡るもので、内川沿いの沖積地やその屋敷周辺の水田をおもな生産地としたと思われる[27]。西長森の集落の周辺は段丘面上といっても、内川の沖積地と大きな段差がなく、段丘南縁部ほど乾燥した土地ではない。また、集落の西側は南北方向のゆるやかな谷が存在し、ここからの湧水や内川からの水も有効に使えたものと推定される。現在、この内川沿いの沖積地は三ツ俣用水の灌漑範囲に含まれるが、この用水がなかったとしても地形からみて少なからず谷水田が存在したと考えられる。さきに引用した元和8年の文書には長森村の本高が520石余り、正保2年国絵図には村高522石余りと記されており、これを長森用水開削以前の石高とすれば、2つの用水の開削以前にも比較的広い耕地が存在したことがうかがえ、それが西長森を中心とした範囲とみなすことができよう。

現在、西長森の集落とその周辺に中世の居館跡は確認されてはいないし、これを明確に示す地名も存在しない。遺構の存在が確認される居館は堀や土塁が存在することによるものであり、これがなければ地表面から遺構の存在を推定することはできない。従来、中世の居館は堀と土塁に囲まれた構造が一般に想像されているが、近年の発掘調査例からすると、そうした構造はあくまでも戦国期のものである場合が多いように思われる[28]。したがって、こうした遺構が確認されていない西長森周辺にも、在地領主の館・屋敷が存在した可能性は否定できないといえよう。今後の課題としたい。

C．坪ノ内館の性格と歴史的背景

坪ノ内館が造営された15世紀後葉以降の館周辺は、現在のように水田が一面に広がるような状況ではなく、かなりの部分が未懇地として残っていたと推定される。当館の造営主体はこの周辺に基盤をおいた武士であり、在地領主であると考えられる。この周辺の在地領主層の分布は、御館の乱の際の鮫ケ尾城主堀江宗親以外はまったく不明である。その居館は乙吉館に比定されており、これをのぞけば、十日市や三ツ俣館の存在から、それに伴う在地領主層の存在もうかがえる。また、これら以外の本田村においても、その存在を想定することは可能である。いまこれら周辺の地名・地籍などを詳細に検討する余裕がなく、坪ノ内館跡の造営主体は即断できないが、前述した西長森の集落周辺に推定される在地領主層がもっとも可能性が高いようにも思われる。

館は日常生活の住まいであり、当館で検出された遺構・遺物はそれを物語っている。しかしながら、この館の場合、矢代川に臨む段丘崖縁辺を選地しており、そこがただ単なる日常生活

の場ではなく、ほかになんらかの機能をもった施設と考えられる。

新井市周辺の居館には、松原館・三ツ俣館など坪ノ内館と共通した立地条件をもつものがいくつか存在する(第Ⅱ章3C)。これらの造営期は不明であるが、近年の館の発掘事例からみると、坪ノ内館跡同様おおむね15世紀から16世紀にかけての時期に存在したと類推される。これに加えて、多くの山城が同じ時期に築城されたと考えられる。山城はいうまでもなく軍事的な機能をもつものである。当時の情勢はこうした施設を必要としたのであり、同時期に造営された居館もそうした背景のもとに成立したものといえよう。すなわち、住まいであるとともに経済的・軍事的な機能がその一面にあるのである。坪ノ内館についていえば、館は一方では館主がその土地を支配する拠点であり、他方では上杉の領国支配のなかで一定の役割を担っていたことを示唆するであろう[29]。

以上のように、坪ノ内館跡は室町から戦国期の時代背景のなかで生まれた一種の経済的・軍事的拠点であり、いわゆる中世前期以来、農業生産に主体をおいた有力な農業経営者の居館とは成立背景が根本的に異なるように思われる。近年、中世館跡の調査も増加しつつあるとはいえ、多くは15世紀後半以降の戦国期の例であり、中世前期のいわゆる武士の館は調査例が少なく、実態はあまりよくわかっていない。しかしながら、館の構造は別として、中世前期の在地領主の生活拠点である館は存在したはずであり、いわゆる「中世の館」は次の2つの類型に弁別して理解することができよう。

ひとつは農業の生産と経営を基本とした、いわゆる中世の在地領主層の屋敷であり、もうひとつは室町後期から戦国期にかけて出現する経済的・軍事的機能をも兼ねた館である。ここでは前者をA類、後者をB類としよう。坪ノ内館跡はB類にあたる。A類は概して中世前期以来の生産基盤を保持し、中世村落の中核をなすものであろう。これはB類が出現する室町後期から戦国期に至って、堀や土塁をめぐらすなど、大幅に構造を改変していることも推測される。B類は段丘崖縁辺や河川に面していたり、周囲に対する眺望もよいなどの立地条件をもち、一面では自然の要害と考えられる。

以上、資料を詳細に検討しないまま、二つの類型を設定した。これがどの程度普遍化できるかはわからないが、今後の中世の城館の研究課題として提示しておく。

4．結　　語

これまで、6章にわたって調査成果を述べてきたが、最後にその要点を列挙しておく。

(1) 坪ノ内館跡は頸城平野南縁の新井市大字長森字堂ノ浦763番地他に所在する。当地は矢代川に面した比高約10mの段丘崖が半島状に突き出した部分、標高約127mに立地し、頸城平野から信越国境の山々を一望できる。

(2) 当館跡は今回の発掘調査で、はじめてその存在が確認されたものである。この地は地元で「坪ノ内」という通称があり、かつて豪族屋敷があったという伝承はあったものの、居館の存在を明確に示す「立ノ内」などの地名や堀などの痕跡はなく、研究者の間ではまったく知られていなかった。

(3) 発掘調査は上新バイパス建設に伴うもので、その法線部分東西約40m、南北約60m、面積約2,250㎡を調査した。この部分は館全体からみれば東側にあたる。

(4) 発掘区内では空堀2本、溝1本、掘立柱建物12棟、井戸24基、土坑数基、ピット多数が検出された。空堀は段丘崖にむかって「コ」の字状にめぐっており、その範囲は、東西20～25m、南北30～45mの方形の区画である。これは館全体の東側の郭にあたり、「東郭」とした。空堀は幅3～4m、深さ1m前後である。掘立柱建物は明確にプランが把握されたものが12棟で、これ以外の多くのピットからみて、かなりの建物が存在したと考えられる。東郭にある最大規模の建物1はこの郭の主屋で、空堀2の外側の建物は当館主の被官の建物と考えられる。井戸は建物に近接して存在する。空堀1は掘削後のある時点で北側が埋められて、石垣(石組1)と石組暗渠(石組2)が構築されている。これより、この館は造営当初から廃絶までの間に、改変がなされたことが知られる。

(5) 発掘区外においては部分的なトレンチ調査を実施して、空堀や土塁状の高まりの性格を究明した。その結果、①空堀2は直線的に西側にのびて段丘崖に達すること、②土塁状の高まりは外面に葺石を伴う土塁であること、③土塁は屈折部をもち、その下に空堀2が位置すること、④空堀2の北側に土塁の屈折に伴って、幅約3mの空堀3が存在すること、が判明した。したがって、空堀2の掘削後に土塁が築かれ、同時に空堀3が掘削されたと推定される。ここにおいても空堀1と同様に館の改変があったことが知られる。発掘区とその西側の所見を総合すると、館の最終段階の規模は東西50～70m、南北30～50m、面積約2,800㎡以上と考えられる。

(6) 出土遺物は陶磁器類・石製品・金属製品などである。陶磁器類には中国製陶磁器（青磁・白磁・染付・黒釉壺)、土師質土器(皿・足付皿・杯・鍋)、瓦質土器(香炉・火舎)、瀬戸・美濃焼(天目・灰釉碗・香炉・盤・壺)、珠洲焼(すり鉢・壺・甕)、越前焼(壺・甕）のほか、

産地不明のものが若干ある。これらはごく一部を除いて、15世紀前葉から16世紀後葉のものであるが、土師質土器皿などにはほとんど型式差がなく、館が造営された時期は15世紀後葉以降と考えられる。

土師質土器皿のB類（糸切りタイプ）や土鍋などは主体的なあり方をしていないが、信濃地方との関係が注目される。また、金銅製の水瓶や以前に当地で採集された和鏡は、貴重なものであり、館主の階層を示唆する。石製品のうちの粉挽き臼は一般的に室町期以降に普及するものと考えられ、この時期に食物や食品の加工方法などに大きな変化があったことが想定される。茶臼も同様に普及し、当時の武将が喫茶の風になじんだことが知られる。

(7) 当館跡は室町後期から戦国期の緊張した社会情勢を背景に出現したものであり、生活の場であるとともに、一定の軍事的・経済的な機能をもつものと推定される。当館跡の造営時におけるごく周辺の状況は、荒地がひろがっていたと考えられ、中世以来の有力農民である在地領主層の存在は考えられないことから、当館は軍事・交通上の有利な立地条件を生かして、山城などと同様の機能を兼ねるものとして造営されたことがうかがえる。当時の村落は現在の西長森の集落周辺に存在し、内川沿いの谷水田に主な生産地を求めたと考えられる。

註

1）これらの遺構はいわゆる地山（Ⅲ層）上に存在する黒色土（Ⅱ層）をベースにしているが、調査に際しては、遺構検出が容易な地山上まで掘り下げて遺構検出しており、検出された遺構の状況は当時のものとかなり異なることが予想される。また、見落した遺構も多いと思われる。ただし、柱穴は硬い地山面を掘り込んだものが大半と考えられ、さほど見落しはないと思われる。

2）外法は約60度、内法は約50度である。刈羽郡小国町御館でも同様である〔大河内勉・荒川正明1985〕。

3）無文の青磁碗（1）は上田分類のD類で、比較的シャープなつくりからすれば、D－Ⅰ類に比定され、14世紀に遡る可能性がある。また鍋を削り出した蓮弁文碗（4）も14世紀まで遡ると考えられる。

4）瀬戸・美濃焼の編年は、美濃古窯研究会1976、田口昭二1983、井上喜久男1985、楢崎彰一・斉藤孝正1985による。

5）前者は註4の文献であり、後者は小野正敏1981などである。

6）珠洲焼の編年は吉岡康暢1981・1982による。16世紀前半に比定されるⅦ期は消費遺跡では未確認で、実際に流通したかどうかは不明とされる。北陸地方では16世紀には珠洲焼にかわって越前焼のすり鉢が流通するが、当館跡ではこれが1点も出土していない。石製の鉢（101～106）がこの代用品として使用されていたのかもしれない。

7）鎌倉では鎌倉前期にA類がかなり生産されているが、鎌倉後期以降はすべてB類となる。こうした動きは関東各地でみられるようである〔神奈川考古同人会1986〕。

8）土鍋は胎土に著しく砂粒を多く含み、きわめて硬質な焼成で、搬入品と考えられるが、皿B類については量的にやや多いことから、在地産の可能性も考慮しておきたい。ただ、小形品なので比較的遠距離でも流通するようにも思われる。なお、B類が多い遺跡に上越市伝至徳寺跡〔小島幸雄・中村美恵子1983〕がある。

9）唐津焼がまったくみられないことも16世紀末まで下らない証左と考えられる。近年、県下各地で唐津焼Ⅰ期の製品が検出されており、当地方では唐津焼の成立当初より多量に流通していたことがうかがえる。

10）ただし、梨平新田のみは現在の大字・小字にみられない。梨の木村の枝村であり、その周辺に位置する

ものと推定される。

11）これについては大江口土地改良区の教示を得た。圃場整備前のものである。

12）これには十日市・五日市・四ツ屋や乙吉・宮内・神宮寺の各村が含まれてはいないが、それ以外の村の用水は、その用水源で分けると、矢代川・万内川が5つ、内川が7つ、山川が1つで、灌漑する水田の石高が大きいのは大江口(大井口)用水の730石余りと、長森用水の約600石である。内川水系の用水はいずれも灌漑面積が小さく、総計でも約330石である。猪野山はほとんど谷水で灌漑する。大江口用水は小丸山新田・藤塚新田・谷内林新田・五日市・十日市・乙吉を、長森用水は長森一村を、内川水系は梨の木・篭町をそれぞれ灌漑する。このほか新保新田・坂井新田は藤塚新田の残水、八幡新田は藤塚新田と谷内林新田の残水、梨平新田は梨の木の残水、長森と猪野山の一部は三ツ俣の残水、土田は長森の残水をそれぞれ利用しており、これらと現在の灌漑系統を比較すると、現在の長森用水の末端が土田をこえて段丘北側の西縁までのびることが相違するくらいで、両者はほとんど一致している。

13）この文書は作成年代が不明であるが、金子以策氏の教示によれば、文化6年(1809)に当地が榊原藩領になった際に作成された可能性があるという。

14）段丘面上でも小さな起伏があり、小規模な谷水田は存在した可能性はあろう。

15）慶長3年(1595)に、堀秀治が実施した検地をのちに「古検」と称し、この際の新田を「古新田」という。

16）新発田市立図書館蔵。絵図調査にあたっては同図書館長高橋禮彌、県史編纂室阿部洋輔、新発田高校荻野正博の各氏の協力を得た。この絵図は一部文字が判読不能であり、長森周辺については判読できるのは梨木・三俣・猪山・四日市などで、ほかは不分明であるが、昭和初期の絵図筆写資料〔三扶誠五郎1936〕を参考にすれば、婆太地区の新田村はまったく記載されていない。なお、長森については「長」の頭の部分が残り、村高の「五百廿□石」が読める。さきの筆写資料はこれを522石とする。

17）小林源治1960所引史料(小林源治家文書)。内容は猪野山・三ツ俣との代地山に関するものである。

18）さきの正保2年絵図の長森村の村高は522石であり〔三扶誠五郎1936〕、この文書の本田高とほぼ一致することが注目される。

19）このことについては、段丘面北半部の各新田が長森村から分かれた結果、長森村の耕地を割いたからではないかとする意見もある〔小林源治1960〕が、元禄15年郷帳によれば、八幡・谷内林・新保の各新田は、五日市村枝郷となっており、藤塚・坂井・小丸山の各新田が長森村枝郷である。ちなみに、長森と段丘北半部の7つの新田の総村高は931石余りで、さきの元和8年の石高1,003石余りより少ない。

20）式内社である婆太神社は宮内の丘陵山裾に鎮座しており、この存在から周辺の開発が古代に遡ることが推察される。また大江口用水の灌漑地域である五日市・十日市は本田村であり、大江口用水の開削以前に成立した村である。正保2年国絵図には五日市(絵図の記載は四日市)は村高279石余りで、十日市は不明である。五日市の元禄15年の村高は305石余りで、両者には大きな差はなく、五日市は大江口用水の開削によって飛躍的に生産拡大したとは考えられない。

21）金子以策氏の筆写史料(文書は長森区長所蔵)。

22）金子以策氏所蔵。この絵図は明治新政府の政策に伴う明治3年の検見規則によって作成された検見耕地絵図〔佐藤甚次郎1982〕と考えられる。このあと明治5年の地券渡方規則などにより地引絵図が作成された。検見耕地絵図は各筆の状態には主眼が置かれず、村を単位とし、村域における田・畑・屋敷の所在・分布を示すことに重点がおかれたという。

23）いわゆる地籍図で、縮尺は1/600である。図面は新井市役所所蔵の明治24年作成中頸城郡西郷村大字長森のものである。

24）圃場整備前の1/3,000の地形図は長森の西部については作成されておらず、この図で長森全体を示すことはできなかった。

25）この矢代川の氾濫原には、村絵図に「御検地場」という記載がみられ、新しく開発されたことが知られる。

26）ここでいう在地領主層は、守護・守護代などを除いた在地の有力者層を漠然とさすものである。

27）春日神社・諏訪神社・虚空蔵神社などの多くの神社が、集落を中心にして、その北東と東にそれぞれ位置することが注目される。これらの神社が中世まで遡るとすれば、西長森を中心とした中世村落の存在が

示唆される。

28）従来の城館跡の発掘成果の大半は、城館の廃絶時の姿を示すものであって、築造時の状況については不明な点が多い〔河原純之1981〕。

29）小和田哲男1981は、本城に対する支城を第一次支城と第二次支城とに分け、第二次支城網は短くて1・2km、長くても5・6kmの距離で位置していることに注目し、その間の連絡手段が鐘・太鼓や法螺貝などの音であったことを想定している。また、これらと交通路との関係が注目されている。坪ノ内館跡周辺では、鮫ケ尾城や鳥坂城が第一次支城で、それ以外の山城と多くの居館は第二次支城といえ、これらが1～2kmほどの距離で位置することが留意される。坪ノ内館跡についていえば、矢代川に沿って関山方向へ通じる交通路との関連が想起される。こうした側面を重視すれば、戦国期の居館も山城と同様の軍事的機能を看取することができ、そうした背景で造営されたことも首肯される。

引用・参考文献

朝倉氏遺跡資料館編　1983　『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡県道鯖江・美山線改良工事に伴なう発掘調査報告書』福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館

浅野晴樹　1985　「北関東における中世土器様相」『神奈川考古』21　シンポジウム古代末期～中世における在地系土器の諸問題　神奈川考古同人会

阿部洋輔編　1984　『上杉氏の研究』戦国大名編集9　吉川弘文館

新井市教育委員会　1977　『新井市の古墳群』

新井市教育委員会　1978　『谷内林古墳群1号墳発掘調査報告』

新井市ホワイトピア構想研究会　1985　『新しい雪国都市新井をめざして―新井市ホワイトピア構想策定報告書―』　新井市

伊藤正一　1966　「頸南の城館跡」『頸南』　新潟県文化財年報第5　新潟県教育委員会

伊藤多三郎　1963　「越後上杉領国の成立」『藩制成立史の綜合研究』　吉川弘文館

石井進　1974　『中世武士団』日本の歴史12　小学館

石井進　1976　「中世社会論」『岩波講座日本歴史』8　中世4　岩波書店

井上鋭夫　1970　『新潟県の歴史』　山川出版社

井上喜久男　1985　「16世紀の瀬戸・美濃窯」『中近世土器の基礎研究』　日本中世土器研究会

植木宏　1980　「新潟県城郭解説」(新井市の項)　『日本城郭大系』7　新人物往来社

上田秀夫　1982　「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』2　日本貿易陶磁研究会

宇野隆夫　1981　「遺物」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』京都大学埋蔵文化財研究センター

荻野正博　1983　「越後国中世庄園の成立」『新潟史学』16　新潟史学会

大河内勉・荒川正明　1985　『新潟県刈羽郡小国町御館発掘調査報告』　小国町教育委員会

大山喬平　1970　「荘園制と領主制」　歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本史』2　封建社会の成立　東京大学出版会

奥村哲・杉本耕一　1973　「新田開発」『新井市史』上巻　新井市役所

奥村哲・杉野誠治　1973　「用水の利用」『新井市史』上巻　前掲

小野正敏　1981　「山梨県東八代郡一宮町新巻本村の陶磁器」『貿易陶磁研究』1

小野正敏　1982　「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』2

小野正敏　1985　「出土陶磁よりみた15・16世紀における画期の素描」『ミューゼアム』1985年11月号　東京国立博物館

小野正敏・金元賢治　1981　『豊原寺跡Ⅱ』　華蔵院跡第2次発掘調査概報　丸岡町教育委員会

小村弋　1963　「春日山城下町の成立」　藩政史研究会編『藩制成立史の綜合研究』　吉川弘文館

小和田哲男　1979　『城と城下町』　教育社歴史新書97

小和田哲男　1981　「大名領国制下の支城の史的位置」『日本城郭大系』別巻1　新人物往来社

加藤晋平　1973　「中世の石塔と城館址」『新井市史』上巻　前掲

神奈川考古同人会　1986　「シンポジウム古代末～中世における在地系土器の諸問題」『神奈川考古』21

金子以策　1973　「上杉氏と上越」『新井市史』上巻　前掲

金子拓男　1973　『五十嵐小文治館発掘調査報告書』　新潟県南蒲原郡下田村教育委員会

金子拓男・宮腰公健　1977　「くつがた遺跡出土の密教法具」『月刊文化財』1977年7月号　第一法規

河原純之　1981　「中世城館跡の発掘と保存」『日本城郭大系』別巻1　前掲

木村宗文　1984　「文献からみた古代・中世の頸城地方」『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ』　新潟県教育委員会

木村宗文　1985　「歴史的環境」『北陸自動車道上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅰ』　新潟県教育委員会

木村礎　1980　『近世の村』　教育社歴史新書

木村礎　1983　『村の語る日本の歴史』古代・中世編　そしえて文庫8

河野真知郎　1986　「鎌倉における中世土器様相」『神奈川考古』21　前掲

小島幸雄・中村美恵子　1983　『伝至徳寺跡発掘調査報告書』　上越市教育委員会

小林源治　1960　「長森村歴史の覗き見」『郷土の新井』5　新井市郷土史研究会
駒井和愛・吉田章一郎　1962　『斐太』　慶友社
後藤守一　1935　『古鏡聚英』下
坂井秀弥　1982　『栗原遺跡4次・5次発掘調査報告』　新潟県教育委員会
坂井秀弥　1983　『栗原遺跡6次発掘調査報告』　新潟県教育委員会
坂井秀弥　1985　「頸城平野古代・中世開発史の一考察―頸城村を中心にして―」『新潟史学』18　新潟史学会
坂井秀弥　1986　『北陸自動車道上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅱ』　新潟県教育委員会
佐藤甚次郎　1982　「明治前期の地籍図」『歴史地理学』116　歴史地理学会
三扶誠五郎　1936　『正保二年越後絵図並ニ国中石高調』　新発田郷土研究会
高橋勉　1984　『新井市栗原遺跡第7次・第8次発掘調査報告書』　新井市教育委員会
高橋勉　1985　『月岡遺跡範囲確認緊急調査報告書』　新井市教育委員会
竹田和夫　1986　「室町・戦国期武家雑掌の基礎的考察―上杉家雑掌神余氏を事例として―」『地方史新潟』22.
新潟地方史研究会
高田平野団体研究グループ　1981　「高田平野の第四系と形成史」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』25
田口昭二　1983　『美濃焼』　考古学ライブラリー17　ニューサイエンス社
東大史料編纂所　1983　『越後国絵図』(頸城郡)　東京大学出版会
豊田武　1952　「中世日本商業史の研究」『豊田武著作集』第2巻所収　1982　吉川弘文館
中野政樹　1969　「和鏡」『日本の美術』44―11　至文堂
楢崎彰一・斉藤孝正　1985　『愛知県古窯跡群分布調査報告』Ⅳ　愛知県教育委員会
新潟県教育委員会　1980　『昭和54年度新潟県遺跡地図』
新潟県教育委員会　1984　『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ』
新潟県　1980　『新潟県上越地域分類基本調査・高田東部』
新潟県　1981　『新潟県史』　資料編6
服部英雄　1981　「中世荘園と館」『日本城郭大系』別巻1　前掲
服部英雄　1983　「小地名による中世の村の復原―能登国万行保・奥原保を素材に―」『歴史公論』86　雄山閣
花積哲夫・伊藤裕　1984　『月岡遺跡発掘調査報告書』　新井市教育委員会
福井県教育委員会　1979　『特別史跡一乗谷朝倉氏発掘調査報告Ⅰ』　朝倉館跡の調査
福井県教育委員会・朝倉氏遺跡調査事務所・福井県立朝倉資料館編　1971～1985　『一乗谷朝倉氏遺跡』Ⅲ～
XVI
北陸地建弘済会　1981　『新潟県平野部の地盤図集』
美濃古窯研究会編　1976　『美濃の古陶』　光琳社
宮田進一　1985　「出土遺物による時期区分」『弓庄城跡第5次緊急発掘調査概要』　上市町教育委員会
妙高団体研究グループ　1969　「妙高火山の形成と山麓の水理地質」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』14
三輪茂雄　1978　『臼』ものと人間の文化史25　法政大学出版局
武藤直　1975　「東国・交通」『日本歴史地理総説』中世編　吉川弘文館
村田修三ほか　1981　「城郭用語辞典」『日本城郭大系』別巻2　新人物往来社
森田勉　1982　「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』2　前掲
吉岡康暢　1981　「中世陶器の生産と流通」『考古学研究』108　考古学研究会
吉岡康暢　1982　「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」『庄内考古学』18　庄内考古学会
吉田恵二ほか　1981　『昭和55年度新井市埋蔵文化財調査報告書』　新井市教育委員会

別表１　天和３年長森村検地水帳一覧

本表は金子以策氏が昭和41年12月に筆写した「天和三癸亥年越後国頚城郡長森村御検地水帳」（登録番号１・Ｈ・１－０）をもとに作成したものである。資料原本は当時長森区長が所蔵していたものである。

番号	地名	等級	間数	面積 町	反	畝	歩	名請人
1	孫左衛門原	中田	40 × 9.5	1	2	20		孫右衛門
2	〃	中田	30 × 9		9			〃
3	〃	下田	20 × 8		5	10		〃
4	〃	下田	7 × 5.5		1	8		作右衛門
5	〃	下田	4 × 2.5			10		孫右衛門
6	〃	下田	10 × 3		1			傳左衛門
7	〃	下田	7.5× 7		1	22		孫右衛門
8	野墨	上田	4 × 2.5			10		与四兵衛
9	〃	上田	43 × 8	1	1	14		伝三郎
10	孫左衛門原	上田	40 × 2.5		3	10		牛兵衛
11	〃	上田	13 × 8		3	14		〃
12	〃	中田	16 × 2		1	2		惣左衛門
13	〃	中田	29.5×13	1	2	23		与四兵衛
14	〃	下田	16 × 2.5		1	10		宗左衛門
15	大宮	上田	26 ×28	2	4	8		与惣左衛門
16	ほつこ	中田	36 ×17	2		12		〃
17	大石まち	下田	43 ×19	2	7	7		仁兵衛
18	とうりん	下田	56 ×16	2	9	26		〃
19	畑田	下田	33 ×17	1	8	21		市郎右衛門
20	ほつこ	中田	30 ×17	1	7			五右衛門
21	畑田	下々田	20 ×16	1		20		市郎右衛門
22	〃	中田	54 ×39	7		6		〃
23	みつくり田	下田	50 ×42	7				源右衛門
24	石原田	下田	28 ×16	1	4	28		久四郎
25	〃	中田	53 ×21	3	7	3		権左衛門
26	小田	中田	35 ×32	3	7	10		市郎右衛門
27	弐反田	下田	50 ×45	7	5			五治右衛門
28	〃	下田	52 ×28	4	8	16		佐五兵衛
29	ひえの木	下田	43 ×36	5	1	18		長右衛門
30	八枚田	中田	44 ×35	5	1	10		杢左衛門
31	畑田	下田	20 ×19.5	1	3			市郎右衛門
32	えふかい	中田	33 ×30	3	3			源右衛門
33	えび作り	中田	47 ×33	5	1	21		久右衛門
34	〃	中田	32 ×22	2	3	14		弥五左衛門
35	〃	下田	36 ×30	3	6			七郎兵衛
36	腰前	下田	46 ×27	4	1	12		儀左衛門
37	腰前	中田	38 ×34	4	3	2		権左衛門
38	風吹	上田	30 ×23	2	3			与惣左衛門
39	弐枚田	下田	36 ×31	3	7	6		弥治右衛門
40	塚田	下田	54 ×32	5	7	18		九郎右衛門
41	立石	中田	43 ×34	4	8	22		吉右衛門
42	鳰田すいみん	下田	40 ×34	4	5	10		与茂助
43	南田	上田	47 ×23	3	6	1		儀左衛門
44	前田	上田	44 ×34	4	9	26		弥惣右衛門
45	〃	上田	7 × 6.5			1	15	与茂助
46	〃	上田	18 × 9			5	12	弥惣右衛門
47	石橋田	中田	35 ×21	2	4	15		〃
48	〃	上田	27 ×21	1	8	27		源助
49	立石田	中田	40 ×34	4	5	10		市右衛門
50	前田	上田	36 ×26	3	1	6		七右衛門
51	〃	上田	25 ×18	1	5			善右衛門
52	〃	上田	37 ×33	4		21		市右衛門
53	〃	上田	12 × 6			2	12	源四郎
54	東田	中田	32 ×30	3	2			仁右衛門
55	立石	下田	8 × 1				8	七右衛門
56	〃	中田	58 ×39.5	7	6	11		与惣左衛門
57	風吹	下田	50 ×17	2	8	10		弥惣右衛門
58	〃	下田	12 × 6			2	12	長左衛門
59	常流	下田	13 ×13			5	19	杢左衛門
60	風吹	中田	20 ×20	1	3	10		源四郎
61	〃	下田	56 ×33	6	1	18		弥次右衛門
62	南田	下田	40 ×33	4	4			源四郎
63	風吹	上田	18 ×10			6		弥次右衛門
64	大田	下田	43 ×36	5	1	18		角右衛門
65	〃	下田	48 ×38	6		24		善右衛門
66	沢田	下田	34 ×31	3	5	4		源四郎
67	〃	下田	62 ×53	1		9	16	弥治右衛門
68	下塚	下田	36 ×28	3	3	18		惣左衛門
69	落合	中田	5 × 3				15	治郎右衛門
70	沢田	下々田	64 ×24	5	1	6		佐五右衛門
71	前田	下田	58 ×52	1			16	市左衛門
72	場作り	中田	48 ×24.5	3	9	6		市右衛門
73	前田	中田	48 ×36	5	7	18		惣左衛門
74	壱枚田	中田	3 × 1				3	弥次右衛門
75	風吹	上田	24 × 9			7	6	惣左衛門
76	〃	下田	60 ×46	9	2			〃
77	かけはた	下田	9 × 6			1	24	源右衛門

番号	地名	等級	間数	面積 町 反 畝 歩	名請人
78	かけはた	上田	12 ×9	3 18	市郎右衛門
79	はた田	中田	14 ×10	4 20	市郎左衛門
80	とうふけ	下田	8 ×5.5	1 14	佐五兵衛
81	〃	中田	40 ×39	5 2	仁左衛門
82	〃	下田	70 ×23.5	5 4 25	仁右衛門
83	〃	中田	35 ×21.5	2 5 2	〃
84	大宮	下田	50 ×42	7	権左衛門
85	〃	中田	40 ×27	3 6	長四郎
86	沢田	下田	32.5×20	2 1 20	弥五右衛門
87	〃	中田	38 ×32.5	4 1 5	〃
88	こくぞう	下田	18 ×3	1 24	佐之助
89	石原田	中田	40 ×34	4 5 10	門右衛門
90	〃	中田	17 ×16	9 10	〃
91	こくぞう	中田	35 ×35	4 25	惣左衛門
92	〃	上田	35 ×26	3 10	〃
93	〃		70 ×38	8 8 20	仁右衛門
94	〃	上田	71.5×40	9 5 10	勘兵衛
95	〃	上田	41 ×36	4 9 6	伝兵衛
96	〃	中田	61 ×28.5	5 7 28	長右衛門
97	大やち	中田	51.5×32	5 4 28	九右衛門
98	〃	下田	51.5×30	5 1 15	〃
99	諏訪の木	中田	48 ×43.5	6 9 18	門右衛門
100	〃	中田	36 ×30	3 6	勘兵衛
101	かつほ田	中田	32 ×18	1 9 6	〃
102	諏訪の木	上田	22 ×12	8 24	佐五兵衛
103	〃	上田	21.5×20.5	1 4 21	作兵衛
104	〃	上田	31 ×12.5	1 2 27	庄左衛門
105	〃	上田	30 ×28	2 8	弥惣右衛門
106	あら田	中田	29 ×10.5	1 4	庄左衛門
107	くね添	上田	41.5× 9.5	1 3 4	伝兵衛
108	沢田	中田	45 ×24	3 6	作兵衛
109	野田	中田	39 ×30	3 9	源助
110	〃	下田	39 ×33	4 2 27	〃
111	下野田	下田	48 ×37	5 9 6	作蔵
112	道下	下田	31.5×28	2 9 12	佐平次
113	野田	中田	49 ×20	3 2 20	与治右衛門
114	〃	中田	44 ×33	4 8 12	弥次右衛門
115	七月田	中田	40 ×40	5 3 10	作左衛門
116	あら田	上田	45 ×43	6 4 15	弥次右衛門
117	大石のまり	中田	24 ×20	1 6	若右衛門
118	七月田	中田	43 ×40	5 7 10	源助
119	てのふち	下田	22 ×14	1 8	孫右衛門
120	長左衛門田	中田	60 ×52	1 4	九郎右衛門
121	山のこし	下田	112 ×17.5	6 5 10	三左衛門
122	かけ端	下田	9 ×5	1 15	五右衛門
123	屋鋪田	上田	13 ×12	5 6	儀左衛門
124	くね添	中田	39 ×16	2 24	伝十郎
125	〃	中田	7 ×7	1 19	〃
126	〃	上田	11 ×11	4 1	与惣左衛門
127	畑田	中田	54 ×46	8 2 24	〃
128	〃	上田	32 ×23	2 4 16	門右衛門
129	〃	下田	26 ×19	1 6 14	久四郎
130	〃	上田	13 ×7	3 1	三五兵衛
131	屋鋪田	上田	36 ×10	1 2	門右衛門
132	えの木町	上田	69 ×26	5 9 24	儀左衛門
133	〃	中田	69 ×9	2 21	〃
134	長田	上田	44 ×38	5 5 22	仁左衛門
135	ほきの宮	上田	63 ×36	7 5 18	李左衛門
136	〃	上田	22 ×11	8 2	〃
137	〃	上田	10 ×3	1	〃
138	〃	中田	63 ×12	2 5 6	〃
139	畑田	上田	12.5× 9	3 22	佐五兵衛
140	せうふ田	上田	40 ×21	2 8	源右衛門
141	〃	中田	46 ×42	6 4 12	三左衛門
142	えまり	下田	74 ×38	9 3 22	市郎右衛門
143	堂浦	下田	39.5×37	4 8 21	五治右衛門
144	〃	上田	37 ×10	1 2 10	与惣左衛門
145	〃	下田	68 ×21	4 7 18	治左衛門
146	畑田	上田	46 ×10	1 5 10	久四郎
147	風吹	上田	25.5×20.5	1 7 13	〃
148	〃	上田	36 ×25	3	仁左衛門
149	畑田	上田	14 ×2	28	弥惣右衛門
150	風吹	上田	11 ×6.5	2 11	四郎右衛門
151	〃	上田	50 ×16	2 6 20	弥惣右衛門
152	〃	上田	22.5× 7	5 7	源右衛門
153	〃	上田	24 ×21	1 6 24	三左衛門
154	〃	上田	43 ×12	1 7 6	久四郎
155	〃	上田	40 ×12	1 6	権左衛門
156	〃	上田	34 ×18.5	2 29	三左衛門
157	〃	上田	35 ×27	3 1 15	与惣左衛門
158	〃	上田	41 ×28.5	3 8 28	惣左衛門
159	〃	上田	43 ×18	2 5 24	弥次右衛門

番号	地名	等級	間数	面積 町	反	畝	歩	名請人
160	石原田	上田	36 ×32		3	8	12	惣左衛門
161	越米	中田	30 ×22.5		2	2	15	市右衛門
162	山口田	上田	43 ×42		6		6	三左衛門
163	ぼら塚	上田	52.5×50		8	7	15	弥惣右衛門
164	永代田	下田	50 ×35		5	8	10	吉右衛門
165	石原田	中田	40 ×31.5		4	2		作左衛門
166	芝河原くろ	上田	40 ×25.5		3	4		善右衛門
167	北田	上田	33 ×15		1	6	15	作左衛門
168	神なり田	下田	51 ×26.5		4	5	1	庄左衛門
169	清水田	中田	36 ×28		3	3	18	与茂助
170	野田	中田	56 ×44		8	2	4	半兵衛
171	松木田	下田	58 ×29		5	6	2	孫右衛門
172	三百苅	中田	58 ×22.5		4	3	15	文右衛門
173	ほこ塚	上田	58 ×27.5		5	3	5	源助
174	大田	上田	52 ×44		7	6	8	〃
175	小泉	上田	51 ×38		6	4	18	弥惣右衛門
176	〃	下田	40 ×32.5		4	3	10	与茂助
177	〃	上田	20 × 8			5	10	平兵衛
178	山口	下田	24 ×21		1	6	24	弥次右衛門
179	〃	上田	17 × 7.5			4	7	作右衛門
180	前田	上田	18 ×12.5			7	15	三右衛門
181	畑田	上田	10 × 9			3		弥惣右衛門
182	五反田	上田	60 ×35		7			九右衛門
183	〃	上田	54 ×23.5		4	2	9	平兵衛
184	十二畑	下田	13 × 2				26	治兵衛
185	〃	下々田	7 × 5			1	5	市左衛門
186	〃	下々田	5 × 4				20	治郎右衛門
187	餅田	上田	16 × 4.5			2	12	平兵衛
188	〃	上田	42 × 9		1	2	18	〃
189	かにか沢	下田	6 × 2				12	三右衛門
190	屋敷田	上田	20 × 8			5	10	与惣右衛門
191	かけ端	下田	18 × 7.5			4	15	五郎兵衛
192	下新田	中田	20 ×16		1		20	久四郎
193	〃	下田	35 ×16		1	8	20	〃
194	〃	下田	26 × 8.5			7	11	〃
195	〃	中田	20 × 6			4		〃
196	〃	中田	21 × 8			5	18	〃
197	中新田	中田	40 ×23.5		3	1	10	〃
198	〃	下田	30 ×23.5		2	3	15	〃
199	〃	下田	16 ×12			6	12	〃
200	丸山新田	中田	66 ×18.5		4		21	〃
201	とうふけ	中田	63 ×25			5	2	15	村抱 弥惣右衛門・久四郎
202	〃	下田	45 ×25			3	7	15	村抱 弥惣右衛門・久四郎
小計				62	6	5	1	
203	大宮	下畑	5.5× 2				11	守上宮宗 唯念寺
204	下新田	下畑	28 ×24			2	2	12	久四郎
205	大宮	下畑	8 × 4				1	2	市郎左衛門
206	〃	下畑	6 × 3					18	弥右衛門
207	〃	下畑	12 × 7				2	24	与惣右衛門
208	西原	下畑	6 × 4					24	唯念寺
209	孫左衛門原	下畑	10.5× 8				2	24	孫右衛門
210	〃	下畑	10.5× 3.5				1	7	作右衛門
211	野くろ	上畑	6 × 5				1		弥惣兵衛
212	〃	中畑	11 × 4				1	14	市右衛門
213	道境	下畑	10 × 9				3		源四郎
214	杉の木	下畑	7 × 5				1	5	権左衛門
215	〃	下畑	9 × 4				1	6	三郎右衛門
216	とうりん	下畑	10 ×10				3	10	伝十郎
217	杉の木	下畑	6 × 6				1	6	三郎右衛門
218	〃	下畑	20 × 6				4		三左衛門
219	〃	下畑	9 × 8				2	12	市郎右衛門
220	〃	下畑	22 × 7				5	4	仁兵衛
221	〃	下畑	10 × 8				2	20	八十郎
222	〃	下畑	7 × 6				1	12	佐五兵衛
223	〃	下畑	14 × 9				4	6	弥右衛門
224	〃	下畑	14 × 5				2	10	弥五左衛門
225	〃	下畑	14 ×13				6	2	伊左衛門
226	〃	下畑	15 × 9				4	15	仁左衛門
227	〃	下畑	11 × 4				1	14	伊左衛門
228	〃	下畑	19 × 8				5	2	〃
229	〃	下畑	8 × 6				1	18	〃
230	〃	下畑	9 × 7				2	3	弥五左衛門
231	〃	下畑	10 × 6				2		佐五右衛門
232	〃	下畑	9 × 8				2	12	三左衛門
233	〃	下畑	14 ×10				4	20	〃
234	〃	下畑	10 ×10				3	10	弥五左衛門
235	〃	下畑	11 ×11				4	1	源四郎
236	〃	下畑	8 × 6				1	18	弥五左衛門
237	〃	下畑	10 × 8				2	20	仁兵衛
238	〃	下畑	12 ×11				4	12	伝十郎

番号	地名	等級	間数	面積 町	反	畝	歩	名請人
239	杉の木	下畑	9 × 9		1	15		弥五左衛門
240	〃	下畑	21 × 6		4	6		長四郎
241	〃	下畑	12 × 8		3	6		弥右衛門
242	〃	下畑	8 × 8		2	4		伝十郎
243	〃	下畑	26 × 8		6	28		佐五兵衛
244	〃	下畑	12 ×12		4	24		三左衛門
245	〃	下畑	8 × 5		1	10		利左衛門
246	〃	下畑	12 × 6		2	12		久右衛門
247	〃	下畑	12 × 7		2	24		作蔵
248	〃	下畑	10 × 7		2	10		仁兵衛
249	ほここ	下畑	14 × 8.5		3	29		惣左衛門
250	〃	下畑	24 ×12		9	18		市郎右衛門
251	立石	下畑	7 × 5		1	5		源四郎
252	〃	下畑	14 × 5.5		2	17		源助
253	〃	下畑	10 × 5		1	20		七右衛門
254	〃	中畑	9 × 6		1	24		源助
255	〃	下畑	18 × 4		2	12		源四郎
256	〃	下畑	6 × 2			12		半四郎
257	田中	上畑	6 × 5		1			七右衛門
258	立石	下畑	6 × 5		1			庄左衛門
259	〃	下畑	8 × 4		1	2		源助
260	〃	下畑	6 × 4			24		源四郎
261	〃	下畑	8 × 4		1	2		源助
262	〃	下畑	12 × 3.5		1	12		三郎右衛門
263	おち合	中畑	14 × 5		2	10		治郎右衛門
264	しやうか塚	上畑	10 × 8		2	20		〃
265	〃	下畑	7 × 4			28		〃
266	〃	下畑	6 × 5		1			惣左衛門
267	かけはた	下畑	5 × 4			20		杢左衛門
268	〃	中畑	6 × 1			6		八十郎
269	〃	中畑	7 × 6		1	12		市郎右衛門
270	〃	下畑	5 × 5			25		仁右衛門
271	〃	上畑	5 × 5			25		与惣左衛門
272	〃	上畑	7 × 2			14		仁兵衛
273	〃	上畑	7.5× 4		1			弥五左衛門
274	屋敷添	上畑	12 × 8		3	6		仁右衛門
275	〃	上畑	17 ×11		6	7		三郎右衛門
276	〃	上畑	18 × 6		3	18		与惣左衛門
277	〃	上畑	17 × 4		2	8		伊左衛門
278	〃	上畑	13 ×11		4	23		伝十郎
279	〃	中畑	7 × 7		1	19		作蔵
280	屋敷添	上畑	19 × 4			2	16	作蔵
281	〃	上畑	11 × 7			2	17	重右衛門
282	〃	上畑	14 × 3			1	12	佐五右衛門
283	〃	上畑	13 ×11			4	23	〃
284	〃	上畑	13 × 6.5			2	24	仁左衛門
285	〃	上畑	7 × 3				21	市郎右衛門
286	〃	上畑	14 × 4			1	26	久四郎
287	〃	上畑	5 × 3				15	仁右衛門
288	〃	上畑	27 ×18		1	6	6	杢左衛門
289	〃	上畑	4 × 1				4	久右衛門
290	〃	上畑	14 ×10			4	20	市郎右衛門
291	かけはた	下畑	6 × 4				24	重右衛門
292	〃	下畑	8 × 8			2	4	門右衛門
293	〃	下畑	7 × 4				28	三左衛門
294	〃	下畑	6 × 5			1		五治右衛門
295	〃	下畑	6 × 3				18	三左衛門
296	〃	下畑	12 × 4			1	18	〃
297	〃	下畑	10 × 7			2	10	佐五兵衛
298	〃	中畑	10 × 4			1	10	源右衛門
299	屋敷添	中畑	3 × 3				9	唯念寺
300	〃	中畑	6 × 4				24	門右衛門
301	かけはた	中畑	9 × 8			2	12	弥五左衛
302	屋敷添	中畑	8 × 8			2	4	久右衛門
303	〃	中畑	6 × 2				12	五郎兵衛
304	〃	上畑	8 × 3				24	仁左衛門
305	かけはた	上畑	8 × 4			1	2	伊左衛門
306	〃	上畑	8 × 7			1	26	三郎右衛門
307	〃	上畑	7 × 4				28	唯念寺
308	〃	中畑	6 × 6			1	6	重右衛門
309	〃	中畑	9 × 4			1	6	五郎兵衛
310	〃	中畑	8 × 4			1	2	伝十郎
311	〃	中畑	8 × 7.5			2		佐五兵衛
312	〃	中畑	9 × 7			2	3	仁右衛門
313	〃	中畑	13 ×10			4	10	五治右衛門
314	〃	中畑	17 ×15			8	15	与惣兵衛
315	〃	中畑	7 × 4				28	五治右衛門
316	屋敷添	上畑	14 ×11			5	4	儀左衛門
317	〃	上畑	8 × 7			1	26	久四郎
318	〃	上畑	9 × 9			2	21	源右衛門
319	〃	中畑	16 ×14			7	14	治左衛門
320	〃	上畑	16 × 4			2	4	七郎兵衛

番号	地名	等級	間数	面積	名請人	番号	地名	等級	間数	面積	名請人
				町 反 畝 歩						町 反 畝 歩	
321	家敷添	上 畑	30 ×11	1 1	門右衛門	362	切 石	下 畑	8 × 6	1 18	仁右衛門
322	〃	上 畑	20 ×10	6 20	権左衛門	363	〃	下 畑	10 × 7	2 10	作 蔵
323	〃	中 畑	7 × 7	1 19	重右衛門	364	〃	下 畑	10 × 9	3	伝十郎
324	かけはた	中 畑	13 × 6	2 18	与惣左衛門	365	〃	下 畑	20 × 8	5 10	治左衛門
325	〃	中 畑	6 × 3	18	五治右衛門	366	〃	下 畑	10 × 9	3	七郎兵衛
326	〃	中 畑	10 × 8	2 20	佐五兵衛	367	〃	下 畑	11 ×10	3 20	〃
327	〃	中 畑	6 × 4	24	源右衛門	368	〃	下 畑	10 ×10	3 10	儀左衛門
328	〃	中 畑	8 × 5	1 10	七郎兵衛	369	〃	下 畑	10 × 8	2 20	久四郎
329	〃	中 畑	11 × 8	2 28	治左衛門	370	〃	下 畑	8 × 5	1 10	治左衛門
330	〃	中 畑	9 × 7	2 3	七郎兵衛	371	〃	下 畑	16 ×15	8	源右衛門
331	〃	中 畑	12 ×11	4 12	儀左衛門	372	〃	下 畑	7 × 6	1 12	治左衛門
332	〃	上 畑	20 × 7.5	5	久四郎	373	〃	下 畑	4 × 1	4	門右衛門
333	〃	上 畑	12 × 8	3 6	与惣左衛門	374	かけはた	下 畑	3 × 1	3	唯念寺
334	〃	上 畑	12 ×12	4 24	五治右衛門	375	〃	下 畑	4 × 1	4	久右衛門
335	〃	上 田 (畑か?)	13 × 6	2 18	与惣左衛	376	中川原	下 畑	12 × 2	24	市郎右衛門
336	〃	上 田 (畑か?)	26 ×16	1 3 26	久四郎	377	〃	下 畑	21 × 6.5	4 16	与惣左衛門
337	〃	上 田 (畑か?)	22 ×12	8 24	門右衛門	378	〃	下 畑	25 × 2	1 20	杢左衛門
338	〃	上 田 (畑か?)	16 × 8	4 8	五郎兵衛	379	とうりん	中 畑	18 × 7	4 6	仁右衛門
339	〃	中 畑	24 ×16	1 2 24	儀右衛門	380	〃	中 畑	13 ×10.5	4 16	権左衛門
340	〃	中 畑	8 × 8	2 4	与惣左衛門	381	風 吹	上 畑	16 ×13	6 28	弥惣右衛門
341	〃	下 畑	15 × 3	1 15	久四郎	382	〃	上 畑	6 × 5.5	1 3	三左衛門
342	〃	中 畑	12 ×10	4	伝十郎	383	〃	上 畑	7 × 5.5	1 8	権左衛門
343	〃	中 畑	18 × 4	2 12	弥右衛門	384	〃	上 畑	9 × 5.5	1 19	伝十郎
344	〃	下 畑	10 × 4	1 10	儀左衛門	385	〃	上 畑	12 × 6.5	2 18	治左衛門
345	寺かた	中 畑	12 × 5	2	三郎右衛門	386	〃	上 畑	9 × 8	2 12	与惣左衛門
346	かけはた	下 畑	4 × 3	12	儀左衛門	387	〃	上 畑	10 ×10	3 10	儀左衛門
347	〃	中 畑	7 × 3	21	源右衛門	388	〃	上 畑	8 × 5	1 10	伝右衛門
348	〃	中 畑	8 × 6	1 18	五郎兵衛	389	かけ下	下 畑	4 × 2	8	〃
349	〃	中 畑	7 × 6	1 12	弥右衛門	390	風 吹	上 畑	16 × 5.5	2 28	弥治右衛門
350	切 石	下 畑	15 × 7	3 15	三五兵衛	391	〃	上 畑	9 × 8	2 12	源 助
351	〃	中 畑	24 ×15	1 2	弥五左衛門	392	〃	上 畑	8.5× 6.5	1 25	半四郎
352	〃	下 畑	10 × 8	2 20	五郎兵衛	393	〃	上 畑	9 × 2.5	22	七右衛門
353	〃	下 畑	5 × 4	20	佐五兵衛	394	〃	上 畑	9 × 4.5	1 10	弥治右衛門
354	かけはた	中 畑	12 ×12	4 24	久四郎	395	〃	上 畑	5 × 3	15	孫右衛門
355	〃	中 畑	15 ×10	5	儀左衛門	396	〃	上 畑	6 × 2.5	15	治郎右衛門
356	切 石	下 畑	8 × 1	8	源右衛門	397	〃	上 畑	10 × 8	2 20	七右衛門
357	〃	下 畑	5 × 4	20	佐五兵衛	398	〃	上 畑	11 × 5	1 25	吉右衛門
358	〃	下 畑	12 × 4	1 18	五治右衛門	399	〃	上 畑	10 × 5.5	1 25	弥治右衛門
359	大 宮	下 畑	6 × 6	1 6	門右衛門	400	〃	上 畑	3 × 2	6	市右衛門
360	切 石	下 畑	17 × 9	5 3	治左衛門	401	〃	上 畑	8 × 6	1 18	伝兵衛
361	〃	下 畑	8 × 6	1 18	三郎右衛門	402	〃	上 畑	5 × 4.5	22	半四郎

番号	地名	等級	間数	面積	名請人
				町 反 畝 歩	
403	風吹	上 畑	10 × 6	2	源助
404	〃	上 畑	8.5× 4	1 4	市右衛門
405	〃	上 畑	18 × 8	4 24	善右衛門
406	〃	上 畑	18 × 4	2 12	伝兵衛
407	〃	上 畑	6 × 4	24	九郎右衛門
408	〃	上 畑	10 × 3.5	1 5	孫右衛門
409	〃	上 畑	6.5× 5	1 2	七右衛門
410	〃	上 畑	6 × 4.5	27	吉右衛門
411	〃	上 畑	12 × 6.5	2 18	孫右衛門
412	〃	上 畑	7 × 4	28	七右衛門
413	〃	上 畑	6 × 5.5	1 3	孫右衛門
414	〃	上 畑	7.5× 6	1 15	権太郎
415	〃	上 畑	6 × 5	1	市右衛門
416	すみ畑	下 畑	5 × 4	20	源四郎
417	石原畑	下 畑	5 × 2	10	作左衛門
418	風吹	上 畑	4 × 3	12	吉右衛門
419	〃	上 畑	5 × 2	10	七右衛門
420	〃	上 畑	16 × 6	3 6	弥治右衛門
421	小泉	中 畑	14 × 2	28	源助
422	十二畑	中 畑	11 × 8	2 28	〃
423	〃	中 畑	4 × 2.5	10	三右衛門
424	〃	中 畑	16 ×13	6 28	九右衛門
425	〃	中 畑	10 × 3	1	弥治右衛門
426	〃	中 畑	14 × 5	2 10	三右衛門
427	〃	中 畑	7 × 3	21	市左衛門
428	〃	中 畑	10 × 3	1	七右衛門
429	〃	中 畑	8 × 3	24	平兵衛
430	〃	中 畑	3 × 2	6	作右衛門
431	〃	中 畑	6 × 5	1	伊左衛門
432	〃	中 畑	12.5× 8	3 10	平兵衛
433	〃	中 畑	7 × 2	14	三右衛門
434	〃	中 畑	6 × 5.5	1 3	〃
435	〃	中 畑	6 × 3	18	佐五右衛門
436	〃	中 畑	4 × 2	8	七右衛門
437	〃	中 畑	7 × 3.5	24	伊左衛門
438	〃	中 畑	4 × 2	8	三右衛門
439	〃	下 畑	5 × 2	10	治郎右衛
440	〃	下 畑	10 × 2.5	25	三右衛門
441	〃	下 畑	10 × 2	20	惣左衛門
442	〃	下 畑	12 × 3	1 6	治兵衛
443	〃	下 畑	10 × 2.5	25	惣左衛門
444	十二畑	中 畑	8 × 5	1 10	三右衛門
445	〃	中 畑	10 × 2	20	治郎右衛門
446	〃	下 畑	9 × 2	18	市左衛門
447	寺前	中 畑	10 × 4.5	1 15	三右衛門
448	〃	中 畑	5 × 4	20	平兵衛
449	〃	中 畑	5 × 2	10	三右衛門
450	〃	中 畑	7 × 3	21	作右衛門
451	かにか沢	下 畑	5 × 4	20	伊左衛門
452	〃	中 畑	7 × 4	28	蒔右衛門
453	〃	中 畑	4 × 3.5	14	治郎右衛門
454	〃	中 畑	7 × 3	21	三右衛門
455	〃	中 畑	3 × 3	9	治郎右衛門
456	〃	中 畑	13 × 4	1 22	三右衛門
457	〃	中 畑	12 × 3	1 6	九右衛門
458	〃	下 畑	12 × 2	24	三右衛門
459	〃	下 畑	12 × 8	3 6	三五右衛門
460	〃	下 畑	4 × 2	8	伊左衛門
461	寺前	下 畑	6 × 5	1	弥治右衛門
462	〃	下 畑	5 × 4	20	九右衛門
463	〃	下 畑	8 × 4	1 2	三右衛門
464	〃	下 畑	10 × 1.5	15	惣左衛門
465	〃	下 畑	7 × 1.5	10	三右衛門
466	〃	下 畑	4.5× 4	18	平兵衛
467	〃	下 畑	9 × 4	1 6	九右衛門
468	〃	中 畑	10 × 9	3	弥惣右衛門
469	屋鋪裏	上 畑	12 × 6	2 12	九右衛門
470	うら畑	上 畑	4 × 3	12	三右衛門
471	〃	中 畑	8 × 7	1 26	〃
472	かにか沢	中 畑	6 × 4	24	三左衛門
473	〃	中 畑	5 × 2	10	三右衛門
474	坂の根	中 畑	6 × 3	18	伊左衛門
475	風吹	中 畑	4 × 3	12	惣左衛門
476	〃	中 畑	11 × 5	1 25	〃
477	〃	中 畑	9 × 4	1 6	治郎右衛門
478	〃	中 畑	7 × 6.5	1 15	市左衛門
479	〃	中 畑	4.5× 4	18	伊左衛門
480	〃	中 畑	6 × 4.5	27	弥治右衛門
481	〃	中 畑	12 × 5.5	2 6	市左衛門
482	〃	中 畑	6 × 6	1 6	弥治右衛門
483	〃	中 畑	9.5× 6	1 27	権太郎
484	〃	中 畑	5 × 4	20	市左衛門

番号	地名	等級	間数	面積 町 反 畝 歩	名請人
485	風吹	中畑	10 × 1	10	関右衛門
486	〃	中畑	19 ×16	1 4	佐五右衛門
487	〃	中畑	12 × 6	2 12	弥治右衛門
488	〃	中畑	10 × 2.5	25	七右衛門
489	〃	中畑	14 × 2	28	吉右衛門
490	〃	中畑	5 × 3.5	17	〃
491	〃	中畑	3 × 2	6	七右衛門
492	〃	中畑	22 × 6	4 12	伝兵衛
493	〃	中畑	8 × 3	24	半四郎
494	〃	中畑	6.5× 5	1 2	九右衛門
495	〃	中畑	6 × 5	1	市左衛門
496	〃	中畑	8.5× 5	1 12	佐五右衛門
497	川端	下畑	14 × 2.5	1 5	伝四郎
498	風吹	中畑	18 × 5.5	3 9	孫右衛門
499	〃	中畑	8.5× 7	1 29	伝四郎
500	〃	中畑	12 × 8	3 6	惣左衛門
501	〃	中畑	8 × 7	1 26	権太郎
502	川端	下畑	12 × 2	24	市郎右衛門
503	中川原	下畑	8 × 8	2 4	〃
504	〃	下畑	8 × 3	24	八十郎
505	〃	下畑	22 × 3	2 6	〃
506	〃	下畑	18 × 5	3	市郎右衛門
507	〃	下畑	9 × 2	18	与惣左門
508	〃	下畑	4 × 2	8	八十郎
509	〃	下畑	14 ×11	5 4	与惣左衛門
510	〃	下畑	6 × 2	12	市郎右衛門
511	風吹	中畑	13 × 6.5	2 24	市右衛門
512	〃	中畑	7 × 4	28	権太郎
513	〃	中畑	4 × 3	12	角右衛門
514	野畑	中畑	6 × 6	1 6	勘兵衛
515	〃	中畑	8 × 7	1 26	作左衛門
516	手のこうし下	下畑	6 × 6	1 6	作右衛門
517	屋敷添	上畑	5 × 4.5	22	善右衛門
518	〃	上畑	8.5× 6	1 21	源四郎
519	北蒲	上畑	10 × 6	2	吉右衛門
520	〃	上畑	12 × 4.5	1 24	源助
521	〃	上畑	7 × 5	1 5	孫右衛門
522	〃	上畑	10 × 6	2	九郎右衛門
523	家の前	上畑	6 × 5.5	1 3	市右衛門
524	南浦	上畑	5 × 4	20	孫右衛門
525	屋敷前	上畑	13 × 6	2 18	善右衛門
526	屋敷前	上畑	15 × 8	4	弥治右衛門
527	十二天	下畑	5 × 3	15	伊左衛門
528	屋鋪裏	上畑	9.5× 4	1 8	角右衛門
529	〃	上畑	6 × 3.5	21	伝右衛門
530	〃	上畑	5 × 3	15	伝兵衛
531	〃	上畑	6 × 4	24	弥治右衛門
532	〃	上畑	8 × 6	1 18	源助
533	〃	上畑	16 × 9	4 24	伝兵衛
534	〃	上畑	16 × 8.5	4 16	茂助
535	よこひ	上畑	13.5×10	4 15	勘兵衛
536	〃	上畑	13 ×10	4 10	九郎右衛門
537	とや	下畑	4 × 4	16	〃
538	〃	中畑	10 × 3	1	作兵衛
539	〃	中畑	16 ×12	6 12	庄左衛門
540	野田	中畑	21 × 9.5	6 19	〃
541	〃	中畑	5 × 4	20	与治右衛門
542	〃	中畑	14 ×12	5 18	作右衛門
543	〃	中畑	18 × 7.5	4 15	弥惣右衛門
544	〃	中畑	10 × 8	2 20	与治右衛門
545	〃	中畑	15.5×15	7 22	治兵衛
546	下原	中畑	13 ×10	4 10	弥惣右衛門
547	〃	中畑	13 × 8.5	3 20	伝兵衛
548	〃	中畑	13 × 8.5	3 20	与治右衛門
549	くね添	中畑	13 ×13	5 19	伝兵衛
550	下原	中畑	16 ×14	7 22	与治右衛門
551	〃	中畑	8.5× 6	1 21	弥惣右衛門
552	〃	下畑	16 × 5	2 20	伝兵衛
553	〃	下畑	13 × 7	3 1	与茂助
554	〃	下畑	5.5× 4.5	25	九郎左衛門
555	〃	下畑	8 × 5	1 10	勘兵衛
556	〃	下畑	13 × 6	2 18	弥惣右衛門
557	〃	下畑	6 × 1	6	治兵衛
558	〃	下畑	9 × 5	1 15	源助
559	〃	下畑	5 × 4	20	伝兵衛
560	〃	下畑	13.5×13	5 25	文右衛門
561	〃	下畑	5 × 4	20	半四郎
562	〃	下畑	11 × 4	1 14	作左衛門
563	〃	下畑	12.5×10	4 5	作右衛門
564	〃	下畑	3 × 3	9	市右衛門
565	〃	下畑	11 × 5.5	2	庄左衛門
566	〃	下畑	10 × 4	1 10	与茂助

番号	地名	等級	間数	面積 町 反 畝 歩	名請人
567	下原	下畑	12 ×11	4 12	九郎右衛門
568	〃	下畑	12 × 4	1 18	作右衛門
569	〃	下畑	10 × 3	1	伝兵衛
570	〃	下畑	20 × 7	4 20	勘兵衛
571	〃	下畑	14 × 6	2 24	弥治右衛門
572	〃	下畑	20 × 8	5 10	伝兵衛
573	〃	下畑	12 × 8	3 6	〃
574	〃	下畑	13 ×13	5 19	〃
575	〃	下畑	7.5× 6	1 15	勘兵衛
576	〃	下畑	13 × 6.5	2 24	庄左衛門
577	〃	下畑	15 × 8	4	作左衛門
578	〃	下畑	12.5× 6	2 15	角右衛門
579	〃	下畑	10 × 5	1 20	作右衛門
580	〃	下畑	13 × 3.5	1 15	源四郎
581	〃	下畑	8 × 5	1 10	権太郎
582	〃	下畑	8 × 7	1 26	市右衛門
583	〃	下畑	6 × 4	24	権太郎
584	〃	下畑	6 × 4	24	与治右衛門
585	〃	下畑	5 × 2	10	市右衛門
586	〃	下畑	5 × 2	10	与治右衛門
587	五りん林	中畑	16 × 6	3 6	権左衛門
588	〃	下畑	7 × 5	1 5	門右衛門
589	〃	下畑	9 × 7	2 3	八十郎
590	〃	下畑	24.5× 8.5	6 28	市郎右衛門
591	〃	下畑	9 × 5	1 15	八十郎
592	〃	下畑	10 × 8.5	2 25	門右衛門
593	〃	下畑	9 × 6	1 24	五右衛門
594	〃	下畑	14 × 6	2 24	佐五兵衛
595	〃	下畑	12 × 6	2 12	市郎左衛門
596	〃	下畑	10 × 9	3	〃
597	〃	下畑	10 ×10	3 10	門右衛門
598	〃	下畑	10 × 9.5	3 5	市郎左衛門
599	くね添	下畑	11 ×10.5	3 25	久四郎
600	〃	下畑	14 × 9	4 6	杢左衛門
601	〃	下畑	8 × 6	1 18	久右衛門
602	〃	下畑	8 × 2	16	重右衛門
603	〃	下畑	8.5× 6	1 21	久四郎
604	〃	下畑	14 ×11	5 4	与惣左衛門
605	〃	下畑	6 × 4	24	五治右衛門
606	〃	下畑	16 ×10	5 10	権左衛門
607	〃	下畑	24 ×10	8	久右衛門
608	くね添	下畑	21.5×16.5	1 1 14	与惣左衛門
609	〃	中畑	11 ×10	3 20	佐五兵衛
610	〃	中畑	14 × 8.5	3 29	久四郎
611	〃	下畑	12 × 7.5	3	久右衛門
612	〃	下畑	12 × 8	3 6	権左衛門
613	〃	下畑	16 × 6	3 6	門右衛門
614	〃	下畑	18 × 6.5	3 27	権左衛門
615	〃	下畑	14 ×13	6 2	佐五兵衛
616	〃	下畑	12.5× 7.5	3 4	重右衛門
617	〃	下畑	10 × 9	3	佐五兵衛
618	〃	下畑	10 × 3	1	重右衛門
619	〃	下畑	17 ×11.5	6 15	長右衛門
620	〃	下畑	10 × 4.5	1 15	重右衛門
621	〃	下畑	9 ×8	2 12	仁右衛門
622	〃	下畑	10 × 9.5	3 5	市郎左衛門
623	〃	下畑	10 × 6	2	仁右衛門
624	〃	下畑	17 × 4	2 8	仁左衛門
625	〃	下畑	12 ×10	4	市郎左衛門
626	〃	下畑	12 × 6.5	2 18	重右衛門
627	〃	下畑	12 × 6	2 12	仁左衛門
628	〃	下畑	8 × 6.5	1 22	三郎右衛門
629	〃	下畑	18 ×13	7 24	仁右衛門
630	〃	下畑	9 × 8	2 12	〃
631	〃	下畑	16 × 8	4 8	佐五兵衛
632	〃	下畑	19 × 8.5	5 11	重右衛門
633	〃	下畑	12 × 9	3 18	長右衛門
634	丸山	下畑	10 × 7.5	2 15	杢左衛門
635	くね添	下畑	11 × 8.5	3 3	治左衛門
636	〃	下畑	18 × 8.5	5 3	門右衛門
637	〃	下畑	14.5× 8	3 26	五郎兵衛
638	〃	下畑	18 ×10	6	五右衛門
639	〃	下畑	10 × 8	2 20	久四郎
640	西切石	下畑	8 × 8	2 4	七郎兵衛
641	〃	下畑	16 ×12	6 12	〃
642	小丸山	下畑	22 ×21.5	1 5 23	五郎兵衛
643	〃	下畑	15 × 7.5	3 22	〃
644	くね添	下畑	23 × 6.5	4 29	作蔵
645	〃	下畑	14 ×14	6 16	治左衛門
646	〃	下畑	6 × 6	1 6	作蔵
647	中新田	下畑	10 × 8	2 20	仁右衛門
648	丸山	下畑	12 × 4.5	1 24	五郎兵衛

番号	地名	等級	間数	面積	名請人
				町 反 畝 歩 四捨五入	
649	丸山	下畑	26 × 7	6 2	儀左衛門
650	〃	下畑	16 × 6	3 6	与惣左衛門
651	〃	下畑	8 × 6	1 18	唯念寺
652	〃	下畑	6 × 5	1	五左衛門
653	大宮	下畑	20 × 6	4	儀左衛門
654	〃	下畑	19 ×15	9 15	仁右衛門
655	〃	下畑	6 × 6	1 6	五郎兵衛
656	〃	下畑	9.5× 3.5	1 3	源四郎
657	〃	下畑	11 × 9.5	3 14	久四郎
658	〃	下畑	4 × 4	16	唯念寺
659	〃	下畑	4 × 1	4	〃
660	下原	下畑	10 × 7	2 10	弥次右衛門
661	〃	下畑	26 × 9	7 24	市右衛門
662	大宮	下畑	9 × 5.5	1 19	三左衛門
663	〃	下畑	14 × 6	2 24	〃
664	〃	下畑	8 × 6	1 18	仁右衛門
665	切石	下畑	16 × 9	4 24	長泉寺（真言宗）
666	〃	下畑	14 × 7	3 8	〃
667	〃	下畑	60 × 27	5 4	〃
668	大宮	下畑	12 × 7	2 24	唯念寺
				反 畝 歩 四捨五入	
669		屋敷	20.5×12	8 6 69	杢左衛門
670		〃	9 × 8	2 12 38	治兵門
671		〃	10 × 7	2 10	九郎左衛門
672		〃	32 ×12	1 3 93	弥惣右衛門
673		〃	14 × 6	2 24 44	庄左衛門
674		〃	16 ×11	5 26 58	与茂助
675		〃	15 ×12	6 58	三左衛門
676		〃	16 × 7	3 22 50	久右衛門
677		〃	11 × 8	2 28 42	弥五左衛門
678		〃	10 × 6	2 36	〃
679		〃	13 ×10	4 10 50	八十郎
680		〃	11 × 6	2 6 38	五右衛門
681		〃	10 × 6	2 36	源四郎
682		〃	14 ×13	6 2 58	儀左衛門
683		〃	21 ×13	9 3 72	五郎兵衛
684		〃	10 × 8	2 20 40	五治右衛門
685		〃	8 × 6	1 18 32	与兵衛
686		〃	12 × 6	2 12 40	伝十郎
687		〃	12 × 6	2 12 40	作蔵

番号	地名	等級	間数	面積	名請人
				反 畝 歩 四捨五入	
688		屋敷	12 × 8	3 6 44	重右衛門
689		〃	14 ×14	6 16 60	佐五兵衛
690		〃	18 × 5	3 50	治左衛門
691		〃	12 ×10	4 48	門右衛門
692		〃	10 × 9	3 42	権左衛門
693		〃	16 × 6	3 6 48	惣左衛門（久四郎名子後家）
694		〃	27 ×11	9 27 80	市郎右衛門
695		〃	10.5× 8	2 14 41	九右衛門
696		〃	12 ×10	4 48	三右衛門
697		〃	6 × 6	1 6 28	平兵衛
698		〃	10 × 8	2 20 40	三五右衛門
699		〃	8 × 8	2 4 36	伊左衛門
700		〃	8 × 7	1 26 34	治郎右衛門
701		〃	13 ×13	5 19 56	市左衛門
702		〃	25 ×20	1 6 20 94	弥治右衛門
703		〃	15.5×15	7 22 65	源四郎
704		〃	10 × 7	2 10 38	市右衛門
705		〃	9 × 7	2 3 36	権太郎
706		〃	14.5× 8	3 26 49	作左衛門
707		〃	30 ×10	1 84	弥右衛門
708		〃	12 × 6	2 12 40	吉右衛門
709		〃	8 × 6	1 18 32	勘兵衛
710		〃	8 × 8	2 4 36	伝兵衛
711		〃	7 × 5	1 5 28	角右衛門
712		〃	15 × 7	3 15 48	七右衛門
713		〃	8 × 6	1 18 32	伝右衛門
714		〃	10 × 6.5	2 5 37	善右衛門
715		〃	14 ×13	6 2 58	源助
716		〃	6 × 5	1 26	半四郎
717		〃	6 × 4	24 24	伝兵衛
718		〃	12 × 6.5	2 18 41	文右衛門
719		〃	14 × 6	2 24 40	弥惣右衛門
720		〃	9 × 9	2 21 40	佐之助
721		〃	9 × 5	1 15 32	三郎右衛門
722		〃	28 ×10	9 10 80	源右衛門
723		〃	24 ×18	1 4 12 88	久四郎
724		〃	14 × 9	4 6 50	仁右衛門
				畑＋屋敷 町 反 畝 歩	
小計				14 6 8 24	

等級	面積	分米	租率	備考
	町 反 畝 歩	石 斗 升 合		
上田	18 3 24	238 4	13	古検なし
中田	22 3 23	245 3 8 4	11	〃
下田	21 3 9 23	192 5 7 9	9	〃
下々田	6 3 21	5 9 6	8	〃
a (小計)	62 6 5 1	681 6 3		
上畑	2 5 15	16 2 8 3	6.5	古検なし
中畑	2 9 16	11 6 2 1	4	〃
下畑	6 8 9 28	18 6 2 8	2.7	〃
屋敷	2 3 7 25	15 4 5 9	6.5	〃
b (小計)	14	61 9 9 1		
A 計	77 3 3 25	743 5 4		(a＋b)
(外		267 4 2 1		新高減)※
d 漆木	本 1			弥惣右衛門
	1			弥次右衛門
	4			源四郎
	1			孫右衛門
	4			七右衛門
	2			伝兵衛
c (小計)	13	6 5	5分/10本	
雑木山	間 間 町 600×50 10	3	3分/1町	村中
草山	此山場広故不及検地			〃
d (小計)		6 2 3		
B 計		6 8 8		(c＋d)
総計		743 7 4 2		(A＋B)

※ハリ紙

地名	等級	間数	面積	名請人	備考
			町 反 畝 歩		
大宮	下田	30×8	8(畝か?)	浄土真宗 唯念寺	高7斗2升
〃	屋敷	23×14.5	1 1 3	〃	
中新田	芝原	24×9	7 6	村中	牛馬飼場
下原	芝原	70×29	6 7 20	〃	
〃	芝原	100×23	7 6 20	〃	
〃	芝原	105×10	3 5	〃	
大宮	芝原	20×12	8	権左衛門	不成作場
すきの木原	芝原	21×14	9 24	作蔵・伝十郎	
立石	芝原	12×4	1 18	源四郎	

別表　2　斐太地区天和３年検地帳地名一覧

（金子以策編）

雪森村	そりた、つかた、八十かり、さわた、あれた、くほた、ひろめ、すなた、い下、一つ原田、庄右衛門田、松の木、えはた、松原田、きんたい、五拾かり、文助田、すなとひた、次郎左衛門田、やち、のあれ、石とび、石蔵、こしき、ささや、小兵衛田、よこにし田、のら田、やち田、ひやけ田、ゑそへ、水こみ、かこい、ふちめん、みすまた、竹のはな、中川原、こしまい、かけのこり、下川原田、五合分田、上川原、川はた、川原、しほからた、助四郎、ひけ田、畑田、上沢田、道はた、はんちやう、すた、天道田、八枚田、もち田、とぶ、屋敷添、世原、道下、砂原、しみはた、清水はた、うほの子田、ひとろ田、北沢田、にかいた、北田、くねそへ、岡宿新田、田そい、方岡（かたおか）畑、方岡、うら畑、屋敷下、十二屋敷、おたて
宮内村	土口、六枚田、ぶたい田、沢田、地作田、わたなへ、すし塚、鳥追田、大田、ぢんばいおき、壱枚田、屋敷田、装束免、的場、からこでん、にわか山、にしやうでん、地田、こしまへ、あぶらでん、どぶ、平田、五反田、二枚田、河原田、たたみ田、砂田、下河原、まめ田、江またき、かうのし田、山作、どぐち、かにはし、清水田、弐枚田、若宮田、三枚田、石くら、屋敷添、かた岡、苗代場、かね塚、さきの木、助右衛門畑、木下、菅沢、北畑、平畑、三角田、久保田、坂口、寺屋敷、山岸、石原田　あまいけ口、小田切屋敷、鳥井沢、やしき道、からこめん、えぼしめん、山口、十王堂、そり河原、
十日市村	ぶたい、ぶたい河原、石蔵、まいた、家下、南田、川押田、西松の木、水尻、松の木、砂田、なかれ田、古屋鋪、中川原、柳田、沢田、柳原、山道下、道上、川原田、前川原、上河原、こしまい、家そい、そて河原、し水田、ほてら町、石原田、下長田、長田、西河原、すわの木、すな原、清水か久保、てんとう田、おちあい田、高橋明田、みやうどうし、田の神明、せと田、与四郎田、そて久保、しをり田、屋ち田、うら田、えはた、ばしやう、みやうとうし、くわん音めん、神明田、道下、そてはた、ちやはた、砂はた、牛かくほ、下ほてら町、みなみ、下長田、みな口はた、てんとうはた、古屋敷、なかれ畑、柳畑、かきの木下、そて屋敷、
	家浦、屋敷そい、土井の内、寺屋敷、新田畑、
籠町村	うちかわ、石田、すな田、ありこてん、くつかた、たて田、しそ田、やくしとう免、みのうた、十二てん、内川田、あなた、三反田、まん沢、くねそへ、ほまち、小林田、うした、塚田、八まん田、かち田、とうせい、ひろ田、清水田、前田、よの木町田、そり田、川原田、清水いて、川原田うへ、五反田、次左衛門田、こしまい田、久保田、治左衛門田、つく田、柳の町、北田、川はた、屋敷そへ、林田、うら田、やしき田、あふら免、ひろ田町、始田、ひろまち、かもくり田、くのち、沢田、ぢい田、大つか、のくろ田、ふりやめん、東こし、前の畑、町うら、わき畑、なかちう、川原、ふかまち、かつほ田、大な田、畑田、まん五郎、てんとう、てんとう畑田、さめかはな、新林、屋敷田、えんのし、八まんはた、道下、にうは、なかはた、うらはた、林くろ、たての次、くねそて、みなみ畑、内くね、屋敷内、宮の前、たての内、たいつさき、くねの内、まへ畑、北畑、外畑、五反田、ゑんの地、山くろ、ふとうやしき、すみ畑、ふたい、わき畑、北うら、蔵屋敷、大門さき」天神堂、小原畑、八幡畑、もとやしき、長坂口」長坂口上、滝の入、いもいけ、山のこし、滝のまへ、くらの袖、さかのはな、えの木ひら、新林、ます沢内、ならまたくち、へんのう、蔵のまへ
梨木村	こうし田、五反田、三十かり、水なし田、とよすみ、えひす田、五合田、前田、北田、きわのきた、みやうえん、えの木まち、川原田、川原、まりはり、のくろ、なか（中）た、三木松、久保田、成（なり）沢、山崎田、はしこた、なかぢやうだ、馬いらず、川はた、まん五郎、かはらけめん、なかの、清水田、とよすみ、せんくわん、えぼし山、大ひどろ、かも、かもつる、よこまくり、清水出、四百がり、まちばり、なかちら田、松ノ木田、中の田、てんとう、いし（石）なはたけ、なはたけ、石田、上とよすみ、山のこし、のはつれ、中み、水しり、てんとう前田、くねの内、屋敷内、ひろめ沢、宮こし、うら畑、前畑、みやうえん、えばた、そで畑、三本松、道はた、外畑、江向、白わせ田、長田、清水端、沢田、長嶺、え丸、大塚
	屋ち田、大久保、山道山、くいそう田、一枚下り、

藤塚新田村	下の山道、水しり、木ノこえ、え畑、畑田、ない ま、つか田、いし橋、沢田、太左衛門田、をふ田、おこし田、道下、をし田、道端、大田、屋くわん田、そり田、江くち、はたば、三まい田、えはた、はしこ田、一枚田、長田、まかり田、五枚田、江丸、中道、孫左衛門田、ととめき、中之田、くいばた、道上、畑田、江道、苗場、一枚田、江違、江迎、江とつか、外くろ、どうさい、石橋、いせ田、ととめき、道下畑、高畑、そて田、くねそへ、くねそへ大畑、ひへ畑、ひへ畑下畑、下畑、そで畑、そでくね、屋ち畑、つか畑、西原、横畑、鷹野原、江端、屋ち原、新田畑、いすい、いすい田あと、屋敷畑、にやうば、南はたけ、野くろ、橋場、高見原、外くね、外くほ、
飛田新田村	いけ田、柳原、屋地田、中川原、道下、はるの木原（はりの木、はんの木）、やち田、おどり田、沢田、壱枚田、砂田、ひやけ田、わうさり、かに池、上川原、はたけ田、稲荷境、とび田、かいち田、四ツふち、明神田、河はた、すなはた、諏訪免、屋敷添、つるのこし、古川、
乙吉村	なか道、門川、とよ田、三反田、弐拾分、仏供免、河原、沢田、畑田、くつかけ場、横林、寺田、水尾、とつしやぶ、五枚田、とぶだ、前田、めくら渕、天道、ちやうち田、こしの平、水久保、やしやう免、七反田、とて下、石原、なが也、よしや町、道上、たての内、とてきは、北畑、せきはな、山ノ内、飯塚、とよ田、きとのはへ、いえつか、水窪、おく田、中島、地蔵院、坪内、角左衛門田、屋敷田、壱枚落、川原、かいねた、江川端、小もん、西中島、くね外、弥八かいと、やき端、うら畑、かけ残り、山こし、島畑、くねそへ、水おし、かく田、とふ、おとし、形部、ささや、きは、とてきを、くねそこ、もちの木、内河、六郎右衛門田、北うら、石原田、かじ田、一枚田、弐反田、七反田、六拾かり、かうく原、三枚田、五十かり、かけ残り、川原田、中島、北畑、前畑、道西畑、きとのはへ、よしの町、はし下、たて田、道田、四十かり、ひめ田、石田、屋敷の内、天神堂、南畑、鳴畑、畑直し、ふたい、南うら、大田細田、しやうし田、すみ田、なかおもて、大せきまち、石橋、右衛門田、くね添、山道上、山道下、ままの端、外畑、とつか、苗代田、女路田、こみ
飛田村	ちやう、五美の上、ちやう田、木の下、堂下、ひろみ沢、なか満
	あな田下、中ノはへ、へや田、もち田、もち田下、寺田、わたなへ屋敷、御所ノ木南また、御所ノ木、十二川ノ端、かいね田、八反田、石原田、江そへ、みのは田、天神田、北沖、大ぬけ田、大ぬけ田川端、といつめ、外ケ窪、袖ケくほ、かに池、あみた屋敷、えざし、上ノ切り、みな口、清水田、砂田、沢田、古めん、さいの神、きつね塚、弐枚田、廣町、あぶら田、大京、三枚田、欠ノ上、川原田、中ノ切、小田、大田、岡宿江はな、江さし、岡宿、塩から、ひはり田、壱枚田、立田、塚のこし、五枚田、まま上、ぬけ残り、ささら田、ささら田下、ささら田こし、くほ田、まま下、屋代下切り、屋代上切り、古川、上ノ川原、おく田、江端、赤条、中の切、とつら薮、八幡田、外ノ沢、江またぎ、五枚田、すみ田、三反田、越前、前田、万日、野黒、寺向、くわんおん田、矢嶋田、かぢ田、藤八明、ふけ田、おこし田、土ぶけ田、道下、石蔵、四ツおき田、茶畑ノ腰、居町川原、居町、ちぢれ木、江添、樋掛り、畠ケ田、どどめき、石河原、がけ下、御所の木下、樋詰、西光寺、苗代、家際、にう場、おく苗代、土ぶけ、四枚田、家ノ前、早稲田、越米田、牛がくび、外ケ窪、穴畑、みのわだ（和田）、みの和田下、大ねけノ下、樋詰下、南河端、あみだ屋敷、行人渕、中はた、大畑、古めん、さくら田下、観音堂、茶畑、ぬけま、道敷畑、漆畑、屋敷畑、井町河原、石原畑、西河原、中ノ島、ぬけ残り、まめ畑、西光寺堂ノ前、堂ノ南がけ下、堂ノ南がけ上、西光寺堂ノ前まま下、堂の南がけ上、
岡崎新田村	土井下、中川原、はたけ田、大がけ、四ツふち、三月田、かに池、すいとう、四月ふち（渕）、いなりさかい、屋敷畑、

明治４年村絵図地名一覧　（県教委編）

三俣村	屋敷田、前田、桜の下、やち田、悉ぼ田、いまち、どぶけ、石蔵、助五郎、代官田、山崎、道下、屋敷添、西の谷田、寺屋敷、とのこし、はんの田、のうけ、杉の木前田、こくろ、茶畑、荒田、めくろ田、杉ノ町、沢田、ほこ田、林西、河原、岡ノ屋敷、とふのつめ、脇畑、江ばた、との原、かけはた、立の内、とうの原、橋ノ内、古川、橋ノ内

三俣村	新田、松葉、川原、坂下、かのい川原、中河原、北河原、姥が腰、下かいど、三本木、柿ノ木田、下かい田、坂口、三角田、わせ田、越前、代官田、道下、はんば、西見田、越まき、前田つぼの内、つほの内、池田、北畑、屋敷添、脇ノ田、水尾、石原、ぶたい、巳丑田、一口坂、宮ノ辺、西畑、最新畑、源右衛門田、ほそ田、せほい田、くね花、二反田、宮ノ立、えり田、ほき塚、一ツ橋、下山、山ノ馬、山ノ越、北のり口、さぎの沢、しやうか塚、かのい川原、荷□、坂下、小障子、上かいど、沢井、どろの木下、はしこ田、寺田、ばんば、志		□□塚、をち田、八幡領、せほい町、北田、所新田、山ノ寺、三角畑、北口、最新田、五郎左衛門、崩新田、宮立、屋敷畑、畑ヶ田、河井、なでつき、万門、用宮、せすは、久保、かに沢、上ノ山、地蔵屋敷、島田、山口、前平、滝沢、滝沢新田、南はちき山下新田、ほつ田、山田、大平、池平、岩神、菅沼、菅沢、明光沢新田、神谷、登橋、山之神、はんか山登新畑、流濱くずき、由か平新畑、石高、石高新畑、元屋敷、袖うすかいし、いほし谷、石馬、場付、所新田、うすかいり、いもくずれ、新田、苧物、

別図　明治４年長森村絵図

右者当村耕地麁絵図面書上申処相違無御座候以上

明治四未年
五月日

民政
御役所

壱番組
長森村
（役）百性代　岡田伝七㊞
同　小林藤四郎㊞
組頭　宮腰治七㊞
庄屋　宮腰市郎治㊞

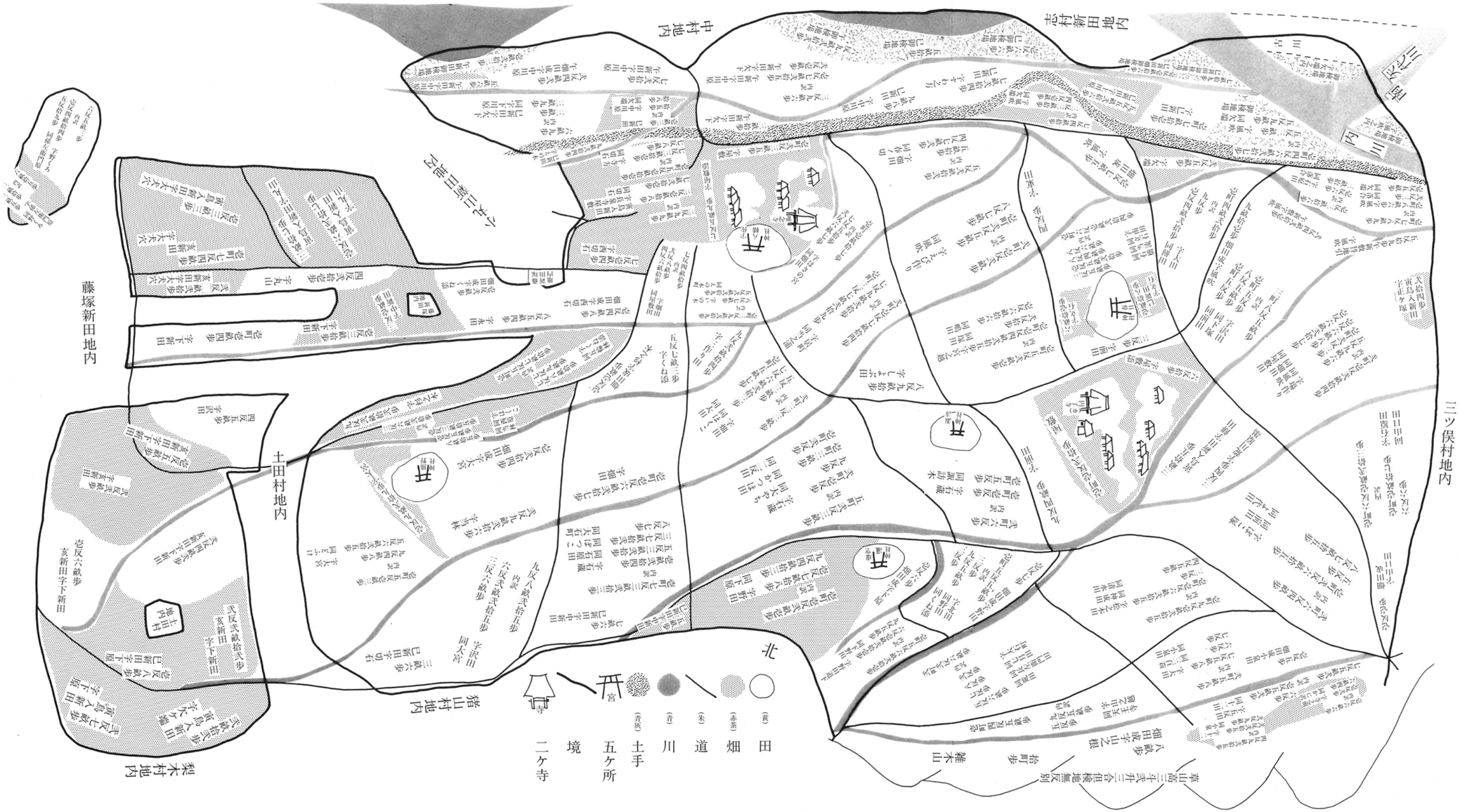
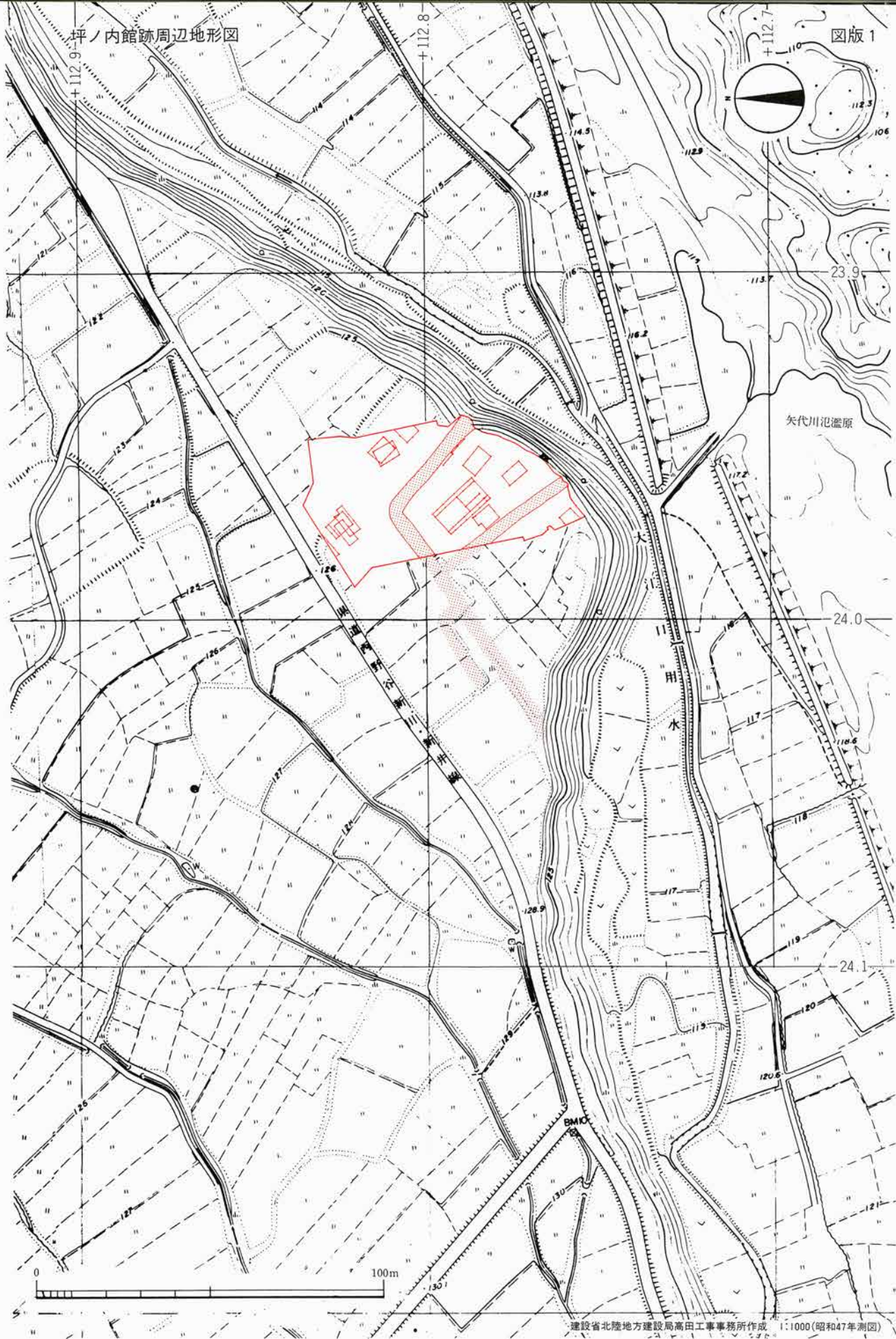


図　　版

凡　例

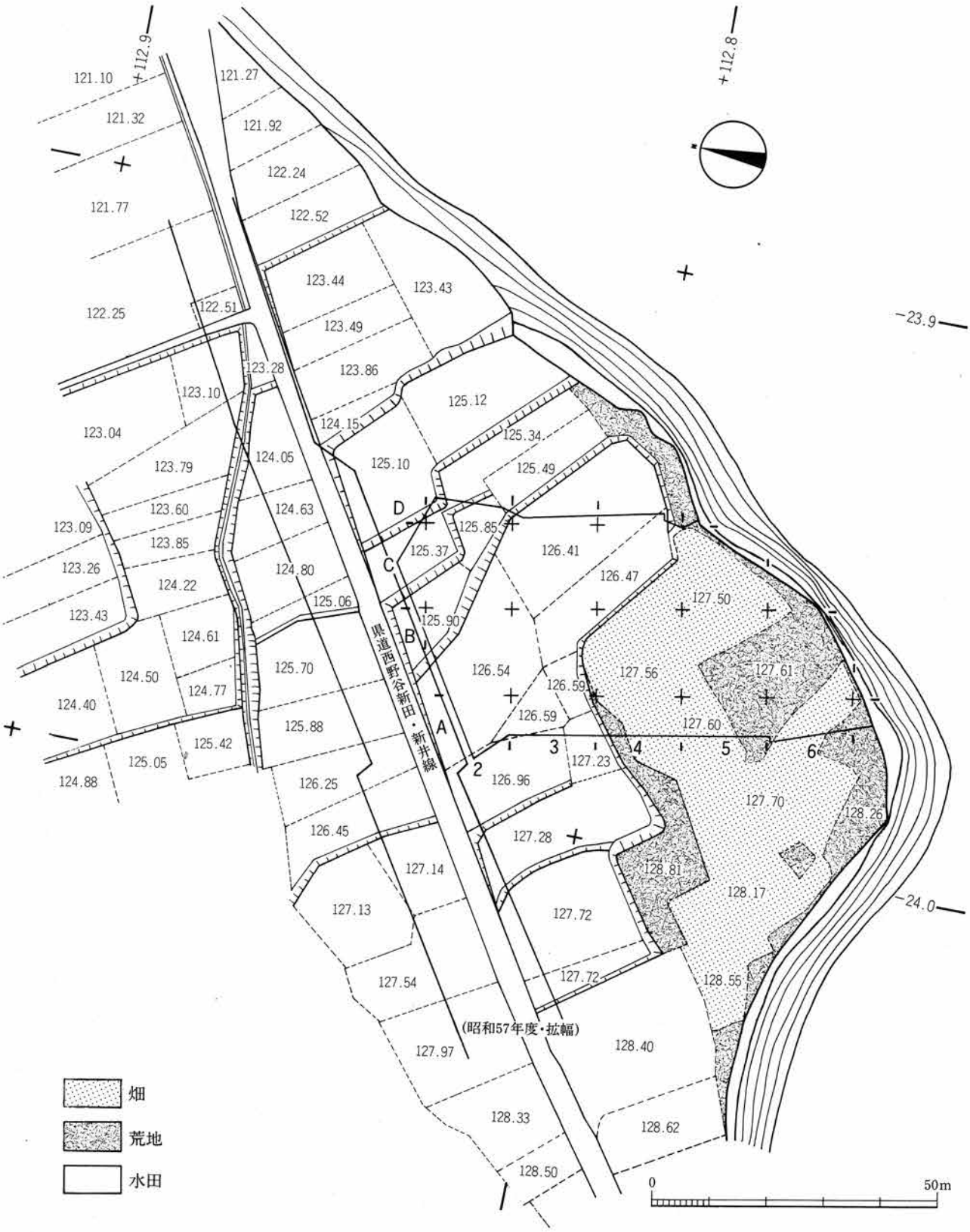
1．ここにはおもな遺構・遺物の実測図と写真をおさめる。
2．遺構平面図の点線は風倒木痕の範囲を示す。この図には原則として遺構と直接関係ない地山中の礫は表示していないが、遺構とからむ大きなものについてはこの限りでない。
3．遺構実測図の断面は原則として平面図に示した位置のものであるが、建物の柱穴などはこの限りでない。柱痕跡が検出されたものはその輪郭をやや太い実線で示した。
4．遺構断面図の粗い網目は地山中の礫、濃い斜線は遺構となる礫、薄い斜線は遺構と直接関連しない礫を、それぞれ示す。
5．遺物の番号はすべて通し番号で、本文と一致する。縮尺は各図版に記した。小破片で口径復原が困難なものは中心線と外形線を離した。
6．遺物写真のおおよその縮尺は各図版に記した。



建設省北陸地方建設局高田工事事務所作成　1:1000(昭和47年測図)

図版 2

グリッド設定図

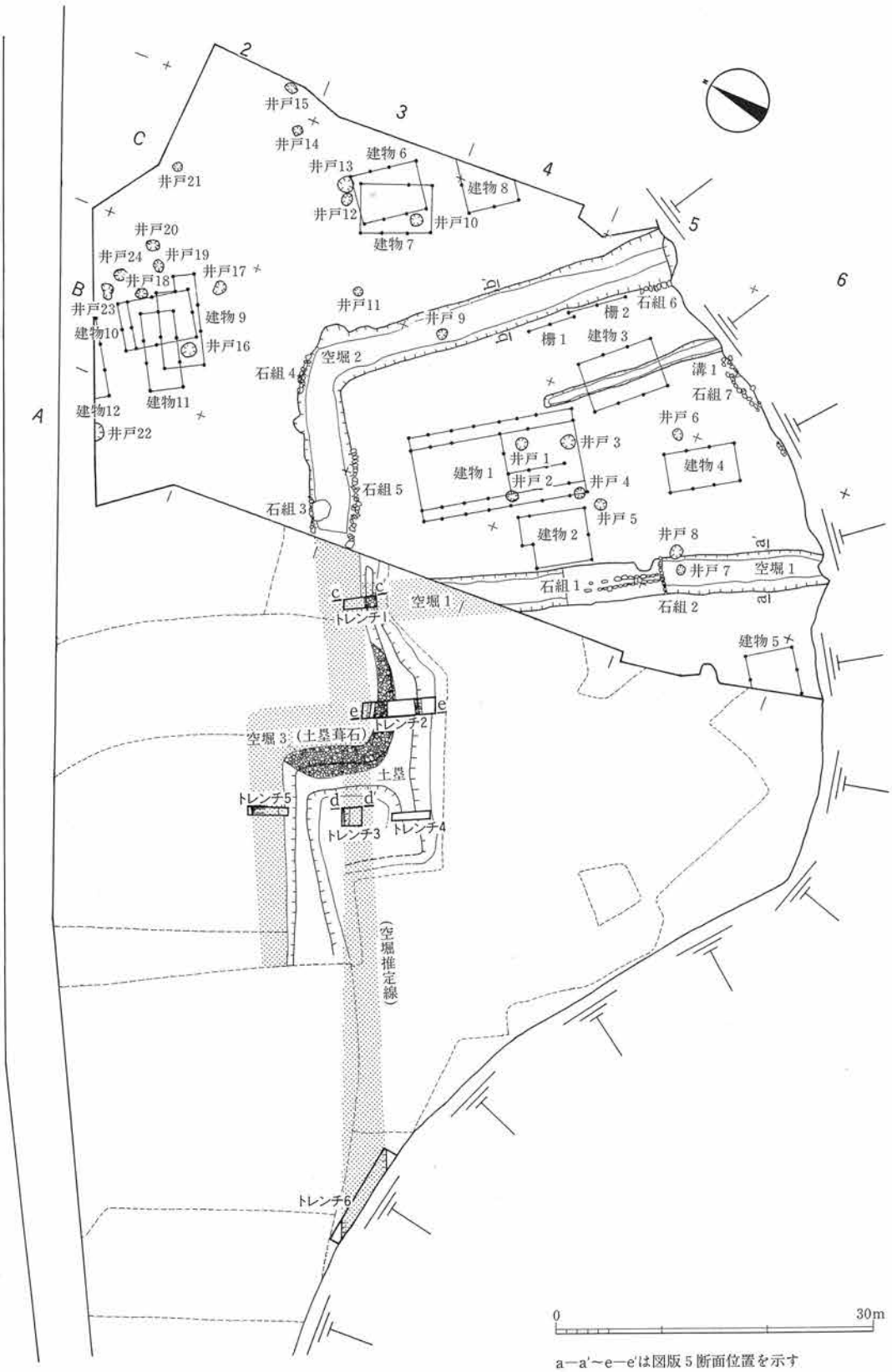

+112.9
+112.8
−23.9
−24.0
121.10
121.32
121.77
122.25
121.27
121.92
122.24
122.52
122.51
123.44
123.43
123.49
123.86
123.28
123.10
123.04
123.79
123.60
123.09
123.85
123.26
124.22
123.43
124.61
124.50
124.77
124.40
125.42
125.05
124.88
124.05
124.63
124.80
125.06
125.70
125.88
126.25
126.45
124.15
125.10
125.12
125.34
125.49
125.85
125.37
125.90
126.41
126.47
126.54
126.59
126.59
126.96
127.23
127.14
127.13
127.54
127.97
127.28
127.72
127.72
127.50
127.56
127.61
127.60
127.70
128.26
128.81
128.17
128.55
128.40
128.62
128.33
128.50
A
B
C
D
2
3
4
5
6
県道西野谷新田・新井線
(昭和57年度・拡幅)
畑
荒地
水田
0
50m

遺構実測図1　発掘区全体図(Ⅰ：200)

図版 3

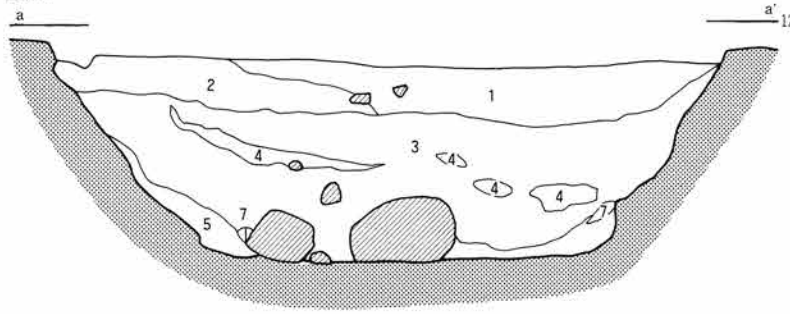
図版 4

遺構配置模式図


井戸15
井戸14
井戸13
建物6
建物8
井戸12
井戸10
建物7
井戸21
井戸20
井戸24
井戸19
井戸18
井戸17
井戸23
建物9
建物10
井戸16
建物11
建物12
井戸22
井戸11
井戸9
棚2
棚1
石組6
建物3
溝1
石組7
空堀2
石組4
井戸6
井戸3
井戸1
井戸2
井戸4
建物1
建物4
石組5
石組3
井戸5
建物2
井戸8
井戸7
空堀1
石組1
石組2
建物5
トレンチ1
空堀1
トレンチ2
空堀3（土塁葺石）
土塁
トレンチ5
トレンチ3
トレンチ4
（空堀推定線）
トレンチ6
0
30m
a—a'～e—e'は図版5断面位置を示す

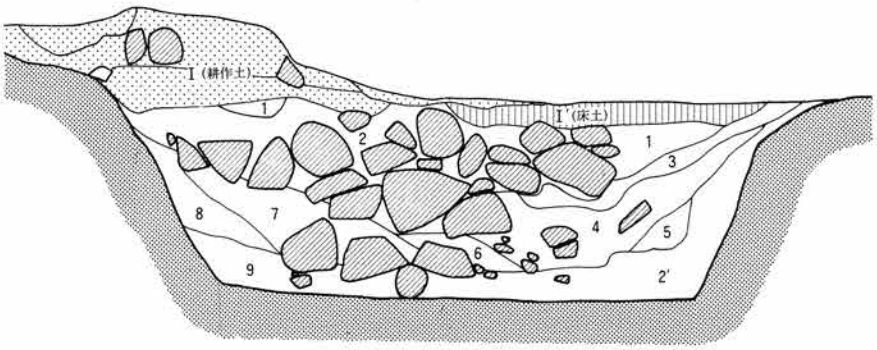
遺構実測図 2　空堀 1・2 土塁土層断面

空堀 1



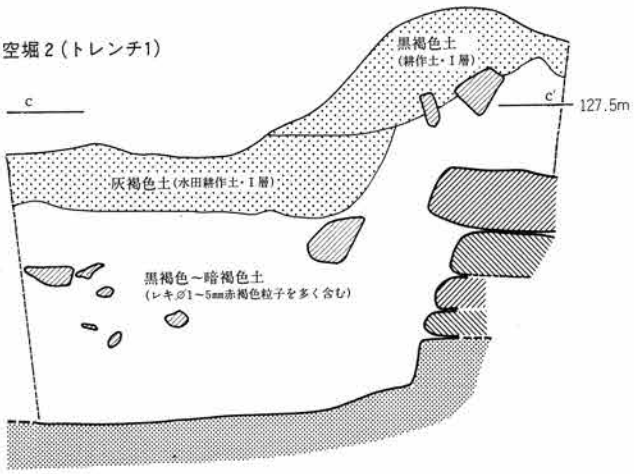
1 黒色土（地山粒子をわずかに含む）
2 黒色土（地山粒子Ⅰより多）
3 黒褐色土（赤褐色土粒子多く含む）
4 黒色土
5 黒色土（地山粒子は2層に同じ）
6 暗褐色土（地山粒子を多く含む）
7 赤褐色土（焼土）
※地山粒子の含有量によって分層

空堀 2

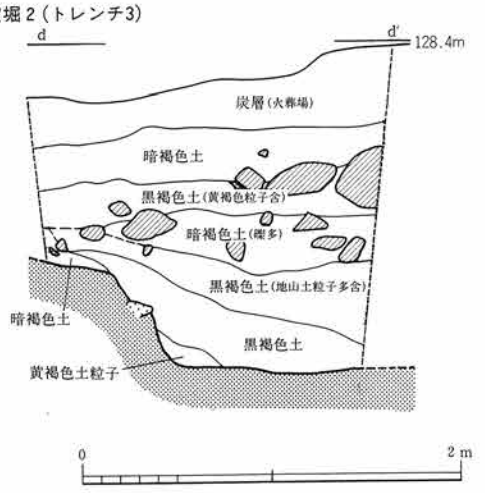


Ⅰ（耕作土）黒色～黒褐色土
Ⅰ'（床土）暗茶褐色土
1 暗黄茶褐色土（地山粒子多く含む）
2 暗褐色土（地山粒子多く含む）
2' 暗褐色土（∅2cm位の地山ブロックわずかに含む）
3 黒褐色土（地山粒子多く含む、土方は酸化している）
4 黒褐色土
5 3'層と5層の互層
6 暗灰茶褐色土（粘性有り）
7 暗茶褐色土（∅1cm位の地山ブロック・∅2～3cmの礫含む）
8 茶褐色土（∅1cm前後の地山ブロック・礫含む）
9 明褐色土（地山粒子・礫含む）

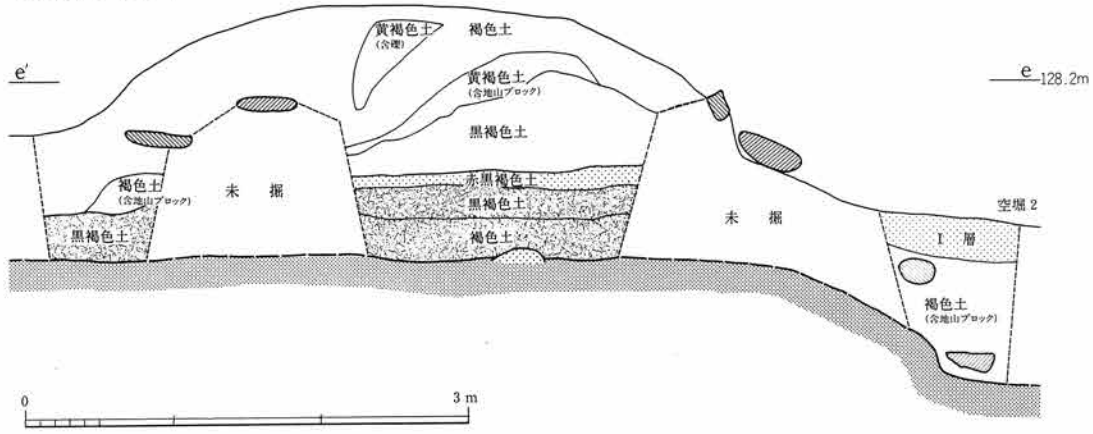
空堀 2（トレンチ1）



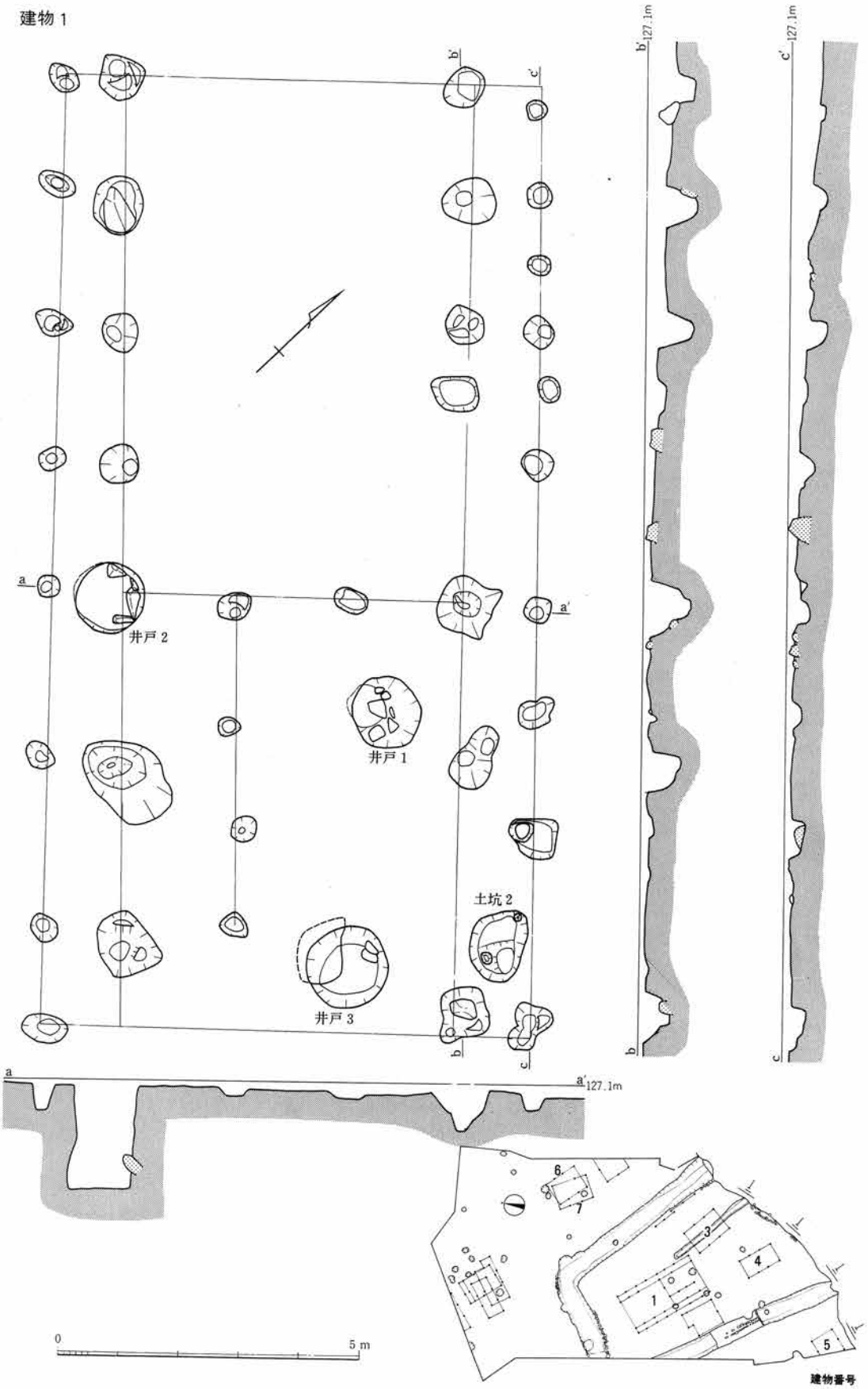
空堀 2（トレンチ3）

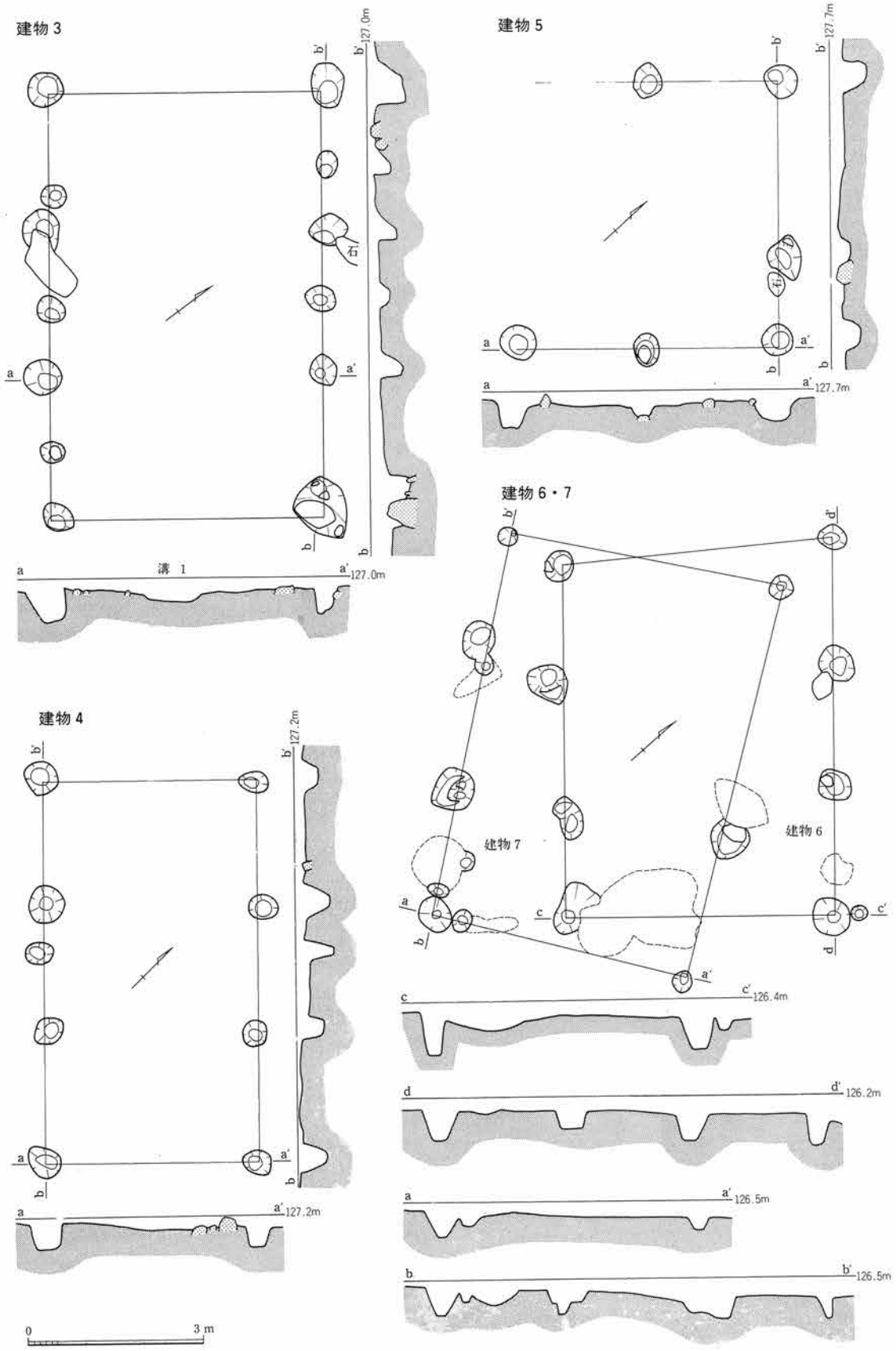


土塁 1（トレンチ 2）



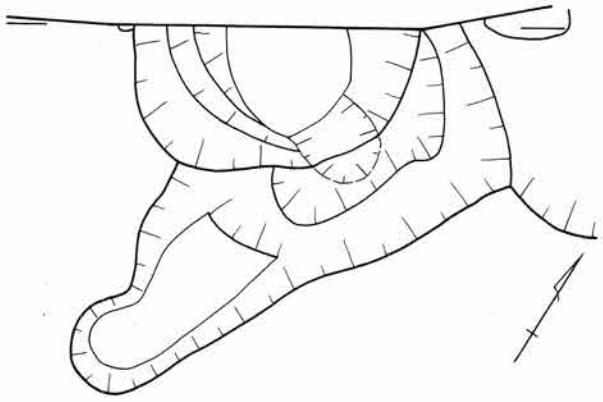
遺構実測図3　建物 1

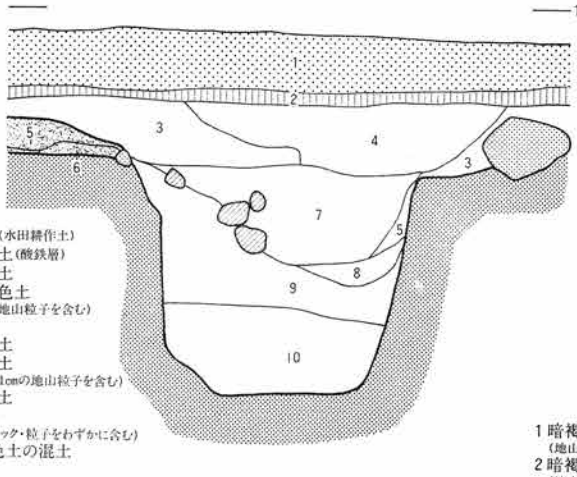



建物 3
建物 5
建物 6・7
建物 4
建物 7
建物 6
溝 1
127.0m
127.7m
127.2m
126.4m
126.2m
126.5m
0
3 m

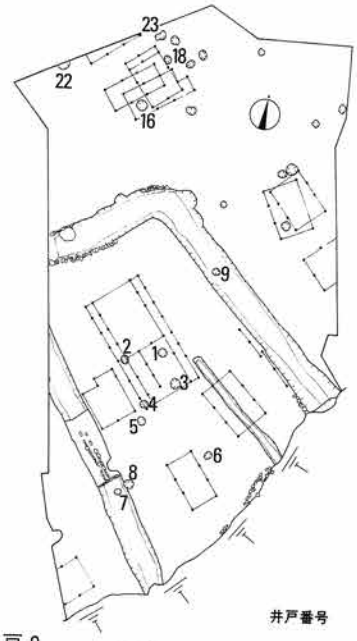
遺構実測図 5　井戸 9・18・22・23 土層断面

井戸22



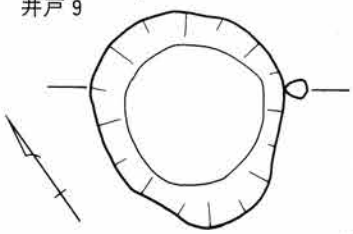


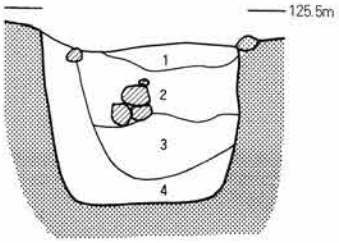
1 灰色土（水田耕作土）
2 橙褐色土（酸鉄層）
3 黒褐色土
4 淡黒褐色土
（∅5mmの地山粒子を含む）
5 黒色土
6 暗褐色土
7 黒灰色土
（∅0.5～1cmの地山粒子を含む）
8 黒灰色土
9 黒色土
（地山ブロック・粒子をわずかに含む）
10 礫と黒色土の混土



井戸番号

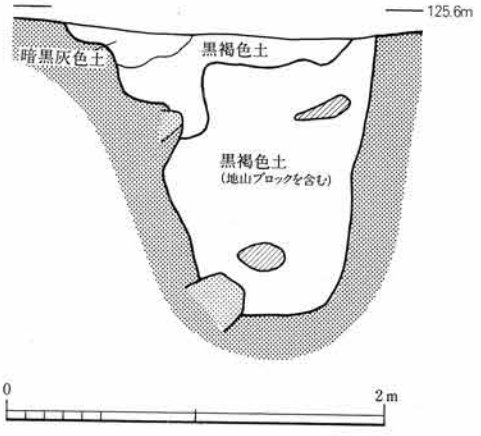
井戸 9



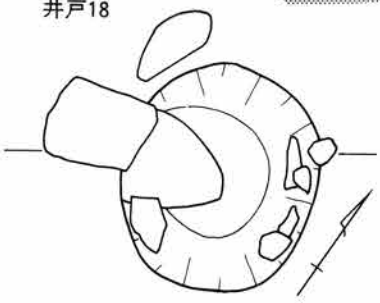


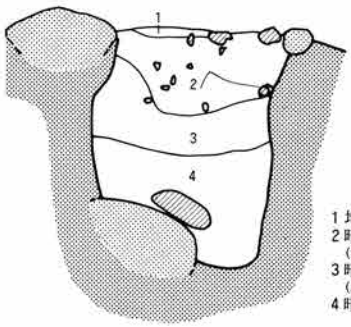
1 暗褐色土
（地山ブロックを多く含む）
2 暗褐色土
（地山ブロックをわずかに含む）
3 黒褐色土
（地山ブロックを多く含む）
4 黒褐色土
（地山ブロックをわずかに含む）

井戸23

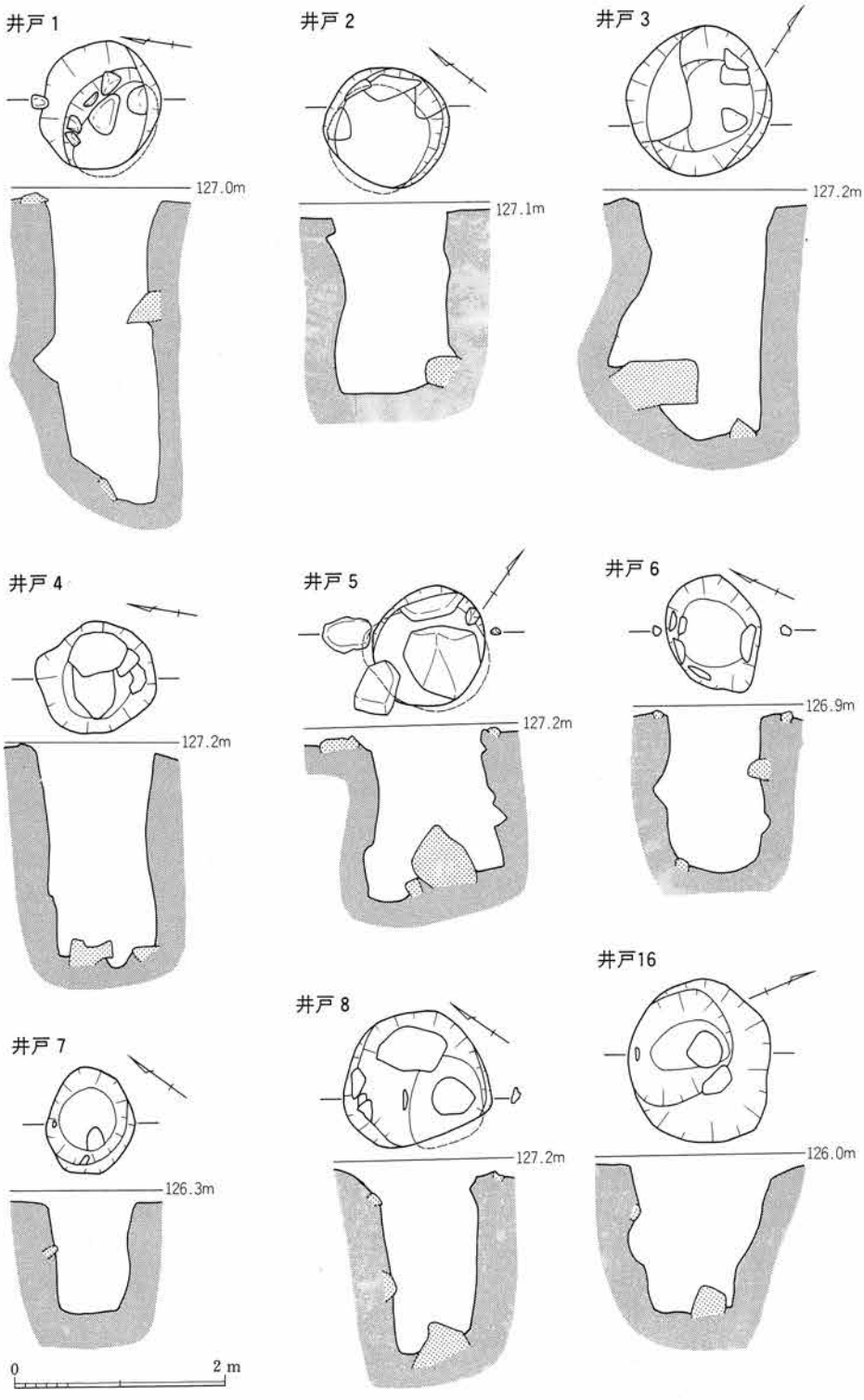


井戸18

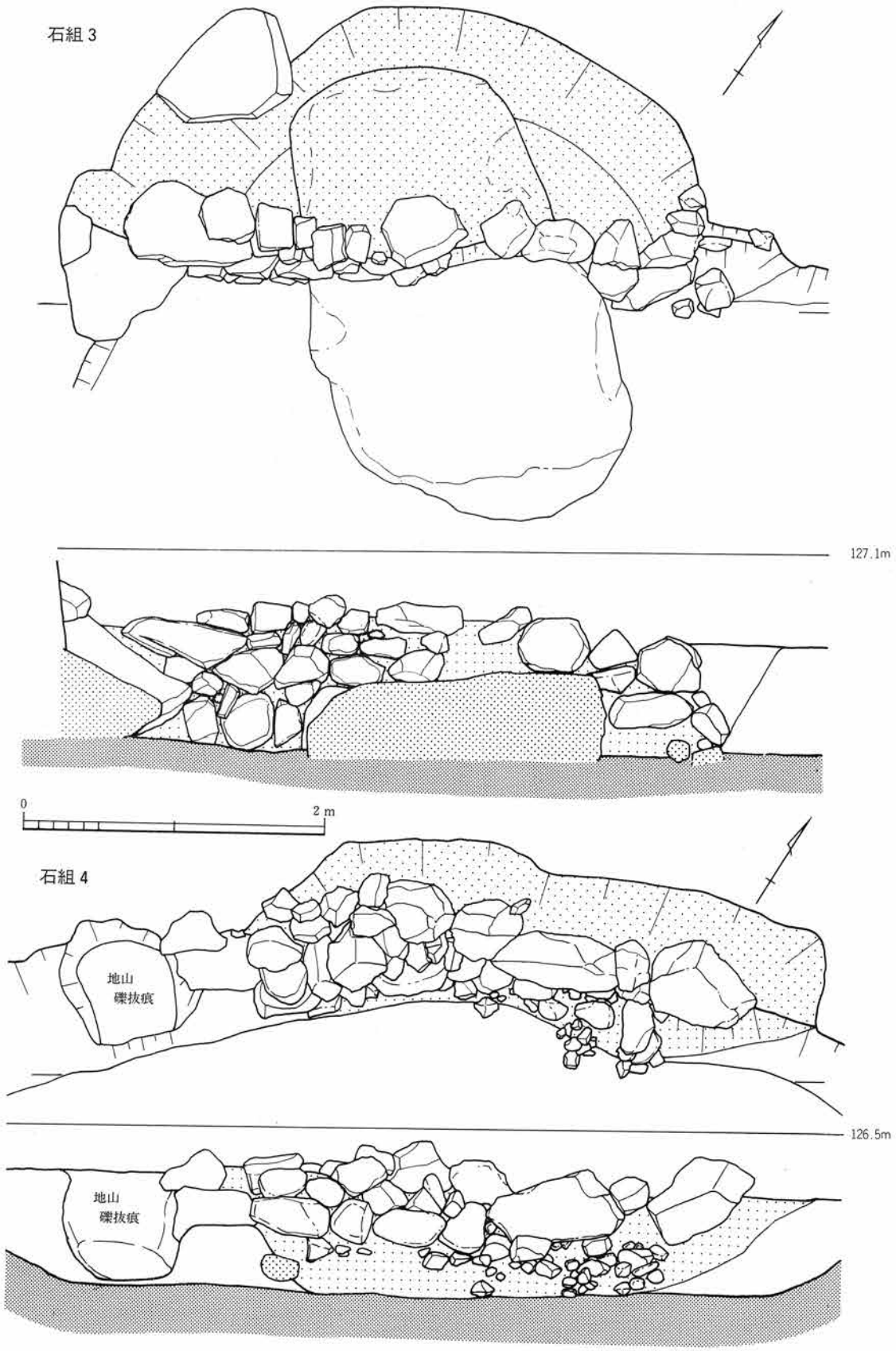


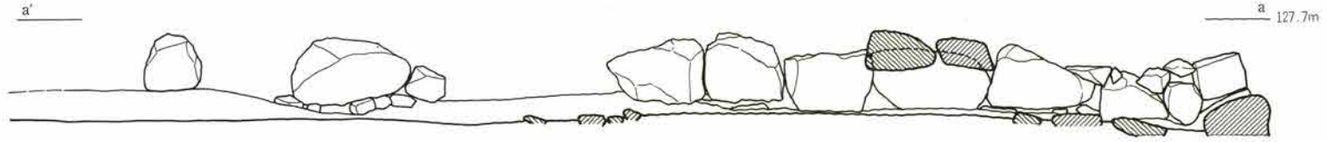


1 地山土と暗褐色土の混土
2 暗褐色土
（地山粒子・炭化粒を含む）
3 暗褐色土
（地山ブロックを含む）
4 暗灰褐色粘土

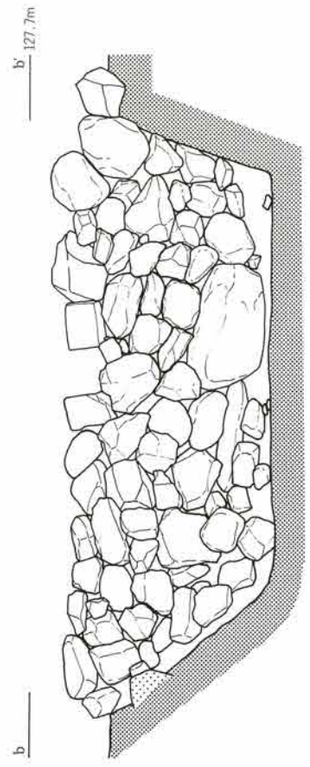

井戸 1
127.0m
井戸 2
127.1m
井戸 3
127.2m
井戸 4
127.2m
井戸 5
127.2m
井戸 6
126.9m
井戸 7
126.3m
井戸 8
127.2m
井戸16
126.0m
0
2 m

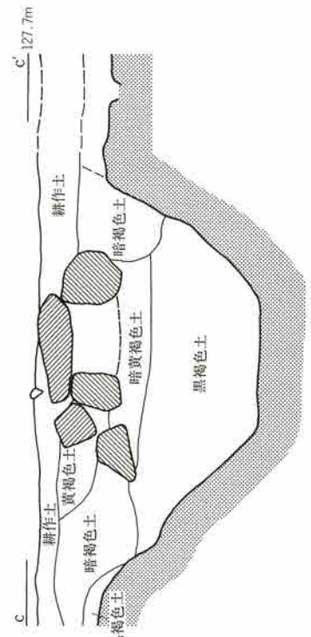
遺構実測図 7　石組 3・4

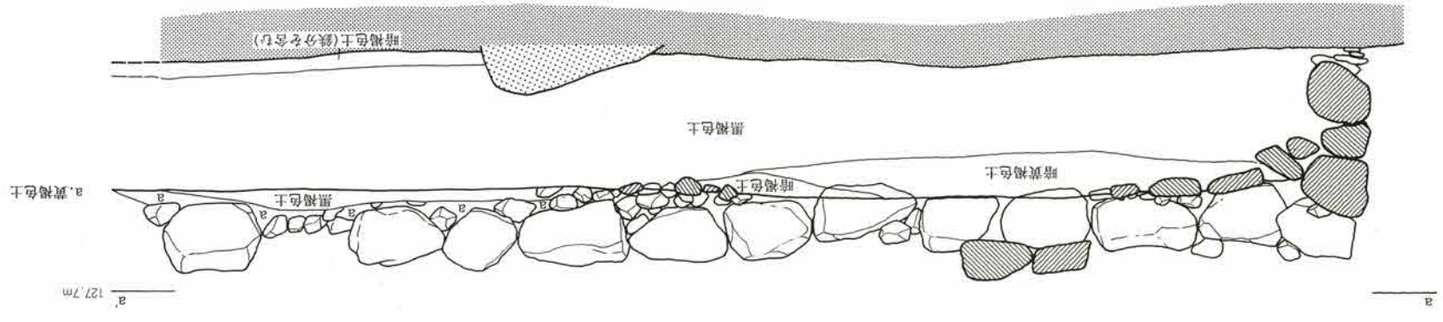


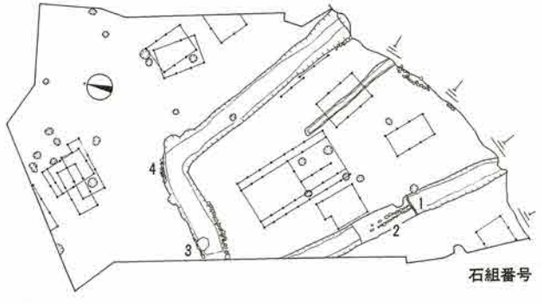

a'
a
127.7m

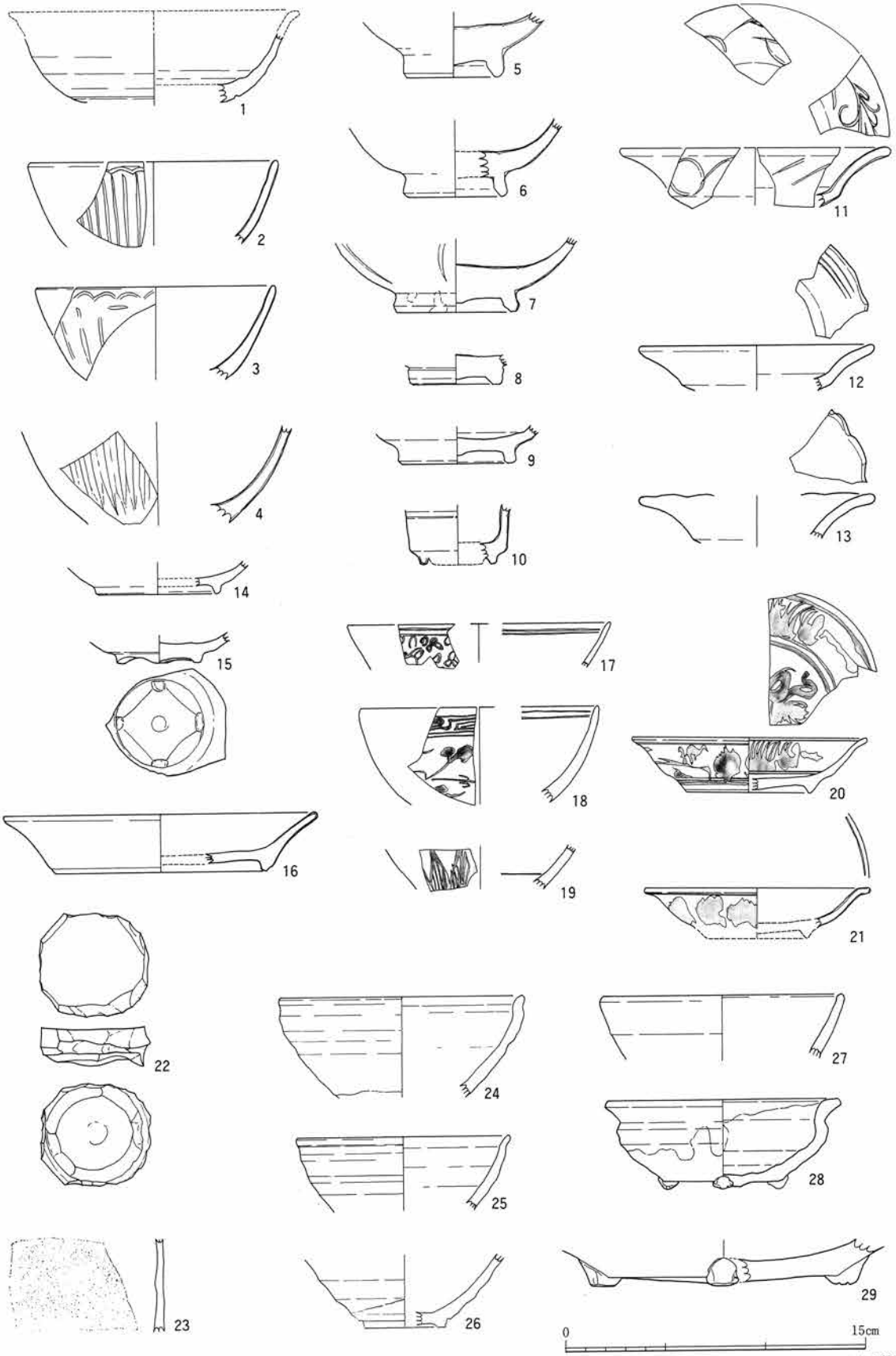
a'
a
b'
c'
c
b
0
4 m


b'
127.7m
b


c'
127.7m
耕作土
暗褐色土
暗黄褐色土
黒褐色土
c

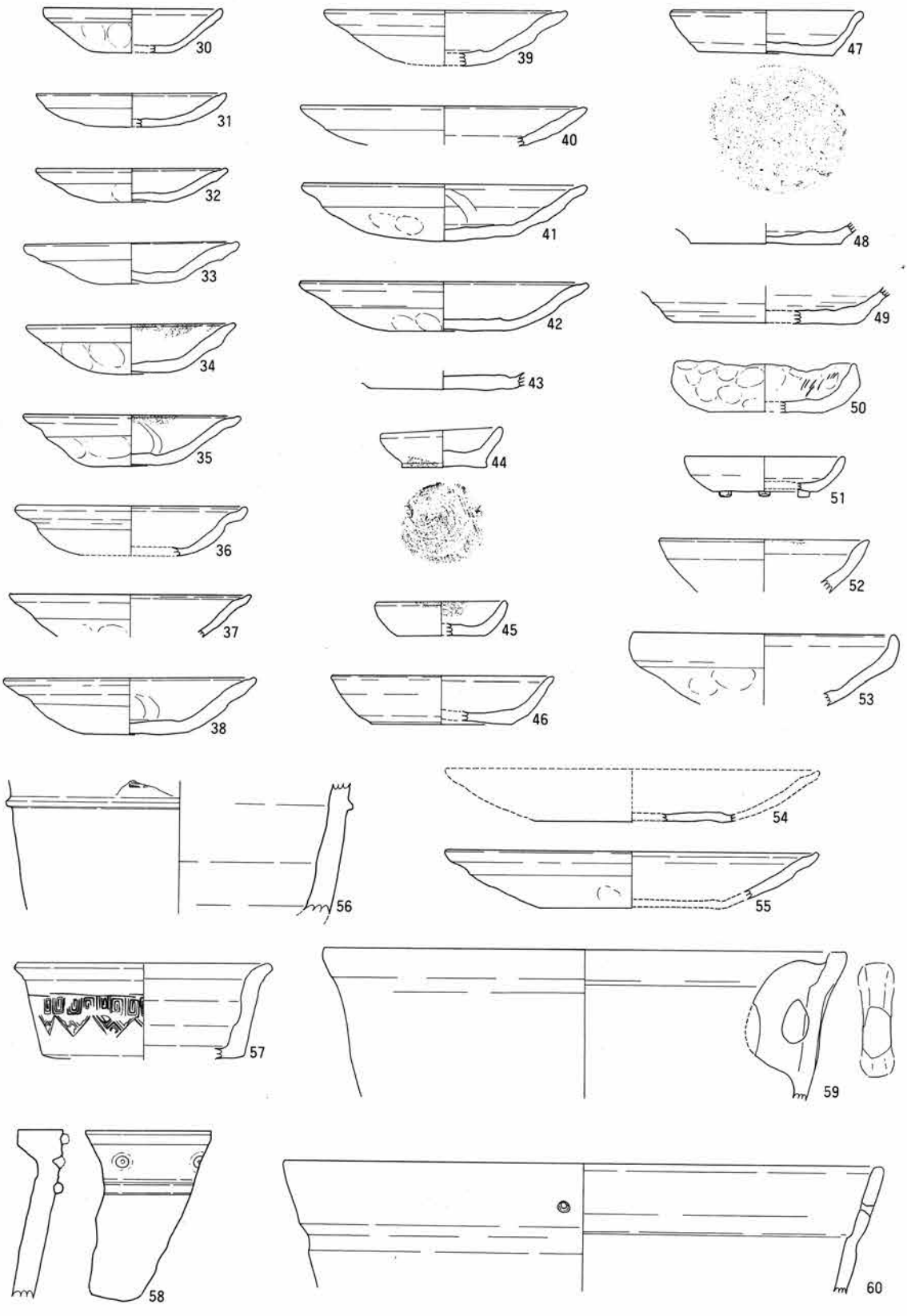

a'
127.7m
a
a.黄褐色土
黒褐色土
暗褐色土
暗黄褐色土
黒褐色土
暗褐色土(鉄分を含む)


1
2
3
4
石組番号



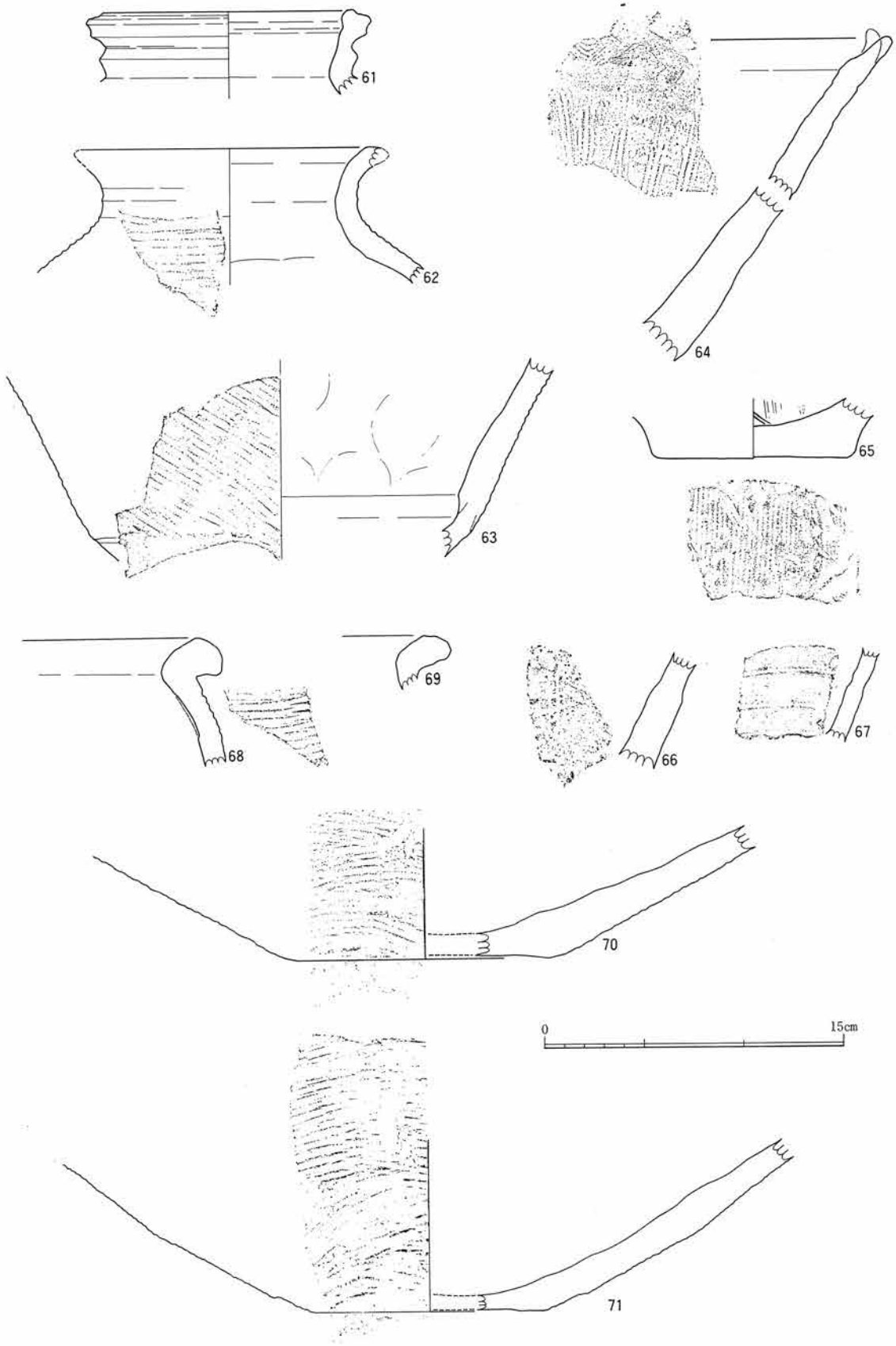
1：3　　1～13・22 青磁　14～16 白磁　17～21 染付　23 黒釉壺　24～29 瀬戸・美濃焼(24～26 天目、27・28 灰釉)

出土遺物実測図２　土師質土器・瓦質土器



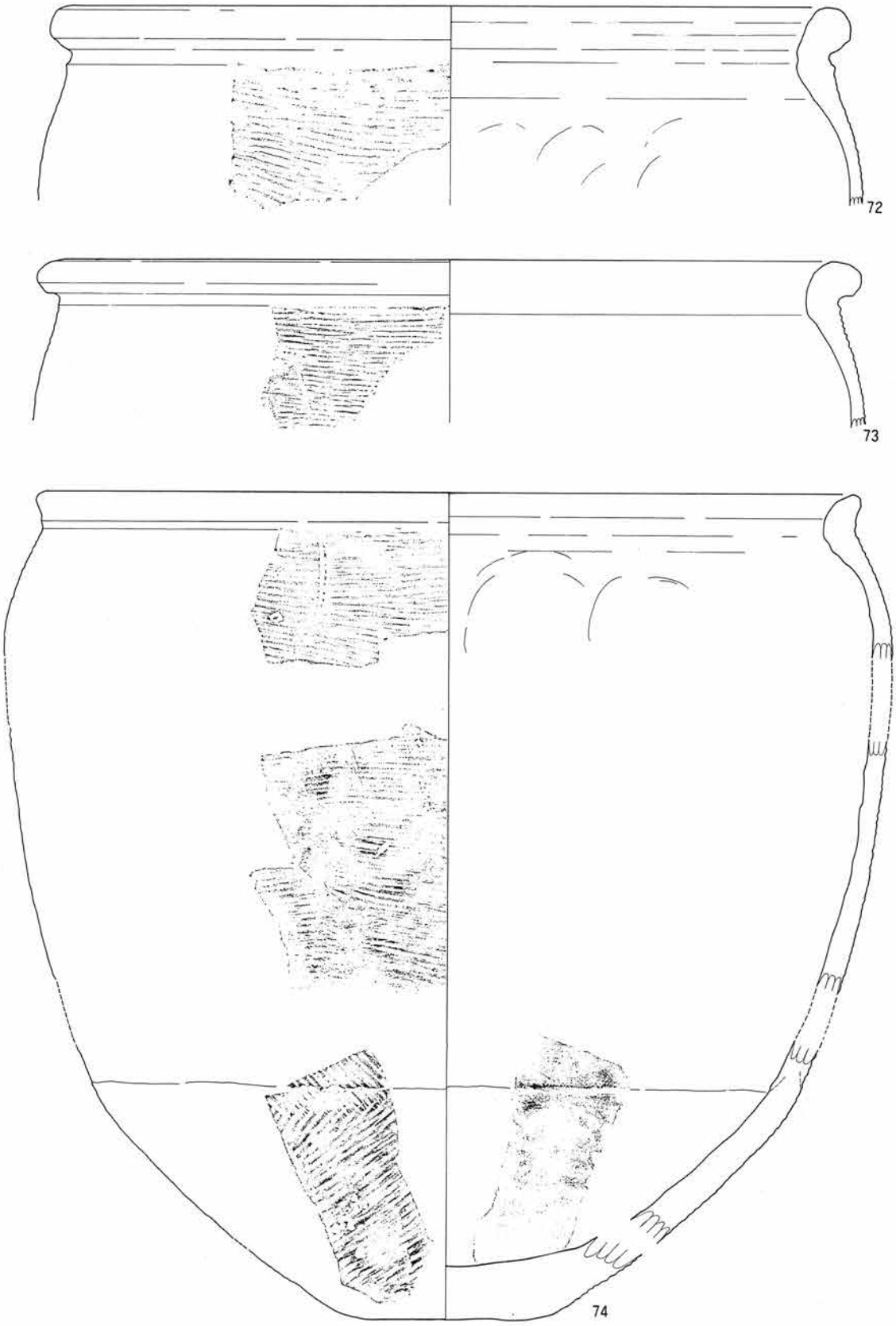
1：3

30～55・59・60 土師質土器　56～58 瓦質土器

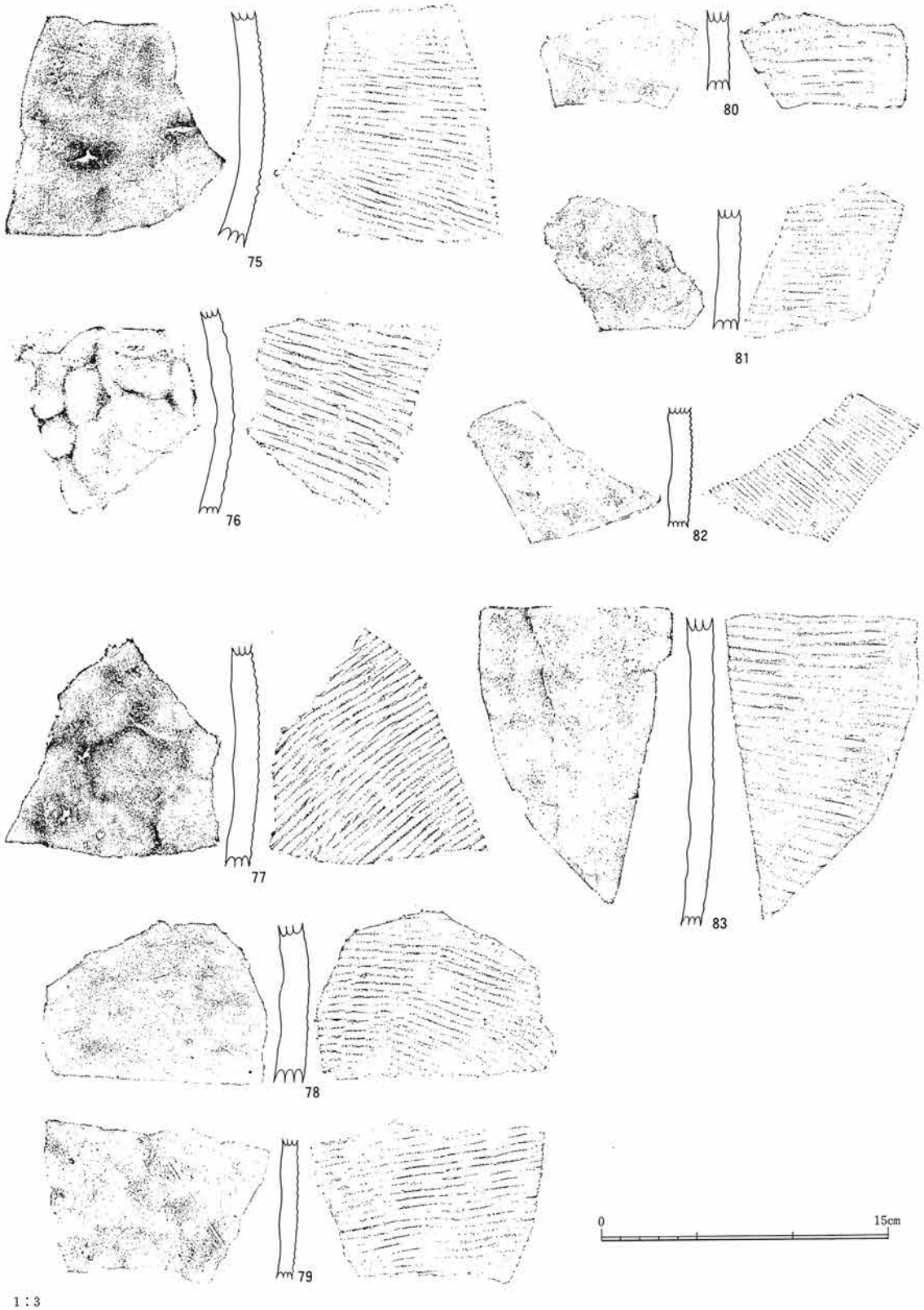


1：3

出土遺物実測図 4　珠洲焼

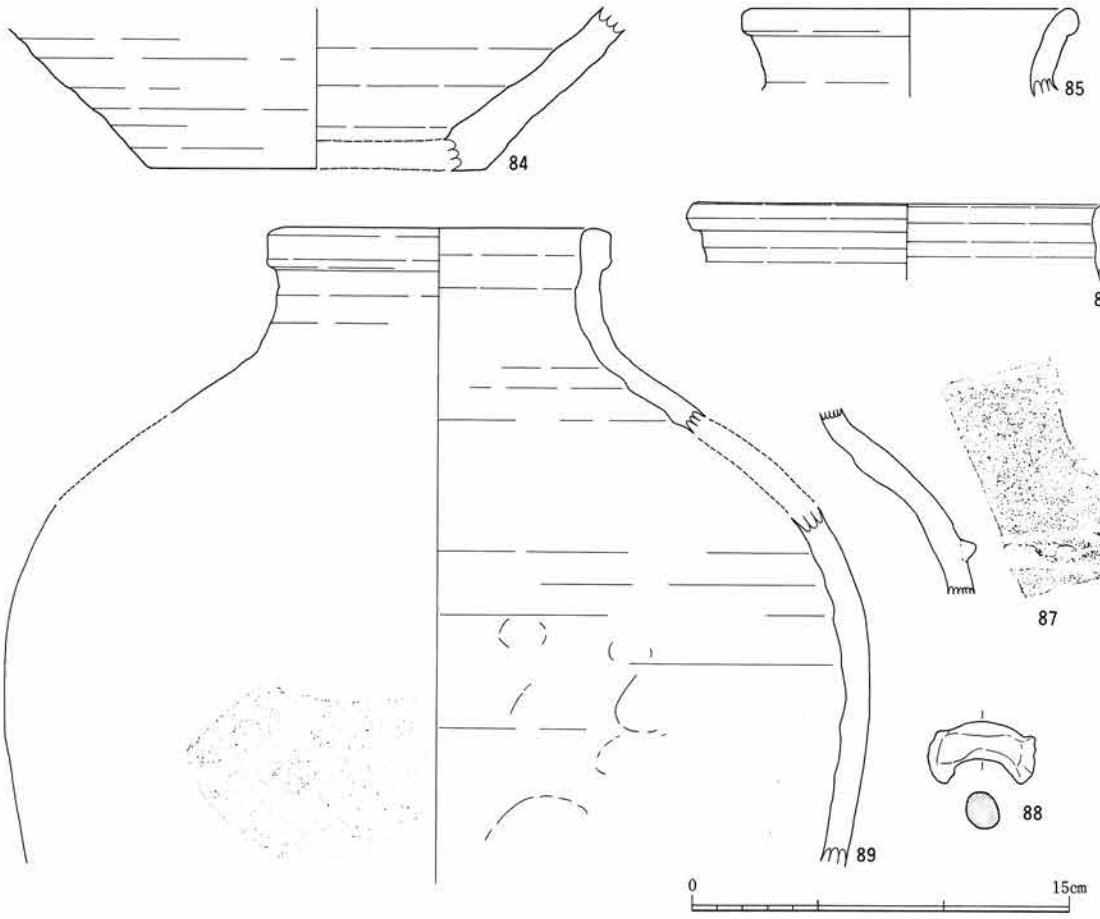


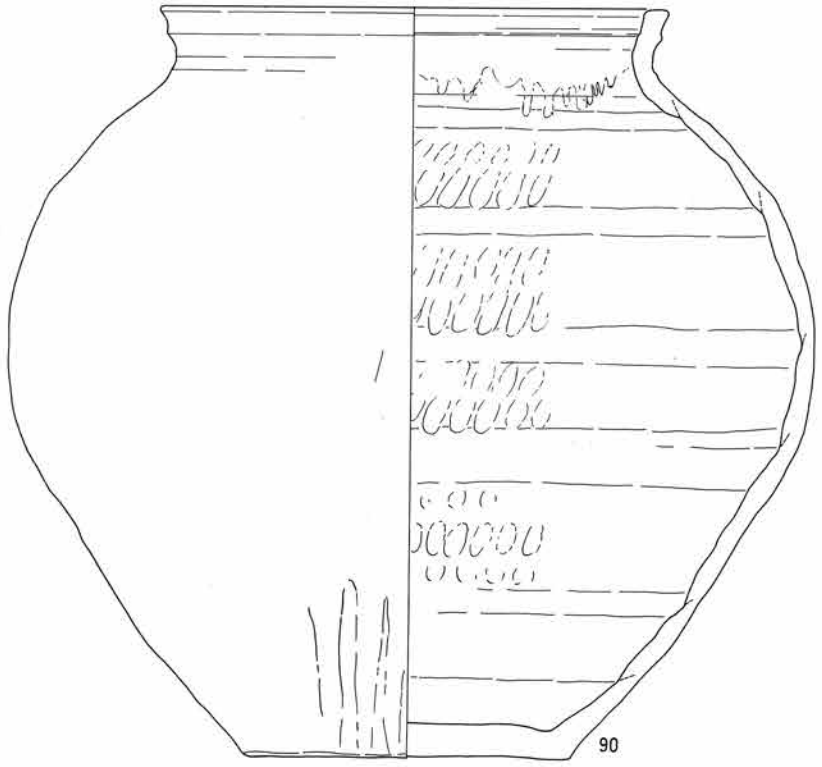
1：4



1:3

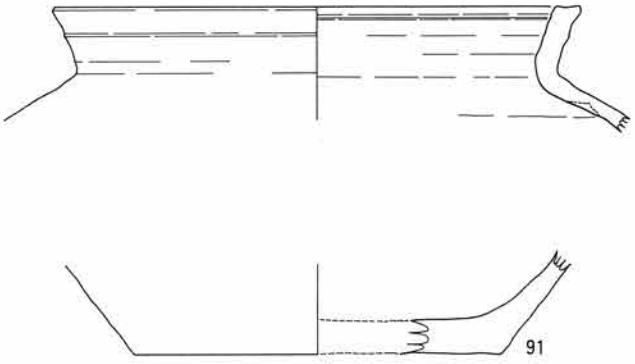
出土遺物実測図6 越前焼・その他



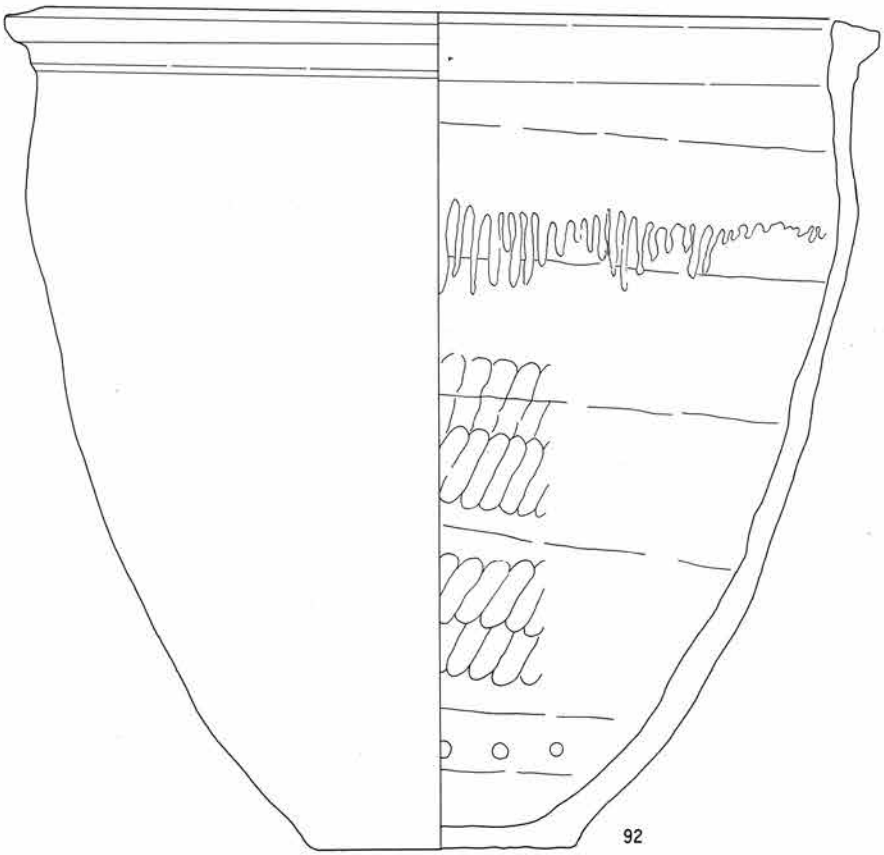


84～89 1：3　90 1：6

85・87・90 越前焼　88 瀬戸・美濃焼壺耳



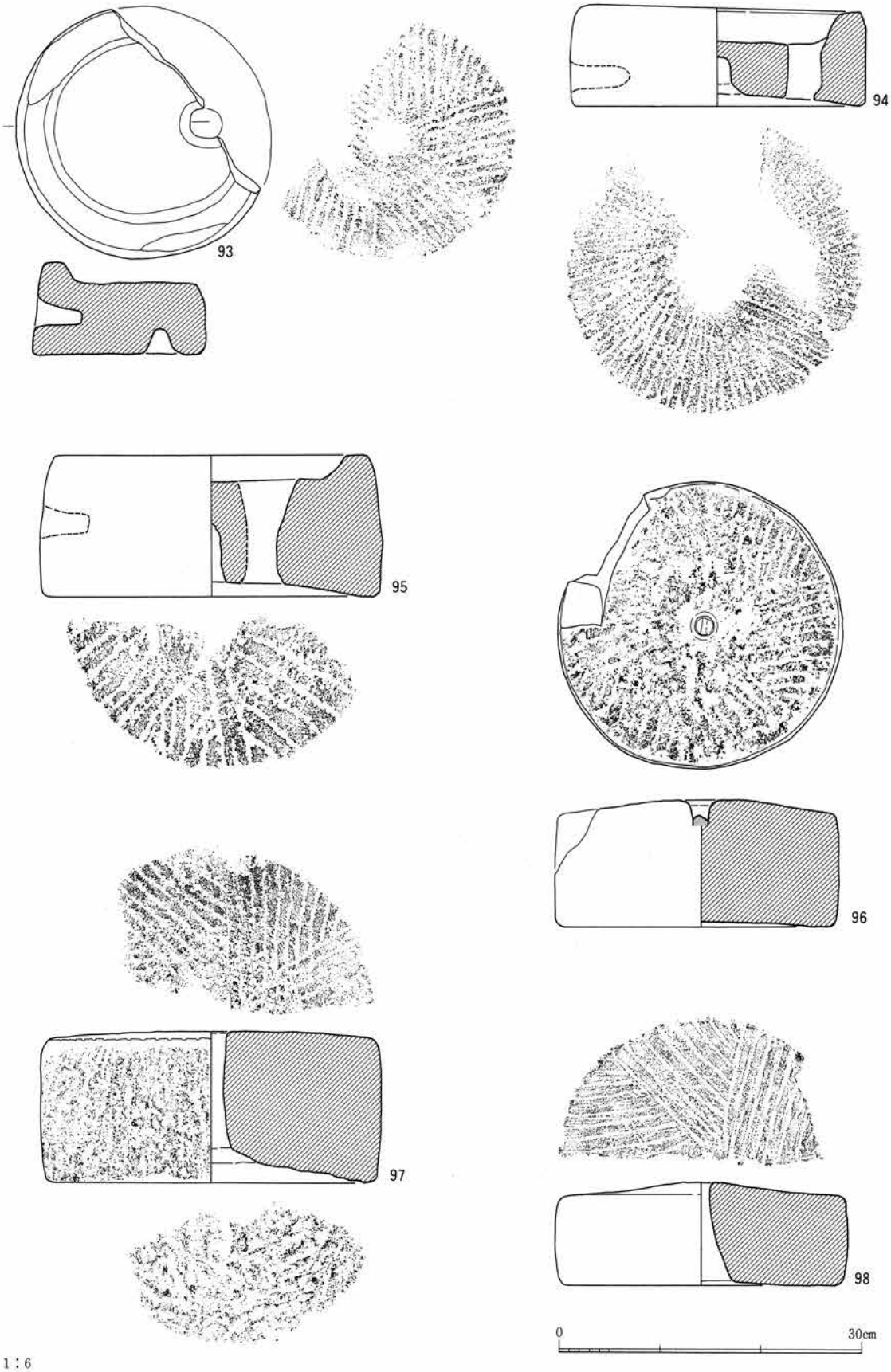
91



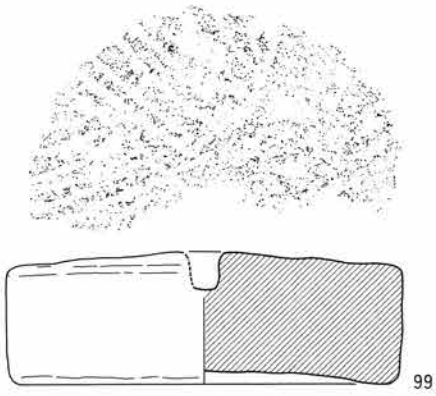
92

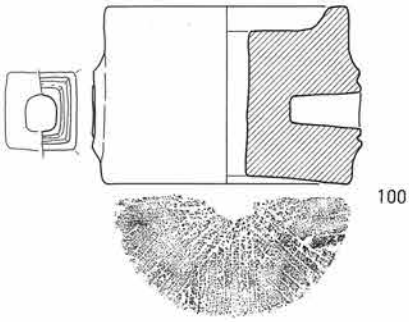
1：6

出土遺物実測図 8　粉挽き臼

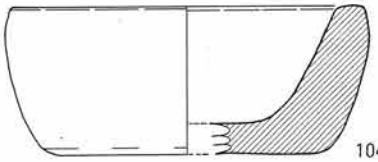


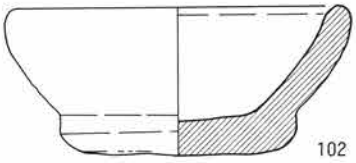
1：6

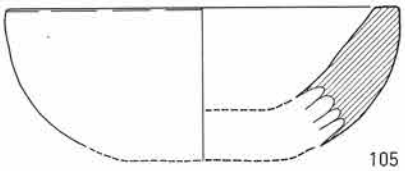

99

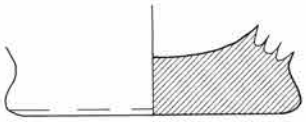

100

101

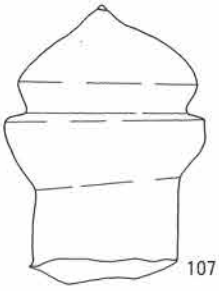

104

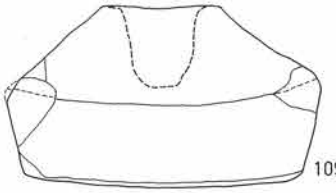

102

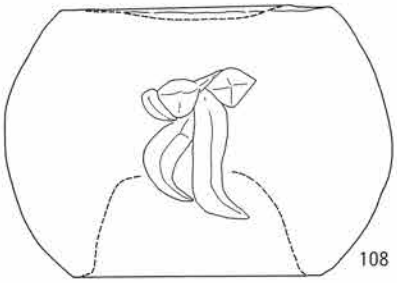

105

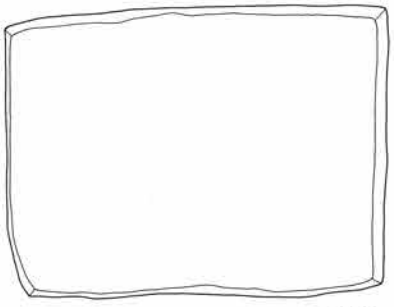

103

106


107


109

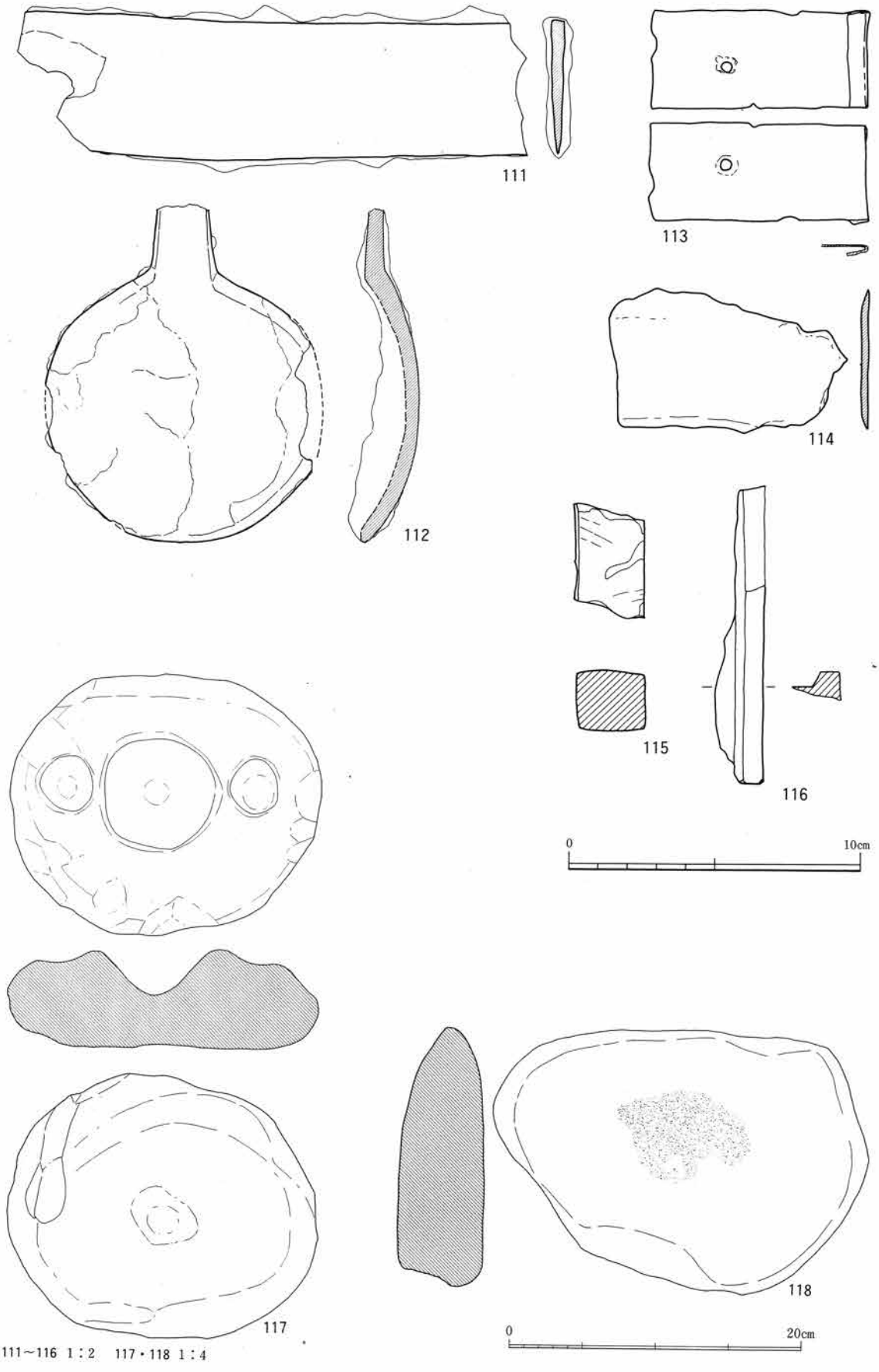

108


110

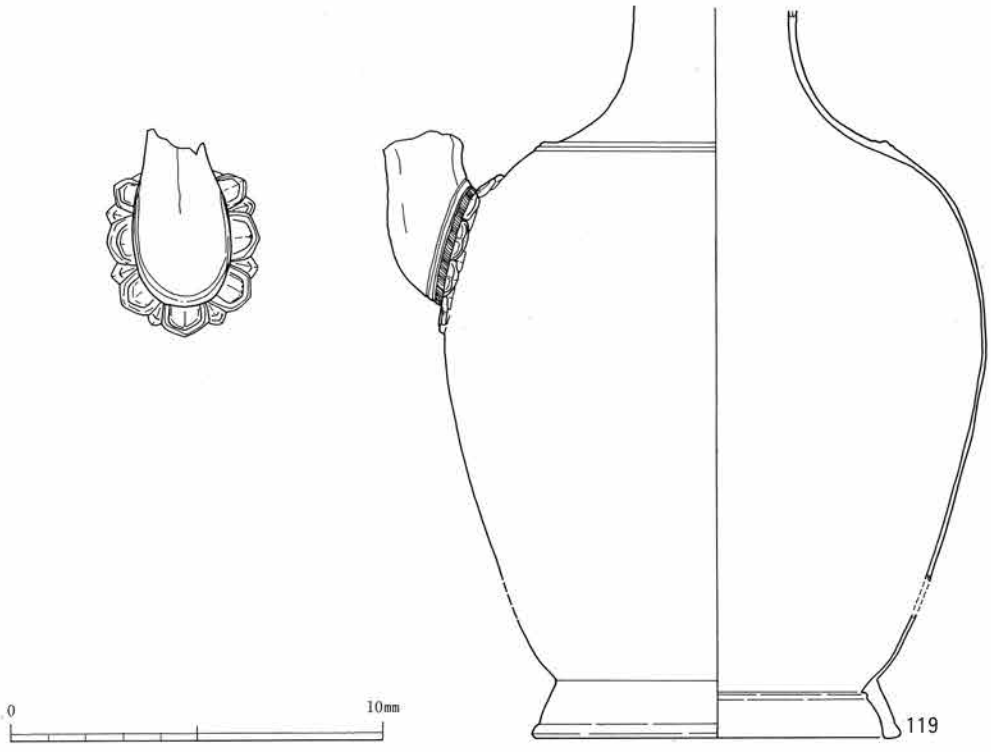
1：6

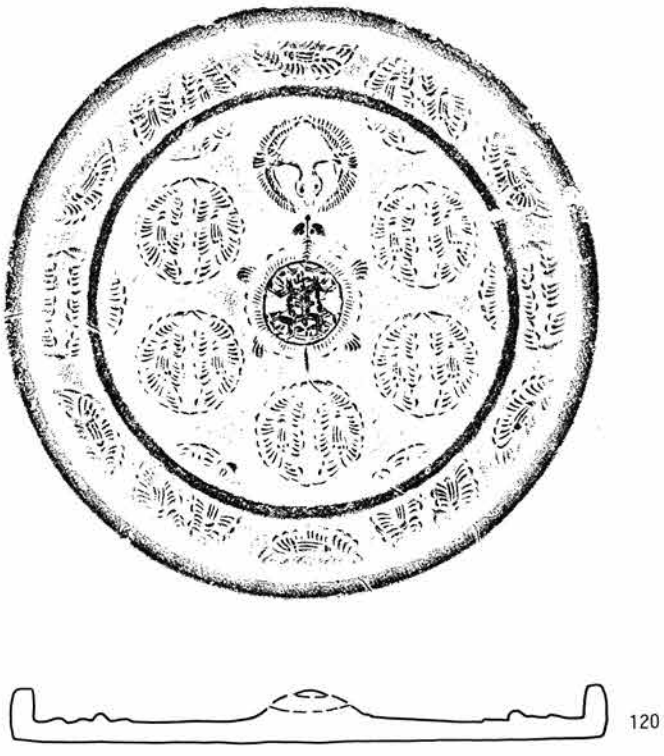
99 粉挽き臼　100 茶臼(小林森男氏所蔵)　101～106 石製鉢　107～110 石塔

出土遺物実測図10 鉄製品・石製品



111～116 1：2　117・118 1：4





119 1：2　120 2：3

和鏡 小林三代治氏所蔵

1　館跡全景　　北東より

2　土塁1近景(表土除去後)　　北東より

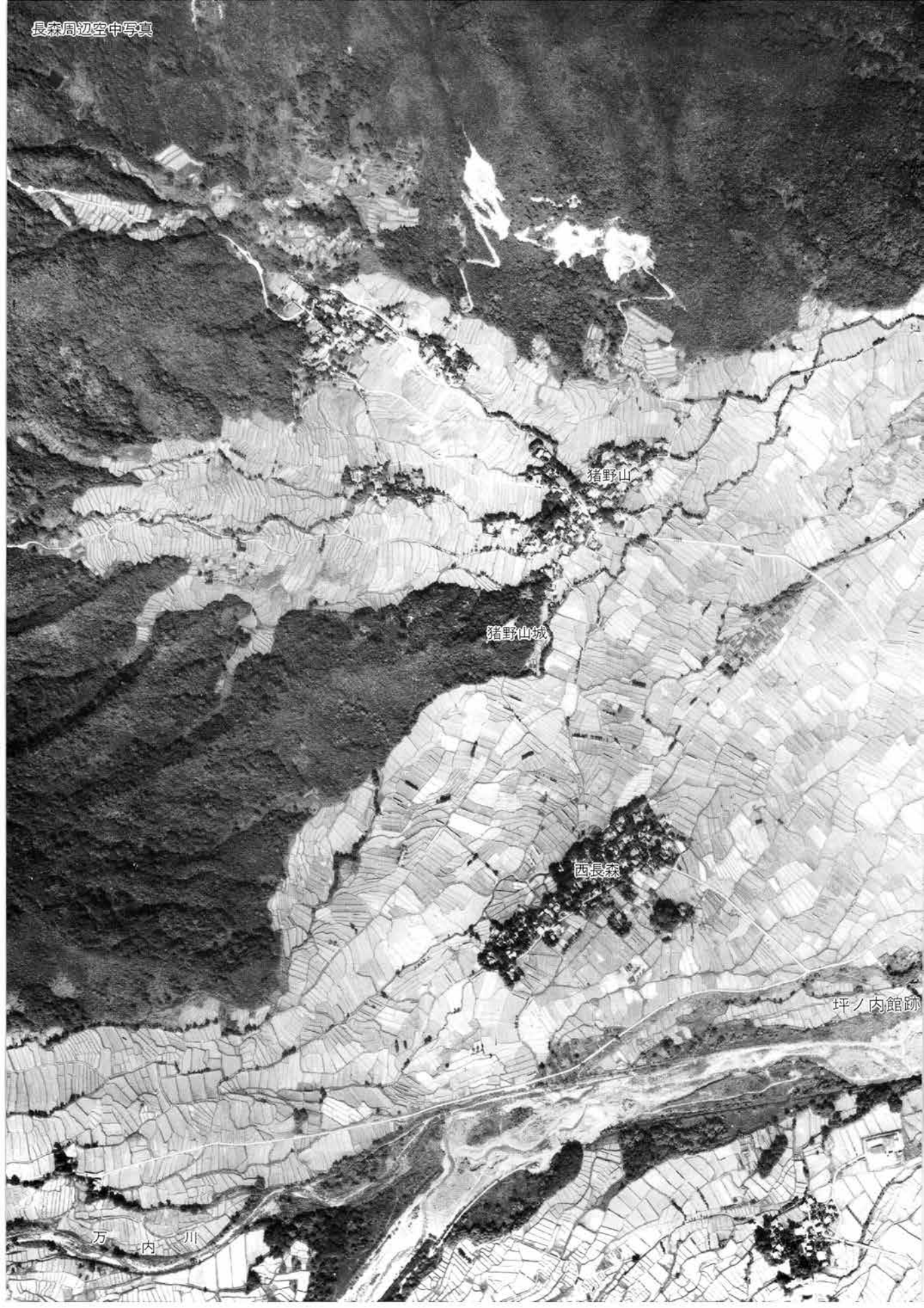
図版24

明治 4 年長森村絵図
（金子以策氏所蔵）

1　館跡遠景
矢代川南岸より

2　館跡近景
南より

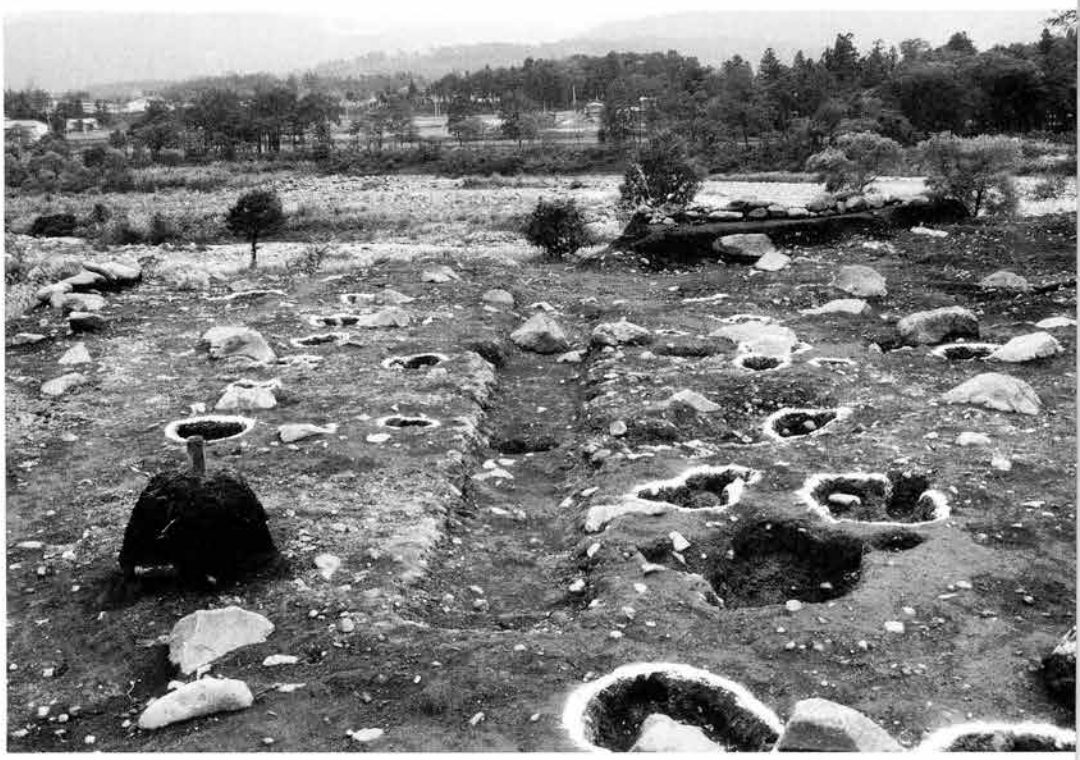
3　館跡近景(発掘前)
北東より


長森周辺空中写真
猪野山
猪野山城
西長森
坪ノ内館跡
万
内
川

図版26
梨の木
五日市
土田
藤塚新田
小丸山新田
新井市街地
矢代川
東長森
国土地理院1974年撮影　1：20,000×2

1　館跡全景　北東より　　2　東郭全景　北西より

1　建物 1
　石組 5
　北西より



2　建物 3
　溝　1
　北西より

3　石組 7
　北西より

1　石組１・石組２
南東より

2　石組２
北西より

1　石組1
南東より

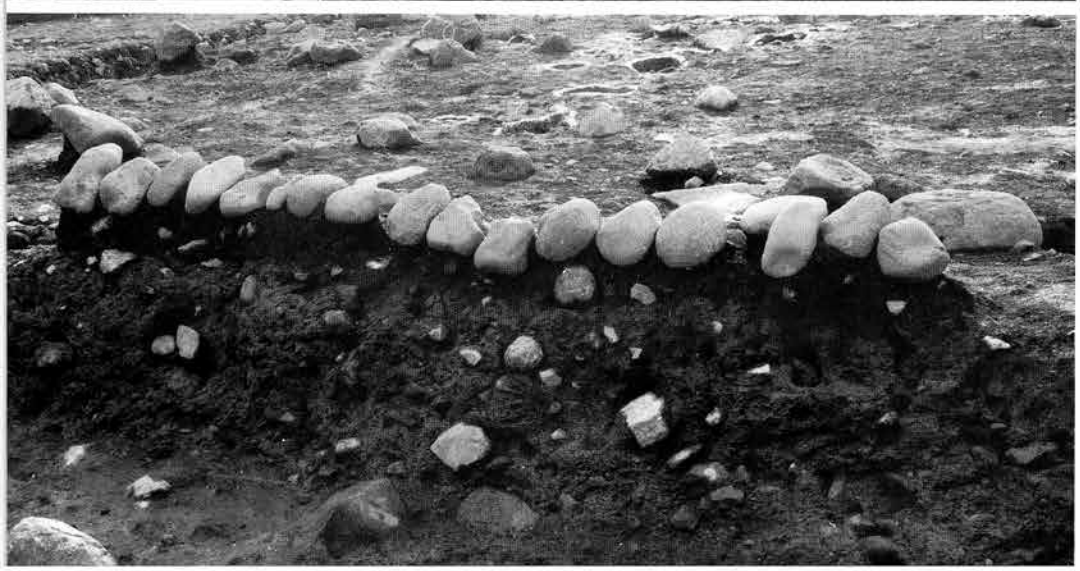
2　石組2縦断面
北東より

3　石組2横断面
北西より

4　石組1・2縦断面
北東より

1　空堀 2 南端部
北西より

2　空堀 2 北部
石組 3・4・5
南西より



3　石組 5
北西より

1　石組 3
南東より

2　石組 4
南より

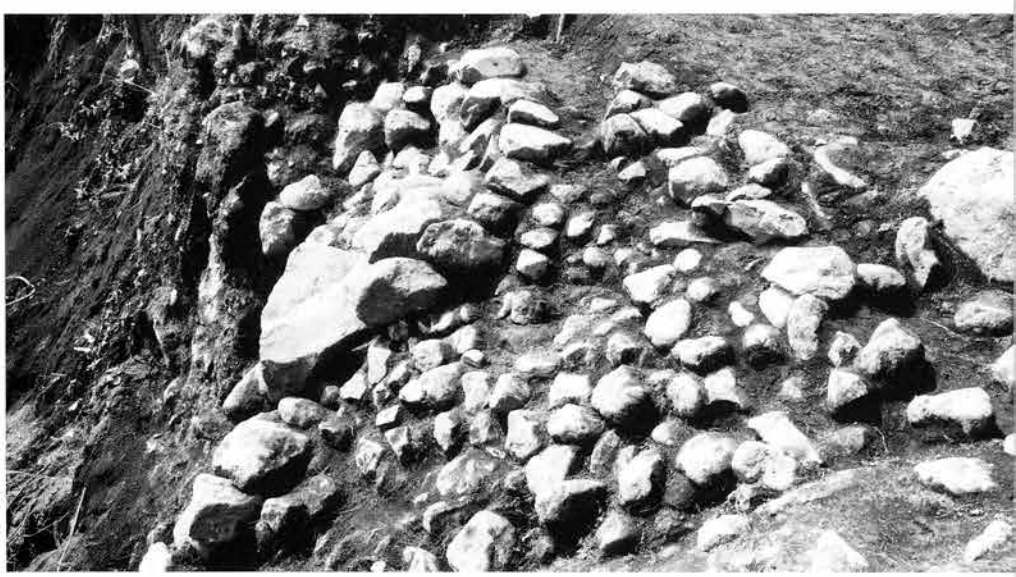
3　石組 6
空堀 2 南端部
北東より

1　空堀 1
（石組1・2除去後）
北西より

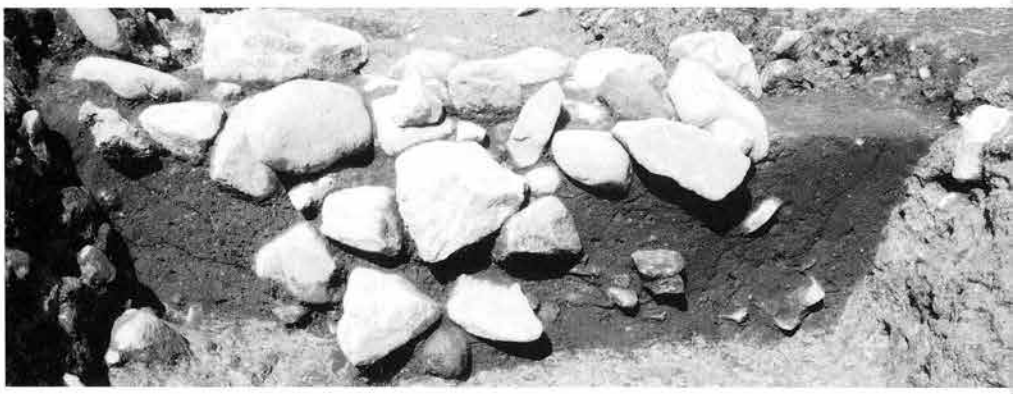
2　橋 1
（空堀 1・石組 2 下部）
西より

3　空堀 1 南端突出部
南西より

1　空堀 2 礫出土状況
西より



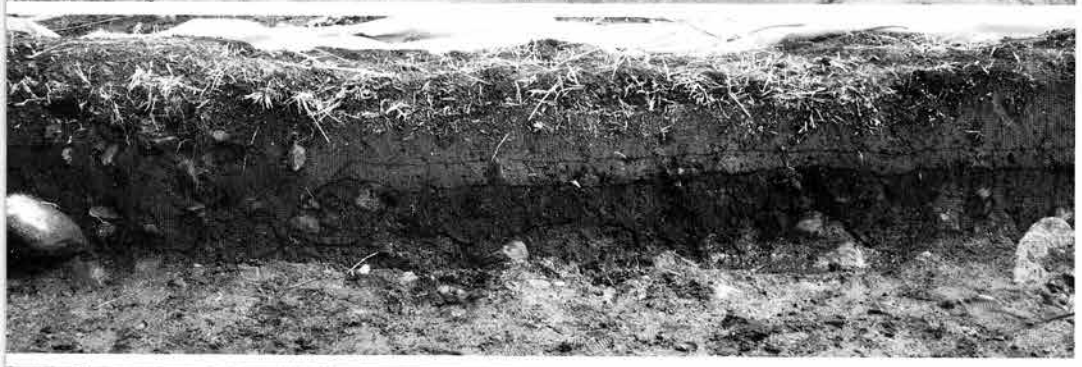
2　空堀 2 南端部礫出土状況
北東より



3　空堀 2 土層断面
南東より

4　空堀 1 土層断面
南東より

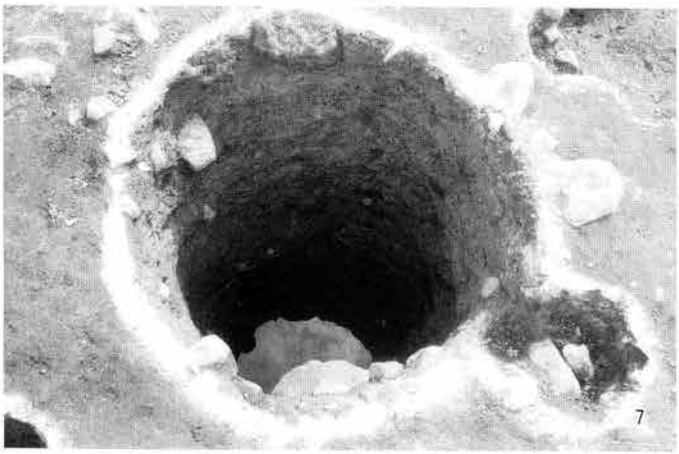
1　B5区土層断面
西より

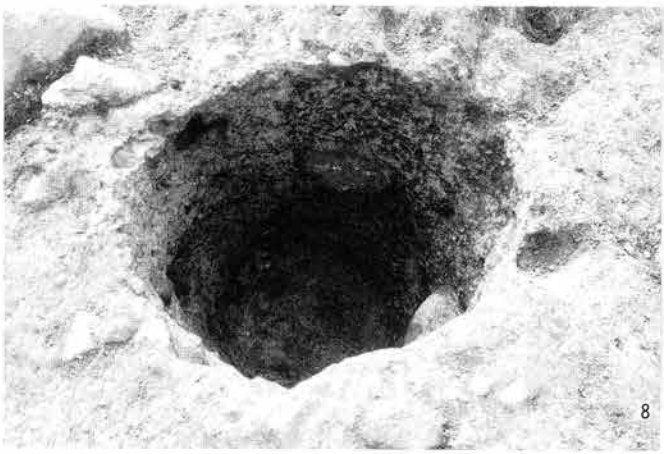


2　B3区土層断面
西より

3　土塁1土層断面
（トレンチ2）
西より

4　空堀1
空堀2交差部石組
（トレンチ1）
北より





1　井戸1 検出状況　東より

2　井戸1 土層断面　西より

3　井戸1 完掘状況　南より

4　井戸4 完掘状況　北より

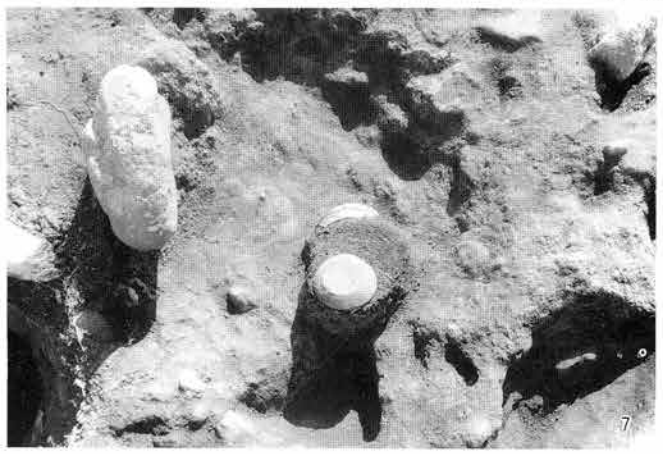
5　井戸3 土層断面　北より

6　井戸3 完掘状況　北より

7　井戸10完掘状況　北西より

8　井戸6 完掘状況　北より

図版37



1　井戸12完掘状況　南より

2　井戸13完掘状況　北より

3　井戸16完掘状況　南東より

4　井戸18完掘状況　北より

5　井戸22土層断面　南東より

6　土坑１検出状況　東より

7　柱穴300遺物出土状況　北より

8　建物１柱穴26土層断面　西より

1　館西半部（発掘区西側）
北東より

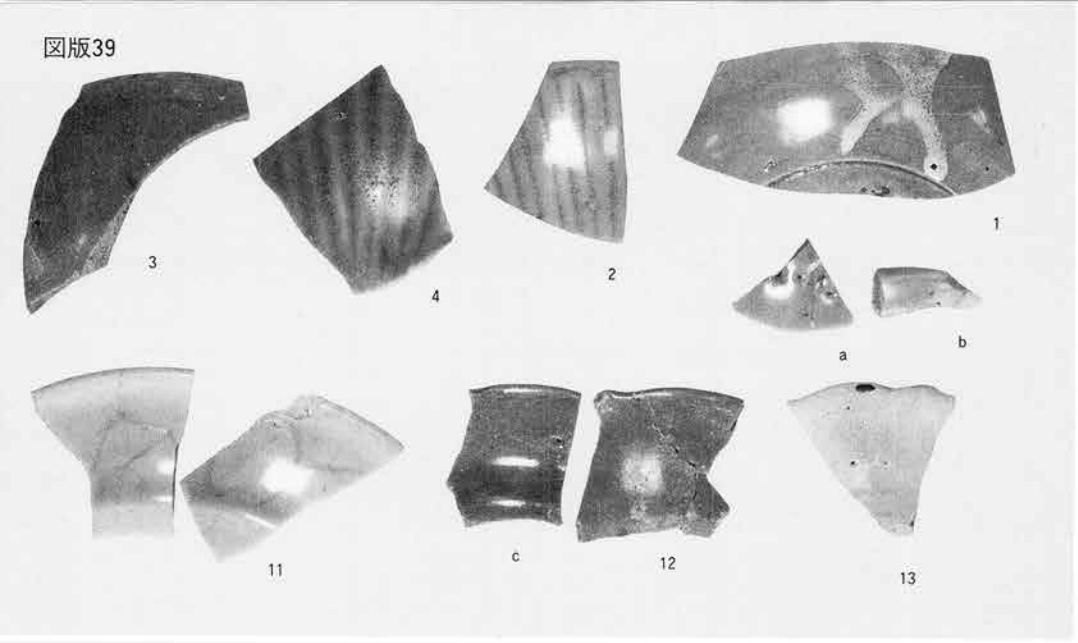
2　土塁１近景（表土除去後）
北東より

3　土塁１石積状況
北西より

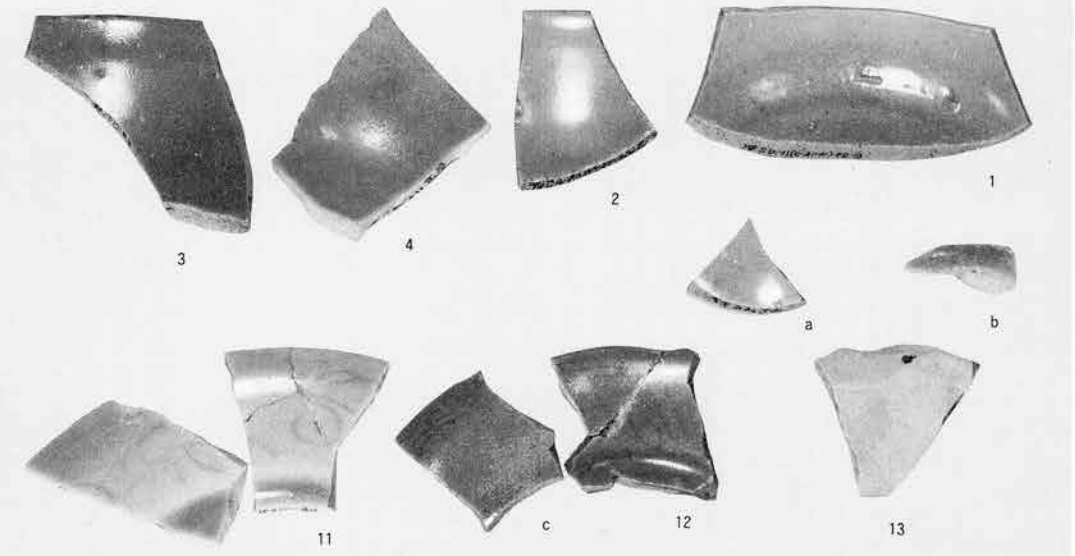
4　土塁１石積状況
北東より

図版39

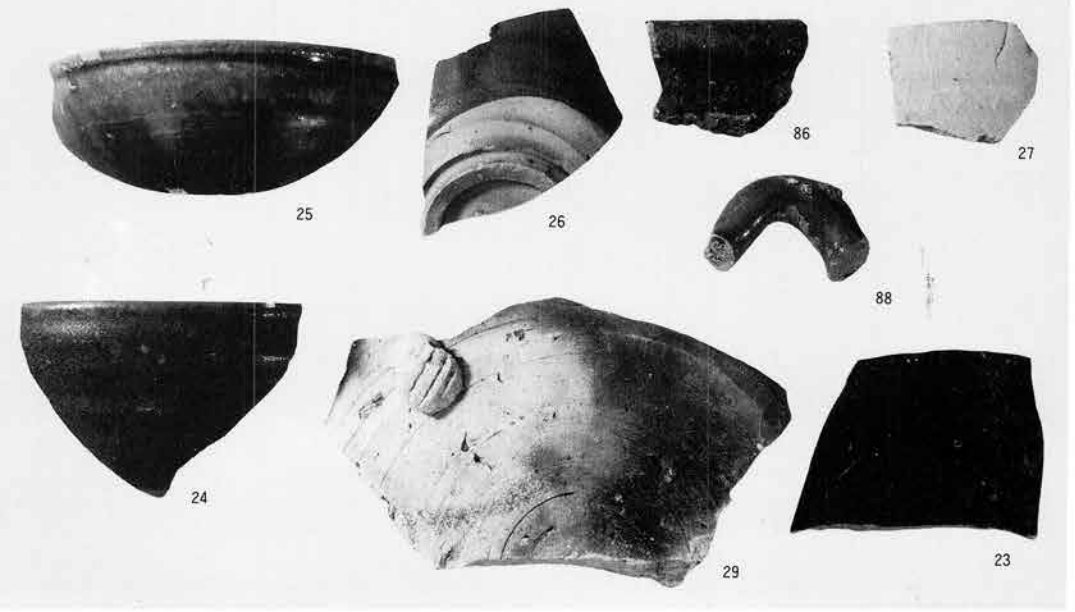
1:2



1　中国製陶磁器
（青磁）

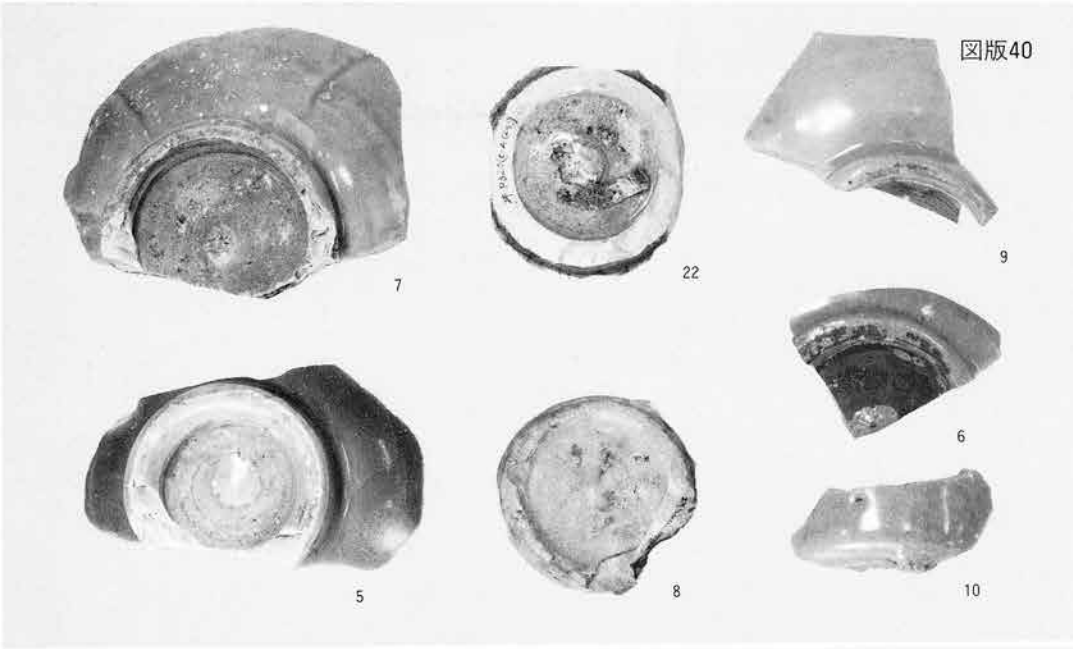


2　同上裏面

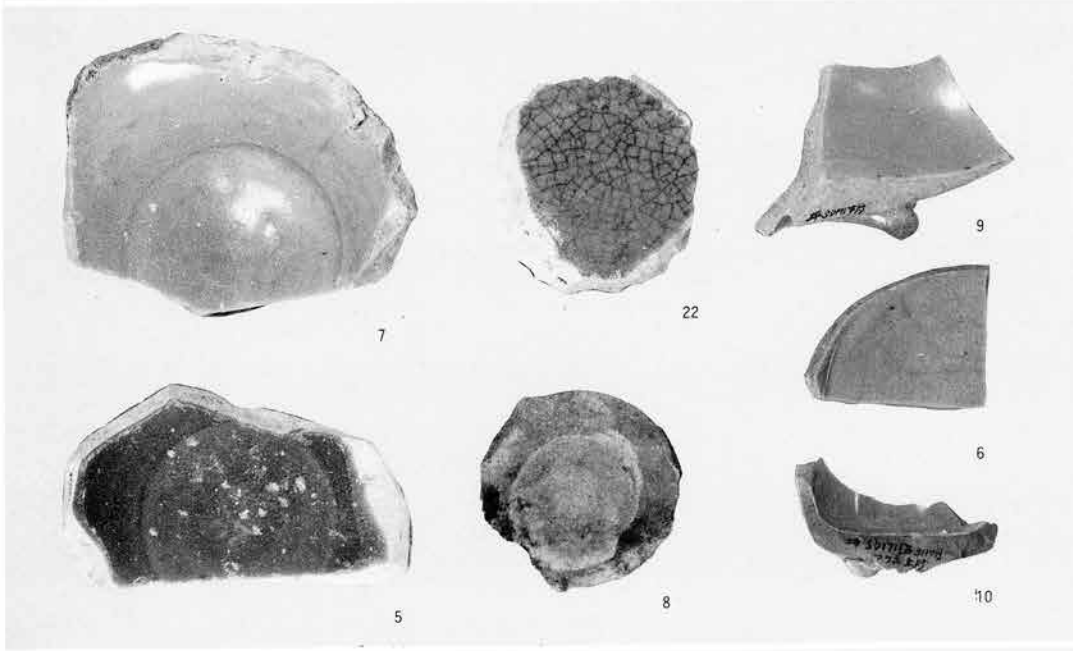


3　瀬戸・美濃焼
（24～27・88）
中国製陶磁器黒釉壺
（23・86）

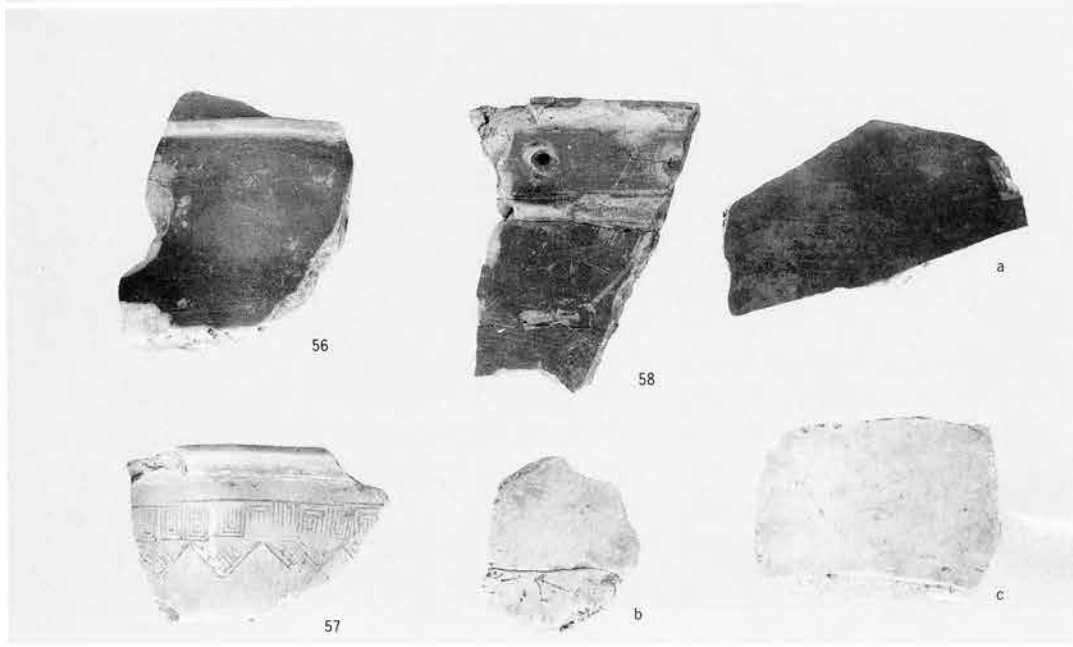
1:2



1　中国製陶磁器
（青磁）



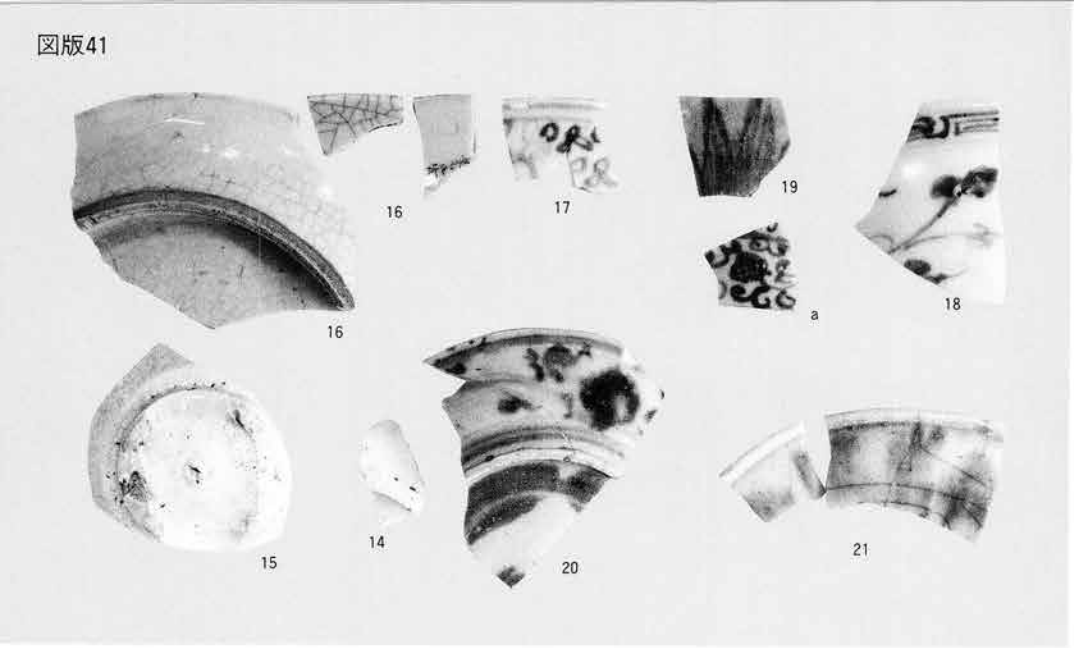
2　同上裏面



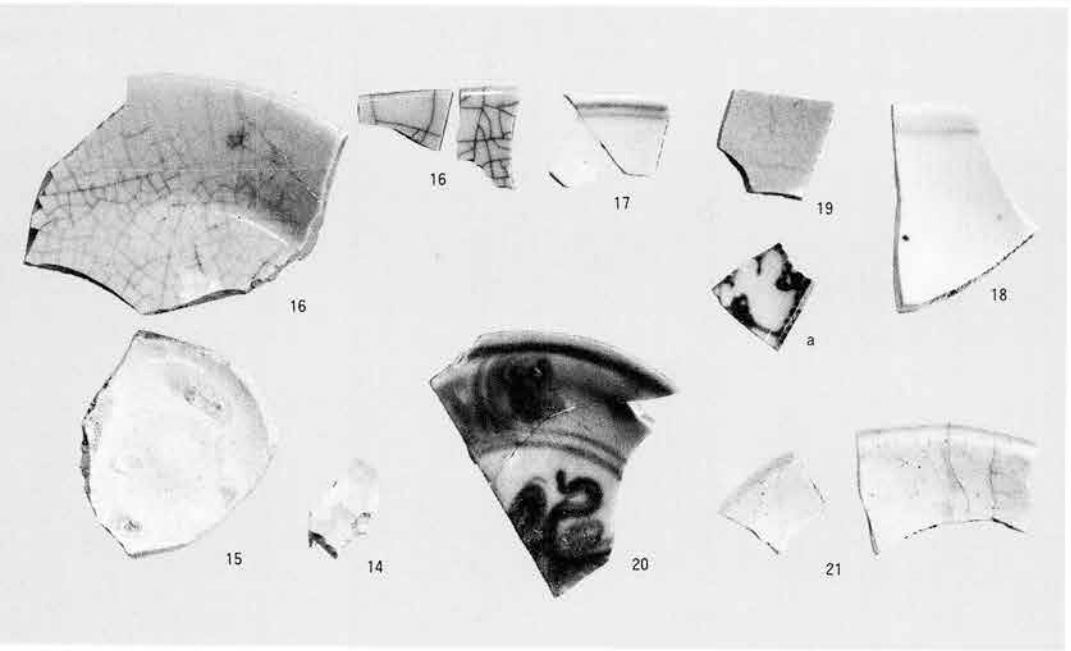
3　瓦質土器

図版41

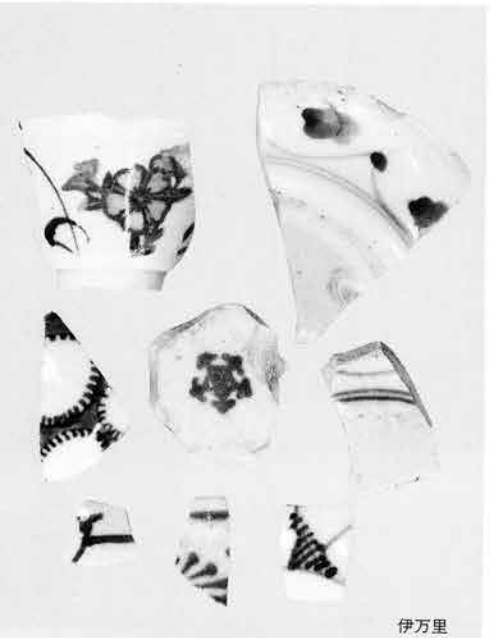
1:2

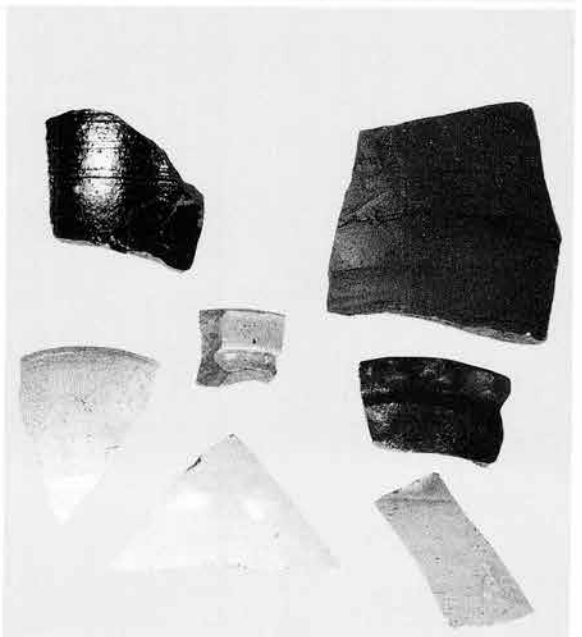


1　中国製陶磁器
（白磁・染付）



2　同上裏面

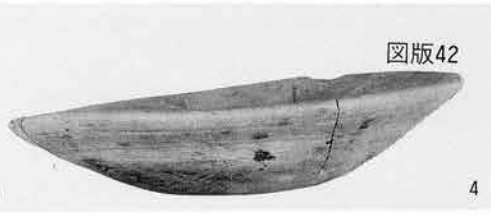




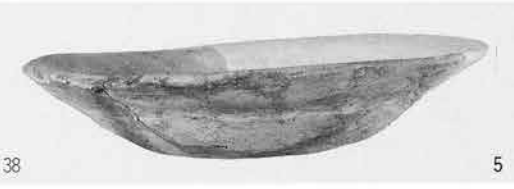
3　近世陶磁器
（伊万里・その他）

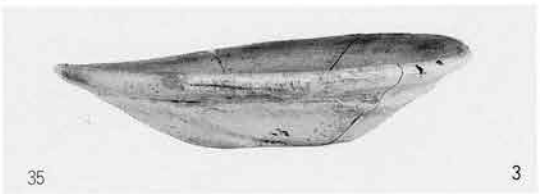
1:2

33 1


39 4

34 2


38 5


35 3

46 6

41 7

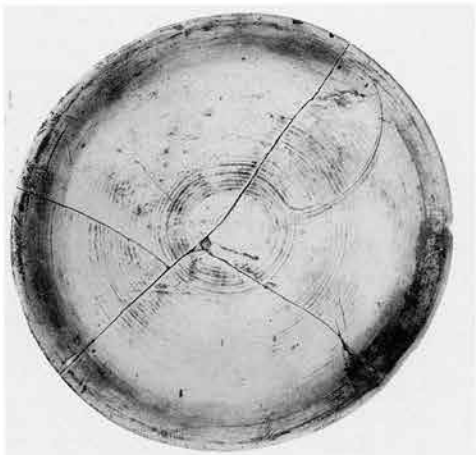
47 9

42 8

44 10

45 11

1 ～11
土師質土器皿
A類(33～39・41・42)
B類(44～47)



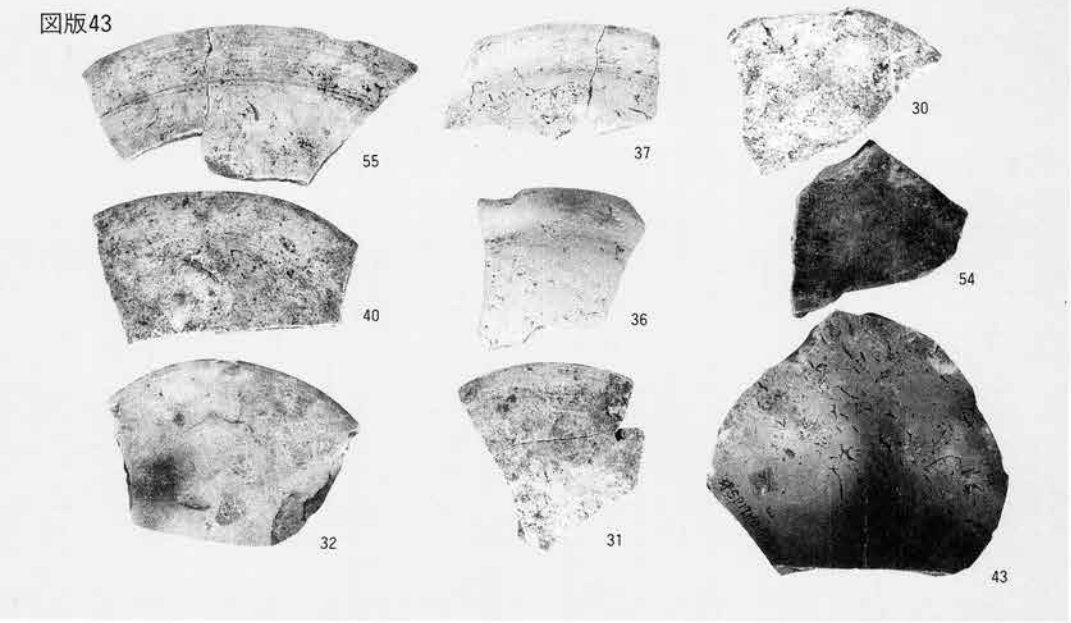
35 12

41 13

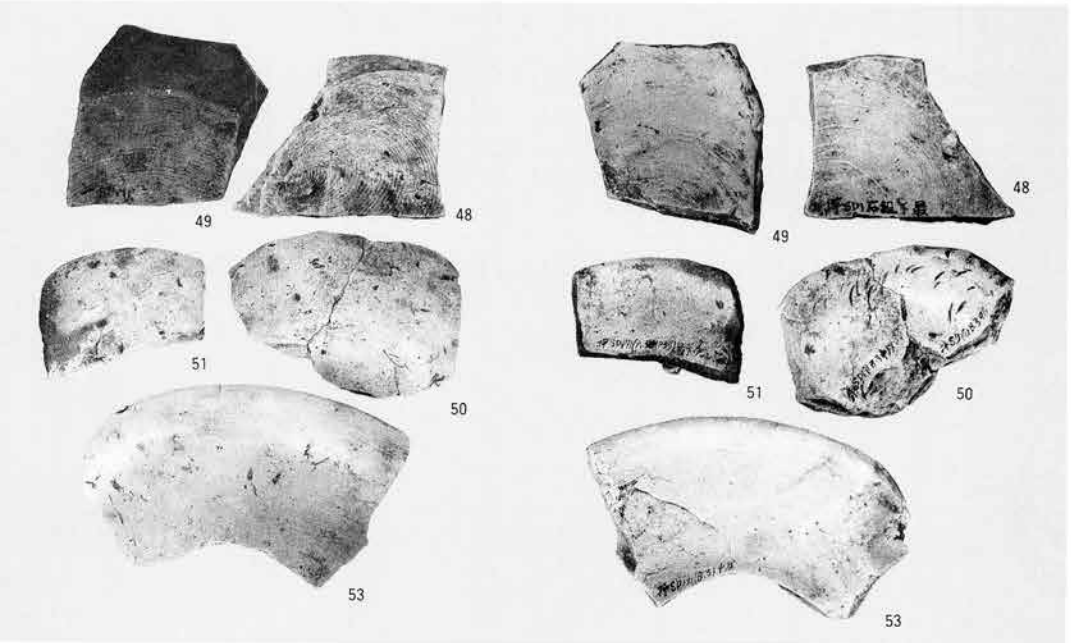
12・13
土師質土器皿A類調整痕
上：内面　下：外面

図版43

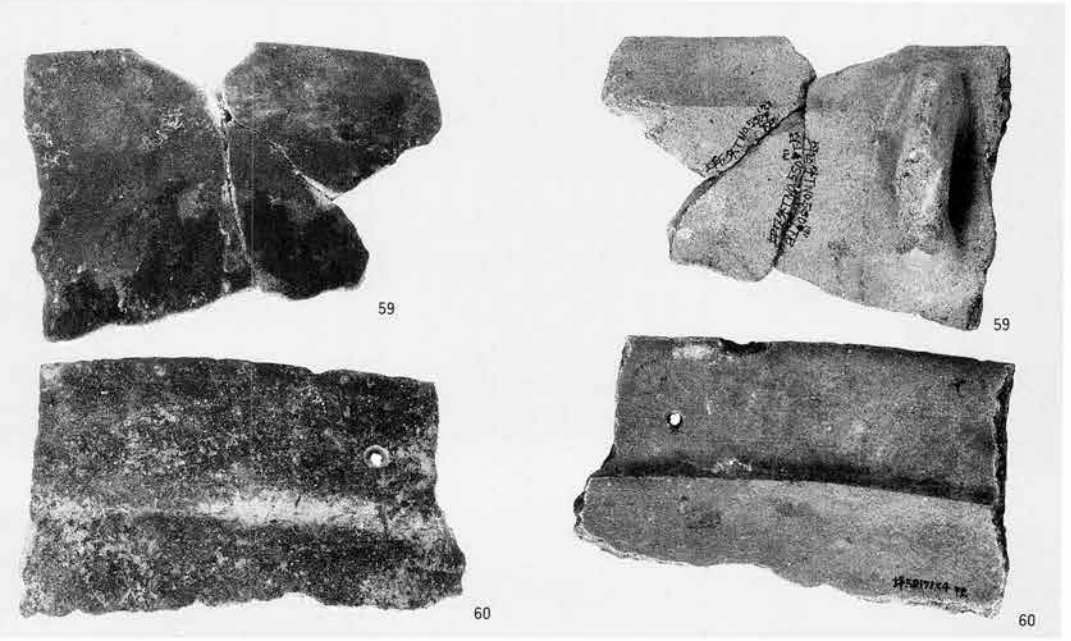
1:2



1　土師質土器皿
A類

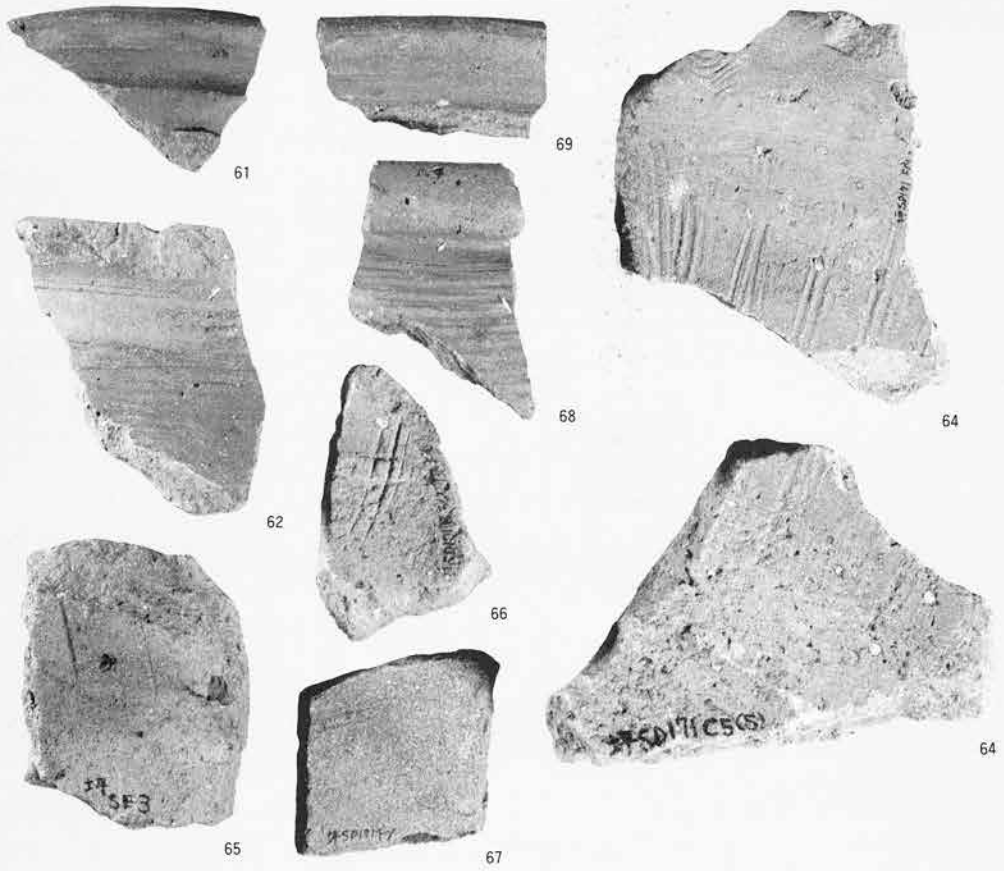


2　土師質土器皿
B類(48・49)
C類(50)
足付皿(51)
杯(53)
左：外面　右：内面



3　土師質土器鍋
左：外面　右：内面

1　1:2
2　1:3

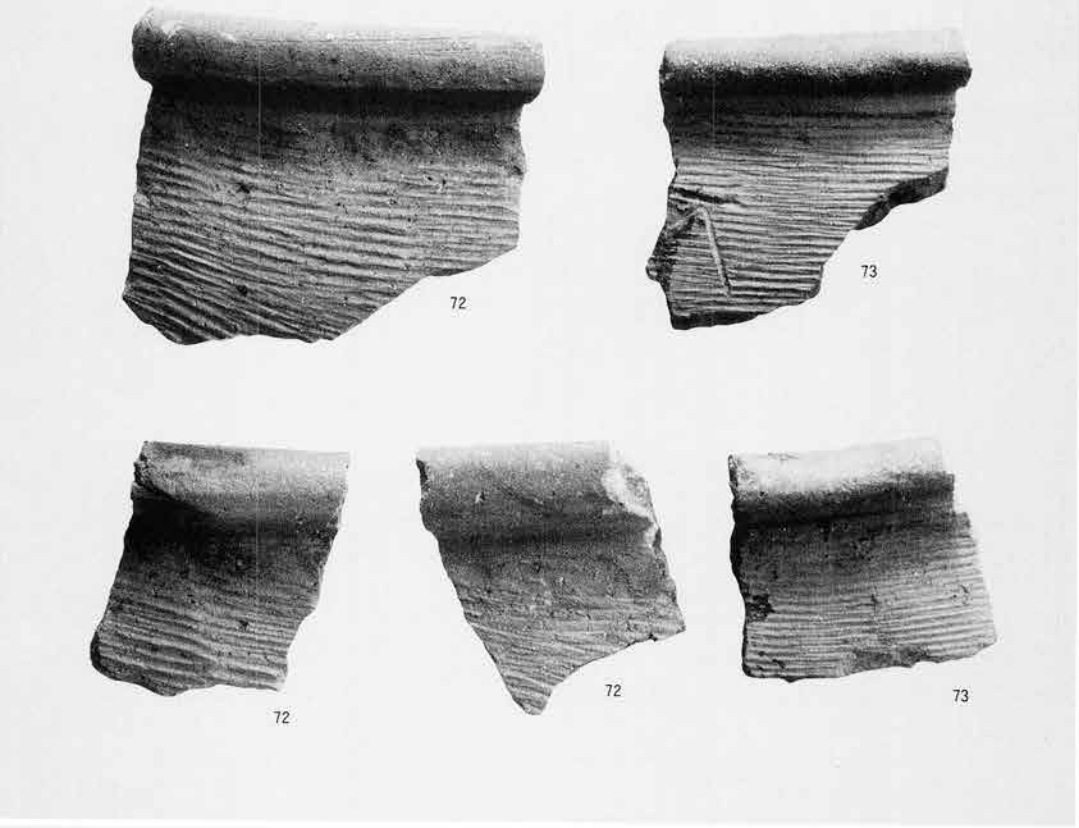


1　珠洲焼
　壺(61・62)
　甕(68・69)
　すり鉢(64～67)

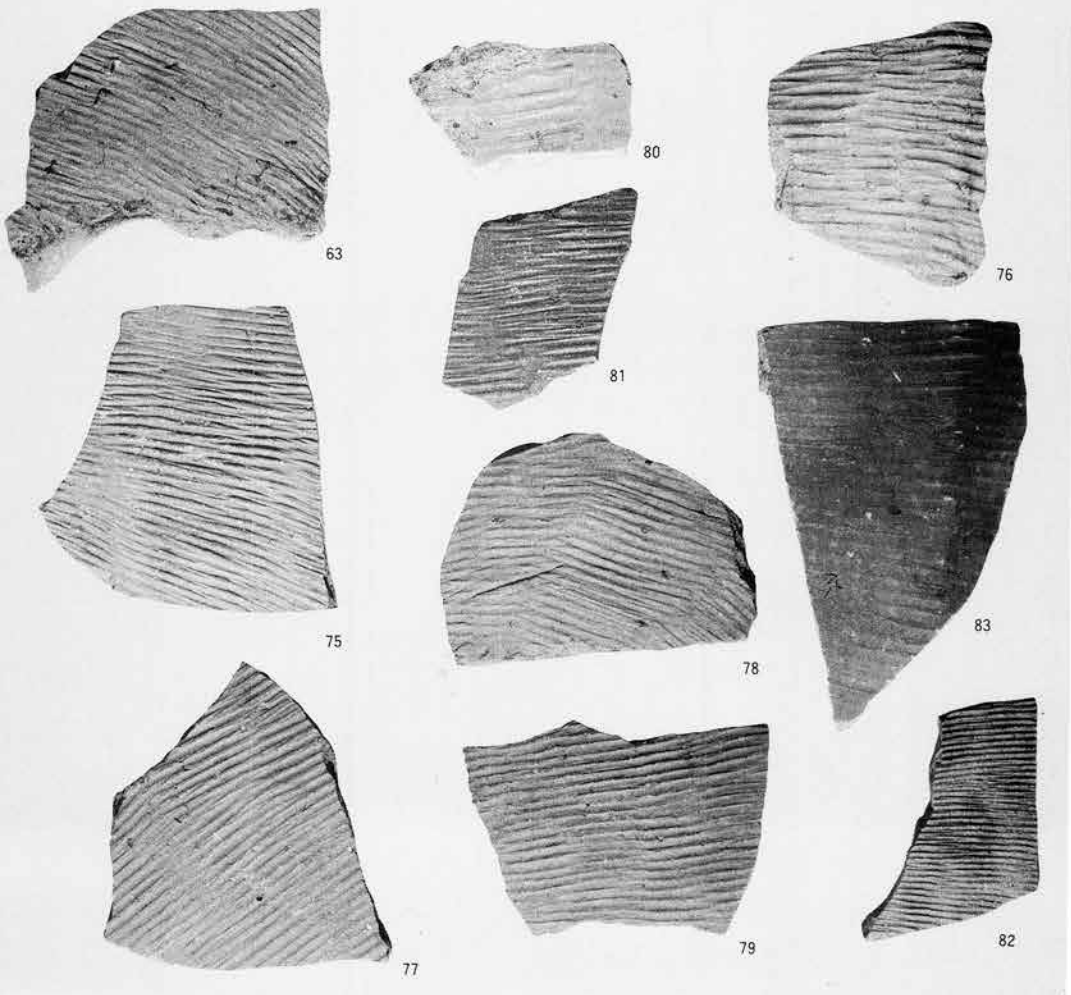
2　珠洲焼甕

図版45

1　1:3
2　1:2

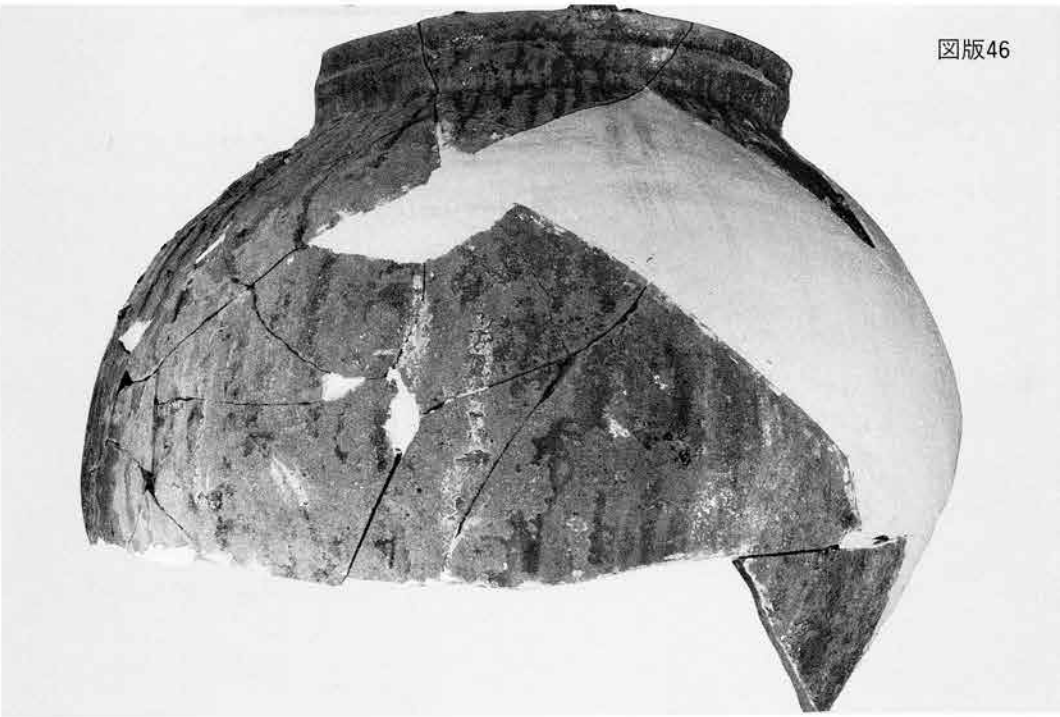


1　珠洲焼甕

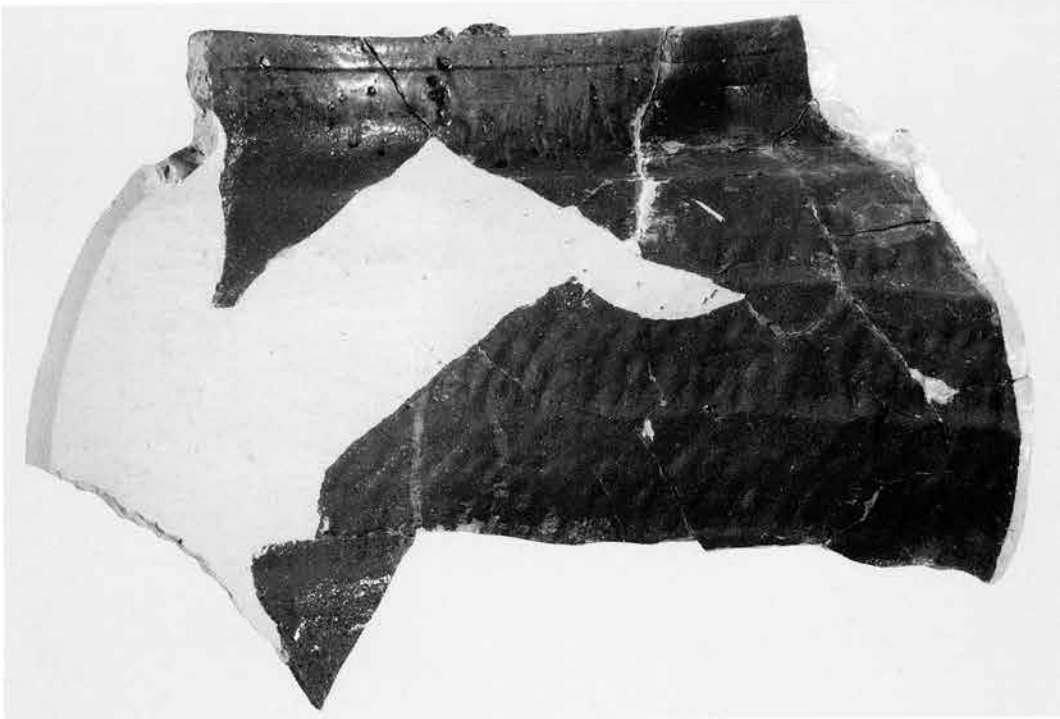


2　珠洲焼
　壺(63)
　甕(その他)

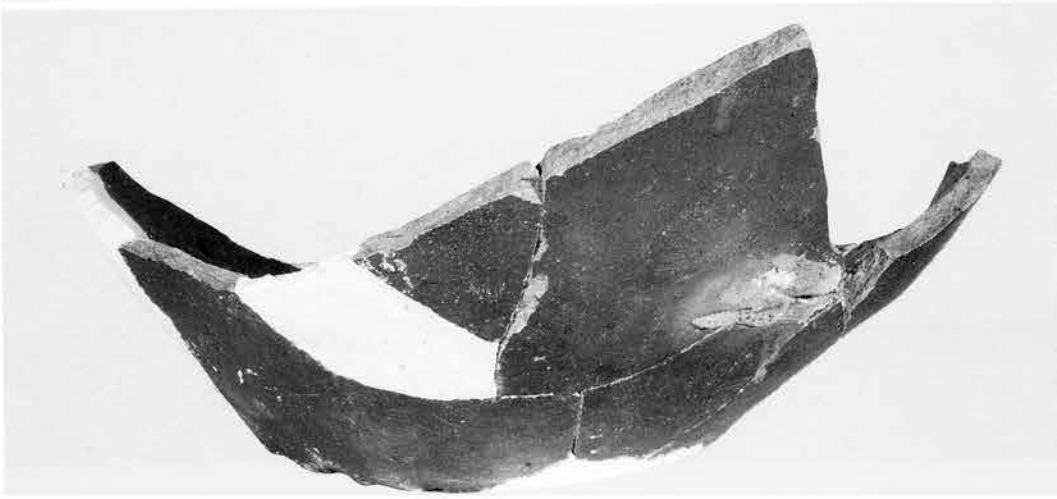
1:5



1　越前大甕(90)
体部外面



2　同上内面



3　同上底部

図版47

85

87

84

1

2

3

4

5

6

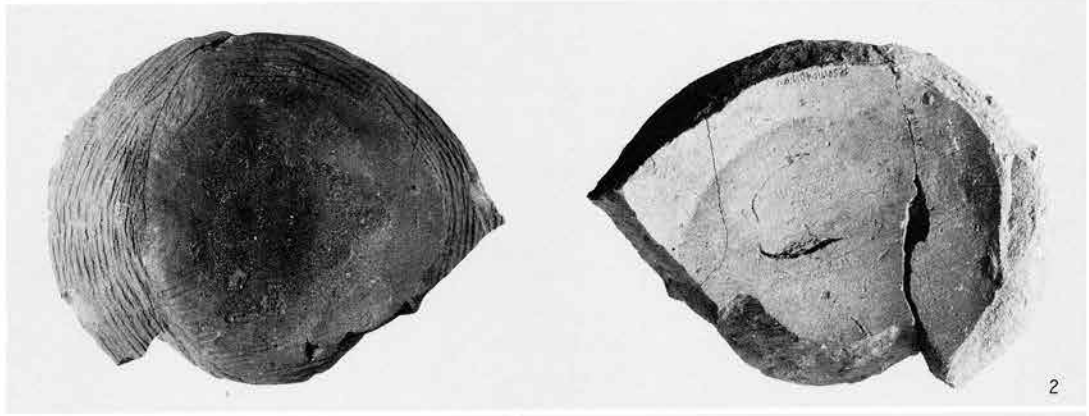
6　1:3
ほか　1:2

1　越前焼・その他
　鉢(84)
　越前焼壺(85・87)
2　瀬戸・美濃焼
　灰釉香炉(28)
3　漆塗土器

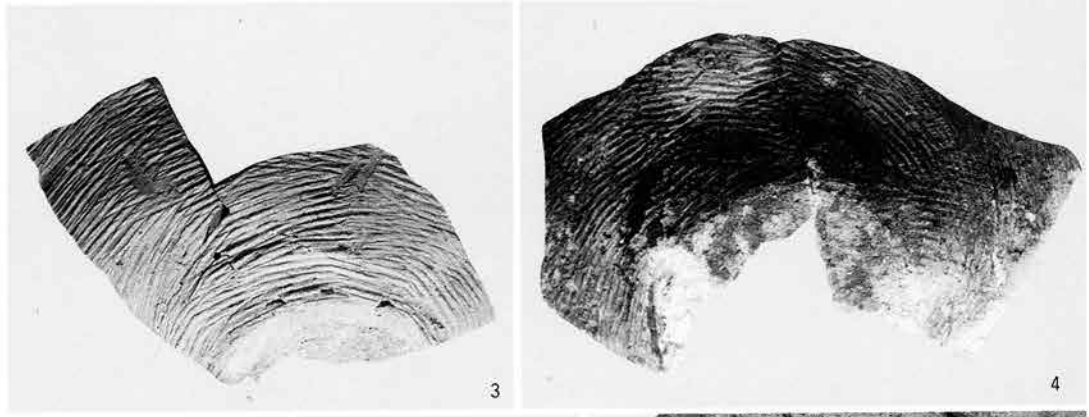
4　壺(89)口縁部
5　同上体部外面調整痕
6　同上体部

1・2　1:2
3～7　約1:3

1　越前焼大甕(91)

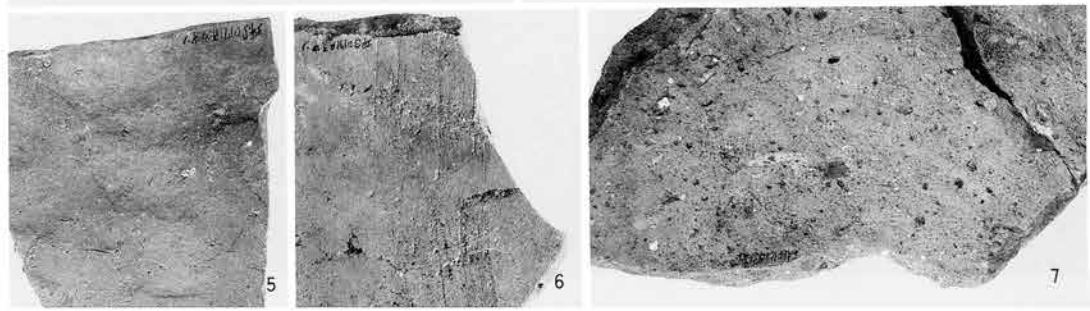


2　珠洲焼甕(74)
底部



3　珠洲焼甕(71)
底部

4　珠洲焼甕(70)
底部



5　珠洲焼甕(83)
体部内面

6　珠洲焼甕(75)
体部内面

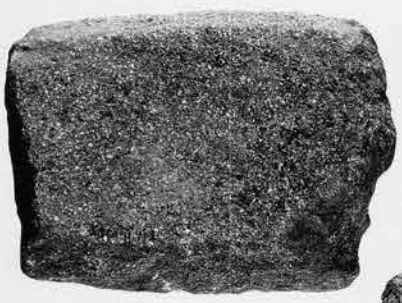
7　珠洲焼甕(71)
底部内面

図版49

1　1:6
2　1:4
3・4・5　1:5

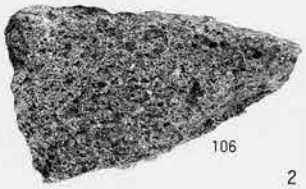
1

1　越前焼大甕(92)



105

101



106

2

2　石製鉢

3

3　宝篋印塔(107)

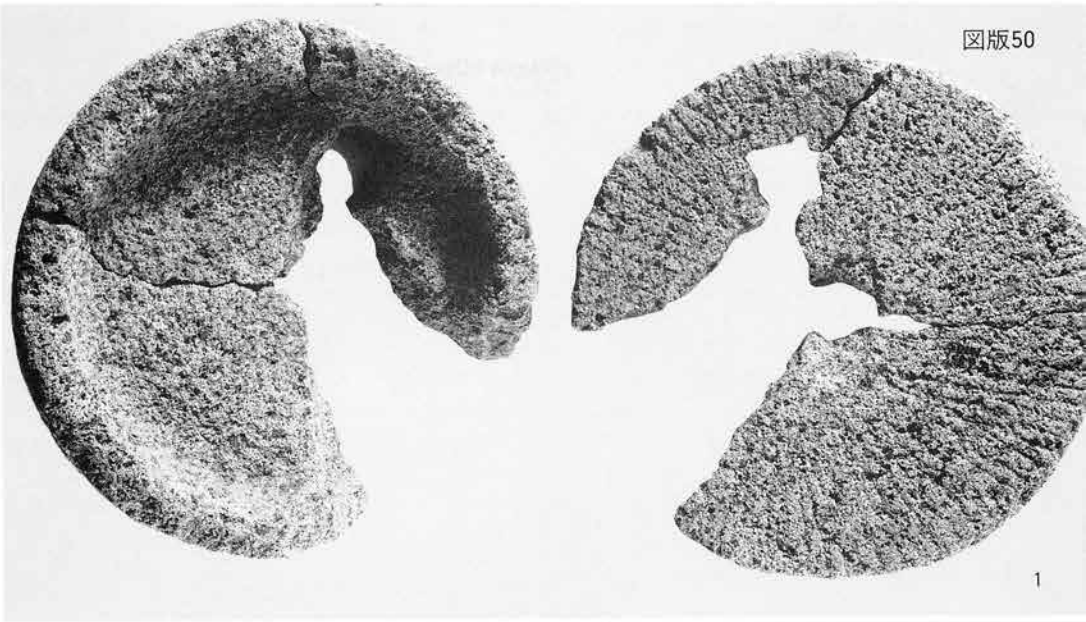
4

4　五輪塔塔身(108)

5

5　五輪塔基礎(110)

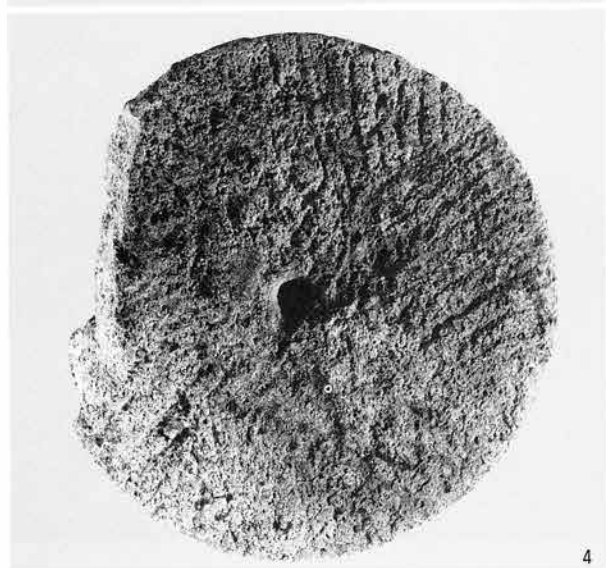
1：4



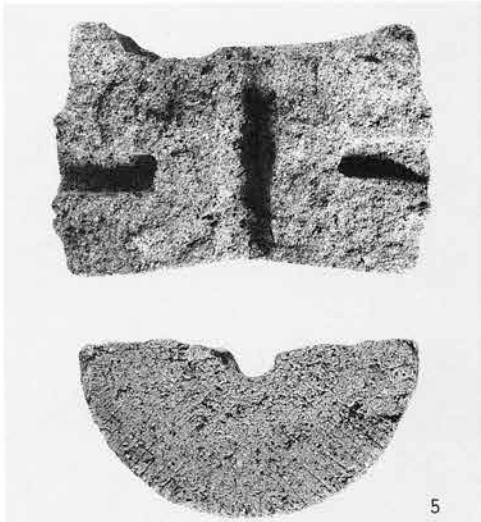
1　粉挽き臼(94)上臼
左：上面　右：下面

2

3



4



5

6

2　粉挽き臼(95)上臼
3　粉挽き臼(99)下臼
4　粉挽き臼(96)下臼
5　茶臼(100)上臼
小林森男氏所蔵
上：側面　下：下面
6　すり石(117)

図版51

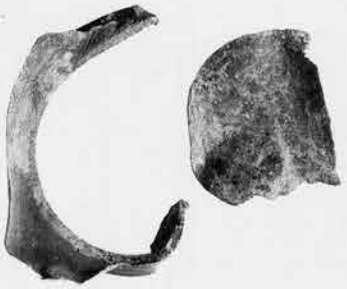
1・3−6　1:3
2　2:3
7・8　1:2

1

注口部正面

2

体部内面



底部

3

4

5

6

1　水瓶(119)

2　和鏡(120)
小林三代治氏所蔵

3　鉄製品(112)
4　鉄製品(113)
5　鉄製品(114)
6　鉄製品(111)

7

砥石

硯

8

7　銭貨
8　石製品
(砥石・硯)

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第44集

上新バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅱ

新井市坪ノ内館跡

昭和61年７月25日印刷　　発行　新潟県教育委員会
昭和61年７月31日発行　　印刷　第一印刷所
新潟市白山浦1丁目613
電話（0252）31−6061